

漆黒の契約者 ～魔法が使えない少年は『死』の運命に立ち向かう
～

早見 綿飴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神と契約することで「力」を与えられ、魔獣と戦う使命を背負う「契約者」と呼ばれる者が存在する世界。

何の変哲もない村で生まれた主人公ユナンは、16歳の誕生日を迎えようとしていた。

その日、ある事件が起こる。

そして彼は「願い」を叶えるため、「力」を求め契約者となる道を選ぶ。

しかし彼には魔法が全く使えなかった!?!使えるのは1つの加護のみ。

それなのに彼の行く手には、古龍、大罪の十二宮などの様々な強敵が立ちはだかる。

過酷な運命の渦に巻き込まれ、「死」に溺れる少年は、その先に何をみるのか。

彼の願いの先に待ち受けるのは希望か、それとも絶望か。

◎各章をざっと紹介（章の終わりに追加）

第一章 旅立ちの決意

『主人公ユナンの16歳の誕生日。その日の夜、村は謎の怪物によって襲われてしまう。緑の王国騎士団の登場もあったが、ユナンは怪物の攻撃を受けてしまい意識を失ってしまった。』

その後、ユナンは精神世界で目を覚まし、女神に契約の話を持ちかけられる。そして彼は村を襲った怪物への復讐を誓い、女神と契

約を交わすことになった。

それから見知らぬ土地に放り出されたユナン。とりあえず王都を目指すことに決めた彼は、その途中、自分は契約者なのに魔法が使えないことに気がつく。これからの不安で胸がいつぱいだったユナンだが、偶然、銀髪の少女と3人の見習い契約者に出会い、彼らと共に旅をすることとなる。そんなユナンと仲間達の旅は順調に進むかのように思えた。

しかしその旅の途中、ユナンは不運にも、女神と契約者の命を狙う集団「大罪の十二宮」の1人と遭遇してしまう。その圧倒的な力の前に、ユナンは為す術なく殺されてしまうのであった。そんな時、彼の契約者としての唯一の力が発動する。しかしそれで簡単に「死」から逃れられるほど「運命」は甘くなかったのである。』

竜、獣人、魔法、基本的に何でも出てくる自由な世界観。

魔法系ファンタジー、主人公苦労する系、キャラクター1人1人にエピソードがある系が好きなのは、是非覗いて見てください！

あなたの好きなキャラが、きっと見つかります。

彼らの物語を色んな人に知ってもらいたくて書き始めました。長い旅になりますが、どうぞよろしくお願いします。

目次

第一章 『旅立ちの決意 く始まりの物語く』

プロローグ 『終わりの始まり』 1

第一章1 『16歳の誕生日 朝』 6

第一章2 『16歳の誕生日 昼』 9

第一章3 『16歳の誕生日 夜』 16

第一章4 『黒い手』 23

第一章5 『君の願いは?』 29

第一章6 『群青の竜』 33

第一章7 『一文無しの男』 39

第一章8 『竜人』 46

第一章9 『契約者との出会い』 51

第一章10 『魔獣ネコマタ』 57

第一章11 『ドラゴンスレイヤー』 67

第一章12 『竜を狩る決意』 78

第一章13 『旅の目的』 88

第一章14 『貿易港マイミア』 94

第一章15 『大罪の十二宮』 102

第一章16 『幸運な男』 109

第一章17 『自然という名の脅威』 115

第一章18 『運命の糸』 125

第一章19 『悪あがき』 138

第一章20 『前を見る』 149

第一章21 『光の守護者』 163

第一章22 『プライヤー』 169

第一章幕間	『不変の真理』	178
第二章	【王都アルヴヘルム編 く自分を探す物語く】	
第二章1	『鍛冶屋の爺さん』	185
第二章2	『転生者』	192
第二章3	『初めてのデート!?!』	200
第二章4	『怪談話』	210
第二章5	『弱虫な雷神』	218
第二章6	『武の道』	228
第二章7	『とある少年の生き方』	236
第二章8	『魔獣ジヨロウグモ』	244
第二章9	『未来へと繋がる涙』	253
第二章10	『王都アルヴヘルム』	267
第二章11	『打ち上げ』	275
第二章12	『イロナシ』	282
第二章13	『死の円』	290
第二章14	『俺だけの記憶』	299
第二章15	『怨嗟の声』	310
第二章16	『君の体温』	319
第二章17	『制約』	328
第二章18	『フレア』	334
第二章19	『千剣の戦乙女』	343

第一章 『旅立ちの決意 く始まりの物語く』 プロローグ 『終わりの始まり』

黒髪の目付きの悪い少年が小高い丘の上に立っていた。丘といっても草木などは全く生えていない。ただ灰色の荒廃した大地が、辺り一面に広がっているだけである。

だからこそ、そんな場所に唯一建っているあの塔は、圧倒的な存在感を放っていた。

天高くそびえる石塔。少し遠くに建っているあの塔が少年の目指す場所である。しかし簡単には辿り着けないであろう。なぜなら、

「何度見てもこの景色はゾツとするなく。」

武器を持った1万の軍勢がその行く手を阻んでいるからである。彼らは皆、契約者である。そして世界を守るため、少年の前に立ちほだかる。

この『世界』を愛する者として、平和を脅かす大罪人へと刃を向けるのだ。その行いはまさしく『正義』と呼ぶにふさわしいものである。

「けど勝てば官軍、負ければ賊軍ってな。つまり勝った方が正義なんだぜ。」

少年は自信満々にそう豪語した。しかし、その後ろにいる仲間の数はせいぜい百人程度。1万の軍勢からしてみれば、それは虫けら程度の集団にしかすぎない。

それなのに、何故かその少年に不安の色は一切見られなかった。

「俺は仲間を信じてる。だからマジで全速力で突っ走るぞ。そんなわけでフォローよろしく!」

黒髪の少年は仲間に向かって軽々しくそう言った。それはこの場の重々しい雰囲気とはあまりにもかけ離れたセリフであった。しかしそのおかげで、仲間達の雰囲気は少しだけ柔らかくなる。

「全く最後の作戦が正面突破ですか。あなたらしいというか、なんというか…」

そんな少年のセリフに、灰色の髪的美丈夫がやれやれと肩を竦めた。いつもの少年の無茶ぶりに呆れた様子である。

しかし少年は気が狂ったわけでもなんでもない。彼にとつてはこれが今回の最善策なのであろう。そう信じられるくらい、仲間たちと彼との間には深い絆があったのだ。

「つても世界を守るっていうのに、集まったのは契約者だったの1万かよ。つまんねえナ。」

少年の仲間の1人、赤髪の屈強な男が目の前の軍勢を見て、気だるげにそう言い放った。そんな男に向かって少年は、首を横に振った。そして狂気じみた笑顔で男に向かってこう告げる。

「それは見当違いだぜ。これから化け物がわんさか現れるんだ。頼りにしてるぞ。」

「そりゃア、良い朗報だぜ。血が騒ぐ。」

それを聞いて赤髪の男がその身に宿る闘志を滾らせた。彼からは猛々しい獣のオーラを感じる。それは決して比喩ではない。

赤髪の男の頭からは虎耳が生えている。彼は獣人、それも猛獣の血を引き継ぐ者であったのだ。

そして黒髪の少年は仲間一人一人の顔を確認してから、最後にこう言った。

「それじゃあ俺から言えることはたった一つ。みんな絶対に死ぬなよ！1人でも死んだらその時点で作戦は失敗だ。」

黒髪の少年は塔を目掛けて全速力で戦場を駆け抜けていた。燃えさかる火球、鋭い風刃などが乱れ飛ぶ。その威力は人の身体など、いとも簡単に壊してしまう程であろう。脆弱な人間がそれから身を守るには、同じく魔法で対抗するしかない。

——しかしその黒髪の少年は契約者でありながら、魔法が全く使えなかった。

そんな少年が戦場を走っていたら、もちろん「死」がやってくる。肌が凍りつくような感覚。冷気を纏った鋭い無数の氷柱が、少年に向かって放たれたのである。だがその少年には身を守る手段がない。

そのまま氷柱に貫かれ、無惨な死体となってしまうだろう。

「おいユナン。速度が落ちている。もつと足を動かさせ。」

しかしその無数の氷柱を1つの巨大な竜巻によって吹き飛ばされた。その竜巻は、氷柱を放った契約者、いやそれどころか周りにいた他の契約者までもを巻き込んで、彼らの身体を切り刻んだ。

そんな常軌を逸した絶技。それを放ったのは少年の仲間の1人である。

少年は契約者の中では弱い部類に入る。だが、

——少年の仲間達は『世界』を相手にできるほどの力をもっているのだ。

少年の仲間達が化け物じみた強さを持っている事は、誰の目から見ても明らかである。一方で黒髪の少年は、目には見えない力を持っていた。

「もうすぐ右から突然竜が現れる。頼んだぞ！」

「——ほんとに来たな！オラァ！俺様と力勝負なんて百年早いんだよ。竜はおとなしくブレスでも吐いときやがれ！」

少年の指示に従うように赤髪の男が右側に立って迎撃体勢をとる。すると少年の予言通り、深紅の鱗を持った竜が突然右側から姿を現し、その強靱な炎爪を少年へと振り下ろしたのである。

もちろんその攻撃は赤髪の男によって防がれた。彼はその爪を肥大化させて、深紅の竜と対峙したのである。炎爪同士の衝突に、赤い熱風が巻き起こる。

男の爪は竜と同じく火炎を纏っていた。さらにその炎は竜のものよりも激しい。彼の闘争心は炎竜のブレスよりも熱く燃え上がっているのだ。

そして赤髪の男はとてつもない力で炎竜に向かって体当たりをした。その竜の体長は5メートルを優に超えているであろう。それなのに彼はその竜を後方へと吹き飛ばしたのである。

体勢が大きく崩れた炎竜。もちろんその竜に向かって続けざまの連撃が叩き込まれる。

「くたばりやがれ！」

そして男はその爪で炎竜の胸を抉りとった。男の爪には竜の赤黒い心臓が突き刺さっている。それは抜き取られてなお鼓動を続けており、竜の生命力を高らかに証明していた。

しかし竜とはいえ、所詮は生き物である。心臓を抜き取られた深紅の竜はそのまま力なく倒れた。

「第一関門突破！ ナイスだぜ。」

黒髪の少年は赤髪の男に向かってピース。状況は一旦落ち着いたように見えた。しかしさらなる困難が少年の前に立ちはだかる。

少年の周りに先程のような大きな竜が無数に出現したのである。そして塔の前には、2頭の巨大な古龍が鎮座していた。

マグマを帯びた黒龍と雷雲を操る黄龍。古龍は自然災害そのもの。つまり噴火する火山と天をも貫く落雷が、意志を持ってこちらを攻撃してくるといふ事なのである。それは悪夢以外の何物でもない。

しかし少年はその足を止めなかった。そんな彼に向かって、赤熱する溶岩と轟雷が放たれた。

自然は手加減というものを知らない。如何なるものであれ平等に、その自然の災禍で飲み込んでしまう。だが、

「夢を追いかける少年よ。古き者を土台に先へと進め！」

「雷龍ヤクサノイカツチ。そいつはオレが倒すからユナンは先に行って！」

赤熱する溶岩を、40代くらいの男がマグマを帯びた大剣で弾く。轟雷を、黄色い髪の少年が青白い稲妻でかき消した。

少年の頼もしい仲間たちは巨大な古龍とすら張り合う事ができるのである。そしてそんな仲間たちは自分を信じてくれている。

——だからこそ黒髪の少年は、どんな強敵が目の前には立ちはだかろうと、その足を決して止めないのだ。

1万の契約者の軍勢の中を抜け、凶暴な竜の群れを突破し、巨大な2頭の古龍の相手を仲間任せ、黒髪の少年は先に進む。

そして目標の塔の入口が、すぐ目の前にまで迫った時であった。

「——危ない！」

そう聞こえた瞬間、少年は灰色の髪の男によって突き飛ばされた。

それはユナンの仲間の1人である。

振り返ると鈍い音が鳴り、その男の胸が光の柱によって貫かれ、血しぶきをあげていた。

同時に少年も、光の柱によって、左の太ももを貫かれてしまったのである。

——少年の前に最後の壁が立ちはだかる。

それは黄金の光を纏った金髪の青年。彼は『世界』を守る正義の化身、そして同時に世界最強の存在でもあった。そんな彼は、目の前にいる黒髪の少年、そしてその仲間達を決して許さない。

「やっぱり最後はお前が立ちはだかるよな。…でも俺は先に進むぜ。」

そう言つて黒髪の少年は足を引きずりながら、塔の入口へと目指す。そんな彼に向かって正義のヒーローは、はつきりとした爽やかな声でこう告げた。

「残念だがここまでだ。君に恨みはないが…これも『世界』のためなんだ。」

「そうかよ。なら俺たちは敵同士だな。『また』会おうぜ。」

そして眩い光が少年の全てを焼き焦がした。

その最期まで少年の目には闘志が宿っていた。

——少年はまだ諦めてはいない。

これは「死」の運命に立ち向かう少年の、始まりからその結末までを描いた物語。

そして願いとは何であるかを問う物語である。

第一章1 『16歳の誕生日 朝』

「……ゆめか」

目が覚めると、寝間着が汗でびっしりと濡れていた。

…夢の内容までは思い出せないが、とても酷い夢を見ていた気がする。

窓から太陽の光が降り注いでくる。その光が、今日はより一層嫌に感じて、ユナンはベットの掛け布団を頭から被った。

少し経ってから、ユナンの部屋のドアが開いた。

「いつまで寝てるのよ。今日でユナンは16歳。もう成人になったんだから1人で起きれないと。」

明るい女性の声でそう呼び掛けたのは、俺の母だ。……凄く声がデカイ。

そして母は俺の掛け布団を引き剥がす。

「はい！起きて!!」

「あー分かった分かった。起きるから、いつものそれやめろって……」
渋々、ユナンはベットから出て立ち上がる。そして不機嫌そうな顔で母を見た。

「そんな顔してたら、お父さんみたいなイケメンになれませんよ。
…未だに彼女の1人もいないんでしょ？」

母いわく父親はイケメンらしいが……

ユナンの顔はまあ普通の部類。と村にいる女友達のフィーナに言われたことがある。むしろ少し目つきが悪いところや、黒髪の左後ろのうなじの所がちよんちよんに跳ねている事を考えるとあんまり……
フィーナの苦笑いの顔を思い出して心が沈む。てんねんな性格のフィーナの証言だ。信じたくないが、真実には近いのだろう。

「うるせえ……余計なお世話だっつーの！まず俺の記憶に無い父親の顔を毎度毎度引き合いに出されてもわかんねーよ。……でも今日やっと15年ぶりに戻ってくるんだっけ？」

俺の父親は、俺が1歳の頃に、母と俺を村において、母いわく「使

命」のために旅に出たらしい。

そして俺が成人の頃には戻ってきてくると。

——そう母に約束をして。

「そうよく。ホントに待ちに待ったんだから。もう、私はモテるんだから、早く戻ってこないと他の男についていつちやうんだからね。…まあそれは嘘だけど。」

自分で言うのか…と冷たい目で母を見る。

顔を赤らめ、豊満な胸の下で腕を組み、腰まで届くほど長く艶やかな黒髪をフリフリさせている。確かに、母は年齢の割には若く見えると思う。

「お父さんがいつ帰って来てもいいように、ずっと綺麗なままではないなくちやね！」

と毎日美容に気を使っているからなのかもしれない。

しかしそのせいでよく、事情を知らない町の若い男達に狙われ、母との仲を取り持って欲しいと懇願されたものだ。…あの時は大変だったなあ。

「えーと俺は今日は家にずっといた方がいいのか？」

「夜まで帰ってこなくて大丈夫よ。というか帰ってこないで。夫との2人きりの時間を楽しみたいし…ユナンの成長を見せるのは最後のお楽しみでこと。」

子供に帰ってくるなとか言う親って…

まあ母が嬉しそうで何よりだ。

「んじやあ俺は朝飯食ったらアベル達と遊んでくる。夕飯の時には戻ってくるわ。」

「はい。あと、村の人達に今日はうるさくなるからすみませんって伝えといてね。」

「いつもうるさいだろ…」

ユナンは呆れながらテーブルへ向かっていき、朝ご飯を食べ始めた。バターに乗ったパンと目玉焼き、そして牛乳。いつも通りだ。

ただ、キッチンを見ると、大きな肉の塊や色とりどりの野菜などの食材が並べられていて、今日が特別な日なのだと感じられた。

今日は父さんの為に、腕によりをかけて作るんだろうな……あれ？
今日は俺の誕生日だよな?!

なんてくだらない事を考えていたら朝食を食べ終えていた。

「いつてきまーすー」

黒いシャツの上に黒いジャケットを羽織り、下には黒いズボンを履いて、いつも通りの服で家をでる。

「行ってらっしゃいー」

母がエプロン姿でぴよんぴよん跳ねながら手を振っている。いつもよりテンションの高い母に少し微笑ましさを感じて、ユナンは珍しく母に笑顔見せた。

「あつ今の顔！父さんに似てるわよ。」

「一言多い」

ユナンは恥ずかしさを隠すように急ぎ足で家を出た。もういつも通り、目つきの悪い、不貞腐れた顔に戻っている。

帰ったらまた、散々あの母のノロケ顔を見させられる羽目になると思い、ユナンはうんざりしていた。

第一章2 『16歳の誕生日 昼』

家を出ると平和でのどかな風景が広がっていた。ここはムルクという村で、50人程度の人々が暮らしている小さな村だ。段々畑が広がっていて、この村名産の「ナナンの実」をつける木が綺麗に植えられている。

ユナンは村の人に挨拶をしながら、待ち合わせ場所である村の中心の井戸を目指す。

みんな俺の誕生日を心の底から祝ってくれて、少々照れくさかった。

目的地に辿り着くと、既に他の3人は集まっていた。

「ごめん！遅くなった。」

「あつユナンだぁー、遅かったね〜」

ゆったりとした可愛らしい声が返ってきた。薄桃色のふわふわした髪を肩まで伸ばしている女の子がフィーナだ。

「つーかまたいつものヘンテコな格好かよ。おれさまより年上になっただってのに、ファッションセンスは雑魚のままだな。」

褐色肌に、焦げ茶色のくせつ毛。陽気な声で茶化しながら、そう言ってきた男の子がドータだ。

「もう、すぐそうやって人の悪口を言うんだから。ホントに服のセンスは無いけどそんなこと言ったらダメでしょ。それにドータはユナンよりちっちゃいんだから、しつかり年上扱いしなきゃダメじゃない。」

とフィーナが少し頬を膨らまして、ドータに注意する。

：フィーナが1番俺の心を傷つけた事については触れないでおく。

「なんで身長で偉さが決まるんだよ。というかおれさまよりチビなおまえに、身長のことなんて言われたくねーよ！」

すかさずドータが反論する。そんな2人をなだめるようにして、茶髪の男の子が間に割って入った。

「まあまあ。2人ともそこまですてにして。今日はユナンを祝う日なん

だから。」

落ち着いた声で2人に語りかけた男の子がアベルだ。この4人中で1番身長が高い。明るい茶髪がすらつとしていて、綺麗に長さも整えられている。服装も襟のある白いシャツを、ピシツといつもしっかり着こなしている。

ドータとフィーナはまだ15歳だが、アベルはもう16歳になり、家のナナンの実販売の手伝いをしている。

「はーい」

2人が同時に返事をして静かになる。喧嘩はよくするが、案外、仲の良いやつらだ。

この3人が、俺と同じ年にこの村で生まれた幼なじみ達だ。

「それじゃあ、いつもの場所に行こうか。」

そう言つてアベルが先頭を歩く。その後ろにフィーナが、そしてさらにその後ろにドータがいて、俺とフィーナにちよっかいをかける。いつもの光景だ。

村はずれの森の中に、大きな開けた場所がある。空気が澄んでいて涼しく、俺たち4人のお気に入りのお場所だ。そこでいつもだべったり、遊んだりしている。

今日は4人の中で、もう2人も16歳になったということで、これからの俺たちの未来について話し合っていた。

16歳になると成人ということで、世間的には自分の職業を決める時期にあたる。フィーナは花が好きで、花屋を村で開きたいらしいし、ドータは王都の騎士団に入りたいらしい。

「おまえの父ちゃんと母ちゃんって、両方契約者なんだろう？おまえの母ちゃんの、魔獣から村を守る姿…いつもカッコいいよなあ。美人で、そのうえカッコいい母ちゃんなんて…お前が羨ましいぜ」

ドータの言うとおり、母は契約者だ。父とは契約者の仕事の中で出逢って、結婚したらしい。

本来、契約者は王都の騎士団以外は、傭兵であったり、旅人であったりして、その行く先々で問題を解決してお金を稼ぐものらしい。

しかし母は、村の村長からお金を貰う代わりに、専属で村を守っている。

「でもお前の母ちゃん、見たことない魔法使うよな。」

…どの色なんだろうな。騎士団マニアのおれさまでも、全くわかんなかったぜ。」

「俺も知らねーんだから…そんな目したって教えらんねーぞ。」

「ちえっ。つまんねーの」

契約者は、「力」の出力が、大まかにそれぞれ5色の系統に分かれる事が一般人にも知られている。たまに、例外もいるらしいが…母はそれなのだろうか。

赤、青、緑、黄、白　そしてこのラムザ王国では各色の王国騎士団が存在する。

「でも、ユナンも契約者になってみんなを守るんだよね？ちいさい魔獣なら追い払ってくれるもんね〜」

「いや、それが…俺はまだ決めてないんだよ。」

確かに12歳の時からユナンは、母による戦闘の訓練を受けている。

突然、「というか父さんが帰ってきたら、また旅に出るわけなんだから。ユナンも強い男にならなきゃダメよね。」と母が言い出し…

…そこから地獄の様な特訓が始まった。

母から木刀で、手加減抜きにビシバシ叩かれる。それが終わったと思ったら、犬の魔獣の巣窟である山に放り出され、帰ってきてまた木刀で叩かれる。

…あれ？俺、もしかして母さんから虐待受けてない？

「ええと…なんかごめんね。」

そんな泣きそうな俺の様子に気づいたフィーナが、謝ってくれた。…自分が情けない。

「というかいくら筋肉つけたからって、限界があるだろ。やっぱり契約して力を貰わねえことには、デカイ魔獣なんかには、かないっこねえ。」

ドータの言うとおり、契約者には「力」が与えられる。大きな魔獣

にはそれを使って戦うのが前提条件だ。でも肝心の契約の仕方がユナンには分からない。

「ドータも騎士団に入りたいのなら、契約者にならないといけないね。でも契約の仕方は知っているのかい？」

考えるような仕草をしながら、アベルが的を射た発言をした。それを聞いたドータが自信満々な目をして、ユナンの方を見てきた。

ドータはユナンに夢を見すぎである。ユナンは別に契約者博士でもなんでもない。

「ばーか。それを今、ユナンから聞くんだろーが。両親2人とも契約者なら知ってるだろ。なあ？」

「…それが詳しい契約の仕方は、俺もよく知らねえ。」

「はあ？なんだそりゃあ」

俺だって、犬の魔獣だらけの場所なんかには放り出されたら1度は考える。契約者になる想像くらい。ただ…

「母さんは、俺に契約に関して具体的な事は何一つ教えてくれなかった。…ただ、強く願えば良いとしか。」

「それにね、私は、ユナンは契約者になってならなくて良いって思っているの。」とホントは最後にそう付け足していた。母は、そこまで俺が契約者になる事を望んでいる訳では無かったのだ。

「はっ。強く願うだけでなれりゃあ、おれさまなんて5歳…いや4歳で契約者になってるね。」

まあ確かになんらかの手順は必要なのであろう。それでなきや、全世界が契約者で溢れかえってしまう。

「…まったく知らないならしゃーねーか。王都へ行って騎士にでも直接聞かか。」

そんなところでこの話は落ち着いた。

するとユナン達の元に、1匹の黒い子犬がどこからかやってきた。

「くうーん。」

「わあ！こんな所に子犬なんて…可愛い〜」

フィーナがパツと表情を明るくして、そう言った。昔から、フィー

ナは動物に良く好かれる。フィーナもまた動物が好きなのだ。彼女も少しづつ子犬へと近寄っていく。そんな彼女をユナンは横目で見つつ……！

「待て、フィーナ！そいつは魔獣だ！」

ユナンはとつさに、傍にあった木の太い棒を掴み取り、フィーナを庇う。

次の瞬間、子犬が牙を剥いて、ユナンに襲い掛かってきた。右手の木の手棒でその攻撃を捌いて、残った左こぶしで腹パンを食らわした。ユナンの思いつきりの腹パンに、子犬は低い悲鳴をあげた。

「ギャフン。グルルルル。」

子犬は、さっきまでの可愛い鳴き声とは正反対の声を上げていた。慌ててドータとアベルも木の棒を持って近寄ってきた。

「つーか、魔獣だって良く分かったな。流石は契約者の息子。」

「犬の魔獣は目が赤く光るんだよ。というかコイツがいるって事はあと何匹かはいるぞ。」

「それは、聞きたくなかったな。」

ユナンの予想通り、5匹の中型犬くらいの大きさの魔獣が俺らの周りに近寄ってきた。

小型犬を囫にしている間に、群れで獲物を囫う。魔獣らしい外道で合理的な戦い方だ。

フィーナを中心に囲って、魔獣と対峙する。

「狙いは——」

「頭か腹、だろ？王国騎士を目指してるおれさまを舐めてもらっちゃ困るぜ。」

「僕にはあまり期待しないでくれると助かるな。」

「……ただ男として、フィーナの盾ぐらいにはなろう。」

それぞれの決心が伝わったのか、魔獣が一斉に襲い掛かる。1頭目を頭から棒で叩き割り、2頭目の攻撃を躲して、左こぶしで全力腹パンの追い討ち。3頭目の牙が、左の腕に食い込む。ピリツとした痛みが脳へ伝わるが、こんな痛み、あの山では何度も経験した事がある。逆に俺は左腕の筋肉に力を入れ、牙が腕から離れないようにした。

そしてそのまま、

「おりゃあーくたばりやがれ!!」

と叫びながら腕に噛み付いたままの魔獣を、腹から木の幹へ叩きつける。

「キヤーン」

情けない鳴き声をあげながら、魔獣達は去っていった。

振り返るとドータが自慢げに、そしてアベルが申し訳なさそうに立っている。どうやら、ドータが2体の魔獣追い返したようだ。

フィーナはというと、

「喧嘩はダメでしょー!魔獣も生き物よ!仲良くしなさい!」

ムツとした表情でカンカンに怒っていた。フィーナは魔獣に対しても優しいのである。そんな彼女の考えは少し平和的すぎる。

ユナン達は呆れながら、口をとがらせて訴えてくるフィーナをなだめた。

傷の治療を終えたころ、日は傾き始め、辺りはすっかり薄暗くなっていた。

「もうこんな時間か。急いで帰っても日が暮れてしまうかな。取り敢えず…帰ろうか。」

そのアベルの言葉に従って、僕らは村へ急ぎ足で向かう。その道中でドータがユナンにちよっかいをかけてきた。

「おやおや。ユナン君、おれさまより怪我しちやってるじゃんか。まあ今日の勝負はおれさまの勝ちってことで」

「俺は3匹相手にしたんだ。2匹までなら無傷で済んだんだぞ」

ユナンはドータの煽りに不貞腐れながらそう答えた。そんなユナンの反応に、ドータは手を口に当て、少し声を高くしてさらに煽ってきた。

「ほんとかなあ?ニヤニヤ。」

…次会った時は、母に頼んでこいつをあの魔獣の山にぶち込んで貰おう。

ユナンはそう心に決めた。

「それにしても…あの場所で魔獣が出たことなんて、これまで1度も無かったのに。おかしいとは思わないかい？」

確かにアベルの言うとおりだ。実際母も、あいつらは魔獣の中でもかなり弱い部類だから人里付近には近づかないと言っていた。

…何だか嫌な予感がする。

「そうだな。少し急ぐうぜ。」

ユナンたちは言いようのない不安を抱えたまま、よりいっそう、村への足取りを早めたのだった。

第一章3 『16歳の誕生日 夜』

「はあ…はあ…走って…帰ると…案外…疲れるよね」
息を切らしながらフイーナがそんな愚痴をこぼす。
空は星がかすかに見えるほど暗くなり、地平線の端にだけ、夕日の光が残っていた。

「やはり急いで帰っても、日は沈んでしまったようだね。」

でも僕たちの心配は杞憂に過ぎなかったようだ。」

アベルが周りを見渡しながらそう言った。村の家の小窓からは、ラントンの明かりが漏れており、いつも通りの村の風景があった。

「なーんだ。無駄に体力使っちゃまっただけかよ。おれさまは腹が減ったから、もう家に帰るぜ。また明日な」

そう言っただけで、気だるそうに歩いていった。

「僕たちも家に帰ろうか。僕とフイーナはこっちの道だから、ユナンとはここで別れだね。今日は父親が家に帰ってるんだってね。久しぶりの家族3人での食事、楽しんでおいで。それじゃあまた明日。」

「あしたユナンのお父さんに会わせてねーばいばーい」

「おう。今日は楽しかったぜ。また明日な。」

ユナンは手を振りながらそう言って、アベル達と別れた。

父親かあ。会って何を話したらいいんだろう。どんな人だろう。母さんと気が合うってことは変人なんだろうな。

父について考えるにつれ、胸の中の期待と不安がどんどん膨らんでくる。実質、父親との初対面だ。そりゃあ誰だって同じような状況になれば、緊張ぐらいするだろう。

父親のことで頭がいっぱいだった俺だが、道中、ある違和感を感じた。

——マイセン爺さんが家の中にいる?!

マイセン爺さんとは、村の中でも母に次ぐ、有名な変人だ。上半身

は裸で、下半身は皮の腰巻のみというヤバい格好をして、いつも家の前で座禅組んで瞑想している。

そして、俺はこれまで1度もマイセン爺さんが家の中にいる姿を見たことが無かった。

だからこそマイセン爺さんの家に明かりが点いている今回の事態に、驚きを隠せなかったのだ。

まあ明日にでも爺さんに直接聞いてみるか。

それよりも今は目の前の事に集中しないと。気がつけば、家はすぐ目の前であつた。

ユナンは今、家のドアの前に立っている。毎日見ているドアなのに、今日は何故だかいつもより大きく思えた。

…うるさくなるって言ってた割には案外静かだな。

まあ契約者である2人だ。俺の気配なんて簡単に分かってしまう。何かサプライズドッキリでも仕掛けて、息を潜めているといった感じだろう。

溜まった唾液を飲み込み、緊張を感じとられないように、声を張り上げながら家のドアを開ける。

「ただいまー!!」

しかし、返事は返ってこない。中には誰もいなかったからだ。けれども、大きなテーブルには、母が作ったであろう大量の美味しそうな料理が、手付かずの状態で綺麗に並べられており、椅子も3脚用意されていた。

…料理多すぎじゃね？

「母さんー？と、父さーん？」

2人を呼びかけてみたが一向に返事は返ってこない。

流石にサプライズが長すぎる気がする。

いやここまで隠れておくメリットなんか無い。

そう思った瞬間、ユナンの中から言いようのない不安がたちまち込み上げてきた。

まず、いくら夜だからとはいえ、家へ帰る途中、誰にも会わないなんてことがあるのか。

頭が父親のことではいっばいだったとはいえ、そんな事にも俺は気が付かなかったのか。

——！フィーナ達が心配だ。

何か危険な事態が起こっていたとしても、父と母は契約者だ。自分でどうにかするだろう。それよりも心配なのはフィーナとアベルだ。ドータはまあ、大丈夫だろう。

フィーナ達の所へ行く前に、一応、何か身を守るものを持っていこう。室内を見渡すと……母がいつも使っている武器を見つけた。「カタナ」と呼ばれていて、母の故郷である極東の地方で使われている武器だ。

カタナを鞘から抜いてみる。片方にだけある刃は、しっかりと研ぎ澄まされており、波のような模様がうっすらと見える。刃の長さは俺の身長半分くらいだろうか。鏢は黒く、左下の隅に赤色の葉の模様が刻まれている。

7枚の葉が扇のように広がるようにして、1つの葉となっており、こちら辺では見ることに無い葉だ。母いわく、時期によって色が変わるらしい。

柄には、黒と白の刺繍で細長い龍のような模様が施されている。

母は他の武器を持っていったのだろう。大体、素手で大抵の魔獣をなぶり殺しにする人だ。何を持っていても大して変わらない。

ユナンはカタナを腰に差して、家を飛び出た。

やはり人はいない。魔獣の襲撃を受けてみんな町へ避難したのか？

「もうすぐフィーナの家に着くか。」

——その時だった。

「いやあああああああああああ!!」

喉を引き裂かんとするほどの悲鳴がユナンの耳に響いた。

：悲鳴の声はフィーナのものだった。

村の道の真ん中で、フィーナが力なく、へなへなと座り込んでいる。奇妙な音が目の前から聞こえてくる。薄暗くてよく見えないので、近づいていくと――

何かをしている黒い人影の様なものと、

何度も刺され、目を大きく見開きながら息絶えているアベルの姿がそこにはあった。

しかし黒い人影のようなものは、その刺す手を止めようとしないう。何度も、何度も、繰り返しアベルの身体に剣を突き刺す。

肉の潰れる音と、刺されたことによつて血が外に大量に漏れ出す音がユナンの耳に入ってきた。

ついさつきまであんなに元気だった友の姿は、どこにも無く、ただ抜け殻となった肉の塊だけがそこには残っていた。

ユナンはそんな受け入れられない現実を前に、頭が真っ白となった。

しかし、胸の奥から燃えさかる程の怒りが湧き上がり、脳より先に、身体が勝手に動いた。

「ああああああああああ!!」

悲鳴と怒声が混じった雄叫びをあげながら、ユナンは鞘からカタナを引き抜き、黒い人影に向かって斬りかかる。

ゴンツ

しかし、鈍い金属音が鳴り、俺は後ろに仰け反った。

：弾かれたのだ。

「ヴェアアアアアアア」

黒い人影が恐ろしい唸り声を上げながら、ゆっくりとこちらを向く。黒いモヤモヤに覆われていて気がつかなかったが、よく見ると、てつかめんを被り、全身を金属の鎧で覆った格好をしている。本で見た、300年ほど前の騎士の格好によく似ている。そして手には、血

がびつしりとこびり付いた両刃の剣を持っている。刃から鈍い光を放っており、命を容易く奪いとってしまいう事が本能で感じられた。

ユナンはカタナをしっかりと両手で構え、目の前の敵と対峙する。これまでの犬のような奴とは比べものにならない。1度判断を誤れば、命は無いだらう。だがこちらも持っているものは、木の棒では無い。

——勝負は一瞬だ。

「キイイイイ！」

奇怪な音を発しながら相手が右手で剣を振り上げ、斜めに斬りかかってくる。……遅い。母の太刀筋に比べたらこんなのを捌くくらい、朝飯前である。ユナンは左前に体重を落として身体を捌く。攻撃を外した相手が少しだけ前のめりになり、体幹が崩れる。その隙を逃すはずが無い。すかさず体重を前に乗せ、そのまま勢いに乗り、

「はあああああ!!」

ユナンは渾身の突きを、相手のてつかめんと鎧の間の喉の部分に目掛けて放った。全身鎧の相手には、突きが有効なのだ。母から色々学んでいた成果が生きた。

「ギイシヤヤアアア！」

人影は悲鳴のような叫び声を上げながら、黒い霧となって消えていった。

∴魔獣の消え方と同じだ。

だが人型の魔獣なんて、これまで見たことがない。

振り返り、フィーナの安否を確認する。

「アベル……アベル……」

鼻をすすりながら、今は亡き友の名前を呼び続けていた。彼女を見ると改めて、彼がもう一生戻って来ないことを理解してしまって、瞼の奥から熱いものが込み上げてくる。

——だが、まだ泣いてはいられない。

フィーナとドータを連れてこの村を出なければ——

そう考えた時だった。

「ヴェエアアアアアア！」

さっきの敵と、同じ姿をした人型魔獣が5体、俺たちの周りから姿を現した。

…ヤバイ。

2体同時でも勝てるビジョンが浮かばないのに、それが5体も。絶望的な状況だ。

「フイーナ！立てるか？ここは俺に任せて逃げろ！」

「ユナンまで…アベルと同じこと言わないで！私はもう目の前で、友達が死んでいくのを見るのは嫌なの！」

「そんな事言ってる場合じゃ——」

「キイイイ！」

同じような唸り声を上げ、人型魔獣が一斉に斬りかかってくる。もう逃げられない。俺はフイーナを傷つけまいと、とつさに庇った。

…俺の人生、ここで終わるのか。母さん、すまない。

「——ドーム!!」

たくましい男の声が響いたと同時に、ユナンたちの周りを灰色の岩の壁が取り囲む。ドツドツと低い音が聞こえてくる。恐らく魔獣の剣とこの岩がぶつかった音だろう。

「ジバンバ！」

また新たな言葉が発せられ、地響きのような音が鳴り響いた。

「ギイシヤアアア！」

「おらあああ！」

「ギイシヤアアア！」

男の掛け声と魔獣の叫び声が交互に聞こえてくる。

何が起こっているのか分からないが、おそらく男が勝っているのだろう。

そしてユナンたちの周りを覆っていた岩壁が崩れる。

辺りには荒々しい岩石が散乱していた。そして巨大な斧を肩に担

いで、凛々しく仁王立ちしている中年のおっさんの姿があった。
「もう大丈夫だ。坊主たち。」

第一章4 『黒い手』

「もう大丈夫だ。坊主たち。」

そう言った男の姿は、とても頼もしく、大きく、巨大な岩のように見えた。

深緑色の髪の毛ヒカンヘアーで、立派に生えた顎髭からは豪傑さが感じられた。顔に見合った、筋肉質な腕には、歴戦の古傷が刻みつけられている。そして

緑色のマントを羽織ったその姿とこの強さ。正体は大体予想がつく。

「助けてくれてありがとう。おっちゃん、騎士か？」

「当たり前だ坊主。わしの名はドーゼル。緑の王国騎士の1人だ。まあこの嬢ちゃんを迷わず庇った坊主も騎士に並ぶほどの度胸があるぞ。」

「あ、ありがとう。：騎士が来たってことは通報があったのか？」

「いや、むしろ緑の騎士団はパトロール中に強大な魔力反応を検知してな。急いで駆けつけて来たらこの状況よ。」

「ということは村の人々は町へ避難していない？でも血の跡も死体も無かった。いったい何処へ？」

「副団長ー走んのはやいっすー」

後ろから気だるそうな女性の声が聞こえた。振り返ってみると、ドーゼルと同じ格好をした5人の騎士が走ってきている。

「おまえらが遅いんだ！大地の加護がありながら、情けない事をぬかすな。危うくわしらの守るべき民の命が消えるところだったんだぞ。」

「大地の加護は疲れないだけっす。速さは関係ないっすから。：まあ反省はしてるっすよ。」

そう言ったのはさっきの女性だ。金色の短髪で、白い肌。大きな目に青色の澄んだ瞳を浮かべている。胸元は大きく開いており、女性らしさを存分に主張している。

そういえば、ドーゼルの胸元も開いており、立派な大胸筋を見せていた。緑の騎士団の正装はなかなか変わっているな。

他の4人の騎士は、20代から30代の男で、みんなドーゼルに負けず劣らず、立派な筋肉をもっているようだ。

…やはり胸元は開いている

「まあ坊主たちには一旦町へ避難してもらおう。ナタリー、おまえに任せる。」

「了解つす。それじゃあついてきてー。わあ！かわいいっすね。君の名前は？」

「フイ、フイーナって言います。」

「フイーナちゃんよろしくっす。小さくて可愛くて、ウチの妹を思い出すっすー。それでー」

「ちよつと待つてくれ！俺はドーゼルについて行く。まだあと一人、男の子が村に残ってるんだ。案内したい。」

ユナンは話の途中で遮り、慌ててそう言った。

「…まあその腰の武器は飾りじゃないんだろう。わかった、案内してくれ。ただそいつを保護したら、坊主には避難してもらおうぞ。」

ドーゼルは腕を組んで、険しい顔つきでユナンの方を見てそう言った。今この村はそれくらい危険な場所なのであろう。だが、ドータを見捨てるなんて真似は出来ない。

「わかった。その子と合流したら、すぐ避難するよ。約束する。」
ユナンは真剣な顔つきでドーゼルにそう返した。

フイーナ、ナタリーと別れ、ユナンたちはドータの家へと向かった。道中にも、人型魔獣が湧いてきた。だが一瞬のうちに、岩に貫かれ黒い霧となつていった。

「というか無限に湧いてくるなこいつら。」

「当然だ。こいつらは手下みたいなものだ。親玉を倒さない限り、キリがないぞ。」

「親玉？無限に湧いてくる魔獣なんて聞いたことが無いけど。」

そのユナン言葉を聞いて、少し迷ってからドーゼルはこう答えた。
「こいつらは魔獣などでは無い。…まあ坊主には知らなくていいこともある。」

ユナンがその答えに納得がいかず、更に問いただそうとした時、遠くとうつすらと人影が見えた。ユナンたちは急いで人影の元へ駆け寄る。

「ドーター！」

「お…う。生きてたか。流石だな。」

ドーターは右手に大きな鉈を握りしめている。腕や身体にはいくつもの切り傷があり、あいつらと激しく戦闘したことが見て取れた。

ドーターはそのままユナンに倒れてきた。

「お、おい?!ドーター！」

「傷は多いが致命傷は無い。大丈夫、気を失ってるだけだ。おい、傷の当てをしてやれ。」

ドーゼルがそう言うと、1人の騎士がドーターに近寄り、緑色の光を傷に当てる。すると、ドーターの傷口が綺麗に塞がっていった。

「すっ、すげえ。」

「まあ大地の治癒能力の応用だ。自分に使う時より、効果は下がるが、これくらいの傷なら塞ぐことが出来る」

これで一安心。そう思った時だった。

「フオオオオオオオウ」

奇妙な音色の甲高い声が聞こえた。そして、周りの空間が一瞬にしてさらに暗くなったのだ。何故か背筋が凍るぐらい、寒気がした。現れたのは、この世ならざるものであった。

手下よりも濃い黒い霧がかかっている見にくいのが、本体は女の人の形をした影のようなものだろうか。ただその背後からは、おぞましい真っ黒い手のようなものが何十本も伸びている。夜の闇よりも暗いそれは、見るだけで恐怖が刻みつけられた。

「最悪のタイミングでのご登場だ。おい坊主！今すぐそいつを抱えて反対方向へ走れ！」

俺だつて今すぐここから逃げ出したい。だが…

「あ、足が震えて動かねーんだ!」

「クソツ、やはり坊主にはまだ早いか。おめえら!ここで食い止めるぞ!日頃の筋トレの見せどころだー!」

「おおお!」

豪快な掛け声とともに、ドーゼルと部下の騎士4人が勇猛果敢に敵へと向かっていく。その姿は頼もしく、あの怪物にすら

「ジバリータ!!」

騎士4人が一斉にそう唱えると、大地から、家よりも大きな尖った岩が、敵に目掛けて無数に放たれた。命中はしたものの、手応えは無い。

「なら、これはどうだあ!!」

そう叫びながら、ドーゼルが巨大な斧を地面に叩きつける。そこからの衝撃が地面を一直線につたわって、敵の真下にたどり着き、山ほど大きな岩が勢い良く地面から噴射された。辺りに砂埃が巻き起り、敵の姿が見えなくなる。

「…やったか?」

騎士の1人がそう口にする。

… 何故かとても不安になるセリフだ。

その時、砂埃を突き破って、黒い手が勢いよく騎士4人に向かって伸びていった。その手はとてつもない速さでそのまま彼らを貫く。

「グフツ」

騎士4人の腹が黒い手によって貫かれていた。しかし、常人なら致命傷になる傷を負ったにも関わらず、彼らの意識は未だ途切れてはいない。

「ジバリータ!!」

それどころか彼らは腹を貫かれながらもなお、魔法で反撃をした。よく見ると腹の周りを緑色の光が覆っている。これが大地の治癒能力であろうか。

すると黒い手が彼らを上空に放り投げ、今度は空中で胸を貫いた。この怪物には知性があるのであろうか。その動作は単なる気まぐれ

ではなく、的確な目的があるように感じた。

「あああああああああああああああ！」

悲痛な声を叫び、大量の血しぶきをあげながら、彼らの意識は途絶えた。今度は胸に緑色の光は無かった。

緑色のマントが赤く染まっっていく。

そんな状況でも、ユナンの足は震えて全く動かない。身動きの取れないユナンにあの黒い手が襲いかかる。

「ーやばい、死ぬ！」

ユナンは自分の「死」を悟り、思わず目をつぶった。

「グッ…」

しかしユナンは黒い手によって、身体を貫かれなかった。なぜならドーゼルが自分の身を盾にしてユナンを庇ったからだ。

だが別の黒い手が、ユナンに襲いかかった。そんな時、ドーゼルの身体が緑色に光る。

「させぬわー！」

ドーゼルが何かの魔法を使ったようだ。

するとその黒い手はユナンの方ではなく、ドーゼルの方へと襲いかかった。

「ーだがその数が多すぎた。」

「ぬおおおー！」

何十本もの黒い手がドーゼルの身体を貫く。

しかしドーゼルは決して倒れない。そしてその巨軀は空中にも投げ出されないほど重かった。そのおかげで彼は治癒魔法を自分にかける事が出来るのだ。黒い怪物の攻撃を全て1人で受け止める彼はまるで、岩を通り越して山のようにである。

すると黒い怪物が攻撃の手段を変えた。沢山の手を1つに束ねて攻撃してきたのだ。

「ふん、威力が変わろうがわしは倒れんぞ！」

「ーしかし、その怪物の狙いはドーゼルでは無かった。」

「あああああああああ！」

ドーゼルの身体を貫いてもその手の威力は抑えられず、そのま

まユナンの身体を貫いたのである。ユナンの胸が真っ赤に染まった。熱い。胸がとてつもなく熱い。そしてそこから何かが大量に溢れ出ている。なんだ？視界が真っ赤でよくわからない。

痛い痛いいたいいたいいたいいたい——

「クソッ。わしは坊主一人、守れねえのか。」

意識が遠のいていく最中、そんなドーゼルの悲痛な声が聞こえた。彼は騎士としての己の無力さに嘆いているのだろう。だがユナンはそうは思わない。

——ドーゼルは十分頑張っていたじゃないか。悪いのは俺だ。何も動けなかった、見ているだけしか出来なかった。悔しい、非力な俺が情けない。こんなところで俺は死ぬのか。まだなんにも出来ていない。アベルの仇討ちもできていない。父親にだって会ってない。もつと母さんのあの笑顔を見ておけばよかった。

胸の奥が熱い。それは先ほどの胸の痛みによるものとは全く違うものだった。

様々な感情が湧き上がってくる。怒り、悲しみ、不安、恐怖、憎しみ、後悔、後悔後悔後悔後悔——

「なるほど、それが君の感情かい？」

中性的な声でそう呼びかけられ、ユナンは意識を取り戻した。

周りを見渡すと、そこには何も無い、ただ真っ白い空間が延々と広がっていた。

第一章5 『君の願いは?』

意識を取り戻すと、俺は真つ白で何も無い空間に立っていた。

…ここが天国つてやつなのか?

「何故黙りこくっているんだい? おーい、聞こえてますかー?」

どうしてこんな所に? 俺は確か、ドータと合流してから、化け物と遭遇して——胸を貫かれた? しかし、今の俺の胸に穴なんて空いていない。

「おかしいなあ…耳はついていないはずなんだが。頭に問題か? それとも、言葉が理解できないほどバ…」

「はいはい聞こえてるよ! ちよつと頭の整理をしてただけだ! んでさつきからちよくちよく俺を煽ってくるのは誰だ?」

後ろから聞こえてきた声にそう答えて、ユナンは勢いよく振り返った。

そこには、白い椅子のひじ掛けに頬杖をつき、足を組んで座っている人がいた。

薄茶色の髪を首元まで伸ばしている。肌の色は雪のように白く、性的な顔立ちで整っている。目の瞳は紫色に輝いており、珍しい色だなど思った。襟付きの黒の縦すじが入った白い半袖のシャツの上に、黒色の袖がない上着を着用している。黒いホット・パンツに、黒いタイツ、黒いブーツを履き、手には黒いショーティーをはめており、変わった格好だなど思った。

…何故か白シャツの胸元を開けており、黒のブラジャーが露出している。女性であるのは、間違いないようだ。

「ボクが誰かって? うーんそれは難しい質問だね。まずボクには名前というものが無いんだ。ただ、いつしか人間はボクをこう呼ぶようになったね。」

そして勿体ぶるようにしてその女性はこう答えた。

「——神と。」

その場の空気が一変したように感じ、俺は息を呑んだ。なるほど、どうりで同じ人間のように感じない訳だ。でもそうだとすると、

「じゃあここは天国ってことか？俺は死んだのか？」

「いや、君は死んではないよ。言っただろう？人間が勝手にボクの事を神と呼んでいるだけだ。まあここは…精神世界とでも言うっておこうか。」

彼女が苦笑しながらそう答える。それなら、

「じゃあ何故俺はここに呼ばれたんだ？おまえの目的は？」

「いや呼んだのはボクじゃない。君がボクを呼んだんだ。…だがボクにも目的はある。ユナン、ボクと契約を結ばないかい？」

契約！なるほど、母さんが言っていたのはこういうことだったのか。というか契約って、てつきり精霊とかと交わすのかと思っていたが、まさか神様と交わす事だったとは。ちゃんと母にいろいろ聞いておけば良かったなあ。

あの黒い怪物を思い出す。…俺にもつと「力」があれば。ドーゼル達と一緒に戦えたのかもしれない。アベルの息絶えた姿が俺の脳裏に焼き付いて、離れない。

——あの怪物に復讐したい。そのための力が欲しい。

「…契約を結びたい。俺には力が必要なんだ。」

彼女が意味深な笑みを浮かべた。

「では、契約を結ぶとしよう。ユナン、君の願いは？」

「…は？俺が欲しいのは力なんだが。」

「そんな曖昧なものじゃなくて…これも知らないのか。力は勝手についてくるが、力の他にもうひとつ。ボクを呼べる程の器を持った者は、契約の際、何か一つ願いを叶えることができる。……というか魂に刻みついているほど、強い願いを持つてないと、ボクを呼ぶことなんて出来ないはずなんだが。たまにいるのさ、君みたいな人が。まあラッキー程度に思いなよ。」

「…ほんとに何でも叶えてくれるのか？」

今の話が本当なら、アベルを生き返らせる事だつて出来るかもしれない。

「それは君の〔器〕と願いの内容次第かな。まあ言うだけ言ってみなよ。」

「じゃあ、俺の友達にアベルつて奴がいるんだ。そいつを生き返らせて欲しい。」

彼女は右手の人差し指を唇に当て、考える仕草をしてから、こう答えた。

「うーん。君はそういう〔器〕では無いらしい。それに…おつと、これは規約違反だね。危ない危ない。」

よく分からない事を言っているが、この願いは叶えられないらしい。まあ死者を蘇らせる事が出来るなんてうまい話、そうそう無いか。

…だいたい、こいつは神つて呼ばれてるだけだしな。

「あつ。1つだけ勘違いしてもらっては困るが、願い事は本来、大抵、何でも叶えることができるんだ。…人間の願いは凄いからね。今回ののは例外中の例外だよ。そうだね、自分に関する願いなら、君の〔器〕で大抵の事は叶えられると思うよ。」

自分に関する具体的な願いか。風よりも速く走れるようになるとか、山をも砕く力とか、色々浮かびはするが…

黒い怪物と戦つて、死んでいった4人の騎士を思い出す。これからもあるな怪物が沢山待ち受けているのかもしれない。

…俺は奴に復讐するまで死にたくない。いや、死ねない。

「おや、とてもいい顔になったね。願いが決まったようだ。さあ、ボクに言つてごらん。」

「俺には復讐したい相手がいる。そいつを倒すまでの道中で、死にたくなんかない。これが俺の願いだ。いけるか?」

彼女がまた、意味深な笑みを浮かべてこう言った。

「ああ、もちろんだとも。君の〔器〕に合った形で願いは叶えられるだろう。それでは、契約を始めよう。」

そう言つて彼女は俺の胸に手を当てる。

「汝の感情を解き放ち、本来のあるべき姿へと。契約はここに結ばれる。」

彼女がそう口にした途端、ユナンの胸から紫色の光が溢れ出す。

そして、胸の中の何か解き放たれるのを感じる。

「うわあああああああ！」

これまで経験したことのないふわとした不思議な感覚に、ユナンは思わず叫び声をあげる。そして、少しずつ、ユナンの意識は遠のいていった。

「…さて、君の願いの結末はどうなるのやら。」

そんな声を聞いた直後、ユナンは完全に気を失った。

第一章6 『群青の竜』

目が覚めると、ユナンは見知らぬ森の中で仰向けになって寝転がっていた。

辺りを見渡すと、見たことのない木々が生い茂り、木の根本からは緑色にうつすらと光るキノコがたくさん生えていた。日光は木々によって遮られており、ひんやりとした寒さが肌に伝わってくる。

どうやら、ウルク村付近の森では無さそうだ。

「まず、今の状況を整理するか。」

左の腰にカタナを差している。やはり村での起こった出来事は夢なんかじゃない。：胸の傷は塞がっている。服まで元通りなのはどういうわけだろう。これも神様の力つてやつか？

そんなことよりも、ドータやドーゼルが心配だ。フィーナは避難出ていそうだが、他のみんなはあの黒い怪物に……いや、ネガティブに考えるのはやめよう。そんなことを考えたって何も変わらない。

——みんなを信じるんだ。

「まあこの森を出ない事には何も始まらないか。」

とは言ったものの、地図も無ければ、自分がどこにいるのかさえ全く分からない。なんであるの女神は、こんな所に俺を飛ばしたのか……

「ひとまず、歩いて探索してみるか。」

ユナンはキョロキョロと辺りを見回しながら、森の中を歩き始めた。

歩き始めてどれほど経った頃であろう。

突然、先の方から断末魔の咆哮のような音が聞こえてきた。

：正直、行きたくない。いくら契約者になったからって、わざわざ自分から危険な場所に行くような事は避けるべきだ。

しかし、何らかの手がかりにはなるかもしれない。このまま一生、森の中を彷徨い続けるよりはマシだ。

ユナンは意を決して、音のした方へ歩いていった。

「全く、しぶといやつだ。くたばりやがれ！」

——！中年の男の声が聞こえてくる。やった！これで森を抜けられる！だが、男は何かをしているようだった。

——竜だ！

そこには群青色の大きな竜がうなだれて、伏していた。俺の身長は5倍はあるだろうか。

男2人が槍でその竜を突いている。何故、竜は反撃しないのだろう。人間2人くらい、返り討ちに出来そうなものだが。

「罅が明きませんぜ。アニキ。一旦応援呼びます？」

細身の出っ歯の男がそう言った。

「いや、何故かこの竜は抵抗してこない。このまま刺し続けていれば、いずれ力尽きるだろう。」

筋肉質の屈強な男がそう返した。

どうやら男達は、反撃してこない竜を、一方的に痛めつけて殺そうとしているらしい。

変な場面に出くわしたな。このまま竜が死ぬのを待ってから、声をかけることもできるが、

：あの断末魔の咆哮が耳から離れない。

たとえどんな生き物だとしても、動けないものを一方的に痛めつけるのは良い行いとは言えない。それに、この竜が悪いやつには見えな
いのだ。

「生き物にひどいことしたらダメでしょー！」

ある女の子の言葉を思い出す。

俺の友達ならこんな場面に遭遇しても、迷わず飛び出して行って、止めにいくに違いない。

「あの一おっさん達、何してんの？」

ユナンは男2人にゆっくりと近寄りながら、そう尋ねた。

「こんなところに人とは珍しい。見ての通り竜を狩っているところだ。正義のためにな。」

屈強な男が自慢げにそう答える。

…正義か。良い建前だ。だが、竜の鱗は高く売れるらしい。

「お金儲けの間違いじゃ？それにそんな反撃してこない竜を狩るよりも、魔獣を1匹、2匹狩る方がよっぽど人のためになると思うが。」

ユナンはそう言つて竜の前に庇うように立つ。

「なんでえ？俺たちに喧嘩売ろうつてかい？アニキ、やつちまつてくませえ。」

「おい小僧。俺たちの仕事の邪魔をするたあ、いい度胸だ。ちよいと痛い目、見てもらうぜ。」

そう言つて屈強な男は、槍の矛先をユナンに向ける。

やつぱりこうなるかー！いや、強そうだぞ、あのおっさん。どうする？…いや俺は契約者になつたんだ。

——自信を持って。

ユナンも腰のカタナを抜いて、構える。

心配するな。俺は「力」を貰つたじゃないか。

それさえ使えば…

そこで俺はある重大な事に気がつく。

——「力」つてどうやって使うんだ？

「はあああああー！」

男が発声をしながら、槍を薙ぎ払ってきた。

ユナンは少し反応が遅れたが、なんとかギリギリのタイミングで攻撃を躲す。しかし、左腕に切り傷を負ってしまった。

今は普通に戦うしか無いのか。あのクソ女神。大事なところは何にも教えてくれなかったじゃねーか！

「ボクは、質問しなかった君の責任だと思っけどね。」

女神のそんな声が聞こえた気がした。

…きつと気のせいだろう。今は目の前の事に集中しなければ。

槍はその圧倒的なリーチが強みだ。裏を返せば、近づければ勝機が見えてくる。だが、

「良い太刀筋だが、まだ若い小僧。」

なかなか自分の間合いに入れさせてもらえない。相手の方が1枚

上手ということだ。予想外の一撃を叩き込まなければ。

「フェイントか。だがそれは自分より経験が下の相手にしか、あまり通用しないぞ。」

こちらの攻撃が届かない。しかし、こちらの傷は増え続けていくばかりだ。

世界の厳しさを知る。こんなおっさん1人に負けているようでは先が知れている。あの怪物を倒すなど、夢のまた夢だ。

——こんな所で負けていられるか。

もう俺は自分の非力さに嘆くことなんてしたくない。

胸の奥から悔しさが込み上げてくる。

「負けてたまるかああああ！」

周りの景色が、男の動きが、『世界』が遅く見える。

「こいつ?!急に動きが速く!」

俺の間合いに入った!男が驚いて硬直した「隙」を見逃さない。

ユナンはカタナで男をなぎ払い、吹き飛ばした。

男は木に衝突し、そのままうなだれた。

「良い…攻撃だったぜ。小僧。」

男がそう言っただけふらふらと立ち上がる。

「ア、アニキ?!こんなガキ2人がかりなら…」

「黙れヤチンス。もう帰るぞ。そんな傷ついた竜なんて放ってお

け。それに俺は、竜とは対等にやり合う方が性に合うからな。」

そう言っただけ強な男はユナンから背を向けた。

「小僧、この道を辿って行けばロゼッタっていう町に着く。久しぶりに良い戦いができた。礼を言う。」

そう言い残し、屈強な男は去っていった。その後を細身の男がついて行く。

…案外、良い奴だったのか?まあそれよりも今は竜のことだ。

振り返って竜を見る。青色の鱗には槍による傷がびっしりとついていた。だがどうやらそれが問題ではないらしい。竜は翼を痛そうにしていた。

「俺が『緑』の力だったらすぐ治療してやれるんだが。」

あいにく、自分が何色なのかも分かっていない状態だ。どうやって応急処置をしようか悩んでいると、辺りから青色の光を放つものがふわふわと飛んできた。

「うわっ。なんだこいつら。」

そいつらは、竜の翼のところに集まって行って…

「すげえ。傷が治っていく。」

大きな青い光に包まれた竜の翼の傷が、少しずつ塞がっていく。母さんから聞いたことがある。森には精霊が多く生息しているらしい。

普段は人の目から隠れているらしいので、こうして実際に目にするのは、俺も初めてだ。

「まあそれならもう大丈夫だろう。また人間に見つかるんじゃないぞ。」

そう声を掛けて、俺はその場を離れる。

この道を進めば町にたどり着くんだったな。さっきの戦いで腹が減ったなー。先を急ごう。

ちようど、夕日が沈んでいく時間帯であった。

ユナンは駆け足で道を進んでいく。

彼の旅はまだ始まったばかりだ。

竜の姿から銀髪の少女の姿へと変わっていく。

全く、久しぶりに竜の姿で空を飛ぶ練習をしていたら、散々な目があった。ミスをして翼を痛めてしまい、おまけに落ちた先に「竜狩り」の人間がいるとは。

「…それにしても、竜を庇うなんて、変な男の子。」

竜を嫌う人間はかなり多い。過去に人と竜との、多くの争いがあったからだ。だからこそ、わたしは「竜の姿」で人を傷つけるような真似は絶対にしない。…いつの日か竜と人が共に歩み寄れるように。

あの男の子は何故あそこまでして、竜を助けたのか。しかもその後、何の見返りも求めずに、その場を立ち去ってしまった。

「…町へ行くのって、こっちの道で合ってるのよね。」

その町に彼もいるのだろうか。お腹も空いたし、久しぶりに人里におりてみるのも悪くないのかもしれない。

少女は大きめの白いローブを羽織り、フードを被って町を目指す。

——運命の齒車は回り始める。

第一章7 『一文無しの男』

「いや、こういうのってすぐ町に着くはずなんじゃねーのか？」

ユナンはふらふらになりながらも、なんとかロゼッタの町にたどり着く。日はとつくに昇り、人々が仕事をし始める時間帯になっていた。つまり、ユナンは夜通し、道を歩き続けたことになる。

「…とりあえず飯だ。飯。腹が減ってはなんちゃらつて母さんも言ってたしな。」

ユナンはとりあえず、町を歩いて食堂を探すことにした。

結構大きな町のようにだ。馬車が二両通れるほど、大きな通りの両端に、たくさんのお店が綺麗に並び建っている。宿屋、果物屋、武器屋、道具屋などの看板がぶら下げられている。まだ、開店準備中の店が多いようだ。

これはまだ食堂も開いてないか？

そう思っていた時、酒のマークの看板に目がついた。

両開きのドアノブには、白い文字で荒っぽく「OPEN」と書かれた木の板がかかっている。

酒場だが、まあ何かは食べられるだろう。飲酒は王国の法律で成人からと決められている。俺もようやく酒を飲めるようになったわけだが、あいにくこんな状況で飲むほど、能天気ではない。

酒場の扉を開ける。木の軋む音と入店を知らせる鈴の音が鳴る。中には、奥のテーブルの方で、朝っぱらから酒を飲み交わす数名の男たちと、

「いらっしやい。見ねえ顔だな、兄ちゃん。」

カウンターの内側で筋肉質な腕を組んで、こちらに声をかける男の姿があった。頭には橙色のバンダナを巻き、ニカツと綺麗に並んだ白い歯を見せ、こちらに明るい表情を向ける。

ユナンはカウンターの椅子に座り、店主に話しかける。

「おっちゃん、何でもいいから、腹にたまるものを頼む。」

「おうー！いいぜ、値段は…銅貨3枚だ。」

その言葉を聞いて、ユナンの表情は固まった。決して、値段が高かったからではない。むしろ、酒場にしては良心的な値段だ。だが、

——俺、金、持ってねーじゃん！

馬鹿なのか俺!?空腹で金の事なんて、全然考えてなかった。こんなことならあの時、カタナと一緒に家の全財産、持っていつとけば良かった…。

「…おっちゃん、すまねえ。俺、銅貨1枚も持って無かったわ。ただあと少しだけ、ここにいさせてくれ…」

ユナンはカウンターに突っ伏して、そう答えた。これからどうしようか。何かの依頼とか受けて金を稼ぐしか…

ただ、この空腹の中、まともに動けるかは怪しい。

「お、おう。兄ちゃん、ワケあり見てえだな。朝は客もあんま来ねえし、ゆっくりしていけよ。」

おっちゃんの優しさが目に浸みる。情けねえな、俺。

カランカランつと入店の鈴の音が聞こえる。どうやら客がやってきたようだ。

「いらっしやい。また見ねえ顔だな。今日は新しい客がよく来るぜ、まったく。」

スタスタとこちらに歩いてくる音が聞こえる。どうやらカウンターの席に座るようだ。

「おじさん。何か食べ物。お金の心配は要らないわ。」

甘く、澄み透った高い声がした。聴く者すべての心を震わせる、そんな声だ。

…お金の心配は要らない、か。いいなあ。

「おう！金持ちも一文無しもみんな揃って、値段は同じ、銅貨3枚だ。これも商売なんですね。」

…多分この言葉は、その女性へというよりは、俺に向けられたものなのだろう。一文無しですみません。

「ふーん。おじさん、いいひとね。…この隣でずっと寝ている男の子は？」

「あー、その兄ちゃん。一文無しで飯も食えねえんだとよ。流石にすぐ店を追い出すのも可哀想だから、ちよつとだけ置いてやってんだ。」

「そう。…おじさん、この男の子にわたしと同じ料理を振舞ってあげて。お金はわたしが払うから。」

「えっ!?!いいのか!」

ユナンは飛び起きて、勢いよくその女性に歩み寄った。白いフードを被っていてよく見えないが、銀色の髪をした少女であるようだ。

「ええ!?!あなた、起きてたの?…そうよ、感謝してよね。——!。つてあなた、まさかこんな所で出会えるなんて。」

何かに気づき、少女は目を見開いて驚く。どうやら俺のことを知っているようだった。少女の水色の瞳が綺麗に輝いている。

…ただ、こんな可愛い女の子と出会った覚えはない。忘れるはずなんて無いとは思うが、

「えつと君…どこかで会ったっけ?」

「あつ。なんでもないのほんとに。ほんとだから。」

嘘をついているのが丸わかりな反応だ。だが悪い子には見えない。飯も奢ってくれようとするし。

「ほらよ。おまちどおさん!」

出てきたのは熱々のオムライスだ。卵がふわとろで、とても美味しそう…。なんだか、涙が出てきそうだった。

「いただきます。」

ユナンと少女は、同じタイミングでそう言つて、オムライスを食べ始めた。

卵は見た目通りふわふわで、ライスの部分もしっかりケチャップで味付けされている。身に染みる美味さだ。

…奢ってくれた少女には、お礼言わなきゃな。

「えーと俺の名前はユナン。君の名前は?」

「わたしの名前はセーナ。…ただの旅人よ。」

「そうかセーナ、本当に助かった、ありがとう。君は命の恩人だ。何もお礼が返せなくて悪いが…」

すると、彼女は少し頬を膨らませてこう言った。

「別にお礼が欲しくてしたわけじゃないもの。命の恩人だなんて、大袈裟ね。それに…」

そこで彼女は口を紡ぐ。

「…?..どうかしたのか。」

「いや、なんでもないの。それより、ユナンはどうしてこの町に?」
そんな彼女の問いに、ユナンは少しだけ戸惑う。

本当の事言っても信じるわけないよなあ。

「いや、ちよつと旅の途中でさ。とりあえず、王都でも目指そうかと。」

「ふーん。一文無しで旅なんて、変な人。」

彼女が怪しげな視線をこちらへ向ける。

うぐつ。痛いところを突かれた。俺だって好き好んで一文無しで旅なんかしてねーよ…

「実はお金、全部使い切っちゃってな。あはは。」

ユナンは乾いた笑いをしながらそう答える。すると彼女の視線がよりいっそう強くなるのを感じた。まあ無理もないであろう。

「ごちそうさま。」

ユナンとセーナはほぼ同じタイミングでオムライスを食べ終える。

「おっさん!すげえ美味かったぜ。」

「おう!ありがとな。次はちゃんと金払ってから、その言葉を言ってくれよな。」

はい、すみません…

「えーと銅貨6枚でいいのよね。」

「いや。久しぶりに、純粋な人の思いやりってやつを見て感動しちゃったよ。特別サービス!2人合わせて、銅貨2枚だけでいいぜ。」

「あ、ありがとう。おじさん。」

「マジか!やっぱりおっさん良い人だな。」

そう言っユナンは笑顔でセーナを見る。何故か、彼女の表情が少しこわばっているように見えた。

「ほんじゃあ次は金持ってまた来いよ。兄ちゃん。」

「ああ！この恩は忘れねえ。また来るよ。」

そう言つてユナンたちは店を出た。

もうお昼時になり、大通りには多くの人が行き来して、たくさん
の声で溢れかえっていた。

こんなに人がいるのを見るのは初めてだ。自然と心が躍る。

「なあ。ちよつと他の店とか行つてみないか？」

「いいけど。あなた一文無しなのに？それに、もう一緒にいる理由
なんてないけど…」

結構痛いところを突かれる。確かに一緒にいる理由なんて、もうな
い。

だが正直、一人でいるのは心細い。それに、

「言つただろ？俺は君に恩返しがしたいんだ。店を巡るのは情報を
仕入れて、依頼を受けて、お金を稼ぐことが目的だ。」

ユナンは必死に身振り手振りを入れながら、そう熱弁する。

まあ、後半のは言い訳みたいなものだ。

「…わたしも店で買い物をする予定だったから別にいいけど。何も
買つてあげないわよ？」

「乞食してるわけじゃねーよ！いいよ、勝手に手について行くから。」
こうしてユナンとセーナは、一緒に店を巡ることになった。

2人は様々な店に入つていき、ロゼッタの町を存分に堪能した。
そして、日が沈み始める。

「…どんだけ買うんだよ。これとか、本当に要るのか？。」
そう言つて、ユナンはもふもふの犬のぬいぐるみを指さした。

「か、可愛いからいいでしょ！それよりその…荷物持つてくれてあ
りがとう。」

「ああ、いいよ。俺から持ちたいって言つたんだし。」
途中、何もしてない自分に嫌気がさして、俺は荷物持ちを引き受け
たのだ。

「でも、もうお別れね。今日は楽しかったわ。ありがとう。」

別れの時がやってくる。流石にこれ以上この子に付きまどつたら、

ストーカーと同じだ。町の衛兵を呼ばれるなんてのは御免だ。

「…こつちこそ楽しかったぜ。ほら、荷物全部持てるか？」

そう言つてユナンはまとめた荷物を彼女に渡す。

「当たり前よ。わたしつてこれでも、ユナンより、力もちなんだから。」

彼女がドヤ顔でそう答え、荷物を受け取る。セーナの身長と同じくらい荷物を背中に背負い、彼女は歩き出す。

…結構軽々と背負っている。今の言葉もあながち、嘘では無いのかもしれない。俺の今までの存在意義とは…

「またな。セーナ！」

「…さようなら。ユナン。」

そう言つて彼女は俺から背を向け、歩きだす。

そんな彼女の後ろ姿が、やけに寂しそうに思えて――

「――い。」

「えっ？」

彼女が何かを呟いたような気がした。

「輝石が、無い!?!」

そんな彼女の焦る声が、町中に響き渡った。

これはユナンとセーナが酒場を出た後の出来事である。

「全く、変なやつらだったぜ。」

男はコップを磨きながら、そう、口にこぼす。このご時世に、あんな心暖まる光景を目にすることができるとは。まだまだ世の中、捨てたものじゃない。

そう男が感慨に耽っていると、カウンターの椅子の下に何やら、光り輝くものが落ちていたのを見つける。

「ん？参ったなあ。嬢ちゃんの忘れ物か。…これは」

男が手に取ったそれは、水色の輝きを放っている石であった。

その瞬間、男の表情が変わる。

忘れるわけがない、この形状、そしてこの輝きは、竜の輝石だ。：
あの忌々しい竜の。

竜人族にとって、竜の輝石は命の次に大切なものだ。いずれ、あの
竜はここを訪ねてくるだろう。

「おい、おめえら！竜狩りの時間だ。」

重々しく、低い声で男はそう叫んだ。その瞬間、酒場で飲んだくれ
ていた男達の雰囲気が変わる。

「悪いな。これが俺たちの『ケジメ』なんだ。」

第一章 8 『竜人』

「輝石が、ない!?!」

セーナが悲鳴じみた声をあげて、頭を抱えている。

輝石?なんだそりゃ。ここまで気が動転してること、彼女にとつて、とても大切なものなのだろう。

「どこかで落としかたのかな?どうしよう、どうしよう……」

セーナはそう呟きながら、意味もなく、あつちへ行ったり、こつちへ行ったりしている。

…なんか小動物みたいで、可愛いな。

ユナンはそんな事を思いながら、セーナに少しカツコつけた声で、こう呼びかけた。

「コホン。なにか、お困りのようだね。手伝おうか?」

「…いや結構です。それでは。」

「なんか冷たくね!?!これでも俺たち、半日一緒に買い物した仲だよなあ!?!」

「ごめん。ちよつと気持ち悪くて、つい冷たくしちゃった。でも、ほんとに手伝いは要らないの。——これは、わたしの問題だから。」

…何か、あまり関わって欲しくない理由があるようだった。だが、あんなに気が動転した姿を見せられて、大丈夫だとは思えない。それに、

「何度も言うが、俺は君に恩返しをしたいんだ。君が困ってるなら、俺は君の力になりたい。」

ユナンは真っ直ぐにセーナの目を見つめ、そう答える。この言葉に偽りはない。

セーナは少し戸惑いの表情を浮かべた後、意を決したように、俺の目を見つめる。

「わかったわ。ちよつとついて来て。」

そう言つて、セーナに連れて来られたのは、町はずれの人目につかない場所であつた。そして、彼女はフードを取つた。

腰まで届くほど、長い艶やかな銀髪。均整のとれた顔だち、きめ細

やかな肌は雪のように白い。そんな相手に天使のような眼差しを向けられては、誰だって、心を奪われる。

「…超が付くほど可愛いな。なんで、フードなんか被ってるんだ？もったいなすぎるだろ…」

ユナンは思わず、そんな感想を口にする。

「お世辞はいいから。…今からその理由を説明するの。」

セーナは少し頬を赤らめて、恥ずかしそうにユナンの評価を受け流す。そして、真剣な表情で、ユナンに背中を向け、白いローブを脱ぎ始め…

「待て待て待て！こんな所で脱がれても?!」

ユナンは顔を真っ赤にして、恥ずかしがりながら必死に止めようとする。

「いきなり裸になったりなんかしないわよ。…これを見て欲しかったの。」

セーナの背中から、水色の翼が生えている。

枝分かれした骨、先に鋭い鉤爪が生えているそれは、竜の翼を彷彿とさせる。

「わたしは、竜人という種族なの。人じゃないのよ。だからあなたも、わたしと関わらないほう——」

「カッコイイな！竜人とか初めて見たぞ！」

「えっ…わたしの話聞いてた？わたしは竜なのよ！人に嫌われてる…」

「セーナが人に対して何か悪いことをしたのか？」

「いや…別にわたしは何もしたことないけれど…」

「なら関係ねえじゃん。なあなあ、竜ってことはブレス吐けたりするのかわ?!」

目を輝かせながら、ウキウキで聞いてくるユナンの様子に、セーナは目を大きく見開いて驚いた。そしてユナンからまた背を向けて、その場にしゃがみ込んだ。

「…この姿じゃ吐けないわよ。それにしてもユナンって、本当に変

な子。…本当に、バカなんだから。」

「なんで俺罵られたわけ?!…まあ俺にそんな重大な話を話してくれたってことは、つまり、輝石っていうのが竜人にとって、とても大切なものってことか。」

セーナはその場を立ち上がって振り返り、ユナンの方を見る。

「そういうこと。あれが無かったら、わたしは竜に戻れないの。」

「…そりゃ大変だな。ブレス、吐けないもんな。」

「別に、ブレスが吐きたくて、竜に戻りたいわけじゃないからね!」
セーナは、ぷりぷり怒りながら、必死にそう訴えかけた。

そんなこんなで、とりあえず、セーナとユナンは輝石をどのようにして探すか、の話し合いをすることにした。

「まあこういうのって、失くしたものを最後にどこで見たのか、思い出すのが大事だよな。」

「えーと、最後に輝石を見たのは町に入る前ね。」

「つてことは、結局、町全部を探す羽目になるのか。とりあえず俺たちが買い物した店で探してみようぜ。」

ユナン達は一軒一軒、入念に店の中を調べて回る。だが、輝石は見つからず、店主にも話を聞いたが、一向に手がかりは掴めない。

「この店にも無かったか…次の店行ってみるか。」

ユナンがそう言った時だった。ユナン達は家の前で泣いている女の子の姿を目にする。

「あれ。なんだか困ってるみたいね。話を聞いてみましょう。」

「まあ別にいいんだけどさ。輝石、大事なものなんだろう?盗られてたら目も当てられないし、急い方がいいんじゃない?」

「でも、困っている人を放ってはおけないもの。ならあなたとはここまでね。さようなら。」

「待て待て!冗談だって。俺だって泣いている女の子なんか放って

おけねーよ…」

全く、本当に根っからのお人好しだな。

セーナの後をユナンが追いかける。

「ぐすつ、ヌコちゃん。どこに行っちゃったの？」

「どうかしたの？お姉さんに話してみない？」

セーナが優しく話しかける。

茶髪の女の子は、目を擦ってからこう言った、

「私の大切な友達が、ヌコちゃんが、いなくなっちゃって…」

「そのヌコちゃんってのはどんな見た目をしてるんだ？」

「真っ黒くてふわふわしてるの。よく鼠を追っかけてて、今もそれ
でいなくなってる…」

なるほど、飼い猫を探しているのか。これは探すのが大変そうだな

…

「君の家は？」

「ここ。今ちようど、町を一周してきたところで、でも見つからなくて
…」

「大丈夫！お姉さんたちが見つけてきてあげるから。もう日が沈み
そうだし、あなたは家に帰った方が良いわ。」

「ほんとに？ありがとうお姉さん、お兄さん！」

そしてユナン達は、女の子と別れた。

「んで、石もまともに見つけられないのに、猫なんてどうやって探す
んだ。」

「輝石を探すのと同じよ。人にいっぱい、聞いて回るの。」

…なんて脳筋な考え方なんだ。

「まあ人に聞くのは賛成だ。後は、この子の家の周りを中心に、円を
描く様にして探してみようぜ。」

「どうして？」

「まあ猫の探し方にもコツってのがあるんだよ。」

散々、フイーナの猫を、ドータ達と探し回った日々を思い出す。あ
の苦労が、まさかこんな所で役に立つとは…

「ふーん。ユナンって変な知識だけはあるのね。」

「〔変〕は余計だ。」

そうして、ユナン達は道行く人に聞いて回りながら、猫を探し回った。そんな中で…

「オレと一杯、お茶でもしませんか？いいですよね！」

「えっ…あの遠慮しときます。」

「遠慮なんかいりません！行きましょう。さあ、今すぐに！」

ユナン達は、綺麗な女性にしつこくナンパしている、黄色の髪をした男の子を見かけた。

第一章9 『契約者との出会い』

「なら、付き合いましたよ！オレたち。」

黄色の髪をした男は、綺麗な女性にそう提案する。

「なんで、今会ったばかりの人と付き合わなきゃいけないんですか。いい加減にしてください！」

「付き合いたくない…まさか！オレと結婚までしてくれるんですか！」

「そんな訳無いでしょ！どっかへ行つて！」

明らかにヤバそうな人だ。…近寄りたくないなあ。

「ユナン、あの女性、困ってるわ。助けに行きましょう。」

セーナが真剣にそう言つて、言い争いをしている所へ近づいていく。

「ですよー…」

「ちよつと、あなた何してるの？その女性の人、困ってるじゃない。」

「今、オレはこの女性と話してるの！放っておいて…わお！可愛いな女の子だ。何かオレに用かい？」

「だから…その女性が困ってるから——」

「君も一緒にお茶会に参加したいって？いいとも、いいとも！女の子は何人いても…痛ついたた！」

「おい、ちよつとは人の話を聞け。」

ユナンはそう言いながら、男の耳を引つ張つた。

「な、何するんだ！暴力反対！」

「そうよ。ユナン、暴力は良くないわ。」

なんでそつちの味方何だよ…。まあ話を聞く気には、なつてくれたようだ。

「その女性が困つてるように見えたから、俺たちは止めに来たんだ。あんまりしつこくしていると、女性に嫌われるぜ。えーと…名前は？」

「オレの名はキリマル。この女性はオレに声をかけてきてくれたんだ。つまり、オレとお茶したいってことだろ！」

男は胸を張つて、そう自慢げに力説した。

黄色で、少し男性にしては長めの、真っ直ぐだけど、癖のある髪。少し下がった眉からは、控えめで優しくそうな印象を受ける。…まあ実際の人柄はそんなことは無さそうだが。

黄色と緑を基調とした独特の衣装を身にまとっている。これは、母の言っていた「ハオリ」というものに、そっくりだ。左右の胸の辺りには、緑と白色の肌の、腹が出っ張った鬼の模様が描かれている。

左腰には、俺と同じ、カタナという武器を差している。柄は黒と黄色の編み込みで、鞘は黒い。

…母の故郷の人々はみんな変態なのだろうか。

「本当にいい加減にして！何度もいつてるじゃない。好きでもなんでもないって。珍しい服装ね、って声をかけただけよ。」

「…らしいわよ。もう諦めて。わたしも今は忙しいから、お茶はまた今度ね。」

忙しく無かったらいいんだ!?

俺も結構強引に付きまといっおいてなんだが、セーナは結構危うい性格なのかもしれない。…心配だ。

「嫌だ！オレはみんなとお茶会するんだ！」

そう言って駄々をこねているキリマルの対処に困っていると、

「いたいた！またキリマルは女性に付きまといっ…何回怒られれば気が済むのよ！」

「…全くこっちの身にもなってくれ。」

気の強そうな女の子の声と、冷静で低い、イケメンな声が聞こえた。

「ぎゃあああ！アンナとジーク!?ごめんよおお。」

「次からこいつに首輪でもつけるか。」

「ごめんなさい。ウチの馬鹿が迷惑かけて。」

「いえ。助けていただいて、ありがとうございます。それでは。」
そう言っって綺麗な女性は歩いて行った。

「えーと君たちは？」

ユナンは2人にそう呼びかける。

「あたしはアンナ。この3人で旅をしているの。」

赤色の髪を後ろでまとめている。ポニーテールってやつか。軽装

の鎧を身にまとった、女騎士の格好をしている。背中には両手剣を背負っているようだ。

「俺はジークだ。…よろしく頼む。」

深い青色でサラツとした髪型をしている。キリツとした鋭い目をしていて、顔は整っており、クールなイケメン男といった印象だ。狩人のような格好で、矢筒と、大きな弓を背負っている。

「俺はユナン。よろしくな。」

「わたしはセーナ。ただの旅人よ。」

そう言つてセーナがフードを取った。

「可愛いー！髪も綺麗で羨ましく」

「オレは最初から気づいていたけどな。」

「…あんたは黙つときなさいよ。」

そんな彼らの反応にセーナは苦笑する。

「えーと、あなたたち、黒い猫を見かけなかった？」

セーナは3人にそう尋ねる。

「黒い猫？見てないわね。」

「オレも町の子に夢中で…」

2人が首を傾げて、そう答える。

「猫か。俺たちの狙う魔獣に攫われたのかもしれないな。」

ただジークだけは違う反応を示した。

「俺たちの狙う魔獣…？あんたら、まさか契約者か？」

ユナンは彼らにそう聞き返した。

「そうだ。俺たち3人は、先月契約者となった身だ。」

ジークがうなずいて、そう答える。

「そうか！俺も契約者なんだ！」

俺は嬉々としてそう返した。

初めて契約者に出会った！やはり、同じ仲間に出会うというのは嬉しいものだ。

「ほんとう？どれどれ。」

怪しげな顔をして、アンナが俺の服をめくる。

「うわっ。何すんだよ！」

「あつホントだ。あるね、契約者の証。」

「契約者の証?」

ユナンは首を傾げて、問いたです。

「ほら、これこれ。ここの腰の辺りに変な模様あるでしょ?これが契約者の証なの。…なんでユナンはその事を知らないのかしら。」

そう言つてアンナは自分の服をめくり、腰の辺りを指さす。本当だ、何やら魔法陣のような模様が描かれている。

「知らなかったぞ、そんなこと。…つてことはお前らも願いをなか叶えてもらったのか?」

「えっ!? あんたもしかして、『加護持ち』!」

アンナが目を輝かせながら、ユナンに近づく。

…顔が近い。

「『加護持ち』?なんだそれ。」

「ホントに何も知らないんだな、お前。『加護持ち』つていうのは、大陸中央の塔に行かないで、勝手に契約者になった者の名称だ。総じて皆、妙な能力を持つているから、そう呼ばれる。」

「オレたちは、普通、自分から塔に行つて、神様と契約を結ぶんだ。それも、知らなかったの?」

「あ、ああ。実は契約したのはつい最近の事なんだ。田舎の村出身だから、世間のこともあんま知らない。」

…つていうか本当に何も教えてくれなかったんだな。あのクソ女神。

ユナンはここにはいない、だらしない女神の事を、そう評した。案外、このあだ名はしつくりきていて、気に入っている。

「まあ別に『加護持ち』とは言つても、10人契約者がいれば1人ぐらいはいる。そこまで、珍しくもないさ。…その女はちよつと『加護』マニアなだけで。」

「ねえ! 何の加護なの? 教えて!」

「正直、あの女神に自分の『色』さえ、教えて貰えなかつて、俺も困つてるんだ。加護はたぶん…生存に特化したものになったとは思うんだが。『器』つて言葉が引つかかる。」

「色すら教えて貰えなかったの!?!じゃあ『力』も使えないじゃん! ひええ。オレなら耐えられないなあ。」

そこでセーナが話を遮る。

「えーと、盛り上がりつつあるところ悪いんだけど、その魔獣を倒せば、猫ちゃんが帰って来るってこと?。」

…猫ちゃんって、可愛いなおい。

「まあその可能性が高いってことだ。ついてくるなら構わんが、命の保障まではできないぞ。」

ジークがセーナに、そう注意する。

「任せて! わたし、契約者じゃないけど、魔法は使えるの。ユナンより強いんだから。」

「なんでいつも俺を引き合いに出すの!?!…魔法って契約者にならないくても使えたのか。」

「契約者は『力』を引き出してもらっただけだからな。一般人が魔法を使うのは、難しいが、できない訳じゃない。世界には魔法学院ってところもあるくらいだ。」

ジークがユナンの問いに、そう答える。

外の世界に出てみたら、自分の常識が、ことごとく覆される。俺って外のこと、何も知らなかったんだな…

そしてユナン達は、ひとまず、アンナ達の魔獣討伐に同行することになった。

「それにしても、ユナンって契約者だったのね。『力』を使えないからかな? 気づかなかったわ。」

「セーナより弱くてすみませんねー。」

ユナンはへこたれながら、沈んだ声で言った。

「ちよつとした冗談よ。…大丈夫、魔法なんて使えなくても、ユナンが強いことは知ってるわ。」

やけに自信たっぷり声だった。俺が戦ってる所なんて、セーナは1度も見たことが無いはずだが…

そう、聞き返そうとした時、ユナンはジークから声をかけられた。

「ユナン。さっきはアンナがあんなことを聞いてきて、すまなかつた。」

「ん？加護が何かってことか？別に気にしてねーよ。俺が知りたいくらいだ…」

「…お詫びに一つだけ忠告しておいてやる。あまり、自分が『加護持ち』である事と、その内容については公言しない方がいい。」

「どうしてだ？」

ユナンは首を傾げながらそう聞き返す。

「…内容によっては、その加護持ちを殺そうとするヤツらもいるからな。」

第一章10 『魔獣ネコマタ』

「なんで、加護持ちを殺す必要があるんだ？」

「…まあ殺す理由はいろいろだな。最も多いのは、恨みによるものだが。それだけではない。契約者が加護持ちを殺すと、その加護を引き継げるんだ。まあ引き継げるのは、加護を持ってない契約者に限るが…もう分かるだろう？」

「マジかよ。仲間同士で殺し合いとか、シヤレになんねえぞ…」

「契約者に仲間も何も無い。自分以外は『他人』だろう？」

少し尖った意見だが、それが普通なのだろう。

でもマジか。願い通り不死身の加護だったとしても、相手に奪われたら元も子もない。気をつけよう。

「気をつける。ありがとうジーク。おまえ、良い奴だな。」

「ふっ。礼は要らないさ。」

少し顔を逸らして、ジークがそう返す。

ユナンは魔獣「ネコマタ」の住処に行く道中、その魔獣について、3人から情報を聞いておくことにした。

「それでネコマタってどんなやつなんだ。」

「ただの大きい猫らしいわよ。楽勝ね。」

「ただ大きいだけじゃない。普通の猫を攫って、仲間を増やすらしい。数が多ければ、厄介だ。」

「大きい猫がいつぱいとか、怖いだろお！オレ、もう帰りたいよお！」

3人が魔獣に対して、それぞれの反応を示す。

…キリマルは、森へ入ってからずっとビビりっぱなしである。こいつ、本当に契約者か？

でもどうやら、聞いてみた限り、あの黒い怪物よりはマシでありそうだ。

ユナンは、ホッと胸を撫で下ろす。

辺りはひっそりと静まり返っている。もうすっかり夜になり、大きな丸い月がユナン達を照らしている。

：今夜は満月か。綺麗だな。

そんな事を思っていると、突然、茂みからガサゴソと、何かがうごめく音が聞こえてきた。

「来るぞ。」

ジークが弓を引いて構える。ユナン達も戦闘態勢に入った。

「ジャアアアア！」

威嚇のような鳴き声をあげ、茂みから魔獣が飛び出す。体毛は黒く、赤い目で、こちらに殺気のみを向けて睨みつけている。

：でかい。猫なんかじゃない。あれは虎の大きさだ。：ただの大きい猫とは一体なんの事だったのか。

魔獣がこちらに飛びかかろうとした刹那、

「はあ！」

ジークが掛け声と共に矢を放つ。放たれた矢は「青」い光を帯びており、空中でそれは、鋭く尖った氷の柱へと変化し、魔獣の脳天を貫く。

魔獣は一瞬にして、霧となって消えていった。

：凄い。ジークの弓の腕もそうだが、改めて契約者の「力」の凄さを実感する。俺も「力」が使えたらなあ：

「ひええええ！でかああ!?何がただの大きい猫だよ！バケモンだよ、サーベルタイガーだよ、こんなの!!」

キリマルは魔獣の鳴き声よりも大きな声で、そう叫ぶ。うるさいが、まあ気持ちは分かる。

「ギャーギャー叫ぶな。：次が来る。」

とてつもない数の「赤い目」がこちらを睨みつけている。：これはヤバそうだ。

先程と同じ魔獣が、群れをなして、一斉に鋭い爪で襲いかかる。ユナン達は互いに背中を預け、円のような陣形で、魔獣と対峙する。

飛びかかって来た魔獣に対して、ユナンは右前に身を捌いて躲し、魔獣にカタナだけを合わす。魔獣の勢いと相まって、カタナの刃が容

易く、魔獣の横腹を搔つ捌く。

魔獣は唸り声をあげ、黒い霧となって消えた。続けざまに何体も魔獣が飛びかかってくるが、同じように最短の動きで対処する。肉質が柔らかい上に、捻りもなく勝手に飛び込んで来てくれるので、意外と楽に対処できた。

ひと通り、捌ききったので周りの様子を見る。

「なるほど、案外脆いのか。なら、威力を落としても大丈夫そうだ。」
ジークの放った矢は、先程のように氷柱となった後、さらに3つの柱に分かれ、それぞれ魔獣の脳天を貫く。

「くたばりなさい!!」

アンナの振るった両手剣は炎を帯びている。一気に4体の魔獣を切り裂き…魔獣達は炎に包まれ、消えていく。

「猫ちゃんを、返して!」

セーナの周りの、何も無い場所から、たくさんの尖った氷の柱が生み出される。それらは一気に噴射され、前にいた魔獣達を一掃する。
…ホントに俺より強いわ、これ。

「ひえええ…こないでえええ!後で魚あげるからああ!」

そう言っつて、数十体の魔獣に追いかけているのは、キリマルだ。
…尋常じゃないくらい、逃げ足が速い。それはキリマルの身体能力だけでは無く…

キリマルの足元から小さな電気が発生している。

なるほど、こういう魔法の使い方もあるのか。…いや、その腰のカタナはなんの為にあるんだよ。

しかし、魔獣達も知能が低いとはいえ、馬鹿ではない。集団で囲ってキリマルを追い詰める。

「ぎゃあああ!もう、終わりだああ!!」

そう叫んだキリマルの周囲に、大量の電気が発生。辺りに青い稲妻

が走り、大放電を撒き散らす。

周囲にいた魔獣達は、全て焼き焦げた。

：うわあ。1番戦闘中に、近寄りたくない。

「全部片付けたようだな。大体は…キリマルがやってくれたな。」

そう言つて、ジークが矢を矢筒へ戻そうとする。

その時、森のカラスが一斉に飛び立った。辺りの空気が一瞬にして変わり、森の木々がざわめく。

肌がひりつく感覚、それは黒い怪物が現れた時と似ている。

：親玉がやってきたのだ。

「ニャアアアオオオ!!」

低いのに、その鳴き声は猫によく似ている。どことなく、悲しんでいるように聞こえるのは気のせいだろうか。だが、そいつは猫ではない。魔獣だ。

ドシ、ドシと重々しい足音をたてながら、森の中から姿を現した。体毛は黒いが、大きさが、さっきの猫魔獣の4倍はある。4足歩行で、足は分厚い筋肉で覆われている。発達した鋭利な牙は、噛み付いたものを決して離さないだろう。鋭く光る赤い目と、何本にも分かれた尻尾が、動物ではなく、魔獣である事を物語っていた。

珍しく、キリマルが何も叫んでいない事に驚き、ユナンはキリマルの方をちらっと見た。

：顔を真っ白にして、気絶している。

「多少大きくなろうが、関係ない。くらえ!」

ジークがそう言つて矢を放った。先程よりも大きな氷の柱が、魔獣の脳天を狙う。：さっきのは本気じゃ無かったのか。この大ききなら貫けそうだ。

だが、その氷柱は魔獣の脳天に突き刺さる前に、鈍い音とともに出現した、「紫」色の魔法陣のようなものによって、防がれる。

「はあ!?!対魔法術式を魔獣が使うなんて、反則よ!反則!」

アンナが地団駄を踏んで、そう叫ぶ。

対魔法術式？つまり、この魔獣には魔法が効かないってことか？この大きさの相手に物理で勝てるとは、到底思えない。

「チツ。一時、撤退するぞ。ほらキリマル、起きろ。」

ジークは失神しているキリマルを背負い、撤退を提案する。

「分かった。」

そうやってユナン達がその場を立ち去ろうとした時、

「ニヤフン」

魔獣が変な声を出した。それと同時に、ユナン達の退路は灰色の岩壁によって、塞がれる。

ドーゼルと同じ岩の魔法!? まずい退路を塞がれた! ここで決着をつけるしかないか。

「魔法も効かない、退路も塞がれた。絶対絶命よ…」

「…クソツッ!」

アンナとジークがそれぞれ、そんな声をあげる。

「いや、まだだ! 岩壁には効果時間があるはず。時間を稼いで、岩壁が消えた後、また退路を塞がれる前に逃げるぞ! 時間は…俺が稼ぐ。」
そうやって俺は、カタナを構えて魔獣と対峙する。

目の前で見るとでけえなあ。怖いなあ。だが、弱音なんて吐いてられない。

「ニヤアアアゴォ!」

魔獣が悲しみを帯びた唸り声をあげ、前足の爪で襲いかかる。

でかくせに、動きが速い! これは避けられない、受けるしかないか。

ユナンは魔獣の爪にカタナを合わせて、ガードしようとする。だが、

——攻撃が、重い!

予想以上のパワーに身体が吹き飛ばされる。ユナンは、吹っ飛んだまま、木に激突する。意識が遠のく…

「ユナン!!」

セーナのそんな叫びを聞いて、ユナンは意識をкаろうじて、取り戻す。

：幸い激突の仕方が良かったのか、骨は折れて無さそうだ。まだ動ける。

俺はふらふらと立ち上がり、カタナをまた構える。
ゆっくりと魔獣が近づいてくる。

「ユナン！無理をするな！一旦逃げろ！」

「そうよユナン！アタシが変わってあげるから。この両手剣で魔獣なんかぶっ飛ばしてやるわよ！」

ジークとアンナの俺を案じる声が聞こえる。

こいつら、ほんとに良いヤツらだよなあ。短い間だったが、それでも十分によく分かる。

…ここで俺が負けたら、ジークやアンナまで傷ついてしまう。それに、

「ユナン！死んじゃったら許さないんだから！」

——何より心の底から、彼女を守ってあげたい。

ユナンは、自分の胸の内から、「思い」がとめどなく溢れ出ているのを感じる。みんなを守りたい。そんな「思い」が。

ユナンの身体の周りを、「紫」色の「光」が覆う。しかし、それはジークやアンナ、セーナには見えていない。

その「光」は日常で見る光とは違う。己の中にある「光」だ。

「ニャアアアゴオオ！」

魔獣が悲鳴のような鳴き声をあげながら、ユナンに襲いかかる。次はユナンの首元を狙った、完全に殺すつもりの一撃だ。

——『世界』の全てが灰色に見え、遅く感じる。魔獣の唸り声、動き、呼吸、その全てが。

ユナンはその刹那、魔獣の胸に、結晶のようなものがあるのを見つけた。——これしかない。

ユナンは魔獣の攻撃を容易く躲し、カタナで、その結晶に向かって、突きを放つ。

「おりゃああああ!!」

ピキツという音を立て、結晶が割れる。それと同時に魔獣の体は、ガラスのようにひび割れ、黒い霧となって消え去る。

「くろすけは本当に、石ころで遊ぶのが大好きだな。」

小さな男の子が、黒い子猫に話しかけている。黒い子猫は、石を啜えたまま駆け寄り、男の子の手に石を乗せた。

「また投げて欲しいのか？くろすけは、猫なのに、犬みたいな事をしたがるなあ。それ！」

そう言っつて男の子が遠くへ投げた石を、黒い子猫は楽しそうに追いかける。猫と子供が遊ぶ、ただただ、平和な光景だけがそこにはあった。

——視界が暗転する。

「村に魔獣が攻めてきたぞ！みんな、逃げろ！」

男が走りながら、そう叫ぶ。平和な光景は一変。燃えさかる、小さな村の様子が映る。目の前には、あの子猫と血まみれになって倒れている、男の子の姿があった。

「くろ…すけ…お前は逃げ…て。」

そう言い残して、男の子は力尽きる。黒い子猫の目から、涙が零れる。

「にゃーん！にゃーん！」

黒い子猫は炎の中、屍となった男の子の前で泣き続ける。泣いて泣いて、やがて子猫の涙が枯れてしまったころ、

「ニャアアアゴオオ！」

——子猫は、獰猛な魔獣の姿へと変わっていた。

…今の幻は、なんだ。あの魔獣の記憶？いや、普通の動物が魔獣になるなんて、聞いたことが無い。きっと…気のせいだろう。気のせいであると、信じたい。

「た、倒した。」

「やった！アンタはやる男だっつて信じてたわよ！」

そんなジークとアンナの驚きと喜びの声聞いて、緊張が抜けたからか、ユナンはその場に力なく座り込んだ。

「ユナン！怪我はないの!？」

そう言つてセーナがユナンに駆け寄り、抱きついてきた。嬉しいが…痛い。いたいいたい。抱きしめる力が強すぎる。さっきの吹き飛ばされた衝撃のダメージが、モロに響く。

「ああ。幸いどこも骨折して無——」

「良かったー！ほんとに！こんな無理して、やっぱり馬鹿じゃないの!?!」

「ぐえっ。」

さらにセーナに強く抱きしめられ、ユナンは苦しそうな声をあげる。

「今回は、ほんとうに助かった。礼を言う。」

「ありがとね。ユナン！」

ジークとアンナも近づいてきた。

「いや、俺の方こそ、みんなには本当に世話になったぜ。ありがとう。」

ユナンがそう返した時だった。

「にゃーん。」

黒い子猫が、セーナの元に擦り寄つたきた。

…これがちゃんとした猫の鳴き声だよな。やっぱり本家は可愛いわ。

「あつ、ユナン！探してた猫つてこれじゃない？可愛い！」

「かもな。女の子の家へ持って行って見ようぜ。」

こうして、ユナン達は全員揃つて、ロゼッタの町へ無事、帰ろうとしていた。

「カツ！あれ？オレ何してたんだ？」

キリマルが目を覚ました。

「アンタは魔獣の親玉を見てから、ずっと失神してたのよ！ほんと、大変だったんだから。」

「つてことは魔獣の親玉は討伐したのか。まさか、寝ている間に、オレの超スーパーパーな力が覚醒して…」

「そんなわけないでしょ！ほら。ここに結晶。これが討伐の証。」

ちやんと拾って来たわ。」

「へー魔獣の親玉ってそんなものを落とすのか。知らなかった。」

ユナンはアンナの手握られている、紫色の結晶を見つめて、そう言った。結晶の中央に、白い光の線で、あの魔獣の顔が描かれている。「アンタそれも知らなかったの?…ってアンタは契約者成り立てだから仕方ないか。」

アンナが呆れたふうになんと言った。

「ユナン、オレのように理知的な男でないと女の子にはモテ——」

「いいから、俺の背中からはやく降りろ!キリマル!」

そう叫んだジークの声が森中に響き渡った。

ユナン達が、ロゼッタの町に帰って来たのは、朝日が昇った後の事だった。

ユナン達は黒猫を連れて、女の子の家へと向かう。

「あれ?アタシ達の依頼人の家と、同じじゃないの。」

アンナが不思議そうになんと言った。

…すごい偶然だな。

「あつ、お兄さんとお姉さんだ。ヌコちゃん見つかったの?」

茶髪の女の子がはしゃいだように、家の中から出てきた。

「はい。これかな?」

セーナは優しくそう声をかける。その時、セーナが抱えていた黒猫が、女の子へ飛び移った。どうやら、本当にその猫で合っていたようだ。

「お帰り!ヌコちゃん!寂しかったよね、ごめんね。ありがとう、お兄さん!お姉さん!」

「あら。魔獣討伐だけでなく、うちの娘の、子猫探しまでしてくれたの?本当に助かるわ。」

妖艶な大人の女性の声でそう言って、奥から、この子の母親らしき人物が出てきた。艶やかな紫色の髪を首元まで伸ばしている。

…親子で髪の色が違うのか。この子の髪の色はお父さん似かな。

「いえいえ、子猫探しは、その2人がしてくれたので、私たちは関係ないです。これが、討伐の証です。どうぞ。」

そう言ってアンナは女性にあの結晶を渡す。

「助かるわ。これで町の人たちも安全に王都へ向かえるわ。はい、これが報酬よ。あなたたちにも。」

「えっ。いいんですか？こんなに…」

ユナンは驚き、そう口にする。袋の中には、金貨10枚が入っている。大金だ。

「いいのよ。うちの娘も凄く心配してたし、受け取って。」

女性は右手で自分の頬を触りながら、そう言った。

「あ、ありがとうございます。」

ユナンは礼を言って、頭を下げた。

「ばいばい。お兄さん、お姉さん。またね！」

「おうまたな！」

「もう猫から目を離しちゃダメよ？ばいばい。」

ユナン達は家をあとにする。金貨を10枚手に入れ、女の子の笑顔も見れた。色々大変だったけど、これでよし、だ。

ユナン達が去っていった後、女の子は首を傾げる。

「あれー？ネコマタちゃんって、確か、急所の結晶を隠してる筈なのに、なんであのお兄さんは1発で貫けたんだろう？」

「決まっているじゃない。あの男の子が——だからよ。」

女性が女の子に、呆れたふうにそう言った。

その言葉を聞いて、女の子が目を輝かせる。

「そっかー！じゃあまた会えるかもね！お兄さん！」

第一章 1 『ドラゴンスレイヤー』

「さーて。依頼も済んだことだし、次の町に行くわよ！」

「えー!? やだよ。オレもう疲れたよ。今日はゆっくりしまーす。この町の女の子とも、まだ遊んでないし。」

「最後のが本音でしょ。全く、いやらしい。」

依頼を終え、アンナとキリマルがそんな会話をしていた。

こいつらとも、もうお別れか。賑やかな奴らだったな。

ユナンがそう思い、寂しそうな顔をした時だった。

グオオオオオ。

竜の鳴き声に匹敵するほど、とてつもない轟音が辺りに響き渡る。

「ちよつとキリマル! こんな町中でオナラとか、ほんとデリカシー無いわね!」

「いや、オレじゃねーよ! オレは紳士だぞ。オナラなんかするもんか! ユナンだろ?」

「なんで俺を疑うんだよ! キリマルの中の俺のイメージはどうなってるんだ!」

「…なら、新手の魔獣か?」

4人が爆音に驚き、慌てふためく。

魔獣の声? でもそれにしてはなんか、少し間抜けというか、緊迫感の無い音だった気がする。だいたい、こんな真昼の時間に、堂々と魔獣が町に姿を現すか? 町の衛兵に叩きのめされて、終わりの気もするが…

ユナンがそんな事を考えていると、

「あ…あの…」

セーナが、顔を真っ赤にしながら、恥ずかしそうにふるふると手をあげた。何か言いたそうな顔をしている。

「どうかしたか? セーナ。」

ユナンは首を傾げてそう質問し、彼女に次の言葉を促す。

「え、えつとね…ちよつとお腹が空いちちゃって。今の音はね、わたし

のお腹の音っていうか、なんていうか…」

セーナは、両手の人差し指の先同士をくつつけて、どきまぎしながら、そう答えた。

そのセーナの言葉を聞いて、この場にいる全員が固まる。

——マジかよ。あれ、お腹が鳴る音かよ。

「み、みんなどうしたの？な、何か言つてよ！ねえ！」

両腕をパタパタさせて、慌てふためきながら、必死に4人にそう叫ぶ、セーナの姿がそこにはあった。

そういうわけで、ユナン達は町のレストランで食事をする事になった。

「まあそういうえばアタシ達、魔獣ネコマタ討伐のお祝いとかしてなかったわね。みんなの健闘に、かんぱーい！」

「かんぱーい！」

アンナに続けて、他の4人もそう言つてグラスを掲げる。

場所は町の大通り沿いにあるレストランの中。端にある、大きな木のテーブルを5人で囲つて座っている。

昨日の夜からまともに食事をとっていない。みんな、美味しそうな料理を前にして、気分が盛り上がっている。…ただ1人を除いては。

「お腹の音は生理現象。不可抗力だわ。」

「まあまあ、セーナ。そんな落ち込んでないで、食べようぜ。セーナのおかげで、みんなとこうやって楽しく食事をする機会に恵まれたわけだし。」

セーナがずっと、頬を膨らまして拗ねているのを見兼ねて、ユナンがそうフォローする。

だが、セーナがこちらを可愛い目で睨めかえしてきた。

…どうやら、ひどくご機嫌ななめらしい。

流石は大きな町にあるレストラン。メニューも豊富だ。

ジークはパスタ。アンナはカレーライス。キリマルはうどん。そして、俺はラーメン。みんなの好みはバラバラだ。

セーナは：オムライスにチャーハンに牛丼まで！

：多すぎだろ!?!しかも全部米系。つてかオムライスは昨日食べた
だろ。

「セ、セーナはよく食べるなあ。あはは。」

「魔法を使ったらお腹が空くのよ。ユナンこそ、そんなに少食だから、魔法が使えないのよ。」

「あっ!とうとう言ったな!人のコンプレックス、バカにしたな!」

「ユナンだつて!わたしのお腹の音を聞いた後、その場でのたうち
回つて、大笑いしてたじゃない!」

ユナンとセーナがギャーギャー騒ぎ立てながら、口喧嘩をしてい
る。

そんな2人の様子を見て笑つたアンナがこう言った。

「アンタたち、本当に仲が良いわね。」

「どこが!?!」

2人が口を揃えて、アンナに抗議する。

「ふふつ。そういうところよ。それはそれとして、2人はいつから
一緒に旅をしてるの?」

「いや、俺たちが初めて会つたのはつい昨日の事だ。セーナが酒場
で飯を奢つてくれてさ。その後、セーナが大切なものを失くしたつて
言うから、俺が恩返しも兼ねて探すのを手伝わせて欲しいって頼ん
だ。」

「へえー。探しものね。それで、見つかったの?」

「いや、いくつか店は回つたんだが、その後、魔獣退治の流れになつ
て：まだ見つかってないんだ。」

「じゃあ、アタシ達も手伝つてあげるわ。ユナン達にはお世話になつ
たし、アンタたちもいいでしょ?」

「俺はアンナについて行くさ。」

「女の子が困っているなら、助けるのが紳士の務めさ。」

「じゃあ決まりね!それで落し物つて具体的には、なんなの?」

アンナがそう言った時、セーナがユナンの服の袖を引っ張る。そし
て、小声でユナンにこう呼びかける。

「ちよ、ちよつと。どうするのよ。」

「もちろん、手伝ってもらっていいんじゃないか？——あいつらはみんな良い奴だよ。大丈夫だ。」

ユナンが自信満々にそう答える。セーナは少し困った表情を浮かべたが、ユナンのそんな様子を見ると、ため息をつき、

「わかった。ユナンを信じるわ。」

そう呆れたように言ったのだった。

セーナは3人に、自分の正体について話す。3人はそれぞれ、最初は驚きこそしたものの、

「へえ。まさか竜だったとわね。お腹の音が大きいのも納得ね。でもセーナは可愛いし、そんなの全然気にならないわ！寧ろ、アタシが守ってあげるんだから！」

「竜か。お腹の音もそれで……。だが頼りになるな。よかったらこれからも俺たちと一緒に旅をしないか。」

「お腹の音が大きい竜?!でもオレは可愛い女の子ならなんでもいけるよ。むしろ、属性がついた分、普通の女の子よりも興奮するね。」

「お、お腹の音は関係ないから!!」

4人の反応を見るに、ユナンの予想通り、何の心配も要らなかったようだ。

そうして食事を終えたユナン達は、みんなで輝石探しを再開するこ
とにした。

店をあらかた調べ尽くした後、ユナン達は酒場の前に到着する。

店の扉には、「OPEN」と書かれた看板がかかっている。まさか、昨日の今日でまたここに来ることになるとは。…おっちゃん、驚くだろうな。

「あのおじさん、今日もいるかな?」

「いるだろうな。おーい、おっちゃん。昨日の今日でまた来たぜ。今度はちゃんと金持ってるぞ！」

そうやって、扉を開け、ユナンとセーナが入ろうとした時だっ

た。

「おい。ちよつと待て。」

ジークがそう言つて、酒場に入ろうとする2人を止める。

「どうしたんだよ、ジーク。」

「中の様子がおかしい。少し警戒するべきだ。」

「その通りだ。優秀な仲間だな。兄ちゃん、もう3人もお友達を作つたのか？すげえな。」

そう言つて、酒場の中から昨日の店主が姿を現した。

橙色のバンドナに、白と青のボーダーの半袖のシャツ。下は焦げ茶色の短パンのズボンと、赤色のシャツの袖を腰で結んで、腰巻のようなものをしている。昨日と同じ服装だが、

——その男の右手には、ロングソードが握られていた。

「…どういふつもりだよ。おつちゃん。」

「お嬢ちゃんが欲しいのは、この石だろ？」

そう言つて男はポケットから、光る水色の石を取り出した。

「あつそれ！その石、わたしにとって大切なものなの。返して、おじさん。」

「そうだろう。この石は竜の輝石。竜人にとって、命の次に大事なものだ。だが、これは返せねえ。なぜなら、俺は傭兵団ドラゴンスレイヤー団長、ダントラ。竜を狩る者だからだ。嬢ちゃんには悪いが、ここで死んでもらう。」

そう言つたダントラの周りには、数名の武器を所持した男たちが身構えている。…後ろにも！囲まれた。

竜を狩る者。そんなやつので、あの輝石を落とすしちまつたのか!? マジでツイてないな、セーナ…

だが、ダントラが悪いやつには思えない。オムライスも美味しかった。説得を試みれば、どうにかなるかもしれない。

「待ってくれ！ダントラ、セーナは人間に手を出したことが1度もないんだ。良いやつなんだ！今回はセーナを見逃してやってくれなにか？」

「すまんが兄ちゃん。人には譲れねえもんつてのがある。俺らは決

して竜を許さない。正義の名のもとに、全ての竜を殲滅する。てめえら、やっちまえ！」

そうダントラが言った直後、周りにいた男たちが一齐に、こちらへ襲いかかってくる。だが、

「セーナを傷つける人は、アタシが許さないわ！」

アンナが両手剣を振るうと、熱風が巻き起こる。そして、その熱風によって、数名の男たちが吹き飛ばされた。

「悪いが、俺たちは契約者だ。大人が束になってかかって来ようが、負けはしない。」

ジークの放った矢が、三本の、先の丸い氷柱に分かれ、男たちを吹き飛ばす。

「こいつら、契約者ですかい!?ダントラ団長どうします?」

「…お友達が契約者とは驚きだ。よしてめえら、流石に契約者相手はキツイだろ。下がっている。コイツらは、俺が片付ける。」

そう言ったダントラの雰囲気が一変する。辺りには熱風が巻き起こり、ダントラの持つていたロングソードが、炎に包まれる。

——ユナンは肌にチリチリと伝わってくる熱の感触に、息を飲んだ。

…ダントラ、契約者だったのか。見たところ「赤」の色だとは思いますが、アンナより、強そうだ。全員でかかれば、どうにかなるか。

「これでも俺は昔、赤の王国騎士だったんだぜ。対人戦は久しぶりだが、甘く見るなよ。」

「ひええ！あのダントラとか言うおっさん、超強そうだぞ！あんな炎に焼かれたら、オレの髪の毛、全部焼け焦げちゃうよ！ハゲは嫌だよ！ハゲは！」

キリマルがいつも通り、うるさく叫び散らかす。

…心配するの、命じゃなくて髪かよ。

「相手が契約者だろうと、関係ない。はあ！」

ジークの放った氷の矢が、ダントラに飛んでいく。だが、

「ふん！」

ダントラの振るったロングソードから、燃えさかる熱風が放たれ

る。そして熱風は、氷の矢を吹き飛ばした。

「チツ。分が悪いな。」

ジークは悔しそうにそう呟いた。

俺はそこで、ある疑問を抱く。

「こんなに炎が巻き起こったら、家とか燃えるんじゃないのか？」

「契約者の魔法は対象を選ぶことが出来るのよ。その分、威力は少しだけ落ちるけど。燃やしたいものだけを燃やしたりすることが出来るの。」

ユナンの呟きに、アンナがそう言った。

なるほど。普通の炎とはちよつと違うのか。便利なもんだな。

「酒場が燃えちゃ困るんでな！こっちから行くぞ！オラア！」

そう言つてダントラは、セーナに勢い良く斬りかかる。アンナはセーナを庇つて、なんとか炎を纏った両手剣で、ダントラの一撃を受け止めたが、苦しそうだ。

ユナンもカタナでダントラに斬りかかって、加勢しようとする。だが、

「メーザー！」

そう唱えたダントラの周囲から、ボールくらいの大きさの火球が生まれる。そして、火球は勢い良く、ユナンに向かって飛んでいった。

ユナンは咄嗟に、カタナで火球をガードする。

——この火球、質量がある！

カタナから伝わる感触は、本当に飛んできた玉のようだった。だが、火球はカタナで受け止められた途端に、熱を増して、光り出す。

——ヤバイ！

ユナンは本能で危険を感じ取り、カタナを斜めに斬り上げるようにして、火球の方向を変え、頭上へ飛ばす。

次の瞬間、爆発音とともに、火球が弾け飛ぶ。その衝撃で、ユナンは後方へ吹き飛んだ。

衝撃で、身体が節々痛い。肌がヒリヒリする。少し、火傷をしたかもしれない。だが、まだ動ける。

「ユナンー！」

「ユナン!?!アンタ大丈夫?」

セーナとアンナが、ユナンの身を案じる声をあげる。

「…運が良い奴だ。だが嬢ちゃん、よそ見とはいけねえな。他人の心配じゃなくて、自分の心配をしな!」

そう言ったダントラは、ロングソードで斬り上げ、アンナの両手剣を弾く。アンナの体幹が後ろへ崩れる。

そしてすぐにダントラは、アンナへ斬りかかった。

「あつ。」

アンナが大きく目を見開き、弱々しく声をあげる。

まずい!俺は火球によって、吹っ飛ばされたばかりだ。ジークとキリマルも少し距離が離れていて、追いつかない。アンナが危ない!!

ユナンがそう思い、手を伸ばした時だった。

辺りに雷鳴が轟くような轟音が鳴り響く。黄色の髪の少年は、稲妻そのものとなり、人智を超えた速度で移動する。その少年の通った後には、青い稲妻が走り、雷神が通ったのではないかと錯覚するほど、神々しかった。

黄色の髪の少年はいつの間にか、ダントラがアンナに向けて放った一撃を、その腰に差していたカタナで受け止めている。その刀身は、黄色い輝きを微かに放っていた。

その少年とは、キリマルのことであった。

「女性を傷つけるヤツを、オレは絶対に許さない。」

彼は普段は絶対に出さない、低く真剣な声でそう言った。その表情は冷たく、目には殺気だけが宿っていた。

彼には似合わない、恐ろしい顔だ。

——あ、あれがキリマル?まるで別人じゃねーか。

おそらく、ここにいた全員がそんな感想を抱いただろう。

「こ、これは驚いたな、黄色い髪の兄ちゃん。てめえはただの臆病者だと思っていたが…すまねえ、立派な男だったようだ。」

そう言って、ダントラが残忍な表情を浮かべる。手加減はしない。そう決心したように。

「えーと、オレの髪焼かないでね。」

「どうだかな!」

「ひええ!許してえ!!」

ダントラの振るったロングソードが、燃えさかる火炎を巻き起こす。しかし、その火炎がキリマルの髪を焼く前に、尋常ではない速さの逃げ足で、キリマルが後退する。

「チツ。すばしっこいやつだ。」

そう言ったダントラへ、ユナンがゆっくりと近づきながら、声をかける。

「なあダントラ。人にだって、良い奴、悪い奴がいる。竜だって、同じじゃないのか?セーナはさ、輝石を失くして自分が大変な状況になっっているにも関わらず、何の躊躇もなく、困っている女の子に手を差し伸べるほど、良い奴なんだ…。俺はそんな奴が理由もなく、人を襲うとは到底思えない。それとも、お前らの正義ってやつは、竜だからって理由で、そんな良い奴らも見境なく殺す事だったのか?そんなの、ただ竜を怖がってるだけだろ!」

「お前に何が分かる。」

ユナンの必死の説得に、ダントラは、ぽつりとそう呟いた。

「お前に何が分かるってんだ!?お前は竜の怖さをこれっぽっちも知らない、ただのガキじゃねーか!!」

「ああ、これっぽっちも知らないね。…なら、これから少しずつ、知っていけばいいじゃねーか。俺は、セーナが良い奴だって信じてる。だからこそ、俺はセーナを守るぜ。」

ダントラの怒声に、ユナンがそう答える。

もう迷いはしない。次は本気で斬る。セーナを守るために。

ユナンの言葉を聞いて、セーナは大きく目を見開き、そして、目から涙を零した。

「キヤー!ー!竜人よ!あっちへ行つて!」

——たくさんの悲鳴の声を聞いた。

「竜人だ!?うちはお断りだ!」

——たくさんの怒りの声を聞いた。

「うーん。可哀想だけど、竜人はちよつと。」

——たくさんの哀れみの声を聞いた。

「うちの家族を返せ！竜人め、死ね！」

——たくさんの怨嗟の声を聞いた。

どうしてわたしは、何もしていないのに、みんなから嫌われるんだろう。わたしはただ、みんなと仲良くなりたかっただけなのに、近づけば近づくほど、人々はわたしから遠ざかろうとする。

いつしか、わたしは自分から人々を遠ざけるようになってしまった。諦めてしまったのだ。人間と仲良くなることを。

でも、彼は違った。おかしな子だ。自分から竜人に近づこうとする。今までにも、お金目的で近づこうとする人間は何人かいた。最初は彼もそっちの人間かと思ったが、何故か違う気がして、彼を遠ざけられなかった。

——その理由が彼の言葉を聞いて、ようやくわかった。

彼は「わたし自身」を「見」てくれている。「見た目」や「種族」なんかじゃない。「わたしの中身」を。

わたしは本当はずっと、みんなに「見」て欲しかったのだ。「見た目」ではなく、「わたし」を。

竜人に同情してくれた人々と一緒に生活をしたこともあった。だがそんな生活の中でも、わたしは変わらず孤独感を抱いていたのは、彼らも、わたしの「見た目」しか見ていなかったからだ。「わたし」を見ていない。

…だが彼となら、種族を超えて分かり合えるのかもしれない。

「うおりやあああ！」

ユナンはカタナを構え、ダントラに向かって斬りかかる。予想外のユナンの速さに、ダントラは一瞬崩れかけた。だが、

「相手が予想外の動きをするなんて、これまでの死線の数々の中で、何度もあった事なんだよ！」

そう叫んだダントラは、地面に即席で作った小さな火球を放ち、そ

の衝撃で後ろに飛んで、ユナンの攻撃を躲す。ユナンは勢い余って、身体が前に倒れる。空中で、ダントラが火球をユナンに向かって放とうとする。火球が当たれば、ユナンはひとたまりもない。絶体絶命の状況だ。

——だが、ユナンは1人ではない。仲間がいる。

「ユナンに集中しすぎだ。馬鹿め。」

ジークの放った氷の柱の一撃が、ダントラの腕に直撃する。そのまま火球はあさつての方向へと、飛んでいった。

「おっさんに興味は無いんだよ！」

「ぐあああ！」

キリマルの放った青色の電撃波がダントラに直撃する。だが、手足が少し痺れながらもダントラは、キリマルへ、ロングソードを振るって、熱風を放つ。

「あちいいい！髪が！オレの髪が！！」

…キリマルの髪が、熱風によって燃えている。どんまい。

「空中で武器も振るった。魔法も使った。もうおしまいよ！さつきのお返しだわ！」

ダントラの背後に、アンナが両手剣を縦に構えて、待っていた。彼女はそのまま炎による勢いをそのまま乗せて、ダントラを吹き飛ばした。

「くそがあああ！」

ダントラはそう言いながら、吹き飛ばされ、酒場の建物へ、勢い良くぶつかった。

ああ。なんでこんな状況で、あの日の事を思い出しまうんだ。

——視界が暗転する。

第一章 12 『竜を狩る決意』

さかのぼること、15年前。

当時、人と竜は、熾烈な争いを繰り広げていた。後に語り継がれることとなる、王国と竜との大戦争。『竜人戦争』の幕開けの物語である。

場所はラムザ王国王都、その住宅街にひっそりと佇む家の中。ダントラは、妻のカーラ、娘のナナと一緒に朝食をとっていた。

そんな中、カーラが茶色の眉を少し下げ、心配そうな表情で、ダントラの身を案じる声をあげる。

「あなた、また遠征ですって？お身体の方は大丈夫なんですか？」

「身体の方は心配ねえよ。いつも美味しい飯をカーラが作ってくれるおかげで、元氣いっぱいだ！ちよつとルダール平原で、竜が暴れるってんでシバいてくるだけだ。」

ダントラは力こぶを見せつけながら、自信満々にそう返した。

「それならいいんですが…。なるべく早く帰ってきてくださいね。もうすぐ、ナナの5歳の誕生日なんですから…」

「そうだぞー！もうすぐ、ナナの誕生日だよ！早く帰って来なかったら、ナナが父ちゃんをシバくから！」

「おい、シバくとかいう言葉、どこで覚えてきやがったんだ。まったく…」

「あなたがさつき、使っついていらしたと思いますけど。」

ダントラの発言に、すかさずカーラが冷たい声でそうツツコミを入れる。

——マジか。俺のせいだよ。

親の口調が、そのまま子供の口調に表れるって本当だったんだな…気をつけねえと。

朝食を食べ終わった後、ダントラがナナに向かって、こう言った。

「ナナ、俺が遠征から帰ってきたら、家族みんなで、旅行にでも行くうじゃねーか。ロゼツタの町なんかどうだ？あそこには王都には無い、珍しいもんも沢山あるぞ。」

ナナが青い目を輝かせて喜ぶ。

「やったー！久しぶりの旅行だ！！父ちゃん、大好き！早く帰ってこなかったら、ぶつ殺すからねー！」

「なんで、もつと過激になってんだ…」

「あなた、いいんですか？仕事の方は？」

カーラがダントラに冷静を装いながら、そう言った。だが、旅行に対する興奮を隠しきれしていない。カーラはもともと、旅をするのが大好きなのだ。

「ああ。この遠征が終わったら、しばらく休みを入れてもらえることになったんだ。久しぶりの家族揃っての旅行だ！楽しもうぜ。」

「はい！わたし、色々準備してきますね。」

そう言つて、カーラが鼻歌を口ずさみながら、ウキウキでリビングを出ていった。

…子育てに忙しくて、まともに遠出なんて出来て無かっただろう。カーラが嬉しそうで良かったぜ。

「それじゃあ、父ちゃんはお仕事に行ってくる！ナナは、父ちゃんがいない間、良い子にしてるんだぞ！」

「ナナはいつでも良い子だよ！えっへん！」

ドヤ顔で小さい胸を張りながら、そう断言したナナの姿を見ながら、ダントラは家を出た。

…早く帰つてやらないとな。

目的地のルダール平原は、王都から馬車で1日かかる、何も無い、ただただ短草だけが一面に広がっている場所だ。

…そう。そんな何も無い場所で何故、多くの竜が暴れているのか。

馬車の中でダントラは険しい顔をしてそう考えていると、隣から声をかけられた。

「ぼーっとして、どうしたんですか副団長。もしかしてまた奥さんに叱られたりでもしましたか？」

明るく陽気な女性の声で、元気にそう語りかけてきたのは、フレアだ。

薄茶色の髪を首元まで伸ばし、赤い瞳をキラキラと輝かせている。その顔にはまだ、幼さが残っており、気の抜けた印象を感じさせる。フレアは16歳になって、赤の王国騎士団に入団してきたばかりの新人。ダントラはその教育係だ。

「叱られてねえよ。ちよつと考え事してただけだ。」

「えー!?副団長が考え事とか、似合わないですよ。もつと気楽に行きませんか?気楽に。」

「うっせえな!お前はもうちよつと考えろ。そんなヘラヘラしてつと、竜にはらわたを食いちぎられるぞ。」

「食いちぎられる!?ふ、副団長。私、もう帰りたいです…」

「なんのために騎士団に入ったんだよお前は!…安心しろ、新人の命を守るのが教育係の務めだ。俺の傍を離れすぎるなよ。」

「副団長。一生ついて行きます!」

「ちよつ。離れろ!暑苦しい!」

フレアが目には涙を浮かべながら、ダントラにその豊満な胸を押し付けて、抱きついてくる。

…まためんどろな新人だな。アホそうに見えるが、というかアホだが、コイツには才能がある。俺がそこまで気を張らなくても、そうそう死ぬことはないだろう。

「まったく、騒がしいヤツらだ。」

馬車の壁に寄りかかって、低くイケメンな声でそう呟いたのは、赤の王国騎士団長、デイルムントだ。

女性のように長く、赤い髪。先は少し跳ねているが、後ろの髪を束ね、全体的にはまとまっている。顔は中性的で、整っていて、クールな美丈夫の王国騎士として、王都の女性からの人気も高い。本人はそういう話には全く興味が無いのだが…

「すみません、団長。こいつ、新人なもんで。」

「…まあそんなことはどうでもいい。それよりもダントラ、お前も今回の遠征に何か違和感を感じていないか？」

「…まあ感じないと言えば、嘘になっちゃいます。」

「実は、俺もそうだ。赤、黄、白の騎士団、総動員での遠征。確かに竜は強敵だが、数十体くらい、俺ら赤の騎士団だけでもどうにかできる。過剰戦力だ。」

「まあ炎の竜相手とかだと、俺らに分が悪いですし、属性を分けて、リスク分散とかいう目的じゃねえですか？」

「…ならいいんだがな。まあ竜を狩る事においては、ダントラ、お前の武器と相性がいい。頼りにしてるぞ。」

「任せてくださいえ！」

ダントラはそう言つて、自慢の「大剣」を掲げた。もちろん総合的な實力はデイルムントの方が遥かに上だ。だが、竜を狩る速さだけはダントラの方が上である。竜を一刀両断する剣技、この剣技のおかげで、副団長にまでのし上がったといつても過言ではない。

「副団長の剣技、カッコいいですよね！私も副団長みたいに、竜を一刀両断できるようになりますかね?!」

「お前の武器はレイピアだろ…」

意気揚々と語るフレアに、ダントラは呆れながらそう釘を刺した。そんな会話をしながらも、馬車は着々とルダール平原へと向かっている。

2日目の朝、ダントラ達を乗せた馬車は、ルダール平原に到着した。遠くから獰猛な竜の雄叫びが聞こえてくる。

…酷く、竜がご機嫌ななめなようだぜ。

「着いたようだな。赤の騎士団！全部隊、かかれ！」

「うおおおー！」

デイルムントの合図とともに、ダントラ達は馬車から一斉に飛び降り、暴れ狂う竜に向かって走っていく。

チラツと周りに目を向けると、黄と白の騎士団も同じく、突撃の合図をした所だった。

赤の王国騎士15名、黄と白の王国騎士がそれぞれ、十数名。対して、向かい側には、赤、青、緑、色とりどりの数十頭の竜が暴れ回っている。

ダントラに対して雷のブレスが向かってくる。ダントラはそれを、最短の動きで躲す。ダントラの横を、速度が乗った雷の球が、もの凄い風圧と共に通り過ぎていく。だがそれには動じない。彼は一直線に、黄色の竜へと向かっていく。

ダントラの大剣が、マグマのように赤く光って、熱を帯びる。その刀身に触れたものは、たとえ竜の鱗だろうと、一瞬で溶けてしまう。さらに、その刀身が炎の刃となって、さらに大きくなる。その大きさは竜にすら匹敵するほどだ。

そのままダントラは、黄色い竜の身体を縦に真っ二つにした。

「この炎刃に、断てぬもの無し。」

ダントラは斬心をとって、そう呟いた。

「か、カツコいいです!!」

フレアのそんな声を聞いて、ダントラはすぐさま怒声を彼女へと浴びせる。

「馬鹿野郎!よそ見なんかしてる暇ねえだろ!!」

「へ?きやあああ!」

そう叫んだフレアへ、水色の竜が大きな牙で、襲いかかる。

だが、悲鳴をあげているフレアのレイピアが赤く光り、竜の強靱な胸に向かって大きな炎の突きが放たれた。

胸を貫かれ、悲鳴のような咆哮をあげて、水色の竜が怯む。ダントラはすかさずその隙に、水色の竜を一刀両断した。

「副団長。やっぱり一生づいで行きませう。」

フレアが泣きじやくりながらそう言った。

いや、実際あの竜にとっては、フレアの突きが致命傷であっただろう。16歳でこの力。本当に恐ろしい娘だ。

「…2頭か。俺は3頭狩ったぞ、ダントラ。…まあ新人を連れていたら仕方ないか。」

そう言いながら、デイルムントが、竜の血がついた剣を片手に歩いてきた。後ろには無惨に首だけはねられた、3頭の竜の死体が転がっている。

ちなみに、デイルムントは意外と負けず嫌いだ。

「流石だな、団長は。」

ダントラはそう言って、やれやれと首を横に振った。実際、もう竜を狩る速度に関しても、ダントラよりデイルムントの方が上なのかもしれない。

周りを見ると、他の王国騎士が既に、全ての竜を片付けていた。辺りには雷や炎で焼け焦げた草や、風によって上半分だけ切られている草などの戦闘の後が残っている。

そして、竜たちの死体だけが、何も無い草原に横たわっていた。

「死にかけましたよ。竜って怖いですね。」

帰りの馬車の中、フレアが目には涙を浮かべながらそんな感想をこぼす。まあ普通の人なら竜を間近で見ただけで、失神するレベルの恐怖だ。それくらいで済ませられるだけ、彼女も人より度胸があるのであろう。

だが、彼女に1つ言わなければならない事がダントラにはあった。

「ここからは、よそ見だけはするなよ。」

泣きそうなフレアに向かって、ダントラは怒った顔でそう注意した。戦場でのよそ見は死に直結する。そうして死んでいった仲間を、ダントラはこれまで何人も見てきたのだ。

「…ごめんなさい。」

フレアがしょんぼりしてそう謝った。

…少し言い過ぎたか。まだほとんど子供みたいなもんだしな。これからは気をつけるとするか。

「まあそれにしても、古龍もいなかったし、やはり予想通り楽勝だった

たな。過剰戦力にも程がある。」

「死者が1人も出なかつただけ、いいんじゃないですかい？」

「…それもそうだな。最近は各色の新人も増えてきている。多すぎに、越したことはないだろう。」

ダントラとデイルムントは今回の遠征を、そう評して話し合いを終えた。馬車はゆっくりと、王都に向かって進んでいる。

3日目の朝、ダントラは家族の顔を、馬車の中で思い浮かべていた。夕方には王都に着いている頃だ。

カーラとナナ、久しぶりの旅行を楽しみにしているだろうな。ロゼッタの町で買い物をして、その後はどこへ行くか。マタノの村に行つて、温泉に入るなんてのもいいだろう。その後は…

ダントラがそんな旅行のプランを考えていると、何やら1両の馬車が、急いでこちらへやってくる。

「緊急事態です！王都が、大量の竜によって攻められています!!青と緑の騎士団が応戦中も、竜の数が多く…至急、援軍を！」

使者が緊迫感のある顔をして、そうダントラ達に伝えた。衝撃の報告にダントラ達は一瞬固まってしまった。その後に思考が追いつく。

「なんだって!?!」

思わずダントラは、馬車から身を乗り出してそう叫んだ。

まずい!カーラとナナは無事なんだろうか…頼む、無事でいてくれ!

「クソッ!平原の竜は陽動だったというわけか。こつちが本命か。おい、ダントラ！」

「言わなくてもわかってますぜ!…俺にも守らなきゃならねえ家族がいるもんで。フレアは後で合流だ!お前はついて来れねえからな。」

そう言つてダントラ達は馬車を飛び降り、炎で速度をつけながら、道を走り抜けていった。

「待つてください!副団長、私も!!」

フレアのそんな声が遠くから聞こえてくる。

ただ待つてはいられない。1秒でも早く王都へ向かわなければ。カーラ、ナナ！

ダントラは王都へ向かって走る中、カーラとナナの笑顔を思い浮かべる。家なんか燃え尽きてもいい。ただ、カーラとナナが生きてさえいてくれたら、それでいい。

：なあ女神様。あんたが本当に神なんだったら、一生に1度のお願いだ。どうか家族を…助けてくれ…

ダントラ達はなんとか王都へとたどり着く。まだ、太陽は頭上にある。

だがそこに広がっていた光景は、悲惨なものだった。

家は崩れて燃えさかり、たくさんの人悲鳴の声があちこちから聞こえてくる。

ダントラは、一直線に自分の家へと向かった。

もう城へ避難してくれていたなら、それが1番良い。だが、万が一の事を考える。万が一、ナナ達が逃げ遅れていたら大変だ。

行く手を阻んでくる竜を大剣で両断し、炎で燃えさかる路地を抜け、自分の家へと…

——そこで目にした光景は、今でもダントラの頭に焼き付いて、離れない。

ダントラの見た先には、家の瓦礫で下敷きとなって、下半身が潰れ、絶命しているカーラの姿があった。そして、崩れ去った家の前には一頭の赤い目をした黒竜がいた。

——その竜の口には、噛みちぎられ内蔵が飛び出している、ナナの姿があったのだ。

「と…父ちゃ…ん…」

腕を弱々しくダントラの方へ伸ばしたナナを、黒竜はさらに噛み砕く。肉と内蔵が飛び出る音と、大量の血しぶきをあげる音が、脳内にこだまする。そのまま、小さな女の子の命は儚く消えていった。

…その後の事はよく覚えていない。ただ後から聞いた話だと、俺は怒り狂った様子で王都にいた竜たちを、片っ端から真つ二つにしていったらしい。

人々はそんな彼をこう呼んだ。

——燃えさかる鬼と。

俺の家族を奪った竜を、俺は決して許さない。

——俺は、この世全ての竜を、必ずこの手で狩り尽くす。

そう、心に決めたのだった。

そう、俺はあの日、そう心に誓ったのだ。

まだこんな所で止まるわけには行かない。

ダントラはなんとか身体を起き上がらせる。もう肋骨が何本も折れている。だが、痛みなんてものは、もう感じない。あの日に受けた心の傷、あれより痛いものなんかこの世に存在しねえ。

…だが、ここで立ち上がって、1人の竜人を殺して、何になると言うのだ。この世全ての竜を殺したところで、もうカーラとナナは戻ってこない。

セーナは何も持たずに、ダントラに向かって、ゆっくりと歩いていく。その姿は凜々しく、可憐でダントラは黙ったまま彼女の方を見ていた。

「わたしは、この力であなたをこれ以上傷つけないの。…だからお願い、輝石を返して。」

水色の瞳が、真つ直ぐにダントラを見つめる。少女は純粹で良い眼をしている。こんな少女が人を殺すはずなんて無い。この歳になればそれくらいの事は分かる。

…綺麗な瞳だな。ナナも、今頃はこんぐらいの年齢で、可愛い女の子になってたんだろうな。

ダントラは、無言でポケットから水色の輝石を取り出し、セーナに向かって投げた。それを受け取ったセーナは嬉しそうに目を輝かせた。その様子はまるで、さつきまでのダントラ達の行いを全て許したかのような様子であった。

「――！ありがとうございます。おじさん。」

「早く行け。俺は骨が何本も折れちまって今は動けねえだけだ。…だが、動けるようになったら、次はお前を、竜を、確実に殺す。」

そう言っただントラは壁にもたれかかった。もう今、戦う意思はない。そう示したように。

「今のうちだ！町から出るぞ！」

ジークにそう言われ、ユナン達は急いで酒場から出ていく。そんな彼らの様子を見て、部下がダントラに向かって訴えてきた。

「団長!?!いいんですかい？」

「…よくねえよ。でもお前らで勝てるのか？契約者であるあいつらに。」

「それは…やって見なきゃわかんねえです。」

「…まあ好きにしろ。」

ユナン達は、町の中を駆けていく。そんな彼らの背中を、夕日が照らしている。彼らの物語はまだ始まったばかりだ。

第一章13 『旅の目的』

ユナン達はダントラ率いる傭兵団「ドラゴンスレイヤー」の追っ手から逃れるため、ロゼッタの町を去ることにした。

だいぶ遠くまで逃げてきただろうか。

辺りはすっかり暗くなり、月の光がユナン達を照らしていた。

そんな時キリマルが、息を切らしながら、愚痴をこぼした。

「ぜえ…ぜえ…もうオレ疲れたよ。昨日からロクに寝てないしさ。ここで一旦睡眠とらない？」

確かにキリマルの言うことも、一理ある。みんなの顔には、睡眠不足と連戦による疲労の色が、濃く現われていた。

「キリマルの言うとおりね。今日はここで野宿にしましょうか。」

キリマルの提案に賛成して、アンナがそう口にした。

まあどうやら、もう追っ手もやって来なさそうだし、休むのも時には大切だ。俺も、正直言っただけ寝たい。

「それじゃ俺は、クッションにできる葉っぱとか集めてくるわ。」
そう言ったユナンに対して、アンナは自慢げに胸を張る。

「ふふん。そんな必要無いわ。これを見なさい。」

リュックからアンナは、何やら三角柱の形をした、手のひらサイズの金属の塊を2つ取り出した。それには、何やら幾何学的な模様が描かれている。

「なんだそれ？」

ユナンは首を傾げながら、アンナにそう問いかける。

「まあ見てなさいって。驚くわよ。」

そう言ってアンナは、その金属の塊を地面に向かって投げた。

すると金属の塊は、不思議な赤い魔法陣を浮かべた後、大きな黒いテントへと一瞬にして姿を変えた。

「すげえええ!!」

「すごい!!」

ユナンとセーナは感動のあまり、思わずそう叫んだ。

「魔法道具『セリオン』の1種よ。セリオンは、中に術式が編み込ま

れていて、誰でも簡単に魔法を使うことができる優れたものよ。アタシは昔、魔法学院都市マグノームに行ったことがあってね。その時に買ったものなの。」

「誰でも!? ってことは俺も使えたり?」

「まあ使えるけど…でも攻撃系の魔法道具とかは、希少で、目ん玉が飛び出るほど高いわよ。ユナンじゃ買うのはまず無理ね。」

「ですよー。」

世の中そう簡単には行かないか。魔法学院。たしか前にもジークが同じ名前を言ってたな。そこに行けば俺も魔法が使えるようになるだろうか…

「じゃあ、オレとアンナとセーナちゃんはこっちのテントで寝て…」

「なんでアンタが女子の方に入ってんのよ。このエロマル。アンタはあっち!」

「あひん!」

そう言って、アンナは鬼の形相でキリマルを蹴飛ばした。

…懲りねえなあ。キリマルのやつ。

こうして、ユナン達はテントの中で睡眠をとることになった。その夜…

「おい。起きろユナン。」

「うーん。なんだよ、キリマル。」

キリマルに起こされたユナンは眠そうにそう呟く。

時間は真夜中。こんな時間に起こすなんて、余程のことがあったのだろうか。

「なに寝てんだよ。それでも男か。」

「いや、意味わかんねえし。それに俺は疲れてるんだ。緊急の用がある時だけ言ってくれ。」

そうやって、ユナンがまた寝ようとした時、キリマルが真剣な顔でこう告げた。

「…セーナちゃんの寝顔。見たくねえか?」

ユナンの耳がピクツと反応する。ユナンの頭にセーナの可愛い寝

顔が思い浮かぶ。

…見てえ。超見てえ！

ユナンは寝袋から出て、飛び起きた。

「ほう。いい面構えだ、ユナン。お前今、最高に光り輝いてるぜ。」

「ああ。行こうぜ相棒。」

ユナンとキリマルは意気投合して、テントから出ていこうとする。

「はあ。お前らほどほどにしとけよ。」

そんなユナン達に、寝ていると思っていたジークが声をかけてきた。

「お、起きてたのかよ。…止めないのか？」

「どうせ、止めたって聞かないだろ…。それに寝顔を見るだけなんだろ？チキンのお前らにそれ以上の事が出来るとは思えんしな。」

…なんか軽く煽られた気もするが、どうやらジークは見て見ぬふりをしてくれるらしい。

ユナン達は女子テントの前までたどり着く。

「それで？どうやって寝顔を見るつもりなんだ？相棒。」

「決まってるじゃんか。そのままこっそり入口から忍び込んで入るんだよ。やるなら、正々堂々だ。」

…どこが正々堂々か、1ミリも分からないが。だがお前は正真正銘の「漢」だよ。キリマル。

「さあ、夢の世界へ。レッツゴー。」

そう言つてキリマルが、テントの中へ入ろうとした時だった。

爆音とともに、巨大な爆発がキリマル達を襲った。

次の日の朝、ユナン達は出発の準備をしていた。

「まったく。男つてほんとにバカね。セリオンを甘く見すぎよ。防衛機能ぐらい、ついてるにきまつてるじゃないの。」

アンナが呆れたような顔をして、そう言い放った。

「オレ、ここ最近で1番死ぬかと思ったよ。」

キリマルがげっそりしたような顔でそう呟く。

：ほんとよく、無傷で済んだよな。キリマルは不死身なのは。「でもユナンも起きてただなんて、ちよつと意外。2人とも夜中に何しようとしたの?」

セーナが不思議そうにユナン達にそう聞いてきた。まったく疑いを持たない、純粋な眼差しが、よりいっそうユナンに罪の意識を芽生えさせる。

「えーとだな、2人で夢を追いかけてたんだよ…」

「へえー。ユナンとキリマルって仲が良いのね!」

辛い。彼女のその笑顔が俺の胸に突き刺さる。いっそ、怒ってくれた方が幾分かマシである。

「そういえば、アンナ達はなんで旅なんかしてるんだ?」

なんとか話の話題を変えようと、ユナンは前々から思っていた質問を口にする。

「ああ、話してなかったな。俺たちは騎士団に入りたかった。そのため王都を目指している。」

なるほど、アンナ達は騎士団に入るつもりなのか。確かに自分から契約者になる理由なんて、それくらいしか無いよな。

「そういうユナン達は、何の目的で旅を?」

「わたしは、世界を見て回りたいくて。」

「俺は…復讐したい相手がいる。」

アンナの質問に、ユナンとセーナがそれぞれ自分の目的を口にする。

「復讐? 誰にだ?」

「俺も実はそいつの正体についてはよくわかってねえんだ。多分魔獣に似た何かなんだが。…俺の友達がそいつに殺された。」

「なるほど。まあ契約者にはそういうやつも多いさ。」

「ということは、2人とも目的地とかは無いんでしょ? なら、アタシたちと一緒に王都まで行かないかしら?」

むしろ、こっちからお願いたいくらいだ。俺は今、実質魔法が使えない状態だ。道中、仲間がいると心強い。それに、旅は人数が多ければ多いほど楽しいものになる。

「ああ。こちらこそ、よろしく頼む。」

「わたしも、1人旅は不安だったから…よろしくね。」
もちろんユナン達は、アンナの提案を受け入れる。断る理由なんてない。

「やったあ！男ばかりのむさ苦しい旅に、もううんざりしてたの！」
そう言ってアンナはセーナの胸に向かって抱きついた。慣れない人の温もりに、セーナは頬を少し赤らめている。

…良い目の保養だなあ。

「なんか、ユナンの目、気持ち悪いんですけど。」

「えっ!?気のせいだって。あははは。」

アンナの鋭い視線に、ユナンは思わず顔を逸らす。

アンナは結構、勘が鋭いな。気をつけねえと…

「それで、次の目的地はどこなんだ？」

ユナンが気になって質問をする。

次は平和そうな所がいいなあ。また、傭兵団に追っかけられるなんてのは御免だ。

「次は貿易港マイミアだな。立地的に交通の要となっていて、ラムザ王国で重要な都市のひとつだ。世界中から色んな人が集まってくる場所でもある。」

ユナンの質問に、ジークがそう解説してくれた。

「へえー。それはワクワクするぜ。」

「なら、色んな美女とも出会えるかな。オレ楽しみだよー。」

「また衛兵でも呼ばれたりしたら大変よ。次、問題を起こしたら、ほんとに首輪買うからね。」

「く、首輪？それはそれでアリかも…」

アンナとキリマルの会話をよそに、ユナンは次の目的地への期待を膨らませていた。

新しい人との出会いだってあるかもしれない。

最初はお金もなくてひとりぼっちで、不安がいっぱいだったが、今はこれからの事が楽しみでしかない。

「なんか楽しくなってきたぜ！」

ユナンが生き生きとした表情でそう叫んだ。
セーナはそんな様子のユナンを見て、頬を緩めて笑っている。
貿易港マイミア。その地でユナン達に待ち受けているの希望か、はたまた絶望か。その答えは誰にも分からない。

黒いシルクハットを被り、黒いタキシードを身につけた男が、森の中をさまよっている。

「貿易港マイミア。この道で合ってると思ったんだけど。参ったな、私としたことが、道に迷ってしまったようだ。」

だが、男に困惑した様子は一切見られない。

「まあ、世界の真理が決して変わらないのと同じだ。たどり着けない目的地なんてのは、この世には無いのさ。」

そんな訳の分からない事を言っつて、男は歩き出す。そんな男に虫型の魔獣が数匹、襲いかかってきた。

「はあ、さつきと襲い方が同じじゃないか。もつと考えたまえ。『感情』に任せて動くものは、思考を放棄する。これだから『感情』は邪魔なのだよ。」

虫型魔獣たちの攻撃が男の元へ届く前に、魔獣達は不可視の力によつて押し潰され、黒い霧となつて消えていった。

「さあ、なぜ君たちは押し潰されてしまったんだろうね。」

男の不敵な笑い声が、森中に響き渡った。

第一章 14 『貿易港マイミア』

ユナン達は次の目的地にたどり着く。

「ここが、貿易港マイミア。交通の要所として昔から栄えてきた港よ。世界中から色んな人がやってくるの！」

アンナがドヤ顔で説明してくれた。案外、アンナは地理に詳しいようだ。：少し驚きだ。

貿易港マイミア、ロゼッタも大きい町だったが、ここはそれ以上だ。泊地には、多くの船が停泊している。大型の船も多く、中には軍船の姿もあった。積荷を一旦置いておくための倉庫が立ち並び、人々が急いで積荷を運んでいる様子が見える。

海から少し離れた所には、酒場や商店が立ち並び、四方八方から人々の賑わいの声が聞こえてくる。とても活気溢れる街並みに、ユナンのテンションが上がる。

「よし！俺、色々見て回ってくるわ！」

「新たな女の子が、オレを呼んでいる気がする。」

ユナンは目を輝かせながら、キリマルは少しカツコつけた風にそう言っ、2人とも駆け出そうとする。

「い・い・け・ど！昼食の時間になったらここで集合ね。：あとキリマルは次問題を起こしたら、ホントに首輪、アンタに付けるから。」

2人の頭を鷲掴みにして、アンナはそう告げる。2人とも頷いた様子を見せたので、アンナは2人を解放した。開放された途端に、2人は風のようにどこかへ走り去る。

「まったく、ほんとにバカなんだから。セーナとジークはどうする？」

「俺はアンナと行動する。」

「わたしも、1人よりはみんなと一緒にいる方が良いから、アンナについて行くわ。」

そういうわけで、セーナ、アンナ、ジークは3人で共に、ユナンとキリマルは、それぞれ1人で行動することとなった。

ユナンが町を散策していると、何やら、言い争いをしている場面に遭遇した。

「それは、ワタシが買った林檎です！返して！」

「ああん？ 獣人風情が、人間様に歯向かおうってか？」

「どうやら、言い争っているのは小太りの大柄な男と…」

——あれは、獣人？頭に猫耳が生えているから、多分合っているはずだ。

男の正面には、少し背の低い獣人の女の子がいた。

白茶色のすらつとした長髪で、ピンクのワンピースを着ている。一見普通の女の子にしか見えないのだが、その頭にはふさふさの猫耳が生えている。

…どうやら、男が女の子のりんごを奪って、言い争いになったらしい。

「おい、おっさん。流石に人の物を奪うのはまずいんじゃないの？」

「なんだ小僧？それに、こいつは人じゃねえ、『獣人』だ。別にいいだろうがよ。」

「…なら衛兵を呼んで、一緒に話し合ってみるか？」

『衛兵』の言葉を聞いた途端、男が怪訝そうな表情を浮かべる。

「チツ。めんどくせえな。ほらよ。」

そうやって男はしぶしぶ、女の子にりんごを返して、どこかへ去っていった。弱々しい声で、女の子はユナンにお礼を言う。

「あ、ありがとうございます。ワタシはモモっていう名前です。」

「俺はユナンって名前だ。それにしても、奪われたんなら、こんな感じで衛兵でもなんでも呼んだら良かったんじゃないの？」

「その…獣人だと、働いてくれない衛兵もいて、あんまり信用出来ないというか…」

「マジかよ。腐ってんなー、衛兵。」

ここ、ラムザ王国は『人間』の国だ。無論、竜人や獣人などの亜人に対する人間の目は厳しい。…竜人は特に。

だから、獣人をこの国で見かけることはめずらしい。俺はムルク村近くの町で、1回だけ獣人を見た記憶がある。だが、それだけだ。ど

ここには『獸人の国』なんて所もあるらしいが…
モモがユナンを怯えた表情で見つめてくる。

「あの…助けていただいたお礼なら、なんでも致しますので…」

「いや、お礼とかいいって…こういうのは自己満足なの。一日一善！そうすりゃ運も上がるってもんよ。」

…まあ俺は昔からマジで運が無いんだが。

そんなユナンの様子を見て、少しだけモモが笑った。

「おかしな人なんですね。それでは。」

そう言つてモモは去つていった。

さっきのモモの怯えた表情を見るに、今まで、人間に酷いことを沢山されてきたんだろうな。これからも、モモは人間を信用せずに生きていくのかもしれない。だが…

ユナンはモモの笑顔を思い出す。

——どちらかが歩み寄ろうとすれば、いつかは人間と亜人が心の底から笑い合える日がきつとくるはずだ。

ユナンがそんなことを考えて、ぼーつとしていると、歩いてきた人とぶつかってしまった。その人が持っていた紙袋から、りんごが1個、転がり落ちる。

「あつ、すみません！りんごの代金、弁償しましょうか？」

ユナンは慌てて、謝罪をする。どうやら、ぶつかった相手は男の人であるようだ。

男は、灰色の癖のある長髪で、長身のイケメンだ。黒いシルクハットを頭に被り、黒のタキシードを身につけている。どこことなく、気品を漂わせているその姿は、貴族を思い浮かばせる。

「ああ、弁償はしなくていいとも。…ところで、このりんごはどうして下に落ちたのだろう。君には分かるかい？」

低く、知的な声で男はユナンにそう問いかけた。

…はあ？何言ってるんだこいつ。変な人だな。そりゃ、

「俺とぶつかったからじゃねーか。本当に大丈夫か？頭とか打つてないか？」

ユナンはそんな男の意味不明の問いかけに、そう返した。男は少し不機嫌そうな表情を浮かべ、こう言った。

「君は面白い『色』をしていたから、もしかしてと思ったんだが。まあいきなりは難しいか。…では特別に時間を与えよう。次に私と会う時までを考えておくように。」

そしてそのまま男は去っていった。

…すごく、変な人だったな。というか次に会う機会なんてねえだろ。

そう思いながら、ユナンは次の店へ足を進めた。

ちょうど同じ時、キリマルは…いつも通り女の子をナンパしていた。

「ああ！こんな所で運命の人と出会えるなんて！」

「えっ…あの…」

「この広い世界の中で、君と出会えた奇跡！オレはなんて…幸運な男なんだ。」

そんな、俳優顔負けの名演技を披露しているキリマルに、男が声をかけてきた。

白い首元まである髪に、中性的な顔立ち。薄い緑色の瞳には、輝きが失われているように感じる。白いシャツの上に黒いコートを身に付けた、怪しい男だ。

『『幸運』…か。君、面白いね。僕とちよつとした賭け事をやらない？』

「なんだよ。オレは今、運命の相手と出会えた喜びに浸っている最中なんだけど。」

「まあまあ、そう言わずに。僕と君がこうして出会えたのも奇跡みたいなものだろ？それに、そんなに時間は取らせないよ。ただの運試しさ。」

そう言って不敵に笑って、男は女の子の手に、金貨を1枚握らせる。

「なっ！オレの彼女の手に、何触ってるんだ！」

「彼女になった覚え、無いですけど…」

「いや、そういうのじゃないよ。ただ、君とゲームをしたかったんだ。この女の子にコイントスをしてもらう。それで、表か裏か。それを当てた方の勝ち。僕が勝ったら、君はその女の子を諦める。君が勝ったら、その金貨をあげるよ。簡単だろ？」

「オレは今まで、じゃんけんで負けたことが1度もないんだぞ。実質、ただで金貨が手に入るようなもんだ…いいぜ。イカサマは無しだぞ。」

「勿論、そんなつまらない事はしないよ。それを証明するために、この女の子にコイントスをしてもらうんだ。…お嬢さん、コイントスは出来るかい？」

「は、はい。一応…」

「では始めようか。」

キリマルと男は女の子の背を向ける。そして、男の合図と共に、女の子は金貨を弾いた。

日の光を浴びて輝く金貨が、高速に回転しながら宙を舞う。表か裏か。その答えは誰にも分からない。

「出来ました。」

「では表か裏か、君から言っていていいよ。」

キリマルは悩んだ末に、

「表！」

と叫んだ。

「じゃあ僕は裏だね。では、結果発表と行こうか。」

キリマルと男は女の子の方へ振り返る。そして、女の子は右手をそつとよけた。女の子の左手の甲の上には、裏面の金貨が乗っていた。

「裏です！」

「ああ、ツイていたのは僕の方だったね。」

「クツ。3回勝負だ！もう1回！」

「別に、何回やってもいいとも。」

そう言っつて、男は不敵に笑う。

その後、キリマルと男はもう一度勝負をするが、それも男の勝利に終わった。

「残念、君はツイてないね。…もう一度やるかい？」

「もう…いいよ。諦める。運だけはオレ、あると思ってたのに…」

沈んだ声でそう言っつて、キリマルは、とぼとぼと歩いていった。「あの、助けていただいてありがとうございます。この金貨、お返ししますね。」

「いいって。僕も楽しめたからさ。それに、その金貨も君にあげるよ。…その金貨、たまたま拾ったものだから。」

そう言っつて男は女の子に笑顔で手を振って、どこかへ行ってしまった。

その頃、アンナ達は猫と戯れていた。

「きゃー！可愛い！この黒猫、お腹まで見せたわよ！人懐っこいのかしら？」

「ほんと、可愛いわね。前の猫ちゃんを思い出しちゃった。」

女性陣がワイワイ騒いでいる様子を、ジークはやれやれと見守っている。

「人懐っこいにも程があるだろ。人を騙す魔獣とかじゃないのか？少しは警戒した方がいい。」

「ジークは何でも警戒しすぎよ。」

そんなジークに黒猫が擦り寄ってきた。だが、もふもふの毛の感触にジークは満更でもないといった感じだ。

ジークの足に頭を擦り付けながら、必死に鳴いて、身の潔白を訴えているようにも見える黒猫をみて、ジークはため息をつく。

「はあ。まあおまえは大丈夫だろう。分かったから、俺から離れろ。」

「そんなこと言っつて、ジークは大の動物好きだもんねー。」

「…少しうるさいぞ、アンナ。」

「へえ、ジークも猫ちゃん好きなんだ。ちよつと意外。」

セーナはそんなジークの様子に親近感を覚え、微笑む。

…少し怖い人と思っていたけれど、案外可愛い所もあるのね。

町の猫達もジークには、そこまで警戒していないように見える。ジークは元々、狩人をやっていたらしい。狩人が動物に好かれると言うのは本当なのかもしれない。

「それでこの黒猫、まだ俺達についてくるのか？」

「可愛いし、旅に連れて行ってもいいんじゃない？アンタの名前は…くろすけよ！」

「おい。そんな簡単には連れて行けな…」

アンナの提案を否定しようとするジークを、黒猫がうるうるとした目で見つめている。

まるで、人の言葉が分かるような反応だ。そんな目で見つめられると、置いていこうにも置いていけない。

「…おいおまえ、餌は自分でなるべくとってくるんだぞ。俺たちは、そんな面倒まで見切れないからな。」

黒猫…改め、くろすけはジークの言葉を理解した様に、喜んで鳴いた。

「そろそろ、昼食の時間ね。集合場所に行きましょう。」

「アイツら…戻ってきてるかしら。」

セーナがそう提案し、アンナはここにはいない、キリマル達を別の意味で心配する。何かと問題を起こしそうな2人だ。何も無ければいいが…

そして、集合場所へ向かおうとしたその時、セーナは足で、何か柔らかなものを踏んづけた様に感じ、下を見る。

「何か踏んづけたような…」

「やあ君たち、ちよつといいかい？少しお腹が空いていて…ここらへんにレストランとかあるかな？」

なんと、セーナは見知らぬ金髪の青年を踏んづけていた。青年は顔を踏まれたまま、爽やかな笑顔をこちらへ向けて、そんな事を聞いて

きた。

「きやあああ！」

セーナの悲鳴が辺りに響き渡った。

第一章15 『大罪の十二宮』

「えーと…その人は？」

集合場所には全員が集まっていた。しかし、人数が1人多くなっている。ジークの背中には、金髪の見知らぬ男が背負われていた。

「まあそういう話も、とりあえず食べながらしましょ。」

動揺するユナンとキリマルの背中を押して、アンナがレストランの中へ入るように促す。

そういうわけで、アンナ達とユナン、キリマルは無事合流を果たし、そのままレストランで食事をしている。

…だが、何故か知らない男が1人混じっているという状況だ。

「本当に助かったよ。お腹が空きすぎて、気を失ってしまってたね。でも、君に踏んでもらったおかげで、意識を取り戻すことができた。ありがとう。」

セーナに爽やかな笑顔を向けてそう言ったのは、騎士の姿の格好をした男だ。

蒼炎のように青い、純粋な瞳をしている。整った顔立ちで微笑む姿は、太陽のように眩しい。腰には、豪華な装飾が施された剣を携えている。

一見、王国騎士のようにも見えるが、マントはしていない。

そんな男を、セーナはとても怯えた目で見つめている。男の事を凄く警戒しているのだろう。席も、男から1番遠く離れた位置に座っているほどだ。

…まあなんか、踏んでくれてありがとうとか言ってる人だし、怖いよなあ。怯えるのも無理はない。

「えーと、俺はユナン、そこでこっちの黄色い髪のがキリマル。俺とキリマルは、あんたと初対面だから、自己紹介をしてくれると助かる。」

ユナンは一応、男に説明を求める。アンナ達が連れてきたから、大

丈夫だとは思いますが、名前も知らない男と食事をするのもいい気分ではない。

「おっと、君達にはまだ自己紹介をしていなかったね。すまない。僕の名前はアルム。1人で旅をしている身でね。」

アルムはこちらに笑顔を向けて、そう答える。

：単に、旅をしていると答えたということとは、やはり王国騎士では無いのだろうか。王国騎士なら所属の色などを名乗るはずだ。

「そうか。俺たちも、5人で旅をしている最中なんだ。よろしくな。」

「よろしく。ユナン。」

そう言ってアルムが、こちらへ手を差し出して来る。ユナンは少し戸惑いながらも、アルムと握手を交わした。

俺も人のことは言えないが、アルムは、人との距離の詰め方が異常に早い気がする。でも少しも違和感を感じないのが不思議というか：変わった人であるのは間違いない。

食事をしながら、色々な話をして、ユナン達はすっかりアルムと打ち解けた。：セーナを除いては。

そんな中、アンナが、自分達の旅の目的について語り出す。

「まあそういうわけで、私たちは騎士団に入るために王都へ向かってるのよ！」

すると、アルムが少し心配そうな表情を浮かべた。

「なるほど。やはり君たちは契約者だったのか。なら気をつけた方がいい。最近こちら辺で、『大罪の十二宮』の1人が目撃されたという情報が出ている。」

その瞬間、ユナン以外の4人の顔が凍りつく。

しかし、ユナンにとっては、初めて聞く名前だ。何か、極悪人の指名手配犯みたいなものだろうか。

「大罪の十二宮？なんだそれ。超ヤバイ犯罪者の名称？」

「えっ!? あんた、その名前も聞いたことが無いわけ？」

ユナンの発言に、アンナが驚く。それくらい、有名人ってことだろ

うか。

「まあ、ユナンの予想は大体合ってるよ。大罪の十二宮。世界を脅かす極悪集団の名称だよ。彼らは、契約者でもないのに特殊な能力を使う。そして…」

アルムは珍しく、真剣な表情をこちらへ向けた。

「——大罪の十二宮は、契約者、そして女神を殺す事を目的に動いている。実際これまでに、彼らによって殺された契約者は、数えきれないほどいる。」

ユナンはその発言を聞いて、息をのむ。

さながら、契約者専門の殺人集団といったところか。

確かに俺たちにとって、脅威以外の何者でもない。数えきれないほどの契約者を殺しているということは、おそらく、とてつもなく強い連中なのだろう。

というか、あの女神にも「死」という概念があるのだろうか…まあなんにせよ、そんな危ない連中には会わないに越したことはない。

「なんかすつげー怖いヤツらつてことは分かったよ…それじゃあ、次の町に早く行った方がいいな。」

「そうだな。アルム、情報提供感謝する。」

「助けてもらったお礼だよ、ジーク。それじゃあ代金はここに置いておくから、僕はこれにて。みんな、またどこかで会えたらその時はよろしく。」

「またなー。」

「またねー。」

ユナン達はアルムに手を振る。アルムは自分の代金をテーブルに置いて、笑顔をこちらへ向けた後に、レストランを出ていった。

「オレたちも早くこの町から出ようよ。大罪の十二宮なんて…会ったらオレたち殺されちゃうよ。」

「俺もキリマルに賛成だ。連中によって、騎士団が壊滅させられたなんて噂も聞く。俺たちじゃ、まるで歯が立たないだろう。」

「まあそうね。じゃあ店を出たら出発しましょうか。ここから王都に近いのは…山を越えるルートね。」

ユナン達はレストランを出て、山へ向かうこととなった。しかし、ユナン達は、山へ続く道に繋がる町の出口で、老人に止められた。

「旅のお方、今、山を越えるのはやめなされ。」

「…どうしてだ？」

「山で落石や土砂崩れが多発しているのじゃ。これは山の神がお怒りになっているに違いない。ああ、恐ろしや。」

その言葉を聞いて、キリマルが震え上がる。

「落石!? アンナ、他に道は無いの〜?」

「あるにはあるけど…少し遠回りになっちゃうわね。船に乗るルートよ。」

「まあ、命の危険に晒されるよりはマシだろう。俺は船のルートの方が良いと思う。」

「じゃあ、そうしましょうか。」

船に乗るために、ユナン達は引き返すこととなった。

道中、ユナンはみんなが不安になっているのを感じ、暗い雰囲気を変えようとする。

「それにしても、アルムって変な奴だったよな。セーナは結局、最後までアルムを警戒してたみたいだし。まあ仕方ないっちゃ仕方ないけど。」

「…ユナンも人のこと言えないと思うけど。でも最後まで警戒しちやっただのは本当。良い人そうなんだけど、なんか、少し違和感があるっていうか。理由は特に無いんだけど…」

「いや、セーナの勘は正しいと思うぞ。なんせ、女の子に踏まれて、笑顔になる変態だからな。」

キリマルの誘いに乗った時は心配だったが、セーナにもちやんと、女性の「勘」というやつが備わっていて安心した。これから先、怪しい男にポンポンついて行かれては、こちらの身がもたない。

「そういう意味じゃないんだけど…」

ユナンの発言に、セーナは苦笑した。

ユナン達は船着き場に到着し、大型の客船に乗ることとなった。何気にユナンは船に乗るのは初めてだ。海の上の景色はどんなものなのか。期待に胸が膨らむ。

「はあ。今日は色々あつて疲れた。オレは客室で寝てくるよ。」
キリマルがだるそうにそう言つて、自分の部屋へ入つていく。みんなも、すっかり疲れ切つている様子だった。どこに、自分達を殺す暗殺者が潜んでいるのか分からない状況だったのだ。精神が摩耗するのも仕方がない。

「それじゃあ、船は明日の朝到着だから。一旦解散ね。」
アンナがそう言つてみんなはそれぞれの部屋へ入つていった。
ユナンはというと、客室のベットで眠れないでいた。

なんか今日は色々あつたな。疲れているはずなのに、何故か眠れない。…初めての船旅だからかな。甲板にでも出てみるか。

ユナンは一人で甲板に出た。甲板には誰もいなかった。ただ、波のさざめきだけが聞こえてくる。

時刻は夕方。地平線に沈む太陽が、赤く光輝いている。海の反射によつて、その光は拡散され、神秘的な光景がそこには広がっていた。それはさながら、海に浮かぶ巨大な宝石のようだった。

ユナンがそんな光景に目を奪われていると、後ろから声をかけられた。低く、知的な男の声だった。

「やあ、また会つたね。それで、答えは出たかな？」

ユナンは振り返り、今日たまたま出会つた男との、奇妙な再開に驚く。もう一生出会うことなど無いと思つていた、変な男だ。

「お前は…今朝出会つた…」
「そう。今朝出会つた見知らぬ男だよ。…君の答えを聞きに来たんだ。」

ユナンは首を傾げて、男に問いかける。

「…答えつてなんだ？」

男はやれやれと、呆れたふうに首を横に振る。

「忘れたとは言わせないよ。ほら、これだよ。」

そう言つて男は茶色い紙袋から、リンゴを一つ取り出し、それを落とした。リンゴが甲板とぶつかる軽い音が、辺りに響き渡る。

「——どうしてリンゴは下に落ちるのか。」

男は不敵な笑みを浮かべ、面白そうに、そう問いかける。

：正直言つて、訳が分からない。男の問いかけも、また、俺に姿を現した理由も。今日は色々あつて、疲れているのだ。そんなこと考えたくもない。

「リンゴが下に落ちるなんて、当たり前だろ。俺は上に昇つていくリンゴなんて見たことがないね。」

ユナンはつまらなさそうに、男の質問にそう答える。すると、男の機嫌が急に悪くなった。

『『当たり前』とはなんだ。そんな個人的な感想、無意味な答え、僕は求めてないんだよ！みんなそうだ。日常には世界の真理を解く鍵が満ち溢れているのに、少しもそれに気づかない。何も考えようとしていない。何も気づかずに日常を過ごしていく。違うだろ。そんなんだから人類は発展しないんじゃないか。』

：男が早口で意味不明なことを叫んでいる。さっきの冷静沈着な男とは、別物だった。突然落ち着きがなくなり、怒り狂っている。

その、全く人が変わってしまった男の様子に、ユナンは恐怖すら覚える。正直言つて、早くここから立ち去りたい。

「お、おいもう部屋で休んだほうが…」

「最後のチャンスだ。もう一度、答える機会を君にあげよう。」

男がさらに低く、静かな怒りを込めた声でユナンに問いかける。：どうみても、この男は異常だ。

「そんなの、どうでもいいだろ？お前、疲れてるんだよ。ちよつとは休め。」

そう言つてユナンは船室へ戻ろうとする。男は下を向いていて、顔がよく見えないが、まあいいだろう。変な奴に、関わらないに越したことはない。

「どっぴ…でもいい…だど？」

男の怒りが沸点に達する。男は右手をそつとあげ、そしてその手を静かに下ろした。

——その瞬間、不可視の力がユナンを押し潰す。

——!?なんだこれ!身体が…潰れる!

その力はどんどん増していく。全身の骨がその力に耐えきれず、徐々にヒビ入っていく。

「あああああああ!」

ユナンは今まで経験したことのない、強烈な痛みに叫び声をあげる。全身の骨がピキピキと音をたてているのが分かる。だが、さらに力は強まっていく。少しずつ近づいていく「死」の感覚に、身体が震える。いや、身体はもう動けない。

——身体ではなく、心が震えているのだ。「死」という恐怖によって。

「ゆる…じで…ぐ…れ」

ユナンはなけなしの力を振り絞り、か細い声で命乞いをする。もう、肺も潰れ、ほとんど呼吸すら出来ない。

「許すわけじゃないじゃないか。なぜなら…」

男は笑顔でユナンへ語りかける。

「僕の名前はニユートン。大罪の十二宮サジタリアスの座に就く。そして、君たちプライヤーを殺す役目を担う者でもあるのさ。…世界の『解放』のためにね。」

プライヤー? 契約者の事か? 世界の「解放」? 何のことだ。わからない。何も分からない。だから俺はこんな目に遭うのか?…だがもうそんなことはどうだっていい。ただ、早くこの地獄から解放してほしい。

骨がほとんど砕け散り、肉の潰れる音がする。痛すぎて、もう訳が分からない。それなのに、力はどんどん増していく。ゆっくり、ゆっくりに力が増すに連れて、意識が遠く離れていく。ゆっくり、ゆっくりに、ゆっくりに…

——頭蓋骨が割れ、脳汁の飛び散る音がした。

第一章 16 『幸運な男』

気がつけば、真っ暗で何も無い空間に、ユナンは1人立っていた。何も聞こえない、何も見えない。温度、匂い、感触、何もかもが「無」であった。

ただあるのは、自分という「存在」だけ。それすらも、今すぐに消えてしまいうような感覚に陥る。そんな曖昧な空間で、ユナンは思考を巡らせる。

俺は確か、みんなと客船に乗っていて…その後一旦、解散したんだ。でも何だか休める気に慣れなくて、俺は甲板に出て…

その瞬間、ユナンの頭に、あの光景が思い出される。黒いタキシードを着た男。その男の謎の力によって、押し潰された自分。

無意識にユナンの身体が震え出す。永遠にさえ感じられた、拷問の時間。全身の骨が少しずつ折れていく感覚。そして、最後の脳みそが潰れる音まで全て、ユナンの身体には染み付いていた。忘れたくても、忘れられない。

——「死」の恐怖がユナンの身体に刻みつけられたのだ。

普通の人なら、「心」まで完全に死んでいたであろう。だが、ユナンは違った。ユナンにはまだ、自分の仲間が残されている。ここで腐るわけにはいかない。

——みんなが、あの「恐怖」に押し潰されるのだけは、なんとかしてでも阻止しなくてはならない。

胸の奥深くから熱い「何か」が湧き上がってくる。それは、紫色の「光」となって、ユナンの胸から飛び出した。

真っ暗な空間に小さな「光」が生まれる。それは、ユナンを導くようにどこかへと向かっていった。

ユナンは何の迷いもなく、その「光」について行く。ただ、何故かその「光」について行かなければならない気がしたのだ。

少しして、ただ進み続けていた「光」の動きが止まった。すると、小さな「光」は紫色の扉へと、姿を変えた。ユナンはその扉のドアノブ

へと、手をかける。

そしてドアを開く。その先から溢れ出す光が眩しすぎて、ユナンは思わず目をつむった。

「旅のお方、今、山を越えるのはやめなされ。」

「…どうしてだ？」

「山で落石や土砂崩れが多発しているのじや。これは山の神がお怒りになってるに違いない。ああ、恐ろしや。」

目を開くと、今日会った老人とジークが話している光景が、ユナンの目の前にはあった。

この会話に、ユナンは聞き覚えがある。確か、ユナン達は山を越えようとして、マイミアの出口で老人に警告されたのだ。今はその状況と、酷く似ている。

…どういうことだ？俺は確かにあの男、ニュートンとかいうやつに殺された。そして、「加護」の発動によつて生き返ったと思つたのだが…

今、目の前には過去の光景が広がっている。タキシード姿の男なんてどこにもいない。なら、あの地獄の光景は、これから起きる未来の出来事なのか？…様々な考えが浮かび、頭が混乱している。

「ちよつと、アンタ大丈夫？さつきからずつと、ぼーつとして突っ立ってるけど…」

放心状態のユナンを見て、アンナが声をかけてきた。薄紅の瞳で、心配そうにユナンを見つめている。

「あ、ああ。悪い悪い。ちよつと考え事してて。」

「ユナンが考え事なんて、変なの。」

そんな、ユナンの返答に、セーナは首を傾げた。可愛い両目で不思議そうにユナンを見ている。

…確かに俺はじつと考えるのは苦手だが、今は考えなくてはならぬのだ。ユナンはそんな気がしていた。

あの記憶が夢で起こった出来事だとは、到底考えにくいのだ。今で

も、あの「死」の感覚に、ユナンの身体は震えているからだ。だが、それが表に出ていないのは、震えている場合では無いと、自分で自分に叱咤しているからだ。あの感覚を、仲間にまで味合わせたくはない。だからこそユナンは、ニユートンに遭遇しない方法を考える。

「まあ、命の危険に晒されるよりはマシだろう。俺は船のルートの方が良いと思う。」

話し合いの末、ジークがそう結論づけた。やはり、前と同じ結果だ。アンナも頷き、その意見に賛成しようとする。…だが、あの客船には、恐るべき悪魔が乗っているのだ。

「待ってくれ。爺さん、落石とかの情報って誰から聞いたんだ？」

ユナンは老人にそう問いかける。船がダメなら、山を越えるルートしかない。何か、安全なルートの情報を少しでも聞き出せれば、状況は変わるかもしれない。

「それは、命からがら、山を越えてマイミアへたどり着いた旅人からじゃ。」

その老人の発言に、ユナンはここぞとばかりに考えを述べる。

「…つまり、危険でも、山を越えられない事はないって事だな。何とか注意して行けば——」

そう、意気揚々と語るユナンへ、ジークが横槍を入れる。彼は、ユナンへ鋭い眼光を向ける。

「待て、ユナン。どうしてお前はそこまで山を越える事にこだわらんだ？…さつきから様子もおかしい。その理由が知りたい。」

「そうだよ。オレ、岩が降ってくるどころへなんて行きたくないよ。」

ジークの鋭い指摘に、ユナンは戸惑う。実際、これが加護によるものなのか、あまり確証は持てていない。はたして、そんな曖昧なもので、仲間を危険に晒していいものか。…だが不思議と、船に乗れば、また確実にニユートンに遭遇してしまうような気もしていた。

「…俺の加護が発動したみたいなんだ。俺は船に乗った先で、大罪の十二宮に殺された記憶がある。」

ユナンは正直に仲間へそう告げる。みんなはユナンの発言を聞いて

て、若干の戸惑いを見せた。そしてまず、ジークが口を開いた。

『『みたい』とはなんだ。確証がない。それに、お前が前に話した『生存に特化した加護』というのでは、今の話の辻褄が合わない。その話では、お前は『死んで』しまっているではないか。』

ジークの発言に、周りのみんなも納得の様子だ。確かに、ジークの発言には筋が通っている。それに比べてユナンの話は、曖昧な「夢」のようなものだ。それでは、みんなを説得することなんて、到底できない。

「とにかく、ユナンには悪いが、そんな戯言で仲間全員を危険に晒すことなんてできない。ここは、船のルートに変えるべきだ。」

ジークがそう結論づけ、周りのみんなもそれに賛成しようとした時、低く、わざとらしい演技じみた声でユナン達に声かけられた。

「おや、僕と同じく山を越えようとする人達がいるなんて。1人で寂しかったんだよ。僕はなんてツイているんだ。」

その男は、白い髪に薄緑色の瞳をしている。白いシャツの上に黒いコートを身につけていて、見るからに怪しい男だ。

すると、キリマルが驚いたように声をあげた。

「お、お前は今朝会った、運だけの男!」

「運だけの男、とは少し傷つくなあ。…まあ事実なんだけどね。」

男は片手で顔を隠し、少し切なそうな声でそう呟く。どうやら、キリマルとこの男は、1度会ったことがあるようだ。

「キリマル、この男性は?」

「オレが女の子をナンパしたら、この男が突っかかってきたんだよ。運試しのゲームをしようって。それで、オレはこいつに全敗したんだよ…思い出しただけで、へこむなあ。」

「アンタ、またナンパしてたわけ?ほんとに、次からは首輪が必要ね…」

アンナがキリマルの発言に、呆れる。そんな様子を男は笑顔で見ていた。

なんか胡散臭い男だな。…だがこの男の登場のおかげで、状況が変わるかもしれない。

「俺の名はユナン。よろしくな！君の名前は？」

「僕かい？僕はマイケル。しがない旅人さ。」

「マイケル、いい名前だな。それはそうとしてマイケル、この先の山は落石や土砂崩れで、進むのが危険だって聞いたんだが……」

そのユナンの発言に、マイケルは苦笑しながらこう答えた。その態度には、余裕が満ち溢れている。

「ああ、それなら問題要らないよ。」

「——！やっぱり、何か安全なルートが……」

「そんなのは知らないよ。だけど僕は『幸運』なんだ。」

そのマイケルの言葉を聞いて、ユナンは絶句する。この男、自分の運だけを信じて、この危険な山に挑むつもりなのか。正直言って、その理由はユナンのさっきの話よりも酷い、説得力に欠けるものであった。これでは、ジークが納得するはずもない。

しかし、そんな彼の言葉に助言をしたのは、さっきまでへこんでいた、キリマルであった。

「……そいつの言ってることは本当だよ。オレはこの目で確かにその『幸運』ってやつを目の当たりにしたんだ。オレとの運勝負に勝ったやつなんて、これまで1度も出会ったことがなかったのに……」

……キリマルの自分の運に対する自信もなかなか凄いものだが、それを黙らせるなんて、よっぽどの『幸運』の持ち主なんだろうな。いや、その力はまるで、

「なるほど、そこまでの自信。お前、『加護持ち』だな。」

ジークがマイケルに対して、鋭い視線を向けてそう言った。

「……バレてしまつては仕方がないね。そう、僕は契約者だよ。君たちと同じくね。……その少女は違うみたいだけど」

マイケルの発言に、ユナン達は顔を強ばらせる。どうやらマイケルは、契約者かそうでないかを判断することができるようだ。ジークから、契約者の中には加護持ちを狙うやつもいる、と前に聞いたことがある。つまり、加護持ちにとって、他の契約者は「敵」になり得るということだ。

「あつ、凶星だった？テキストに言ってみただけなんだけど、当たっ

ちやつたね。後、そんなに怖がらなくても、僕は自分から人を傷つけたりなんてしないよ。…もちろん、正当防衛はするけどね。」

マイケルは笑顔で、面白そうにそう言った。途端に、ユナン達の緊張が解かれる。

…こいつ、性格悪いな。

この場にいた全員がマイケルに対して、そう思った。

すると、アンナが目を輝かせながら、マイケルにこう問いかける。
…完全に自分の利益になる者に媚びる、女の声だ。

「じゃあマイケルさんの周りには、落石とか土砂崩れとかが起きないってことよね。…アタシたちも一緒に同行していいかしら？」

「ああ、もちろんいいとも。言ったじゃないか、僕も一人で寂しかったって。アンナさんの言う通り、僕には落石や土砂崩れが来ないよ。」
マイケルはアンナに笑顔で優しくそう言った。…何故か、少し含みのある言い方に聞こえたのはユナンの気のせいだろうか。

「じゃあ決まりね！マイケルさんと一緒に山を越えるわよ！私たち、本当に運がいいわね。」

アンナの掛け声で、全員の方針は決定した。ジークも、アンナの言ったことには反論しないのだろう。ため息をついて、その提案を承諾していた。

ユナンも、これでニユートンに会わなくて済むと思いい、そつと胸を撫で下ろす。あいつには、いつか復讐したいが、今はまだ時期が早すぎる。我慢も時には必要だ。

そうして、アンナを先頭に、みんなは山へ向けて歩き出す。山には暗雲が立ち込め始めていた。しかし、ユナン達は強力な助っ人の登場に慢心し、そんな事に一切気がつかない。

列の最後尾、マイケルはそんな彼らの様子を見つめていた。——不敵な笑みを浮かべながら。

「本当に運がいい…か。それが分かるのは、これからさ。」

第一章17 『自然という名の脅威』

マイミアの町から歩き始めて、およそ1日。ユナン達は『幸運』の男マイケルと共に、落石が頻繁に起こると噂の山の近くへとたどり着いた。

「あれがドラクロス山。昔から、古龍が眠る山と畏れられている場所ね。1度は行ってみたかったの！」

アンナが、遙か高くにそびえ立つ山を指差しながら、嬉しそうにそう言った。ユナンもこんなに高い山を見るのは、生まれて初めてだ。

山の麓は木々によって緑に覆われている。だが、上にいくにつれて、だんだん緑色が少なくなり、荒々しい岩壁が露出している。山頂は、黒い雲で隠れていて見えない。

これ、落石とか以前の問題だな。まず、自分の体力が持つかどうか

ユナンは山を見てそんな事を思った後、アンナが言った聞き慣れない言葉に対して質問をする。

「古龍？普通の竜とはなんか違うのか？」

そんなユナンの問いかけに、アンナではなくセーナが代わりに答えた。：自信たっぷりの声で。

「全然違うわ。竜は生き物だけれど、古龍は精霊が進化した最終形態よ。つまり、自然の神様ってことね。ふふん。わたし、これでもこういう知識にはちよつと詳しいんだから。ユナンより賢いのよ。」

「流石セーナちゃん。オレ、博識な女性も好みだよ！」

胸を張ってドヤ顔で語るセーナに、キリマルが余計な合いの手を入れる。：なぜ変なマウントをとられたのかは分からないが、意気揚々と語るセーナがちよつと可愛いので放置しておくことにする。

：自然の神様か。敵には回したくない相手だな。

そんなユナンの考えを読んだかのように、ジークが補足説明をする。深青の瞳をまつすぐこちらへ向けた。

「安心しろ。ここ100年、古龍の出現は一切報告されていない。

：まあやつらは、存在するだけで自然災害そのものとなるらしい。そんな簡単に出現するようでは、世界がいくつあっても足りないだろう。」

「へー。そんなやばいヤツもかつての世界にはいたのか。俺はこの時代に生まれて良かったぜ。」

ユナンはしみじみとそう呟く。魔獣に、大罪の十二宮、そしてあの黒い怪物。世界にはとんでもない化け物がゴロゴロいるのだ。そのうえ、古龍なんてものが出現したら、命を何回失うはめになってしまうのか。想像したくもない。

「へえ。僕も少しは聞いたことがあったけど、まさか自然災害そのものになるだなんて、知らなかったよ。1度会って運試しでもしてみたいな。：僕が死んでしまうのか。」

マイケルはジークの話聞き、珍しく薄緑色の瞳に光を宿して、興奮じた声でそう言った。そんなマイケルの様子を、みんなは訝しげに見つめる。

：変態の考えることはよく分からない。まあ放っておこう。

山の麓までたどり着き、ユナン達は何事もなく、山道を登っていく。小鳥たちはさえずり、虫の音がどこかから聞こえてくる。平和な山の風景に、ユナン達はほっと息をつく。

老人から聞いた話よりもずっと安全そうだ。それとも、これも『幸運』の加護のおかげなのか。それはマイケルにしか分からない。

ユナン達は順調に山を登っていく。途中でキリマルが弱音を吐いたが、みんなは気にせずに進んでいく。そんなみんなを、キリマルは必死に追いかけていた。

道中、猿型の魔獣が数匹姿を現した。突然の奇襲にユナン達は驚く。猿型の魔獣達は、マイケルに向かって一斉に大きな石を投げつけた。石といえども、頭に当たれば致命傷になる。

「マイケル！危ない！」

ユナンはマイケルにそう叫ぶ。だが、叫ばれたマイケルの方はいつ

もと変わらず、余裕そうな笑顔だ。

マイケルに投げつけられた複数の石は全て、彼には当たらずに、彼の横を通り過ぎる。そして、その石は木々に反射して、逆に猿の魔獣達の頭を撃ち抜いた。魔獣達は金切り声をあげながら、黒い霧となつて消える。

：そんなのありかよ。

常軌を逸した、有り得ない光景を目の前に、ユナン達は言葉を失う。しかし、当の本人は何事も無かったかのように笑顔でこちらへ問いかける。

「どうしたんだい？早く行こうよ。」

ユナン達は動揺しつつも、マイケルの後について行った。

：だが、山の中腹、高い木々が無くなり、岩壁が露出し始めた所で突然変化が訪れる。

暗雲が空に一気に立ち込め、大雨が降り出したのだ。

「もう、最悪！アンタの『幸運』はどこへ行ったのよ！」

「あはは。そんな風に責められても困っちゃうな。君たちがツイていなかったのかもしれない。」

アンナの責め立てる声を、マイケルは苦笑しながらはぐらかす。ユナン達は大雨でびしょ濡れだ。

ここには身を潜める場所もない。一旦戻るしかないか。

そう考えながら、ユナンはマイケルの方をちらりと見る。：流石のマイケルも、雨粒を全部避けたりはしないか。『幸運』の加護つてのはよく分からないな。

「この天気で山を登るのは危険だね。ここは一旦、山を下りましょう。」

アンナの提案に、ユナン達は頷く。だが1人、賛成しない男がいた。「そうか、ではここで君たちとはお別れだね。残念だよ。」

眉をひそめ、演技じみた寂しそうな声で、マイケルはユナン達に別れを告げる。

「本気か!?マイケル!いくら加護の力でも、限界があるだろ。この

雨じゃ、爺さんの言う通り、土砂崩れや落石が多発するぞ！」

ユナンはマイケルを心配して、大雨の中叫ぶ。猿の魔獣の時の彼の力は凄かった。だが彼の加護はあくまでも『幸運』だ。『無敵』ではない。落石は運良く避けられても、土砂崩れなんかは避けようがないではないか。

「僕を心配してくれるのかい。優しいんだね、ユナンは。でも僕は行くよ。：死んだら死んだで、僕は幸福なのさ。」

そう言っつて、大雨の中を進んでいくマイケルの背中を、ユナンは呆然と見つめていた。

：訳が分からない。死ぬのが幸福？俺は1回、文字通り「死んだ」。あの時の「死」の喪失感は今でも身体に染み付いている。あの男はそれを望むというのか？

「おい、ユナン！そんな自殺願望者のことなんて、放っておけ！山を降りるぞ！」

ジークの怒声が聞こえてくる。：俺はマイケルとは違う。この先も生きなくてはならない。

「分かった！」

ユナンがジークにそう叫び、山を降りようとした時だった。地響きと共に、何か大きいものが地面を転がり落ちる音が聞こえてくる。

ユナン達は音のする方を向いて、目を見開いた。大量の岩石が斜面を転がり落ちてくる。その進行方向には、ユナン達がいた。その岩石は人の何倍もある大きさだ。

——当たれば即死は免れない。

ユナン達は猛スピードで転がり落ちてくる岩石を、何とか躲そうとする。

ユナン達の横を、おぞましい音を立ててながら、岩石が転がり落ちていく。

：近くで見て分かった。即死どころの話ではない。当たれば、全身が砕け散り、一瞬のうちに肉片と化すだろう。

：運良く全員、岩を躲すことができたようだ。仲間の生存に、ユナンはほっと胸を撫で下ろす。

だが、それもつかの間。アンナの頭上を大きな影が覆った。

「えっ…」

その影の正体は、どこからか降ってきた岩石のものであった。それがピンポイントに、たまたまアンナの頭上に落ちようとしている。噴火でも無いのに、そんな『不運』、人生に数回ある程度だろう。アンナはそのとんでもない『不運』を目の前に、思わず反応が遅れる。

そのまま彼女は岩石に潰され肉片に…

：ならなかった。だが、その岩石は彼女の代わりに、1人の男の命を容赦なく奪った。ユナンの想像通り、岩石に当たった男の全身は碎け散り、肉片と化する。

——その男とは、アンナを庇ったジークのことであった。

ジークはとっさにアンナに駆け寄り、彼女を突き飛ばしたのだ。——自分を犠牲にして、彼女を救うために。

ジークは岩石に押し潰される間際、アンナに何かを言ったようだった。その内容は、ジークとアンナにしか分からない。

1人の男の命を奪った血塗れの岩石は、そのまま何事も無かったかのように、斜面を転がり落ちていった。その後にはもう、ジークの原型は少しも残されてはいなかった。ただそこには、人の潰れた肉片と碎け散った骨だけが残されていた。

「いやああああああああ!!」

その肉片を前に、アンナは喉が枯れるほど悲痛な叫び声をあげて崩れ去る。彼女のポニーテールはほどけ、その紅の髪には、さらに赤黒い、彼の血痕が染み付いていた。

「約束…したじゃない。アタシたちの『目的』を果たすまで、一緒にいてくれるって。…アタシは、その後もアンタと一緒に…」

アンナは絞り出すような声で、肉片に向かって何かをずっと呟いていた。

大雨の中でもわかる、彼女が大量の涙を流す姿を、ユナン達はただ呆然と見つめていた。

——ユナン達は何も出来なかった。

いや、ジークだけはあの一瞬間の間に、己の持てる最大限の力を振り絞り、身を呈して愛する者の命を守ったのだ。

本当に愛していたかどうかはユナンには分からない。だが、あの人間離れした『速さ』は、それくらいの人を救うためにしか発揮できない。それだけは、確証が持てる。…それくらい、自然は残酷に、「一瞬」で軽々しく人の命なんて簡単に奪ってしまおう。

それは契約者が相手でも変わらない。契約者として、所詮は少し力を持った「人」でしかない。自然にとつては契約者であろうが無かろうが、1匹の無力な虫けらに変わりは無いのだ。歩いていて、たまたま踏んでしまっても気づかない、そんな虫けらに。

ユナン達は、そんな自然の「1歩」に踏み潰された仲間を前に、ただ打ちひしがれていた。涙も逆に流れて来なかった。…実感が湧かなかったからだ。今まで一緒に過ごしてきた仲間の命が、一瞬のうちに奪われてしまった現実に。

しかし、自然は歩むのを止めない。さらなる脅威が、ユナン達に襲いかかった。

地響きではなく、今度は地震がユナン達を襲った。そして次の瞬間、ユナン達は一気に雲と同じ高さにまで到達した。ユナン達が上空に飛ばされたのであろうか。いや、足はしっかりと地面についている。

——高くなつたのは、地面の方だ。

低く、大きな唸り声が辺りに響く。その鳴き声は竜に似ているが、規模が桁違いだ。その唸り声は山全体に響き渡っている。

「…、これって…」

「ぎゃあああああー！」

セーナの驚きの声と、キリマルの悲鳴がユナンの耳に入ってきた。ユナンは2人の目線の先を見る。

山に、とてつもなく太い岩石の「足」のようなものが生えている。そ

してそれには、竜の鱗のような緑の結晶がびっしりとついていた。

その足が大地を1歩、踏みしめた。とてつもない爆音と共に、地面が大きく揺れる。ユナン達はその大きな存在の上に乗っているのだから、あまり揺れは感じないが、下の大地は、地震によって木々が倒れ、大災害となっている。これは…

「古龍…」

ユナンは今日、聞いたばかりの言葉を口にしていった。存在そのものが自然災害となる。この大きな生物は、それを文字通り体現していた。つまり、

「山で眠ってるんじゃないで、山そのものが古龍ってことか!？」

ユナンは思わずそう叫んでいた。規格外の大きさに自分の目を疑う。だが、目の前には「事実」として、その山のような存在が動き、大地震を引き起こしていた。

そんな中、突如古龍が身震いをした。周りから俯瞰して見れば、一見ただの可愛い生き物の動作に見えるかもしれない。だが、それは「生き物」の話だ。こいつは「生き物」の大きさを、とうに超えてしまっている。それによって落とされる、土砂や大量の落石は人の命なんて簡単に奪ってしまう。

前のととは比にならない数の落石がユナン達へ襲いかかる。これは、「運」と「実力」が合わさっても、生き残れるか、分からない。

ユナン達は全身の神経を研ぎ澄まし、回避に専念する。だが、

「アンナ!!」

ユナンがそう呼びかける。だが、アンナはうわの空であった。薄紅の瞳からは光が消え、生きる希望を失っている。もはや、彼女には生きようとする「意志」が無かった。

そのままジークの隣でアンナは同じく落石に潰され、肉片と化した。

…ジークの決死の最期は無駄に終わった。

「運」が良かったのか、なんとかユナン、キリマル、セーナは生き残る。だが、古龍によって振り落とされたのは、岩だけではない。

岩石を躲してほっとしていたキリマルに、低木がぶつかってきた。

「ぐえっ。」

腹パンされたような声をあげて、キリマルは低木と一緒に落ちていく。だが、ユナン達はそんな状況に悲観している場合ではなかった。ユナンとセーナに土砂崩れが襲いかかる。

：それは、「運」でも「実力」でもどうしようもない。人には不可避の自然災害だった。飲まれれば、命はない。生存は絶望的だ。

「ユナン……」

それに気づいたセーナが、震えるような、泣きそうな声でユナンに声をかける。

その瞬間、ユナンの身体は勝手に動いていた。ユナンがどう動こうと、この可愛い少女を助けることは不可能だ。自然はそんなに甘くない。

普通の生物なら、ここで自然の前にひれ伏し、「生」を諦めて、棒立ちになるだろう。だが、人には「心」がある。

ユナンはただ、死ぬ最後の瞬間に、この少女の隣に居たかった。そして、この泣きそうな少女を抱きしめてあげたかったのだ。そのために、ユナンは彼女の元へ駆け寄る。そして、彼女を優しく抱き締めた。

「あっ……」

ふんわりとされていて柔らかく、暖かい感触がしたのは一瞬の出来事だ。その後には、冷たい「死」の感覚が訪れる。

何の慈悲もなく、大きな土砂が小さな2人の人間を飲み込む。その後冷たい何かが頭にぶつかって、ユナンの意識はそこで途切れた。

前回とは違って、その「死」の感覚は一瞬であった。

——自然は平等に、残酷に、そして「一瞬」で生物の命を奪い去る。

「これが古龍か。凄いな、想像以上じゃないか！」

黒のコートを着た男が頬を赤らめて、興奮じみた声で、残酷な自然災害を見つめていた。その薄緑色の瞳には、確かな光が宿っていた。

「だけど……」

そう低く呟いた男の瞳は、いつも通りの光のない姿へと戻る。そん

な男へ向けて、大量の岩石が降り注いでくる。だが、男には「決して」当たらない。まるで、岩石が生きているかのように男を勝手に避けていく。

そんな男に怒るように、自然は次なる刺客を差し向ける。大量の落石や低木を含んだ土砂が、男に降り注ぐ。その土砂の範囲は広大で、普通の人間なら避けようがない。たちまちその土砂に飲みこまれ、自然の一部となってしまうだろう。

——だが、その男は「普通」ではない。男には「避ける」必要が無いのだ。

その土砂が男の前で飛び上がり、宙を舞う。そして、男だけを選けた後、またいつもの土砂の様子へと戻り、流れていった。

「古龍といっても大したことは無いな。僕の方がツイていたみたいだ。」

そうつまらなそうに言って、男は悠々と歩き出す。天候は大雨。だが、男の全身には、一切、水滴がついていない。さつき、気分転換に雨に濡れてみたが、もう乾いてしまった。気分なんて『あの日』から、一向に変わるはずが無いと言うのに。…だが、全く無意味と言うわけでは無かった。

「ユナン。面白い子だったな。『幸運』の僕を心の底から心配してくれたのは、君が初めてだよ。」

男は不敵に笑いながら、そう言った。

だが、残念だ。あの子は今頃、土砂に飲まれ、死んでしまっているに違いない。… 僕の「代わり」に。

運というのは収束するものだ。その法則を破るには、誰かに「不幸」を押し付けるしかない。その押し付ける力が強い者を、人々は「幸運の持ち主」と呼ぶのだ。

…全く馬鹿げている。

「さて、この先に僕を殺してくれる『幸運』はいるのかな？」

男は『幸運』の持ち主を探して世界を彷徨う。はたして、自分より『幸運』な者が、この世に存在するのであろうか。だが、男は長い旅の果て、既にもう、その問いの答えに気がついていた。

緑の古龍の攻撃が男に向かって襲いかかる。それは、自然の怒りそのもの。大地を割る、神の天罰。だがそれすらも、彼の元には届かない。自然の神すらも、彼の『幸運』には勝てないのだ。

——故に、彼は世界を永遠に彷徨い続ける。

第一章 18 『運命の糸』

ユナンはまた、何も無い暗闇の空間に立っていた。そこは前に、大罪の十二宮のニュートンに殺されて、やってきた場所と同じだった。つまり、ユナンはまた死んだのだ。

：前回の時と比べて、かなり落ち着いている。それは幸いにも一瞬で、ユナンの命が奪われたからであろうか。今回の死には、「痛み」というものが無かった。

だが、前回と同じく、死の「喪失感」というものは確かにあった。自分の中の全てが、剥がれ落ちていく様な感覚。あの恐怖は、とても言葉では言い表すことができない。

ユナンの胸の奥から何か溢れ出し、紫色の「光」が生まれる。

——これについて行けば、みんなにまた会える。

前回は、光に導かれるがまま、まるで光に集まる虫のように、ユナンは無意識でその「光」について行ったが、今回は違う。目に光を宿しながら、確かな「意志」を持って、その紫色の「光」について行く。正直、この「光」がなんなのかは自分でもよく分からない。おそらく、自分の加護の力だとは思うのだが：まあ今はそんなことはどうでもいい。使えるものは何でも使う。

ユナンは、ジークを失って、悲しみに打ちひしがれていた、アンナの泣き顔を思い出す。

——もう、あんな顔はさせない。絶対にみんなを救ってみせる。

そう心に誓い、ユナンは紫色の扉を開けた。中から、眩い光が溢れ出す。

「——大罪の十二宮は、契約者、そして女神を殺す事を目的に動いている。実際これまでに、彼らによつて殺された契約者は、数えきれないほどいる。」

場所はマイミアのレストランの中。ユナン達がアルムから、大罪の十二宮についての情報を聞いていた時だった。

あれ？ここは…

てつきりユナンは、またあの老人に警告される場面に戻されると思っていた。だが、ユナンの予想は外れ、今回はアルムの話を書く場面にまで戻っていた。

まあ正直言つて、誤差の範囲だ。これでユナン達への脅威が取り除かれた訳では無い。だが、戻る場面がランダムだと、少し不安も出てくる。

——もし、死の直前に戻されてしまったら、ユナンは、為す術なくなぶり殺しにされてしまうだろう。

「なるほど。いわゆる『リスクル』つてやつか。そうなったら笑えるね。」

女神のそんな声が無処かから、聞こえた気がした。何を言っているのかはよく分からないが、凄く楽しそうな声をしているのだけは分かる。：こつちは笑えねえよ。

「ちよつとーせつかくアンタの為にアルムさんが説明してくれてるのに、ちゃんと聞いてるの?」

完全に自分の世界に入っていたユナンを、アンナはそう言って注意した。アンナの薄紅の瞳は、燃えるように輝いていた。

ユナンは、そんなアンナの瞳をじつと見つめていた。

——やはり、アンナは元気な姿が一番似合っている。

「な、なによ。そんなにアタシのことをじーつと見つめて：アンタ、凄く気持ち悪いわよ?」

「ごめんごめん。やっぱり元気なアンナは素敵だなんて」

「——?いきなり何言ってるの?アンタ、本当に大丈夫?」

「ユナンも、オレのように、女性の口説き方が上手くなってきてるんだな。この短時間で：流石はオレの相棒。」

「そんなんじゃないよ。ちよつとキリマルは黙れ。」

キリマルの茶化しに、ユナンは鬱陶しそうに、そうツツコミを入れる。でも、そんな平和な会話に、ユナンは少なからず癒されていた。実のところ、さつきまで、「死」の恐怖で、ユナンの身体は強ばっていたのだ。キリマルは、普段は頼りないが、本当に辛い時には助けになつてくれる、不思議なやつだ。

「えーと、僕の話、大体は理解してくれたかな？」

完全に蚊帳の外状態だったアルムが、困ったように金色の眉を下げ、苦笑してユナンに問いかける。

「ああ、悪い悪い。大罪の十二宮、気をつけるよ。情報提供ありがとうな！」

「札を言われるほどのことじゃないよ、ユナン。それじゃあ代金はここに置いておくから、僕はこれにて。みんな、またどこかで会えたらその時はよろしくね。」

「またなー。」

「またねー。」

ユナン達はアルムに手を振る。アルムは自分の代金をテーブルに置いて、笑顔をこちらへ向けた後に、レストランを出ていった。

「オレたちも早くこの町から出ようよ。大罪の十二宮なんて：会ったらオレたち殺されちゃうよ。」

「俺もキリマルに賛成だ。連中によって、騎士団が壊滅させられたなんて噂も聞く。俺たちじゃ、まるで歯が立たないだろう。」

「まあそうね。じゃあ店を出たら出発しましょうか。ここから王都に近いのは：山を越えるルートね。」

そして、キリマルの提案をみんなが受け入れ、アンナが山を越えるルートを提示する。前と同じ過程がユナンの目の前で起こる。

やはり、俺の加護の能力は一種の時間旅行のようなものなのだろう。死ぬ前に戻され、死を回避する能力。確かに「生き残る」のに特化した能力だ。

：その場で復活する能力では無くて良かったと、心の底から思う。もし、そんな能力だったら、俺は永遠と、あの謎の力に押し潰され続けただろう。その結末は、想像したくもない。

ユナンは運命を変える力を入れた。だからこそ、ユナンは心が痛い。そうになると、前回、みんなを殺したのは自分であるようなものなのだ。

ユナンが無理やり、山を越えようと訴えなければ、あのイカれた男

と出会うこともなく、みんなは船に乗ることになった。そうすれば、死ぬのは自分だけだったかもしれない。

だから、今回は山を越えるルートを先に潰しておく。だけど、船に乗って自分が死ぬのも御免だ。山へ行くとみんなが死に、船に乗るとユナンが死ぬ。そうなれば、残された選択はただ1つ。町で1日滞在するというルートだ。

「ちよつと待つて欲しい。おそらく、山は越えられない。俺は今朝、ある老人と話をして聞いたんだ。今、あの山は落石や土砂崩れが多発していて、登ることが出来ないらしい。」

「あー。それは危険ね。じゃあ船に乗るルートに変えましょうか。」
ユナンの言葉を聞き、アンナが両手を合わせる仕草をして、そう提案した。だが、その提案は受けられない。ユナンは代わりの案をみんなに向けて提唱する。

「でも、船も危険じゃないのか？アルムの聞いた話だと、今こら辺に大罪の十二宮がいるんだろ？もしそいつと同じ船に乗ってしまったら、俺たちは逃げられなくなってしまう。…アンナ、この町で1番戦力が集まるところは何処だ？」

「えっ？それは多分、王国騎士の駐屯所だと思うけど…」

王国騎士の駐屯所：そんな場所があるのか。それは嬉しい情報だ。王国騎士がいてくれれば、万が一の事態が起こっても、生き残る確率はグツと上がるだろう。

「じゃあ、今日だけはそこで滞在しないか？」

ユナンは何気なく、そう提案する。前回、ジークに不審な点を鋭く指摘された記憶がユナンの頭をよぎる。心の内をジークだけには悟られたくない。あいつは、少し警戒心が他の人より強いのだ。それに助けられることもあるが、今はそれが障害となる。

だが、ユナンの嫌な予感的中してしまう。

「待て。確かに合理的な判断だ。…だがユナンにしては、少し冴えすぎている提案ではないか？それに、『今日だけ』というのも引っかけ。」

ジークが鋭い視線でこちらを睨みつけてくる。完全に疑いの目を

こちらに向けている。

というか頭に関して、俺、馬鹿にされすぎじゃね？…まあ確かに、この短時間で俺が思いつく案では無いのは事実だ。

ならやはり、加護の事を正直に伝えるべきか。…だが前はそれで雲行きが怪しくなった。

魔獣討伐に行く道中で、アンナは加護マニアだとジークが言っていた。2人は色んな加護を知っているからこそ、そんな俺の、『時間遡行』という常識離れした加護の存在を認めてくれないのかもしれない。しかし、何も言わなければ、それこそ船ルート直行だ。

「…俺が『時間遡行』の加護持ちとかって言ったら、みんなは信じるか？」

ユナンは恐る恐る、みんなに向かってそう問いかける。そんなユナンの発言に、ジークとアンナは少し驚いた様子を見せたが、やはり訝しげな表情を浮かべた。

すると、アンナは自分のリュックから、何かを取り出した。中から出てきたのは、古びた厚い本であった。

「そういえば、ユナンは契約者になって少ししか経ってないのよね。ならこれも知らないわね。…これは加護辞典。現在までに確認された全ての加護の能力が、一覧になって載っているの。」

ユナン、セーナ、キリマルは目を見開いて驚く。

そんな辞典がこの世に存在していたなんて…だがなんでそんなものをアンナは持ち歩いてるのだろう。それに、

「加護って、その契約者の願いの事だろ？そんなの無数にあるんだから、参考にならなくね？」

そんなユナンの問いかけに、アンナは首を横に振って否定する。

「それは、少し違うわ。…人が叶える願いなんて、大体同じようなものになるのよ。この辞典にはね、およそ1000年間の加護持ちの記録が保存されているのよ。けれど、その中に『時間遡行』の加護なんてのを持った人は1人もいない。…それに、この辞典の冒頭にも書いてあるわ。アンタも女神に言われたんじゃないの？」

そしてアンナは、普段は見せない真剣な表情でこう言った。

「人が叶えられる願いには、『限界』がある。」

その言葉を聞いて、ユナンは息を飲む。確かに、似たようなことをあの女神は言っていた。俺も1度はその理由で、ある願いを断られたのだ。

——君はその『器』ではない。

今でもその言葉の意味はよく分からない。でもその『器』というのがアンナの言う『限界』なのだとしたら、辻褄も合う。

…だが実際、俺は『時間遡行』のようなものをした。あれが全部夢だったとはとても思えない。このまま船に行けば、俺は確実に死んでしまう。そんな気がするのだ。

「…信じてもらえなくてもいい！だけど今日だけは、俺の提案に乗ってもらえないか？」

ユナンが地面に頭を擦り付ける勢いで、みんなに懇願する。いつにも増して必死なユナンの様子に、アンナ達は戸惑った。

——そんな中、ユナンの願いを1番最初に受け入れたのは、意外な人物であった。

「…まあ、ユナンの策はそんなに悪いようには見えない。特別急いでいる訳でもないしな。俺は別に構わないぞ。」

ジークのその発言につられて、セーナとキリマルも続けて賛同する。

「わたしもユナンを信じるわ。嘘をついているようには見えないもの。」

「オレはまだこの町でゆつくりしたいしなく。」

「おまえら…」

そんなみんなの様子に、ユナンは涙が零れそうになる。この短い間にも、確かに「絆」はユナン達の間で生まれていたのだ。

アンナも、少しため息をついた後、ユナンの方を見た。

「…まあいいわ。ユナンの加護のことは後回しにしましょう。駐屯所はこっちよ。」

そう言ってアンナが先導して歩き出す。ユナンも、みんなの優しさに心の中で感謝しながら、アンナについて行く。

状況は好転。このまま、ニユートンが船に乗ってどこかへ行ってくれば、ユナン達は生き残れる。あの山も、この町とは結構距離がある。でっかい古龍がまた現れても、ユナン達は逃げて、後は王国騎士にでも任せればいいだろう。

ユナン達は王国騎士の駐屯所にたどり着く。想像していたより、かなり小さい。もっと、砦のようなものを想像していた。

民家が4軒入るくらいの敷地が、石の塀によって囲まれている。そして、奥には木製の屋敷が1邸だけ建っていた。手前には藁の人型の人形が、三体設置してあり、どうやら小さな練兵場のようになっているようだった。

「思ったより、小さいんだな。」

「ほんとね。意外と小さくてびっくり。」

「当然よ。ただの待機所だもの。それに、一応塀で囲ってはいるけれど、王国騎士に防衛設備なんて要らないでしょ？…彼ら自身が強いんだから。」

駐屯所を見たユナンとセーナの感想に、アンナがそう説明を加える。

確かにアンナの言う通りだ。好き好んで、契約者にちよつかいをかけようだなんて思うやつは、そうそういないだろう。それも、王国騎士なんて、言わば「戦闘のプロ」だ。そんなやつを命を狙うなんて、それこそ「大罪の十二宮」ぐらいのものだろう。

ユナンがそんな事を考えていたら、中から王国騎士が1人出てきた。

「…何か用？」

屋敷の中から出てきたのは、白色の艶やかな長髪を腰まで伸ばした少女だ。右のサイドの髪には編み込みがあり、先が赤いリボンで結ばれている。赤い眼鏡を掛けていて、水色の瞳が綺麗に輝いている。その幼く可愛い顔たちにはあまり似合わない、大人びた、おとなしめの女性の声に、不思議な印象を覚える。

一見、その少女は戦闘とは全く縁が無いように見える。だが、彼女

は騎士の正装に白色のマントを羽織っていて、王国騎士である事がうかがえた。

「えーと、俺たちほとんど、見習い契約者みたいなもんでさ。ある人から、大罪の十二宮がこちら辺を彷徨ってるって情報を貰ったんだ。今日だけ、ここで匿ってもらえないか？」

ユナンは少女に向かって、そう説明する。だが、少女はほんの少しだけ眉をひそめ、

「…やつらの目撃情報は、大体嘘。契約者なら、自分の身は自分で守って。」

と言って追い払おうとする。そんな彼女の様子にユナンが困っていると、

「まあまあ、シノちゃん。嘘をついてるようには見えないし、それに可愛い新人だぞ？ここは契約者の先輩として、それくらいの頼み、受け入れてやってもいいんじゃない？」

そう言って屋敷の中から出できたのは、金髪のサラツとした髪を首元まで伸ばした男性だ。陽気な声で話しかけてきたその男性は、片耳に緑のピアスをつけていて、服装も騎士の正装をだらしく着ている。端的に言ってチャライ。

「シノって呼んでいいのは団長だけ。…副団長って呼ばないと、次はタルクを斬るから。」

「おお、怖い怖い。サーセン副団長。」

おどけた調子でタルクはシノに向かって、上辺だけの謝罪をする。

…この女の子、副団長なのかよ。人は見かけによらないな。

そして、タルクは再びユナン達の方へと向いた。そして、ウイंकをして、明るくこう言った。

「俺はタルク。よろしくな、新人。」

ユナン達は屋敷の中へ入ってそれぞれ自己紹介をした。中には、シノとタルクを含め、6人の王国騎士がいた。みんな、「白」の王国騎士団所属らしい。

「最近、魔獣の被害がここら辺で多発していてねー。それで俺らの

出番ってわけ。団長は単独で、他の大型魔獣狩り。まあ頭おかしいほど強いからねーあの人。」

タルクがソファに座って、自分達の今の状況をユナン達に説明してくれた。

魔獣の活発化。あの古龍の影響なのだろうか。

「そういうえば、大罪の十二宮の目撃情報が大体偽情報っていうのは、ほんとなのか？」

ユナンはタルクに向かって、さつき気になっていた質問をぶつけた。今回は本当だが、普通はどれくらい、信用できるものなのかは聞いておきたい。その情報は、これから先も役にたつだろう。

「まあ偽っていうよりは『分からない』っていうのが本当だな。確かにあいつらが契約者を襲うのは事実だが、行動に一貫性が見られねえのよ。別に血眼になって契約者を殺すわけじゃない。実際、大罪の十二宮に遭遇したけど、何もされなかったって言う契約者も結構いるしな。」

確かにニユートンも最初は攻撃してこなかった。攻撃してきたのは多分、俺が彼の「逆鱗」に触れたからだ。そう思うと、俺って相当運が無かったんだな。叶えてもらおう願い、『幸運』とかにしておけば良かったかもしれない。

「…でもあいつらに殺られた契約者はたくさんいる。最近だって『黄』の王国騎士が大勢殺られた。敵であることに変わりはない。」

そんなタルクの発言に、シノが険しい顔をしながら、補足を入れる。

「それは俺も同感だ。自分勝手に人を殺すなんて行為、許されるはずがない。」

「まあ、ゆっくりしていけよ。もし大罪の十二宮が現れたとしても、うちの副団長ちゃんがやつつけてくれるから、安心しな。」

「…タルクも少しは働いて。」

タルクの胸を張った宣言に、シノがため息をついた。

やはりドーゼルの時もそうだったが、王国騎士が傍にいるという頼もしさは尋常ではない。自然と、ユナン達の緊張も解けていく。

駐屯所内で滞在している間、ユナン達は自由に過ごしていた。

ユナンはやることも無く、暇になって周りの様子を見る。

アンナとジークは、タルクを含めた5人の王国騎士達と楽しそうに話していた。4人の王国騎士は、男3人、女1人、みんな10代から20代くらいまでの年齢だ。王国騎士に入団するつもりのアンナとジークにとつては、歳の近い先輩のようなものだ。自然と、会話も弾むのだろう。

キリマルは…意外にも1人で屋敷前のミニ練兵場にいた。

ユナンはそんなキリマルを不思議に思い、声をかける。

「どうした？いつもみたいにシノさんにナンパとかしないのか？」

「しないよ。可愛いけど、ナンパしたら多分オレ、死んじやうよ。」

…なんだその妙な勘は。でもそれくらい、シノさんが強いってことなんだろうか。

「他の人とも話さないのか？」

「あの楽しそうな輪の中にいきなり入れる？オレ、こう見えても人見知りなんだよ…」

キリマルの意外な側面を知って驚く。そういえば、女の子関係以外で、キリマルが自分から、初対面の人に話しかけに行く光景を、ユナンはこれまで、1度も見たことが無い。

「ま、まあ俺もあの輪の中に入るのはちよつと無理だわ。」

ユナンは苦笑しながらそう答える。実のところ、ユナンもそこまでコミュニケーション能力が高い方ではない。田舎育ちで、今まで、狭いコミュニケーションの中で生きてきた。

…ただ、ここ最近では生きるのに必死だった。右も左も分からない、そんな場所にいきなり放り出されたのだ。初対面の人相手に緊張するなんて言っているのは、野垂れ死にするだけである。1つ1つの出会いを大切にしていかなければ、未来はないと思っただのだ。

キリマルと話していたユナンは、練兵場の端っこで、屈んで何かをしているセーナを見かけた。

まあ、セーナもあの輪に溶け込むのは無理だろう。でもあんな所で何をしているのか。

「セーナ、そんな所で何してるんだ？」

ユナンの呼び掛けに、セーナは振り返る。セーナは黒い猫を嬉しそうに抱き抱えていた。猫もユナンの呼び掛けに反応して、鳴き声をあげる。

「えつとね、くろすけと遊んでいたの。」

「くろすけ？」

ユナンは首を傾げる。

「あつ。そういえばユナンはその時いなかったわね。アンナ達と朝、町を見て回っていたらね、この子がわたし達について来ちゃったの。ずっとついてくるもんだから、ジークも根負けしちゃって。」

「へえー。」

ユナンは意外だと思った。あのジークが猫を連れていくのを許すなんて、とても思えないからだ。：まあおそらく、アンナにでも強く言われたのだろう。

というか、前々回と前回、俺は1回もくろすけの存在に気づけなかったのはどうしてだろう。

「くろすけ、可愛い名前。」

「うおわー！」

ユナンはいつの間にか、隣にいたシノの存在に驚き、変な声をあげた。：いつの間にも移動したのだろう。気配さえ感じなかった。

シノは、さつきまでとは別人のように優しい顔で、くろすけの頭を撫でている。くろすけも、気持ちよさそうに目を細め、ごろごろと喉を鳴らしていた。

——こういう普通の女の子の顔もするんだな。

さつきまでのシノは、とてつもない重荷を背負っているような、そんな険しい顔をしていた。だが、今の彼女はそんな重荷から少し解放されているような気がした。

「シノさんは、猫が好きなんですか？」

ユナンの問いかけに、シノは白い頬を紅に染め、愛おしそうに、こう答えた。

「好き。だって団長に似ているから。」

彼女はくろすけを見ているが、その瞳にくろすけは映っていない。今ここにはいない、大切な人のことを思い浮かべているのだ。

こんなに愛されてるってことは、白の団長は凄く魅力的な人なんだろうな。

：こんなに人を愛せるのは羨ましい。俺もいつか、こんな風に誰かを想うことが出来るだろうか。そんな相手に近いのはセーナだが、セーナの事は好きというよりかは、どっちかと言うと「守ってあげたい」という感情の方が大きい。

：多分俺よりセーナは強いが。

そんなこんなで、セーナ、シノ、キリマルと一緒に、くろすけと戯れたり、色々していたら時間は過ぎ去って行った。

そして、いつの間にか時刻は夕方になっていった。

「それじゃあ、俺と：ノリスケ、ナユ。見回りに行くぞ！」

「はい。」

「えー、このメンバー男臭いつすよ。先輩。」

タルクに呼びかけられ、それぞれが違った反応をする。

たしか、夕方になったら2組に分かれて行動を開始するとタルクは言っていた。1組が町の付近の魔獣を狩っている間、もう1組は休憩がてら、この駐屯所で待機。その交代を夜中の間、ずっと繰り返すらしい。

魔獣は昼間は身を潜めていて、ほとんど見つからない。そして、夜になると活発に動き出す。さらに、夜だと、彼らの赤く光る目が見やすいため、普通の野生動物との判別もつきやすい。だから、契約者の魔獣退治は、夜に行われることがほとんどだ。

：夕方。今頃、あの客船に大罪の十二宮の1人、ニユートンが乗ろうとしているところであろう。

後の心配は、明日目覚める古龍だけだ。だがそれも、古龍に近寄らなければ良いだけの話だ。

ユナンはセーナ達の顔を見る。みんな、王国騎士の人達とも打ち解けてきて、楽しそうに会話をしていた。そんなみんなの笑顔を見て、

——やつと、「死」から逃れられる。先に進むことができる。

ユナンはそう実感し、自然と頬が緩む。

あの古龍はそこまで足が速そうではない。信用してくれるかどうかは分からないが、一応、シノにでも古龍の出現の未来を伝えてみよう。そして明日、俺たちは船に乗って、町を離れるか…

——そんなふうには、ユナンがこれからのことを考えていた時だった。

大きな音と共に、駐屯所の塀の一部が謎の力によって粉碎する。そして、崩れ去った石によって生じた煙の中から、黒いタキシードを着た男が現れる。

「ど…うして…だ？」

ユナンは、ここに現れるはずがない、現れてはいけない男の登場に、顔を青白くさせた。そこには、既に客船に乗ったはずのニュートンの姿があった。

「いやあごめんごめん。塀を壊すつもりは無かったんだけど…僕はこれでも人見知りだね。入口から堂々と入るのは、少し恥ずかしかったんだ。」

明らかに異常な男の登場に、その場にいた王国騎士6人が一斉に武器を構える。

だが、ニュートンはそんな彼らには目もくれず、紫色の双眸をギラつかせて、真っ直ぐユナンを見つめた。

「やあ、また会ったね。それで、答えは出たかな？」

ニュートンが笑顔で、ユナンに向かってそう語りかける。ニュートンはたまたま出会った風を装っているが、そんなはずはない。こんな偶然、起こるはずが…

だがその時、ユナンは本能で気がついてしまった。運命というものは、そう簡単には変わらない。この先、どれだけ違う行動を繰り返したとしても、この男とは必ず出会ってしまうだろう。それこそ、この運命を歪ませられる程の『幸運』を持っていない限り。

——運命の糸は、簡単には解けない。

第一章19 『悪あがき』

「やあ、また会ったね。それで、答えは出たかな？」

ニユートンが笑顔でユナンに語りかけてくる。それは、客船でニユートンに出会った時に言われた言葉と同じ。ユナンはその回答で、彼の逆鱗に触れ、そして殺された。

もし今が、あの時と同じ状況であったのなら、ユナンは彼を怒らせないように、その「答え」を考えるのに、苦悩したのであろう。

——だが、前とは違い、ユナンの周りには仲間がいる。

さらには、頼もしい王国騎士6人のおまけ付きだ。…まあそっちが主戦力なのだが。

たしかに、ニユートンの「魔法」は、ユナンが今までに見たことのないほど、強力なものだった。

しかし、ニユートンは1人だ。こっちには、「戦闘のプロ」が6人。負ける理由が見当たらない。

「ああ、答えを言ってみようよ。」

「本当かい!?是非、僕に聞かせて欲しい!」

ユナンは、黒い瞳を鋭く光らせ、ドヤ顔で、自信満々にニユートンにそう返す。そんなユナンの様子を見て、ニユートンは恍惚とした様子で、食い気味に、回答の続きを促した。

「答えは簡単。…お前がくたばれば、クズ野郎!」

ユナンはニユートンに向かってそう叫んだ後、舌を出して、幼い子供の挑発のようなポーズをとる。その瞬間、ニユートンの身に纏っていた雰囲気、ガラリと変わる。落ち着いた、理知的な青年から、恐ろしい狂人のオーラが放たれる。そのまま、彼は怒りに自分の身を任せ、謎の力でユナンを押し潰すであろう。

——だが、ニユートンが「魔法」を発動する前に、彼に向かって目にも留まらぬ速さで、大小様々な6枚の風の刃が放たれる。

鋭く、高い耳を貫くような音。こんな風の音を、ユナンは今まで聞いたことがない。それもそのはず。これは、普通の自然界では起こらない現象だからだ。

鋭い風の刃は、頑強な岩ですら、いとも簡単に切り裂いてしまう。人の肉なんて、風の刃にとつては、包丁で豆腐を切るようなもの。逆に柔らかすぎて、切りにくいぐらいだ。

そんな刃が6枚も、ニュートンに向かって放たれた。彼はたちまち、6枚の刃にスライスされ、その生涯を呆気なく終わらせてしまうだろう。

…今までどれほどの契約者が、彼によって文字通り「ミンチ」にされてきたのだろう。スライスされようが、文句は言えまい。

——しかし、彼を切り裂くはずの刃が、途中で減速して、下に曲がる。そして、風の刃は地面と衝突し、そのまま掻き消えてしまった。…まるで、彼に向かう風の勢いが、そのまま地面に吸われたかのように。

…本当は、べつに手を上げなくてもいいってことか。

さっきの防御で、ニュートンが「魔法」を展開した素振りは無かった。つまり、予備動作無しでの、不可視の力の発動。

——それは、戦いにおいては非常に強力なものとなる。

人智を超えた力の前に、ユナン達は息を呑んだ。

「…『白』か。僕の『権限』で相手するには、少し相性が悪いんだよね…。それにこの力、世界の理に逆らうものだから、僕はあまり使いたくないんだけど…」

ニュートンは、意味の分からないことを呟いている。とにかく、ニュートンの「魔法」は、『白』の力と相性が良くないことだけは分かった。

——だが、風の刃は奴には届かなかった。

そして、ニュートンは紫色の瞳を鋭く光らせ、完全な敵意の目をこちらに向けた。

「でも、僕はまだ死ぬわけには行かないんだ。この世の真理を全て解き明かすまで、終われない。…だから嫌でも、この力を使うのさ。」
ニュートンが完全な戦闘体勢に入る。最初の不意打ちは失敗に終わったが、王国騎士の力は「魔法」だけではない。

——鋭い音と共に、王国騎士6人が消えた。

否、消えたように見えただけである。彼らは風の如く、猛烈なスピードで、ニユートンに斬りかかったのだ。

彼らの使う武器の種類は様々だ。シノはレイピア。タルクはサーベル。他4人も、短剣など、ドーゼル達「緑」の騎士団の装備と比べて、「白」の騎士団は軽い武器を扱う人が多い。

だが、武器の重さだけが、威力を決めるのではない。速度も、威力を決める要因の1つなのだ。

——音速にも匹敵する速さで放たれる一撃は、いかなる□であろうと、その「死」から決して逃さない。

だが、男はその一撃を放たれてなお、「死」から逃れたのだ。∴その場から1歩も動かずに。

ニユートンはその一撃に、膝をつくことすら無かった。相変わらず、彼は余裕そうな笑みを浮かべ、悠然とした態度でその場に立つ立っている。

——逆に膝をついたのは、4人の王国騎士の方であった。

ニユートンの周りで、シノとタルク以外の王国騎士4人が、地面に張り付けにされて、動けないでいる。それは、ユナンが前回、ニユートンから受けたものと同じ攻撃であった。

実際に受けてみたら分かる。素人目に見たら、あの攻撃は避けようが無い。経験の浅い、王国騎士4人がその攻撃を受けてしまったのも、仕方がない事だろう。だが、シノとタルクは初見であの攻撃を避けた。これが王国騎士、戦闘のプロなのだ。

正直、ユナン達は戦闘に加わることさえ出来ない。目の前の次元が違う戦いに、ついていけないのだ。無理やり加われば、逆に彼らの足でまといとなってしまう。それくらい、彼らとユナン達とは、大きな「差」があった。

「あれ？何人か逃れたのか。全員張り付けにするつもりだったのに、君たち凄いな。」

ニユートンが眉を少し上げ、意外な表情をして、賞賛の声をあげる。だが、褒められた2人の方は、もちろん険しい顔つきをしている。今のは完全に皮肉だ。

「…回避にしか専念出来なかった。こいつ、強い。」

「うわあ、団長呼びてえ…こんなバケモノ、久しぶりつすわ。」

そう言い捨てて、シノとタルクは再度構えた。そんな2人の様子を見たニュートンは、目を鋭く光らせる。

「君たちと戦う気なんて、本当は無かったんだよ？ いいの？ 次は君たちもこうなっちゃうよ？」

そうニュートンが言った瞬間、4人の王国騎士が悲鳴をあげる。謎の力を強めたのだ。

1度体験したことのあるユナンには分かる。全身を押し潰されるあの痛みは、想像を絶するものである。

「…王国騎士を舐めないで。」

シノが上空に飛び上がり、ニュートンに向かってレイピアで強烈な、突きを放つ。

それは、ただの突きでは無い。レイピアの先端から、白く尖った空気の槍のようなものが発生したのだ。その時に、鋭い音は聞こえなかった。明らかに、風とは異なる現象だ。

「なるほど、衝撃波か。全く、簡単に音速を越えるなんて、プライヤーは恐ろしいね。」

流石のニュートンもその攻撃を前に、その場で突っ立っているわけにもいかず、回避行動をとる。普通ならそんな間に合うはずもないが、ニュートンは、何かに引っ張られるような挙動で、素早く、後方へ大きく下がって回避する。

シノの攻撃によって、ニュートンが元々立っていた地面が大きく爆散する。そして遅れて、原因不明の爆音と共に、白い波紋が着弾点から広がる。

その波紋は豪風を伴い、ニュートンへと襲いかかる。だが、彼はそれを下へと逸らした。

その衝撃波に、ユナン達と、王国騎士5人も巻き込まれたのだが、不思議と何も感じなかった。衝撃波は、ユナン達をすり抜けて、そのまま広がっていったのだ。

前に、ダントラとの戦闘でアンナが言っていたやつか。契約者の

「魔法」は、威力が少し落ちるが、その対象を選べる。普通の自然現象とは全く異なるものなのだ。

「残念。君のとおっておきの奥義、外れちゃったね。」

ニュートンが不敵な笑みを浮かべて、そう挑発する。だが、その後方には、1人の男の姿があった。

「だったら、これも避けてみな！」

タルクがそう叫んで、風を纏ったサーベルで、ニュートンに斬りかかる。だが、

「はあ、言ったよね。次、近づいたら命は無いって。学習能力無さそうだもんね、君。」

タルクに不可視の力が襲いかかる。ニュートンは、彼の賢いとは思えない行動に怒ったのか、その謎の力をさつきよりも強めていた。彼の本気の一撃は、タルクを一瞬で肉片へと変えるだろう。

「タルク!!」

ユナン思わず、叫び声をあげる。

だが、彼の身体は押しつぶされることはなかった。よく見ると、タルクの姿がゆらゆらと揺れている。

「…目に見えるもの全てが真実じゃねーんだよ。賢いお兄さんは、来世でそれを活かしてくれよな！」

なんと、タルクが2人になっている。つまり、さつきのタルクは偽者だったのだ。何かの魔法であろうか。

タルクはその目を鋭く光らせ、風の纏ったサーベルで、敵の死角から、今度こそニュートンの首をはねようとする。

「もちろん、そんなことは知っているさ。だって目に見えない力の存在に気づいたのが、この僕なんだから。」

だが、タルクのサーベルはニュートンの首に届くことは無かった。その前に、タルクのサーベルを握る右手が、地面へと引つ張られる。そのままタルクの体幹も、崩れてしまった。

「なっ!?サーベルが急に重くなりやがった!」

タルクがそう叫ぶ。敵の前で、転んだような姿勢になってしまったタルク。戦闘中に、そうなってしまった☒の末路は一つだけ。

ニュートンが右腕を上げ、振り下ろしたと同時に、タルクに不可視の力が襲いかかる。その力は、人間を張り付けにするだけでは足りない。それは、人の原型を崩壊させる程の強さをもつ。

「おおおおおー」

だが、タルクはなんとかその力に耐えた。地面に、強風を起こし続け、自分の身体を浮かせ続ける。そんなタルクにさらに、ニュートンが力を加えようとした時だった。

猛烈な旋風がニュートンに襲いかかる。だが、そんな強烈な一撃を前にしても、ニュートンは余裕の表情だ。ニュートンは、その旋風を地面へと逃がす。

その一撃を放ったのはシノだ。そして、彼女は続けざまに連撃を浴びせようと、レイピアでニュートンにさみだれ突きを放つ。その一つ一つから、鋭い風の刃が生まれる。

「君も学習しないね。さっきの回避行動を見たら、想像できないかな？」

そうつまらなそうに言ったニュートンは、上空へと飛んだ。いや、浮かんだという表現の方が正しいのかもしれない。そうやって、シノの連撃を躲した後、ニュートンは右腕を横へと振った。

その動きにつられて、シノの身体が、何かに引かれたように横へと吹っ飛ぶ。そして、そのまま石の塀へ、勢い良く衝突した。塀は崩壊し、砂埃が舞う。

タルクと4人の王国騎士は地面に張り付け状態。副団長のシノも強烈な一撃を受けてしまった。

——大罪の十二宮は、ここまで強いのか。

ユナンは正直、大罪の十二宮を少し侮っていた。たしかに強敵ではあるが、同じ人間だ。王国騎士の集団に囲まれてしまったら、命はないだろうと。

だが、もうやつらは人間や契約者といったものを超えた存在だったのだ。今の戦闘を見れば、それがよく分かる。

まさか、大罪の十二宮「1人」で、王国騎士団の1色ぐらい、壊滅させられるんじゃないだろうか。彼らが一齐に本気になれば、本当にこ

の国は滅びるのかもしれない。

『白』とでも意外と戦えるものだな。でも、この戦闘には少し学びがあった。まさか、空気の密度を変えて、光を屈折させるとは…。やはり、この世界には学びがまだまだ満ちている。面白い、次は白の团长とでも戦ってみようじゃないか！」

ニユートンは天を仰ぎ、心底楽しそうにそう叫ぶ。

「——契約の名のもとに。」

——次の瞬間、音速を超えた衝撃波が、ニユートンの足を切り裂いた。

ニユートンの足の切り傷から、真っ赤な血が流れる。

ユナンは初めて、彼がまともなダメージを受けた事に驚く。それは、ニユートンも同じだった。その攻撃が飛んできた方向は、さつきニユートンが、シノを飛ばした方向と同じであった。

「…完全に攻撃を捌いたつもりだったんだが、君、途中で威力が増すように工夫をしたね？感情的になった方が頭が冴えるなんて、不思議な子だね。」

ニユートンが、真剣な眼差しで、真っ直ぐ白髪の少女を見つめる。それは、吹き飛ばされたはずのシノの姿であった。

シノの姿が大きく変わっている。その服装は、女性のキモノの様なものによく似ている。左右の袖口幅はとも広く、白い袖が風に吹かれ、ゆらゆらと揺れている。下の紺のハカマは、太ももの位置までしか伸びていなくて、スカートのようになっている。膝の少し上まで伸びた黒いタイツには、白の縦線が何本も入っている。白い鳥の羽がついた黒いブーツは、履けば、空を軽々と飛べそうである。

そして、彼女の武器はレイピアから、風の双剣へと変わっていた。真ん中には鷹の紋章が描かれており、鏢の左右は鳥の羽のような形になっていた。

彼女は旋風を全身に纏っており、美しい白の長髪は、その風によって、凛々しくなびいていた。

——その姿は神々しく、まさに風の化身そのものであった。

「…団長の事を傷つける人は、私が絶対に許さない。」

シノが静かに、だが燃えるような怒りを込めた声でそう呟いた。

次の瞬間、シノは後方に暴風を巻き起こし、その姿を消す。そして、彼女は一瞬でニュートンの頭上に現れ、回転しながら、双剣で攻撃をした。

「なるほど、風の双剣か。質量がないから、さっきのようにはいかない。これは、切り札をこちらでも使うしか無いようだね。」

すると、ニュートンの周りを、紫色の球体が覆う。シノは構わず、その球体へ攻撃するが、何故か逆方向へ吹っ飛ばされた。

「!？」

「これは僕の『発見』じゃないんだけどね。でも僕は学ぶことが大好きなんだ。彼に教えて貰ったおかげで、少しだけ力を借りることができようになったんだ。」

ニュートンが少し嬉しそうにそう呟く。ニュートンが、誰のことを思い浮かべているのかは、本人にしか分からない。

「彼」というのは同じ大罪の十二宮の仲間であろうか。たしかに、彼ら同士、協力していたとしても不思議ではない。…力を共有できるのか？

——そうになると、かなり厄介である。

だが、シノは諦めない。吹っ飛ばされても、またあの球体に近づき、双剣の乱舞をくらわす。今度は、風を後方に噴出させることで、身体が吹っ飛ばないようにしているようだ。

「でも、この力は長く維持できなくてね。…そろそろ終わりにしようか。」

そうニュートンが声を低くして呟いた瞬間、ニュートンの瞳が光る。すると、シノの身体を中心に、紫色の光の点が生まれた。

「えっ？」

シノがそう呟いた瞬間、彼女の身体は、勢い良く地面に叩きつけられた。

——だが、それだけでは終わらなかった。

ニュートンの腕の動きに合わせて、シノの身体が空に上がった。そして、また地面に勢い良く叩きつけられる。その動きをニュートンは

繰り返す。

単純な攻撃だが、その威力は絶大。地面という大きな存在と、小さな少女の身体が、何度もぶつかり合う。そのぶつかり合いにどっちが勝利するかなんて、誰の目から見ても、明らかであった。

地面に叩きつけられるごとに、少女の身体は壊れていく。腕が、足が反対方向に曲がる。衝突する度に、そこから血しぶきが飛び出し、地面に真つ赤な花が咲く。

少女は何回叩きつけられたであろうか。その回数も分からなくなつた頃、ニュートンがようやくその攻撃を止めた。

シノの白いキモノ、美しい白い長髪は真つ赤に染まっていた。彼女は全身血まみれで、もはや人の原型さえ、留めてはいなかった。何も知らない人が、彼女を見ても、人間とは認識できないほど、酷い状態である。

「僕もこんなことはしたく無かつたんだよ？」

ニュートンが、わざとらしい悲しそうな声でそう言った。

残された5人の王国騎士達はその光景を見て、不可視の力に押し潰されながらも、必死に声をあげる。

「ころ…してやる。」

そんな彼らには目もくれず、ニュートンは笑顔でユナンの方へと向き直つた。まるで、さっきまでの出来事を忘れてしまったかのよう

に。「少し気分が良いから、君に最後のチャンスをあげようじゃないか。

…こうなりたくなかったら、必死に考えて欲しいな。」

そう低く言つたニュートンの背後、王国騎士達が、一斉に押し潰され、血しぶきを激しくあげた。

アンナ達はその光景を前に、恐怖で息をすることすら出来なかつた。圧倒的な力、それによる理不尽な殺戮の恐怖の前に、人は何もすることが出来なくなる。

だが、ユナンはその恐怖を1回経験している。ユナンはカタナを両手で握りながら、静かにニュートンへと近づいていく。

「…ただの悪あがきでしかない。それは、賢くない判断だ。本当に、

残念だよ。」

ニユートンはそんなユナンの様子に、残念そうにそう呟いて、やれやれと首を横に振った。

——悪あがき、たしかにそうだ。

ユナンに勝ち目はない。だが、この感情を、目の前にいる最低なクズにぶつけないと、気が済まないのだ。1回でいい、この男を切り刻みたい。こんな、

「人のことをゴミのような目で見てくるやつに、ろくな奴はいねえんだよ！」

ユナンがそう叫びながら、ニユートンに斬りかかる。これが、ユナンの心からの答えだ。こんなやつに認めて貰いたいだなんて、思うはずがない。

ユナンの身体を他の人には見えない、紫色の光が覆う。その光は、前回よりも強くなっていった。周りの全てが遅く感じる。ユナンもこの「力」の存在に、気づき始めていた。

一時的な感情の高ぶり、人の身体能力が向上することはよくある。だが、ここまで急に、人の足が速くなることなんてありえない。それは、本来、人にはない「力」が作用している証拠だ。

「——!?急にスピードが上がった。なるほど、でもまだまだその『力』は弱いね。僕は、君の成長が見たかったよ……」

だが、急激に足が速くなっただけで、ユナンの攻撃はニユートンには届かない。音速を越えたスピードの攻撃できえ、奴は対処できたのだ。それに比べるとだいぶ遅いこの攻撃なんて、届くわけがない。

ニユートンは少し後方へ下がり、腕をあげた。その瞬間、ユナンは不可視の力によって、地面と衝突する。そのまま、ユナンの骨は粉々に砕け散った。

しかし、それと同時に、ニユートンの片足も謎の力によって切り飛ばされていた。

「あれ?…これは…見えない風の刃の罠か。凄いなー!」

ニユートンは、片足を切り飛ばされたにも関わらず、何故か嬉しうである。そんなニユートンの様子を見て、金髪のチャラ男は忌々し

そうに呟いた。

「なん…で、嬉しそうなんだよ。くたばりやがれ…バケモノめ。团长…あとはたのみましたよ…」

愛する人の為に戦った少女の攻撃は、ニユートンの足を少し傷つけただけであった。だが、タルクの残した一撃は、奇しくも、今までで1番ニユートンに刺さったのであった。

タルクはここにはいない、「白」の団長に全てを託し、息絶えた。

「この傷は…少しヤバいかな。さてと、気に入らない君だけは殺して、僕はもう逃げるとするよ。」

そんな発言に、ユナンは朦朧とする意識の中で、不思議と安堵していた。この世界では、セーナ達は死なずに済むからだ。…さて、次はどうやってこいつに立ち向かおうか。

——ユナンは死の間際、「次」の世界の事を考えていたのだ。

ニユートンが腕を振り下ろした瞬間、ユナンの身体は、その力に耐えきれずに飛び散った。

「ユナン!! どうして…わたしを置いていつちやうの?」

そんなセーナの悲痛の叫びを、ユナンは知らない。彼は既に、次の世界へと旅立ってしまったからだ。

「人智を超えた力は、人を狂わす…か。」

——女神がそう面白そうに言った声も、ユナンには届かない。

第一章20 『前を見る』

ユナンは暗闇の空間に、ただ1人立っていた。もう、この状況になるのも3回目だ。意味不明な現象ではあるが、それについて考えるのは後だ。

ニユートンの戦闘力は、ユナンの想像を遥かに超えていた。あの男は、シノ達、『白』の王国騎士6人の猛攻さえ、易々と対処していた。戦いの結果、ニユートンは片足を切り飛ばされたが、それは強大すぎる力を持ったが為の、「油断」であろう。彼らでは、ニユートンの命を奪うことは難しい。

ユナンには、無惨に殺された王国騎士6人の姿が、今も頭に焼き付いていた。

：ユナンと関わった人々は、みんな揃って悲しい結末を辿る。軽はずみに人と関わるのは避けるべきなのか。だが、ユナン1人で何が出来る？

そんなことを考えていたら、いつの間にかユナンは紫色の扉の前に辿り着いていた。

次の世界が始まるうとしている。今も「死」の喪失感と、仲間の無惨な死をまた見ることになるかもしれないという恐怖で身体が震えている。しかし、立ち止まるわけにはいかない。

「俺にはまだ、やり残した事が沢山あるんだ。」

そう自分を勇気づけ、震える手でユナンは扉を開けた。

——眩い光が、新たな世界を映し出す。

「——大罪の十二宮は、契約者、そして女神を殺す事を目的に動いている。実際これまでに、彼らによって殺された契約者は、数えきれないほどいる。」

場所はマイミアのレストランの中。ユナン達がアルムから、大罪の十二宮についての情報を聞いていた時だった。

：前回の時と全く同じ場面に戻された。とりあえず、ニユートンが目の前にいる場面とかで復活せずに済んだことに、ユナンは安堵す

る。

だが、それと同時にユナンの頭をある考えがよぎる。

——ニユートンと初めて会う前に戻されたら、自分の存在を知られることもなくなり、彼との戦闘を回避できるのではないか？

もちろんあの男を許したわけじゃない。今でも出来るなら、すぐに彼に斬りかかりたいぐらいだ。しかし、ユナンには今、その「力」が無い。斬りかかっても、犬死するだけである。

…ただ、自殺なんてするほど、ユナンは腐ってはいない。自ら自分の命を投げ出すなんて、愚者のする行為である。

本当にどうしようも無くなった時の最終手段として、ユナンはその考えを頭の隅に押し込む。

ならやはり、彼の問いに見事正解し、ニユートンの機嫌を損ねないようにするのが一番か…

「ちよつと…せっかくアンタの為にアルムさんが説明してくれてるのに、ちゃんと聞いてるの？」

前回と同じく、完全に自分の世界に入っていたユナンを、アンナはそう言って注意した。アンナの薄紅の瞳は、燃えるように輝いていた。

…ここまで同じだと、運命を本当に変えられるのか、心配になってくる。

「何よ、その嫌な目つきは。人の話をしっかり聞かない人は、嫌われるわよ。」

アンナが反応の薄いユナンの様子に、さらに怒りを募らせる。さすがの自分の酷い態度にユナンも反省し、苦笑しながらアンナに謝る。

「ああ、悪い悪い。話はちゃんと聞いてたよ。これからは、態度も気をつける。」

「…なら別にいいけど。」

そんなユナンの反省する様子を見て、アンナの怒りはようやく収まったようであった。

「えっと、ユナン。もう一度話そうか？」

話が落ち着いたタイミングを見計らって、アルムは、苦笑してユナ

ンにそう問いかける。

「大丈夫だ、アルム。大罪の十二宮の話だろ？あいつら、おつかないもんな。情報ありがとう。俺らも気をつけるとするよ。」

「…まるで、大罪の十二宮と実際に会ったことのあるような発言だね。」

不可解なユナンの言動に、違和感を感じたアルムが指摘を入れる。みんなが、訝しそうな目でユナンを見つめてくる。

：マズイ、口を滑らした。色々説明が面倒臭い状況になつてるから、あまりみんなに怪しまれないようにしたかったのだが…。

「いや、言い間違えたただけだよ。本当は、おっかな『そう』って言いかけたんだ。悪い悪い。」

ユナンは額に冷や汗をかきながら、苦しい言い訳をする。アルムは燃えるような蒼炎の双眸で、じつとこちらを見つめてきたが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「いや、釘を刺すような真似をして、こちらこそすまなかつた。僕は用事があるから、もう行かせてもらうよ。代金はテーブルに置いておくから、一緒に頼むね。それじゃあみんな、またどこかで会えたら、その時はよろしくね。」

「またな。」

「またね。」

アルムの別れのあいさつに、ユナン達も手を振って応じた。

ユナンはアルムの立った姿を眺める。

前にも1度見たが、アルムの腰にある剣には、とても豪華な金の装飾が施されている。鍔の真ん中には、十字架の紋章。左右には、手を組んで祈っている人の姿が浮かび上がっている。その2人は鍔の中心を向いており、まるで、真ん中の十字架に向かって祈っているようであった。

アルムもただの一般人には見えない。その格好から、身分の高そうな人のようにも見えるが、自分は旅人だと本人は言っていたし、よく分からないな。

ただ、シノのような強者の風格も、彼からは漂ってこない。…おそ

らくニュートンには勝てないだろう。彼を巻き込むわけにはいかない。

アルムは、笑顔でこちらに振り返り、手を振ったあとに店を出ていった。

「オレたちも早くこの町から出ようよ。大罪の十二宮なんて：会ったらオレたち殺されちゃうよ！」

「俺もキリマルに賛成だ。連中によつて、騎士団が壊滅させられたなんて噂も聞く。俺たちじゃ、まるで歯が立たないだろう。」

「まあそうね。じゃあ店を出たら出発しましょうか。ここから王都に近いのは：山を越えるルートね。」

そして、キリマルの提案をみんなが受け入れ、アンナが山を越えるルートを提示する。

この光景も3回目。いい加減、見飽きてきた。もちろん、山を越えるルートは老人に警告され、無駄足になるので、予め消しておく。

ユナンは前回と全く同じように、山が危険なことをみんなに伝えた。

「あー。それは危険ね。じゃあ船に乗るルートに変えましょうか。」
アンナが手を合わせる仕草をして、そうみんなに提案する。

王都近くの港へ向かう客船は、今日はあと、『1隻』しか出ない。それは、ユナンがニュートンに初めて殺された世界線で、船の切符を買う時に知った情報だ。つまり、早めの客船に乗るなんてことは出来ないのだ。

——あの船で、必ずユナンとニュートンはまた出会う。

もつとも、早めに出航する客船があったとして、それにユナン達が乗れたとしても、ユナンとニュートンは出会ったかもしれないが：。それが「運命」つてやつだ。前回、ユナンはそれを思い知らされた。そしてユナン達は船の切符を買いに行くため、アンナに連れられて、レストランを出た。みんなは船着き場に向かって歩き出す。その間、ユナンはずっとニュートンの問いの「答え」に悩んでいた。

——答えはまだ出ていない。

金髪の爽やかな青年は、何かを考える仕草をしながら、町の中を歩いていった。

さつき会ったユナンという男。明らかに大罪の十二宮について何か知っているようであった。…だが彼から、あの『狂人』のオーラは感じない。それに、周りに仲間もいた。彼が大罪の十二宮という可能性は限りなく低いだろう。

大罪の十二宮の厄介さは、その「強さ」だけではない。彼らは皆、狂人であるにも関わらず、一般人に溶け込むのが上手い。…そう簡単には見つけられないのだ。

そして、何よりも彼らは——なのだ。キリがない。

あの男は確実に何かを知っている。…何の手がかりも得られないよりはマシか。彼には悪いが、この仕事を終わらせたら、少し尾行をさせてもらうことにしよう。

さつき念の為、彼に「光」の印をつけたのだ。探せば、すぐに彼を見つけられるだろう。

「これも『世界』を守るためだ。」

そう呟いて、青年は急ぎ足で仕事にかかった。

前回の記憶を整理していたユナンは、ある事に気がついて、周りをキョロキョロし始める。

「——？ユナンは何してるの？」

セーナがそんなユナンの様子を不思議に思ったのか、声をかけてきた。可愛い目で真っ直ぐ見つめられ、ユナンは思わず、恥ずかしそうに目を逸らす。

「え、えーと、猫の鳴き声が聞こえた気がしてさ。その声の正体を探してたんだよ。」

「——？そんな声聞こえなかったけど。でもそれならあの子かも。くろすけー？」

セーナがそう呼ぶと、町の民家の植木鉢の後ろから、黒い子猫が出てきた。…くろすけだ。そして、くろすけはセーナの膨らんだ胸に飛

びついて、彼女に擦り寄った。

「きやつ。くすぐったいわ。もう。」

セーナがそんなくろすけに、嬉しそうに声をかける。子猫と少女が戯れている光景は、微笑ましい。

あんな所にいたのか。そりやわかんねえわ。猫の隠密能力つてすげえな。…そして羨ましいな。

ユナンはそんな事を心の中で呟いた。

そして、ジークとアンナがくろすけの姿に反応した。

「ああ。そういえばこんな猫いたな。大罪の十二宮の事で頭がいつぱいで、すっかり忘れていた。」

「アタシも完全に忘れちゃってた。この猫はね、朝、私たちにずっとついてきたの。それで凄くこの子が可愛いもんだから、名前を付けてあげたのよ。」

ジークがそんな感想をこぼし、アンナがユナンとキリマルに、その猫について説明してくれた。

2人に完全に忘れ去られていた事を知ったくろすけは、だいぶシヨックを受けたような顔をしていた。

…そんなにシヨックなら、普通に俺たちのすぐ後ろに着いてきたらいいのにな。変な猫だ。

「あつ、やつとちよつと元気そうな顔に戻った。」

ユナンの様子を見て、セーナが少しからかいかいも含んだ、優しい声でそうユナンに言ってきた。セーナに、いつもとは違う自分の様子を見破られ、ユナンはドキツとする。自分は正常な「フリ」が出来ていると思っていたからだ。

「お、俺、そんな酷い顔してたか?」

「ふふん。わたしを甘く見ないで。みんなの様子の变化くらい、わかっちゃうんだから。」

セーナが、可愛く胸を張って、自慢げにそう言った。

その会話を聞いて、他のみんなもユナンに心配の声をあげる。

「そうよ。アンタ、アルムの話聞いてから様子が変よ?大丈夫?」
「大罪の十二宮が恐ろしいのは俺も同じだ。心配なら、相談に乗る

ぞ。」

「ユナン大丈夫？オレと一緒に、女の子をお茶会に誘いにでも行く？」

そんなみんなの温かい言葉に、ユナンは本当に泣きそうになる。だが、グツとこらえる。まだ泣いてなんかいられない。

みんな、本当に良い人達なのだ。：だからこそ、ユナンは今回の事を仲間に相談することはできない。

——みんなに、あの「死」の恐怖を体験して欲しくないから。

「ありがとな。でもその言葉だけで、十分だぜ！」

ユナンは元気そうにみんなにそう告げる。だが、彼の頭の中にはずっとこの言葉が回っていた。

「どうして、リングは下に落ちるのか？」

そして時刻は夕方になる。あの客船が船着き場に到着した。その船が、これから向かう先は「死」か「未来」か。それは、ユナンの「答え」によって決まる。

「俺、船を乗るの、初めてなんだよなあ！」

無理やり笑顔を作って、元気そうにユナンは言った。心臓が恐怖によつて悲鳴をあげている。今まで3回、ユナンは死んだが、別に死に慣れたわけでは無い。怖いものは怖いのだ。

そんなユナンの顔を、セーナはじつと見つめている。だが、可愛い女の子に見つめられているにも関わらず、彼は全くその視線に気が付かない。これから起きる出来事に、頭を全て支配されていたからだ。

そうして、ユナン達は船に乗り、客船が動き出した。

「はあ。今日は色々あつて疲れた〜。オレは客室で寝てくるよー。」
キリマルがだるそうにそう言つて、自分の部屋へ入つていく。みんなも、すっかり疲れ切つている様子だ。そのままみんな、自分の客室に入つて身体を休ませるだろう。

——それでいい。

「それじゃあ、船は明日の朝到着だから。一旦解散ね。」

アンナがそう言って、みんながそれぞれ自分の部屋に入っていく。だが、セーナとユナンだけはその場に留まっていた。セーナは真剣な表情で、ユナンを見つめてくる。

「どうした？セーナ。そんなに見つめられると、男は勘違いしてしまふから、気をつけるんだぞ。」

そんなセーナの様子をユナンは茶化した。だが、セーナは相変わらずじつとこちらを見つめている。

そして口を開いた。彼女の美しい声には、人の心を震わせるような力がある。

「今日のユナン、なんか変。何かあるなら、わたしに話してみて。」

セーナの力強い発言に、ユナンは一瞬心が揺らぐ。だが、ユナンは彼女が押し潰される姿を想像してしまった。

：セーナには悪いが、『今回』は俺一人でやってみる。

「言っただろう？俺は船に乗るのが初めてなんだ。あー、マジで興奮してきたわ。ちよつと甲板にでも出てみるか！」

そう叫んで、ユナンはその場から逃げるように立ち去ってしまう。

セーナはそんなユナンに手を伸ばし、声をかけようとするが、それよりも、ユナンの逃げるスピードの方が速かった。

セーナは、逃げるように去っていく彼の後ろ姿をじつと見ていた。やっぱリレストランでアルムさんの話を聞いてから、ユナンの様子がちよつと変だ。何か隠しているのかも。わたしだけじゃダメなら

：

そう思つて、セーナはアンナのいる部屋の前に立つ。

その行動は、今までのセーナからすれば考えられないものであった。彼女は何回、こうやって「人間」に助けを求めて、そして裏切られたか分らない。いつしか、彼女は「人間」を一切頼らなくなった。そんな彼女が今、「人間」を、仲間を、頼ろうとしていたのであった。

——1人の大切な仲間の命を救うために。

「アンナ、ちよつといいい？」

少女の銀鈴のような声音が、客船の廊下に響いた。

ユナンは重い足取りで甲板に出た。ずっと心臓の鼓動が鳴り止まない。人間はトラウマを思い出し、フィードバックしてしまう事があるらしい。つまり、身体が必死に警告しているのだ。

——そこに行つてはいけないと。

そんなことはユナン自身もよく分かっている。だがどの道、自分から行かなくても、奴はユナンに会いにくるだろう。まるで運命によって引かれたように。

そうなれば、「死」に晒されるのは、ユナンだけでは済まない。だからこそ、こうして震える足をなんとか動かし、ここにやって来たのだ。

波のさざめきも、心臓の音が邪魔して、あまりよく聞こえない。

だが、目の前に広がる景色はよく見える。

地平線に沈む太陽が、赤く光輝いている。海の反射によって、その光は拡散され、神秘的な光景がそこには広がっていた。

その赤すぎる光は、これからのユナンの未来を指し示しているかのように感じる。：不可視の力によって押し潰され、血塗れになるユナンの未来を。

これだけ美しい、海一面に広がる夕焼けの景色を前にしても、ユナンの心は落ち着かない。

でもユナンはずっと夕焼けを眺めていた。この景色を目に焼き付けて、何事もなく明日を迎えたかったのだ。

——そんな事を運命が許してくれるはずがない。

ユナンは後ろから声をかけられた。低く、理知的な、そして密かな狂気を含んだ男の声であった。

「やあ、また会ったね。それで、答えは出たのかな？」

ユナンは振り向きたくなかった。あんな狂人を見るよりも、この目の前の素晴らしい景色を見た方がよっぽど有意義だ。：しかし、ユナンが振り向かなければ、狂人の機嫌はたちまち悪くなってしまいうだろう。

ユナンは振り返り、そして、様々な激情を含んだ目でニュートンを睨みつけた。

「あれ？なんか2回目なのに、僕は随分、君に恨まれているようだ

ね。初対面での印象は、そこまで悪くなかったと思うんだけど。」

：初対面でも相当変人に見えたが、本人はそれに気づいていないようだった。だが、ニュートンはそんな感想を自分には求めていない。求めるのは「答え」だけだ。

「…答えが聞きたいんだろ？整理しながら、少しづつでもいいか？」
ユナンは慎重に、そう問いかける。じつと狂人の様子を観察する。
ユナンの発言に、狂人は嬉しそうな表情だ。

「もちろん、いいともーむしろ最初からいきなり答えを言うなんて無粋な真似、僕はあんまり好きじゃないんだ。論理的に、少しずつ証明していき、答えを導く。…君とは、気が合いそうだ！」

俺は全くそうは思わない…。だが、どうやらそういう答え方がニュートンの好みらしい。これは、『生存』に1歩近づいた。そして、ユナンは今までの経験を思い出しながら、少しずつ答えを導き出していく。

「リングゴが落ちる、それは世界中で変わることの無い現象…」
そう呟いて、ユナンはあの戦闘を思い出す。もちろん、思い出したくはない。だが、これも生きるためだ。

タルクのサーベルが下に、そしてシノが下に落ちていくあの光景は、リングゴが下に落ちていく光景とよく似ている。

——つまり、ニュートンは自分の「力」の正体をユナンに答えて欲しいのだ。

「リングゴだけじゃなく、他のものだってみんな、同じく下に落ちる。つまり、どんなものにも、下に落ちる自然現象が働いているってことか？」

「いい感じだよ。今の君は、理知的で素晴らしい顔をしているよ。」
シノやダントラ、その他の契約者の魔法も、「自然現象」の起り得る可能性を引き出しているのだ。ユナンだって、寒い冬、村の人たちと薪を組んで、火をおこした事がある。同じように、アンナも旅の途中、魔法で、火を木の枝につけていた。過程は違えど、あの現象に、ほとんど違いはない。

——つまり、ニュートンの有り得ない「魔法」も世界で起こり得る

現象の1つ。

日常は、世界の真理を解く鍵で満ち溢れている。

ユナンはニュートンのその言葉を思い出す。

——もしかしたら、ニュートンの「力」は、常に身の回りで起こっている現象を強めたものなのかもしれない。

だからこそ、俺たちはそれに気づかない。それを当然の事と思っているからだ。

「つまり、全てのものには常に、何らかの『力』が働いてるってことか!？」

「ブラボー。そこまで言ってくれたなら、もう正解にしといてあげるよ。『力』の名前なんてどうでもいいからね。実験して、証明して、それを見た人々が勝手に名前をつけるだけだ。」

ユナンの「答え」に、ニュートンは手を叩いて賞賛する。

…どうやら満足してくれたみたいだ。俺はこの「死」の難問に立ち向かい、「生」を手にしたのだ。

ユナンの「答え」を聞いて、ニュートンはとても上機嫌だ。殺意が微塵も感じられない狂人の様子を見て、ユナンも少し気が抜ける。：ニュートンから『力』の正体について、もう少し詳しく聞いてもいいのかもしれない。

——いつか、この男を殺すために。

「その『力』ってやつをお前は扱えるんだろ？マジで凄い『魔法』だもんな。俺もちよつと興味があるんだ。」

ユナンはニュートンの『力』に、興味を示すような発言をした。ユナンの経験では、そういう「学ぶ」姿勢を、この男は快く思うはずである。ユナンには、この男について、だんだんと理解してきた自信があったのだ。

——だが、狂人を理解するなど、不可能に近いのである。

『魔法』?…ふざけるなよ。僕の『発見』を、そんなまがい物と一緒にするな!!」

ニュートンは殺意全開のオーラを放ち、ユナンに向かってそう叫ぶ。ニュートンが右腕をあげた。

ユナンはその瞬間、攻撃が来ることを直感的に感じ、後方へ大きく下がった。

ユナンの元々立っていた場所に、空間の歪みが発生する。

「…避けた。この『力』に気づいたのなら当然か。だからこそ、本当に惜しいよ。君のような人材が、僕の『力』を、よりにもよってあの『魔法』と同じものとして呼ぶなんて。」

なるほど、ユナンがニュートンの『力』のことを『魔法』呼びしたことが気に食わなかったらしい。

人生最大の失言に、ユナンは後悔する。欲張らずに、おとなしくしておくべきだった。そうすれば、ユナンは「生」を手放さずに済んだのに。

——次の世界では気をつけよう。「答え」が分かったのなら、希望はまだある。

「まあいい。避けられないほど、範囲を広げればいいだけの話だ。」
ニュートンが冷たくそう言い放ち、再度右腕を上げる。ユナンは、自分の周囲に広範囲の空間の歪みが発生したのが分かった。

ユナンはどうやら、『力』の正体に近づいたことで、彼の攻撃を見れるようになったらしい。

ユナンは自分のできる限りの力を振り絞って、その範囲から逃れようとする。だが、空間の歪みは広く、逃れることは出来なかった。ユナンは彼の力によって、甲板に張り付けにされた。

その攻撃を受けて、ユナンはまた新たな「学び」を得る。

——謎の力で押し潰されたのではない。自らが、下に引かれて潰されに行っただのだ。…まるで、木から落ちるリングのように。

ニュートンが再度力を加え、ユナンを肉片に変えようとする。そして、ユナンは「死」を受け入れた。

——そんな時だった。

「…誰か知らないけど、ユナンを痛めつけないで。わたし達の、大切な仲間なの。」

美しく、透き通った女性の声が辺りに響き渡った。その声は、聞かせる者全員の心を震わせる。だが、狂人にその声は届かない。まるで何事

も無かったかのように、ユナンへ攻撃をしようとする。だが次の瞬間、

「メーザー！」

「えいやー！」

「はっ！」

「ひいー！」

燃えさかる火球、大量の氷の礫、氷の矢、小さな青い電撃がニュートンへと一斉に放たれる。

だが、この狂人にはそんな攻撃、一切通用しない。ニュートンはつまらなそうにため息をついて、その攻撃を下へと逸らす。

常軌を逸した謎の力を前に、セーナ達は言葉を失う。

しかし、彼らはすぐに正気を取り戻し、仲間を救うため、男に攻撃を放つ。：それは無意味な行いなのだ。

——もういい、やめてくれ。俺らではこいつに歯が立たないんだ。：俺なんか放って、みんな逃げてくれ。

ユナンは心の中で必死にそう叫んだ。彼の力によって張り付けにされ、息もほとんどできない状況だ。動けず、声も出せない、絶望的である。

「契約者、つまらない存在だな。邪魔しなければ執拗に殺しはしないのに、何故戦うのか。僕には本当に理解ができないよ……」

：お前には決して理解なんてできないだろう。理解できるなら、あんな「殺戮」なんて、絶対にしない。そもそも、彼は人の感情を「学ぼう」とすらしていない。

ニュートンが腕を上げる。その瞬間、セーナ達の周辺に、空間の歪みが生じる。：その事にセーナ達は気づいていない。

——世界の真理に気づけない者の末路はたった一つ。

「——!?!」

セーナ達はそのまま、彼の力によって、甲板に引かれて、張り付けにされる。いや、少し力が強い。

「きやああああー！」

「ああああああー！」

仲間の悲鳴がユナンの耳の中で響く。ユナンは目の前の現実を直視出来ずに、目をつぶった。

やめてくれ、もうやめてくれ！俺が悪かった！俺の失言がこんな事態を招いたんだ。殺すなら、俺だけでいいだろ！なんで仲間を傷つける。お前にとつて脅威でも何でもないだろ！気に食わないなら、まず俺から殺れ！俺を殺してくれ！

…なあ女神。見ているんだろ？俺たちを助けてくれよ…

——人はどうしようも無くなった時、最後は神に『祈る』のだ。

そんなユナンの様子を見たニュートンが、さらに怒りを爆発させる。

「…何故君は、目をつぶっているんだい？逆だよ。この失敗の現実を、その目で『見』ないと。何かを変えたいなら、目をつぶって神に『祈る』のでは無く、目を開けて、前を見ろ！世界を見ろ！そして考えるのだ、少年よ！」

…ニュートンの言っていることは正しい。だけど、どうしようもない時だつてあるのだ。今、仲間の苦しむ様子を見て何になる？何の解決策が生まれる？いや、何も生まれない。自分の「心」が壊れるだけだ。壊れるわけにはいかないのだ。だつて、

——俺には、「次」の世界が待っているんだから。

「じゃあ君は、この輝きを前に、目を開けていられるかな？」

——爽やかな青年の声が辺りに響き渡った。

そして次の瞬間、全てを焼き焦がす真正正銘の光が、ニュートンに向かつて放たれた。

第一章 21 『光の守護者』

その光は暗澹と横たわる大気を射抜く。それは狂人の大罪に対する制裁。全てを飲み込む無慈悲な白光は、神によって罪人に下された光輝の鉄槌のように見えた。

——だがその一撃を放ったのは神ではなく、1人の青年だ。

その威力は絶大である。たとえ常軌を逸した存在であろうと、その白光を前に為す術はない。

しかし、「学び」は時にそんな絶望的な状況さえ覆してしまうことがあるのだ。

ニュートンはその白光を曲げた。全てを飲み込むと思われた光は、彼の横を通り過ぎ、海の彼方へと飛んで行った。だがニュートンは決して余裕だったわけではない。その証拠に、ユナン達にかかっていた力が消えていた。こんな見習い契約者達に構っている暇は無いということだ。

「…驚いた。私の攻撃を捌くなんて、貴方は相当強い手練のようですね。」

空中に浮かびながら爽やかにそう呟いたのは、アルムである。一人称が変わっているが、その右手に持っている剣は、ユナンがレストランの中で見たものと同じだった。それに、戦闘中でさえ崩さないその眩い笑顔が、本人であることを1番に証明している。

「本当の自然現象の『光』であつたなら、この程度の重力で曲がるはずがない。僕はとっくに焼け焦げていたよ。僕が生きているという事実が、君が『まがい物』である何よりの証拠だね。」

そんなアルムの賞賛の言葉を、ニュートンは皮肉めいた言葉で返した。ニュートンは契約者の『魔法』の事を『まがい物』だと評していた。その真相までは、ユナンには分からない。

「なら、本物であると証明してみせるまでだ。」

そう言ったアルムは剣を自身の中心で構える。鏡のように磨き上げられた美しい刀身に、光が急速に集まっていく。そして、光が刀身から漏れ出し始めた瞬間、アルムはニュートンに向かってその剣を振

り下ろした。

さっきの3倍はある太い白光がニュートンへと放たれる。前の攻撃でも少し曲げるので精一杯だったのだ。流石のニュートンでも、この光を捌くのは無理であろう。

だが、前の時よりも簡単そうにニュートンはその光を曲げてみせた。：この男はやはりバケモノである。

『感情』を増加させてどうするんだよ。『質量』が増すだけなんだから、逆にさっきよりも対処は楽だったよ。攻撃が通用しなければ、さらに強い力で無理やり押し通そうとする。：これだから脳筋は嫌いだ。

やれやれと首を横に振りながら、ニュートンは今の攻撃の感想を口にする。

ニュートンはどうやら、いちいち目の前で起こった現象の説明をしないと気が済まないらしい。そのおかげで、ユナンも答えを導き出す事が出来たわけだが。：敵に攻略のヒントを必ずあげてしまうのが、この男の最大の弱点なのかもしれない。

「よく『脳筋』だと、他の人にもそう言われますよ。：たしかに、私も少しは成長しないといけないね。」

そう呟いたアルムは、光の速度でニュートンに向かって斬りかかる。ニュートンの背後に一瞬で現れた彼は、剣を振り上げる。その剣は、白光を纏っており、触れたもの全てを焼き焦がすであろう。

遠距離魔法が通用しないなら、己の武器で直接男の命を奪う。その判断は、前回ユナンが出会った白の王国騎士達と同じであった。

——もちろん、ニュートンはそんな単純な攻撃で敗れるほど、甘い敵ではない。

ニュートンの紫色の瞳が怪しく光る。すると、アルムの重心に紫色の点がつき、彼はニュートンの後方へと飛ばされた。もちろん、それだけで攻撃は終わらない。その後ニュートンは、アルムを天高くに上げ、それから暗い海へと勢いよく叩きつけようとする。

ぶつかる場所が地面ではなく海とはいえ、あの高さだ。重症は免れない。それに、ユナンはアルムが海の表面に叩きつけられるだけでは

済まないと感じていた。あの『力』なら、海の奥底まで彼を沈めるであらう。

「これは…まずいね。凄い『力』だ。なら私も力を借りるとしよう。——契約の名のもとに。」

アルムは自分の剣を中央で掲げ、そう祈った。すると、彼の周りが金色に輝き始めた。

元々彼は白い大きなコートを着ていた。下のズボンも白く、全身が白いその姿は、まさに『純白』そのものであった。血の色さえ知らない、純粋な青年のようであったのだ。

だが変身後の彼の姿はそれとは違い、幾多の大罪人をその手で裁いてきた、歴戦の『聖騎士』のように見えた。

全身が金色の鎧に覆われていて、それからは眩い光が放たれている。その背中には、真つ青なマントがついていて、さらに、腰から足首にかけても、青い布で覆われている。青い布の正面には、白い十字架の模様が描かれていた。

金と青の組み合わせが、彼の気品さをよりいっそう高めており、それだけでなく豪快さも感じられた。

そして彼の剣も、上品な片手剣から、豪快な両手剣へと姿を変えていた。その刀身も金色へと変化している。だが、両刃の部分だけは白銀になっており、どんなものでも容易く切り裂いてしまう鋭さを感じられた。

アルムは変身後、すぐに姿を消し、一瞬で甲板の上へと戻ってきた。そして、相変わらずの煌めく笑顔でニュートンへと語りかける。その姿は太陽のように眩しい。

「さあ、そろそろ終わらせようか。」

アルムの周囲には、沢山の金色の粒子が漂っている。その粒子の正体は、あのニュートンですら分からない。ただ、それらがアルムに絶対的な勝利を与えることが、何故かユナンには分かった。それくらい、あの粒子、1粒1粒からは強い「思い」を感じる。

「まだ僕は終わるわけには行かないんだ！死ぬのは君だよ、光の守護者！」

そう叫んだニュートンの手に、謎の武器が現れる。全身が黒く、引き金のようなものがついている。ニュートンが人差し指で引き金を引いた途端、連続する爆音と共に、細い筒の先端から、瞬間的な光とともに沢山の何かが放たれた。辺りにはユナンがこれまで嗅いだことのない異臭が漂う。ただその臭いは危険であると、脳が警鐘を鳴らした。

今の攻撃はまるで魔法のようであるが、ニュートンは魔法が大嫌いである。これも「学び」によって生み出された武器なのであろうか。そんなニュートンからの攻撃を、易々とアルムは躲す。いや、躲してはいない。その放たれた何かが、まるで生きているかのように軌道を曲げて、彼だけを避けたのだ。

その『幸運』にユナン達は驚く。

「普通なら弾が蒸発するほどのエネルギーが必要なんだけど…。君たちはどれだけ世界の真理に抗えば、気が済むんだい？」

ニュートンには『幸運』とは違う、別の何かが見えているようであった。ただそれを理解していようがなからうが、ニュートンの攻撃をアルムが避けた事実だけは変わらない。

——そしてニュートンはゆっくりと右腕をあげた。

それを見たアルムは両手剣を構え、ニュートンと対峙する。それは、敵に斬りかかる為の動作。一見、それは自然な動作に見える。「普通」であれば、彼におかしい所は何一つないであろう。

しかし、ユナンとニュートンだけは、アルムの「異常性」に気がついていていた。アルムの周りには強烈な空間の歪みが生じている。それは、光すら捻れて見える程の凄まじい歪みだ。

ニュートンはこれまで、本気を出していなかったのだ。この強烈な歪みを発生させた『力』こそ、彼の本気である。

——なのに、そんな『力』を受け続けてなお、アルムは武器を構えて立っている。彼の額から汗が流れたが、決して膝はつかない。

ユナンはこれまで、黒い怪物や大罪の十二宮ニュートンなど、常軌を逸したバケモノに出会ってきた。敵にバケモノがいるんだから、味方にバケモノがいたとしても、何ら不思議ではない。

そうだとしても、アルムの強さは「異常」である。それと同時に納得もいく。大罪の十二宮というバケモノがいるにも関わらず、この世界が減びていない理由に。

——それは、彼らより強い者が、なんとか世界を守っているからだ。アルムの身体に、更なる負荷がのしかかる。大罪の十二宮は、やはり強敵なのだ。

だが、私は決して負けられない。私が負けるということはすなわち、世界の「死」を意味する。だからどんなに辛くても、立ち上がるのだ。世界の為に。

彼はまだ青年である。そんな若い身で、とてつもなく大きな『使命』を背負わされているのだ。だからこそ、彼は昔から重圧には慣れている。こんな『力』に、押し潰されるわけにはいかない。

そんな苦しむ男の子を心配するように、様々な「色」の光が彼の周りに集まってきた。

——そう、彼は決して『独り』でこの強敵に立ち向かわなくてもいいのだ。

「みんな、力を貸してほしい。君たちの『思い』をここに！」

そう叫んだアルムは、金色に輝く両手剣を頭上へと振り上げる。アルムの周りから、「赤」「青」「緑」「黄」「白」色の多くの光が集まってくる。それらは、剣の刀身に集まり、天まで届くほど巨大な「虹」色の光の柱を生み出した。

その光の柱は、かつてこの世界で生きていた全ての契約者の「希望」そのもの。その「思い」を、この青年は一身に受ける。そして彼は、肉体が無い彼らの代わりに、その「思い」を、世界を脅かす大罪人へとぶつけるのだ。

「大罪の十二宮！私『達』の光を受けるがいい!!」

そう高らかに叫び、アルムはニュートンへと虹色に光る両手剣を振り下ろした。虹色の光の柱が、ニュートンに放たれる。それをニュートンは、紫色の球体で自らを覆うことで、凌ごうとする。

前回ユナンが見た、彼の切り札だ。それはどんな攻撃だろうと跳ね返してしまう。だが、

——「思い」は時に「理」を超える。

その光の威力に球体は耐えきれず、崩壊する。

「思い」が強いほど「質量」は大きくなる。だが、ニュートンにはその光を捌けない理由があった。

それは、「思い」の数である。端的に言って、多すぎるのだ。その光を曲げるには、一つ一つの「思い」に力を作用させる必要があるのだが、それではキリがない。その前に、ニュートンの身体が光によって消滅してしまうだろう。

「全く、無駄な真似を。世界の真理を『発見』する者は、また現れるというのに。例えば：あの子とかね。」

そう呟いて、ニュートンは黒い髪の少年を見る。ただ、その視線に少年は気づいていない。彼の目には虹色の光だけが映っていたのだ。

そして、ニュートンは不敵な笑みを浮かべたまま、虹色の光に飲み込まれた。彼の肉や骨は一切残らない。彼は光によって、「消滅」していたのだ。

ユナン達を美しい夕焼けの光が照らす。そして波の音に合わせて、夕日に向かって飛んでいく白い海鳥が高らかに鳴き声をあげていた。

——世界が勝利の雄叫びを上げる。

第一章22 『プライヤー』

ユナン達は目の前で起こった現実を飲み込めず、ただぼーっとその場につ立っていた。それは当然である。

いきなりユナン達の前に現れた狂人。自分達を襲う不可視の力。ピンチに駆けつけた光り輝く超人アルム。そして何よりも、目の前で起こった狂人とアルムとの超次元の戦闘。

あまりの怒濤の展開に、ユナン達の頭はキャパオーバーしていたのだ。

そんな絶句するユナン達の様子を見て、アルムが心配そうな表情をしてみたらに語りかけてきた。

もう彼の変身は解けており、いつもの大きな白いコートを身につけている姿へと戻っていた。

「君たち、怪我はないかい？」

そんな彼の問いかけに、最初に返事したのはユナンだ。彼らの中で、こういう混沌とした状況に1番慣れているのは、もちろんユナンである。

「俺は大丈夫だけどよ。他のみんなは…」

自分の状態をアルムへと伝えたあと、ユナンは心配そうにセーナ達の方へ振り返る。あんな辛そうな悲鳴だったのだ。骨の何本かは折れているのかもしれない。

幸いな事に、セーナ達はみんな普通に立つことが出来ていた。先に、アンナが元気そうなポーズをとり、口を開く。

「ちよつとまだ痛むけど、アタシはこの通りピンピンしてるわ！他のみんなも大丈夫？」

そう言つてアンナはセーナ達を見る。3人は大丈夫と言った風に首を縦に振った。無事だった仲間の様子を見て、ユナンはほっと息をつき、安堵する。

——誰かが死んでしまっていたら、またやり直さなければならぬところであつた。

「それは良かった。大罪の十二宮の攻撃を受けて無事だなんて、君

たちは凄いじゃないか。あれは、僕も苦勞するほどの強敵だったんだよ。」

そんなユナン達の平気な様子を見て、アルムは蒼炎の瞳を見開き、賞賛の声をあげる。：彼は、戦闘時と通常時で一人称が変わるようだ。何故かは分からない。

ニユートンは戦いによつて、「力」の制御をずっと「学び」続けていたに違いない。まずは対象を張り付けにして無力化。そしてそれから、対象が壊れるちようどいい「強さ」の力を加える。ユナン達はその張り付けの段階であつた為、痛みはあれど、身体が壊れることは無かつたのだ。

その中間段階であつたユナンの全身の骨は結構痛んでいるのだが、本人はあまり気にしていない。いや、痛みの感覚が麻痺しており、気づいていないのだ。

ユナンはそれから、アルムの正体について考える。明らかに異常な強さを持った青年。何か特別な存在であるに違いない。

ニユートンは「光の守護者」とか言っていたっけ。それも、ユナンは聞いたことのない言葉であつた。

「それで、アルムの正体って俺たちが聞いても良いものなのか？」
ユナンが額に汗を流しながら、恐る恐るアルムにそう質問する。

「正体を知られてしまったからには、君たちを生かしてはおけないね。」

なんて言葉が彼の口から言われてしまった日には、大罪の十二宮ニユートンよりも強い彼に、俺たちは為す術なく皆殺しにされてしまふだろう。

だがユナンのそんな心配は杞憂に終わり、彼は笑顔をこちらへ向けて、軽々しく自分の正体について語つた。

「僕の本当の名前はアーサー。一部の人からは、光の守護者と呼ばれている存在だ。大罪の十二宮『など』、世界の存在を脅かすものを倒す使命を背負っている身なんだ。：そしてさっきの男は、大罪の十二宮ニユートンだろう。あの押し潰す様な『力』は彼で間違いないよ。」
アーサーは軽々しく語つているが、その使命はおそらく、世界一重

いであろう。世界を『守る』という使命。それは言葉にするのは簡単だが、実際に行うとなると、どれほどの苦悩、苦痛が伴うのであろうか。ユナンには想像さえ出来ない。

それを現実でやっていた凄惨な存在が、悲しそうな表情をして、ユナン達に頭を下げた。

「そして、君たちに偽名を使っていたことは謝罪しよう。君たちを驚かせても悪いし、何より大罪の十二宮に僕の存在を知られてしまつて、逃げられたく無かつたんだよ。」

そんな彼の謝罪に、ユナンは慌てて返事をする。

「いやいや、なんで謝るんですか。こつちこそ助けてもらつて、感謝してもしきれないほどですつて！」

「ユナンの言う通りだ。アーサー、俺達はあなたに感謝しかない。」

「アタシ達にもなんかできないかな？一緒にまたご飯とか行きませんか？ご飯代奢りますよ！」

「大罪の十二宮つてやつ、怖かつたよー。オレ、イケメンなお兄さんからもう離れたくないよー！」

「アーサーさん。わたし達を助けてくれてありがとう！」

ユナンに続いて、みんなもアーサーにお礼を言う。そんなユナン達の様子に、彼は少し驚いた表情を見せたあと、またすぐ笑顔に戻つて、「…ありがとう。君たちのような人がいるから、僕はいつだって立ち上がれるんだ。」

としみじみと呟いた。

とてつもない強さを持っていたとしても、彼は一人の人間である。ユナン達の言葉で、彼の心を少しでも支えることが出来たなら、それはとても嬉しい事だ。

ニュートンは虹色の光とともに、この世から消え去つた。ユナンはアーサーのおかげで、この「死」のループから脱出することができたのだ。

それにしても…

「なんで、俺はニュートンに狙われたんだ？」

「君も彼の被害者になりかけたんだよ。」

ユナンのそんな呟きに、アーサーが反応する。そして、彼はさらにその事について詳しく説明してくれた。

「大罪の十二宮ニユートンは、特定の契約者だけを狙って殺すんだ。殺された契約者の色などに規則性は無いが、ある1つの共通点がある。ユナン、君も彼に質問をされてはいないかい？」

「あ、ああ。リングは何故下に落ちるのか、だったな。」

「そんな内容だったのか。とにかく、被害に遭う契約者はニユートンに意味不明な質問をされる。それを気味悪がった契約者の中には、王国騎士に助けを求める者もいるんだが……」

次の内容をユナンは知っている。実際に前はそうだったからだ。

そしてアーサーは真剣な表情でユナンにこう述べた。

「2回目に彼に会った契約者は必ず殺される。彼に歯向かった王国騎士も、同じく押し潰されて屍となる。」

なるほど、俺以外にもニユートンの被害にあった契約者はたくさんいたのか。そして、みんなあの質問に答えられなかった。そりゃあ、あんな短期間で答えろって言う方が無理である。ユナンも彼の力を実際に何回も見て、ようやく答えにたどり着いたのだ。…しかも彼に妥協される形で。

「なんか、そいつにたまたま出会ったアンタって本当に運が無いのね。」

「しかも、ユナンはまだ契約者になって少ししか経ってないのだから?」

「ユナン可哀想だな。オレの運、分けてやりたいよ。」

アーサーの話聞いて、アンナ達がユナンに同情の声をかける。みんなの憐れむような視線がユナンに突き刺さる。

「俺自身が1番分かっているよ!」

ユナンはやけくそになってそう叫ぶ。たしかにこの所、不幸の連続である。黒い怪物に故郷を襲われ、飛ばされた先で「竜狩り」と戦い、逃げた先で大罪の十二宮と出会う。

…もしかしたら、俺のせいで仲間が危険に晒されているのかもしれ

ない。最近は本気でそう思えてきた。

「では、食事にも誘われたのにすまないが、僕にはまだやるべき事がたくさんあるんだ。もう行かせてもらおうとするよ。」

そう言ったアーサーの周りに、金色の粒子が集まってきた。彼の使命を考えれば当然であろう。そんなアーサーの様子を見て、ユナン達は残念そうな表情をしたが、人と別れる時にそんな顔をしてはいけない。笑顔になって、潔く別れを告げる。

「ありがとう。アーサー！」

そう言いながら手を振るユナン達を見て、アーサーは爽やかな笑顔で返した。そして、彼は黄金の光をその身に纏って、空中に浮かび上がる。

その時、ユナンは1つ、彼に伝えたい事を思い出し、急いで声をあげた。

「アーサー！マイミアにいた爺さんから聞いたんだが、ドラクロスの様子がおかしいらしいんだ！古龍とかでてきたらおつかないから、ちよつと様子とか見てきてくれないか？」

そんなユナンの頼みに、アーサーは不思議そうな表情を浮かべる。

「……？古龍なんてこの100年、出現の報告はされていないけど。ユナンは心配性だね。…分かった。時間もそこまでかからないし、一応見てくるとしよう。君たちの旅の安寧を心から願っているよ。それでは！」

そして、アーサーは勢いよく空に飛んで行った。それは、微かに薄い薄紫色の空に煌めく、一筋の流れ星のようであった。

「またな！」

「またね！」

ユナン達はその一筋の流星に向かって手を振る。その正体が世界を守る正義の青年であると知っているのは、今ここにいる彼らだけである。

光の守護者は、世界を見守る希望の星として、今日も夜空を飛んでいる。その正体を知る者は少ない。

「あつ！お母さん。みてみて！流れ星だよ！」

小さな男の子が、目を輝かせながら空を指さして、母親にそう叫んでいた。

「まだ夕方よ？見間違いないかしら。」

そんな男の子の様子を母親は不思議そうに眺めている。そして母親は男の子につられて空を見上げてみたが、既にそこに流星の姿は無かった。

アーサーが飛び去った後、ユナンは可愛らしくも、少し怒っているように見える視線に気がついた。ユナンをじっと睨みつけていたのはセーナであった。

彼女は珍しく白いローブを脱いでいた。白を基調とした青いラインの入った上着は、真ん中のトグル・ボタンで止めるようになっていいる。もちろん、背中には翼用の穴が2つ空いている。下は動きやすいようにしているのか、彼女の白い太ももが見えるほど短い、黒いショートパンツだ。そして足には、動きやすそうな黒いブーツを履いている。

「どうした、セーナ？可愛い顔が台無しになってるぞ？」

「茶化さないの。：なんでわたし達に相談してくれなかったの？」

「そうだよー。オレに相談してくれたら、ジークに助けに行ってもらったのに…」

「そこはお前も行けよ。」

セーナの訴えに、キリマルとジークも反応する。

ユナンはそんなセーナの言葉に少し戸惑う。ユナンだって相談できればしたかった。でも、

「いやあ、ニユートンってやつ、相当変人だったからさ。みんなに何かあつたら危ないじゃん？実際、バカほど強かったし。」

そんなユナンの返答に、セーナは大きいため息をついた。そして、また綺麗な水色の瞳で真っ直ぐにユナンを見つめる。

「わたし達だって、仲間の事が心配なのは一緒よ。わたし達が困っていたら、迷わずユナンは助けてくれた。それと同じでわたし達も、

ユナンが困っていたら迷わず助けるわ。…それが仲間でしょ？」

セーナの発言にアンナ達も深く頷いて賛同する。みんな、頼もしそうにドヤ顔でユナンを見つめている。

…本当に、良いヤツらなのだ。俺には勿体ないほどの。そして、俺はどんどんセーナ達を好きになってしまふ。

——だからこそ、この先何があつてもセーナ達は救つてみせる。この『力』で。

ユナンは契約者なのだ。あの日何も出来なかつたひ弱な男の子とは違う。

もう誰も、アベルの様に死なせたりなんかしない。

もう誰にも、フィーナのように泣き叫ぶ顔なんかさせない。

——この先、傷つくのは俺一人だけでいい。

旅立ちの決意をそう胸に掲げながら、ユナンはみんなに笑顔で語りかける。その顔には希望が満ち溢れていた。

「そうだな、悪かったよ。俺は魔法も使えねえし、実際みんなよりも弱い。だから俺はこれからも、仲間を頼りにしまくるぜ！」

「なんか、急にダメ男みたいな発言になつたわね。…まあ無理するアンタにはそんなくらいの方が丁度いいわ。」

そんなユナンのセリフにアンナはツツコミを入れる。みんなも、すっかりいつもの調子を取り戻したユナンの様子を見て、顔を明るくした。

もちろん、嘘はついていない。俺にはアーサーのような凄い力なんてものはない。あるのは、やり直す力だけだ。仲間に頼つて、それ以外も利用して、明るい未来を目指す。それが、俺の『願い』の叶え方なんだ。

「うわあ！ねえみんな！すつごく綺麗だよ！オレ、こんな景色見たことないよ。」

キリマルがみんなにそう叫んで、夕日を指さす。夕焼けは今、最高潮となっていて、ユナンが見ていた時よりも遥かに綺麗だった。

夕日が地平線の彼方に沈もうとしている。橙色に輝く光を紫色の闇の空がよりいつそう際立てていて、幻想的な風景が作り出されて

いた。

その輝く光は、ユナン達のこれからの未来を映し出しているかのよう
うに感じた。

そんな光景を、ユナン達は仲良く横一列に並んで眺めていた。する
と何を思ったのか、突然セーナが両手を組んで、祈りを捧げ始めた。

「みんなに神の御加護があらんことを。」

そう呟いた彼女にユナンは見惚れていた。彼女の銀色の髪が夕日
の光によって、よりいつそう美しい輝きを放っている。そうして祈り
を捧げている彼女の姿はまるで、本物の女神のように思えた。

祈りを捧げ終えたセーナが、そんなユナンの視線に気づく。じつと
見つめてくるユナンを、セーナは不思議そうにその可愛い目で見返し
た。

「…？どうしたの、ユナン。わたしの顔になんかついてる？」

可愛い目と鼻と口がついているが、そんなこと照れくさくて言える
はずが無い。ユナンは恥ずかしそうに目を逸らして、代わりの話を投
げかける。

「いや、夕焼けに祈りを捧げるってのも珍しいなと思つて。」

「あつ、これね。『竜人』の文化なの。竜人は美しい景色を目にした
ら、仲間の安寧を願って祈りを捧げるのよ。」

なるほど、また新しく1つ、竜人について知ることが出来た。この
調子で彼女について、どんどん知っていきたい。

「…素敵な文化だな。俺らも真似するべきだと思つて。」

もちろん、本心からの言葉だった。そんなユナンの言葉を聞いて、
セーナは笑顔をこちらに向けた。彼女の笑顔は、夕日以上に眩しかつ
た。

さらに、彼女の青い翼がパタパタと嬉しそうに動いているのが分
かった。…犬のしっぽみたいなものだろうか。

「みんなが幸せになる未来を。」

そう呟いて、セーナを真似するように、ユナンも両手を組んで夕日
に祈りを捧げる。今まで祈りを捧げたことなんて1度も無かったが、
こういうのも悪くない。もちろん直接的な効果なんて期待してはい

ない。ただの自分を勇気づける為の行いだ。

俺は契約者だ。「契約者」なんて聞こえの良い言葉を使っているが、実際のところ、神に祈って力をもらったただけの人間にすぎない。だけど、

——神に縋ってでも前に進む。それが「人」であると俺は思うのだ。

ユナンの「願い」の物語はまだまだ始まったばかりである。その結末は「神」さえも知らないのだ。

「神に祈る者、プライヤー。君たちはボクに、どんな物語を見せてくれるのかな？」

女神は夕日に向かって祈るユナンを見ながら、ぽつりとそう呟いた。

——その言葉は誰の耳にも届かない。

第一章幕間 『不変の真理』

アーサーはドラクロス山の上空に辿り着いた。普段ならそんな寄り道をしている暇は無いが、これも1人の契約者の頼みだ。無下にはできない。

アーサーは雲よりも高いその山を、蒼炎の瞳でじつと眺める。山頂には雪が積もっており、荒々しくも神々しいその姿は圧巻である。世界中を探しても、ここまで高い山はそうそう見つからない。古龍が眠っているなんて伝説が生まれるのも無理はないだろう。

彼の瞳が金色に光る。加護を発動させたのだ。魔力の流れ、量を可視化する加護。それは相手の戦闘力を測ったり、古龍の出現場所の予測など世界を脅かす災害の発生を予知する時に重宝する。そういう災害が起こる前には必ず周囲の魔力が活性化するのだ。

「――」

そしてドラクロス山を見たアーサーは、驚いたようにその目をみはった。山の中心に膨大な量の魔力が集まっている。そして今もお、そこに向かって周りの魔力が流れ込み続けているのだ。それは例えるなら、火山の噴火の1歩手前の状態。「何か」によってその魔力溜まりが反応してしまえば、古龍レベルの自然災害が発生してしまうであろう。

古龍は自分と近い存在の竜に反応してしまうという。あとで竜人の国へ行つて、王に警告でもしておこう。

ここには頻繁に足を運ぶことになるな…

光の守護者は女神の代わりに、直接手を下す代理人。常に出ている命令は大罪の十二宮の殲滅。その他の仕事は女神から直接お達しを下る。

つまりその古龍を倒すかの判断は女神が下すのだ。世界が滅亡する程のものでない時は「人々」にその処理を任せる。あまり世界に干渉し過ぎないというのが女神の自論である。それに特に思うところはない。だが命令されれば、すぐに対処できるに越したことはないであろう。

全く最近は本当に忙しい。僕は大罪の十二宮の殲滅に専念したいのだが：

そう思いながらアーサーは、自分の腰にある剣を手にとって眺めた。そして今日の出来事を思い出す。

大罪の十二宮ニュートンを倒したことに、まだあまり実感が湧いていない。…彼を倒すことが出来たのは、この剣のおかげでもあるからだ。

聖剣エクスカリバー。歴代全ての光の守護者の「思い」が宿っている剣だ。それは歴代全ての光の守護者の「加護」を使用できるという意味でもある。つまり、光の守護者は継承していくほど強くなっていくのだ。僕は51代目の光の守護者だ。そして、僕は51個の加護を扱える。

それでも大罪の十二宮ニュートンは強敵であった。

先代の父はとても強かった。だが父はニュートンを含む大罪の十二宮3人を同時に相手にして、殺されたそうだった。

その仇を討てたことにアーサーは喜びを噛みしめる。だが、まだあと2人残っている。僕の代で、その2人だけは必ず仕留めないといけないのだ。

そうアーサーは強く心に誓い、前を向いた。すると、そんな彼に声がかかる。

「アーサー君、おめでとう！200年もこの世界にのさばった大罪の十二宮ニュートンを見事討ち取ったんだね。先代の仇も取れたじゃないか!!」

「まだあと2人残っていますよ。…それでその服装はどういった意味合いで？」

アーサーに声をかけてきたのは、女神だった。だがその格好はいつものとは違い、紺色のドレス姿になっていた。頭には豪華な装飾が施された金色のティアラを付けている。

何故か女神は自分の服装をコロコロと変える。そういった趣味を持っているのだろうか。

女神の顔はたしかに絶世の美女である。だがどんなもので着飾っても、不思議と彼女に美しさは感じない。まるで人形が自ら着せ替えをしているかのように思えてしまうからだ。

——女神からは人間味が感じられない。

「君の勝利を祝う為のパーティーの格好に決まっているじゃないか。はあ、君は乙女心が本当に分かっているじゃないね。そんな調子では、君が次の世代の子供を残せるかどうか心配だよ。まだ彼女の1人もできていないだろうか？」

そんなアーサーの問いかけに、女神は大変不満そうだ。女神は頬を膨らませて不服そうな表情をこちらへ向けてくる。しかし、その仕草は酷く演技じみている。

あなただけにはその心配をされたくはない。というかこの女神に乙女心というものが本当にあるのだろうか。

「力及ばず、申し訳ありません。仕事が山積みになっていました。とても僕にはそんな余裕が無かったです。」

アーサーは眩しい笑顔を女神に向けてそう返した。しかし、彼女の機嫌は一向に直らない。

「むっ。それ、遠回しにボクのせいって言っていると思うんだが。」
「今日の女神様はご機嫌があまりよろしくないようで。…どうかさ

れましたか？」

アーサーはそんな女神の様子に苦笑しながらそう問いかけた。いつもだる絡みされるが、今日の女神はいつも増して酷い。

「まあボクの機嫌が悪いのは認めるよ。君のせいで楽勝に突破してしまったからね…。彼にはもつと色々試して欲しかったんだよね。」

その女神の言葉を聞いて、アーサーの脳裏にユナンの姿が思い浮かんだ。

古龍の復活も予言していたし、本当に不思議な子であった。まさか…

「今日出会ったユナンという少年、本当に不思議な子でしたが…」
そのアーサーの言葉を聞いて、女神は一気に機嫌を取り戻した。そ

して紫色の瞳を輝かせて興奮しながら、アーサーの話に食いついてきた。

「ああ、その子だよその子！ボクの『お気に入り』なんだ！」

「なるほど、そうでしたか。しかし大罪の十二宮の殲滅は僕『達』の悲願でもあります。どうかご理解頂きたい。」

「分かっているさ。まあどうせ詰んでいたようだし構わないよ。：君を引き寄せたのも彼の選択の一つだ。」

「どうやら女神は相当ユナンの事を気に入っているらしい。：気の毒に。本当に彼には運が無いのであろう。女神に魅入られた者など、ろくな運命を辿らない。」

優しい人に限って不幸な運命を辿る人が多い。むしろ、大罪の十二宮は無駄に運が良い。光の守護者に追われながら200年も生き長らえるなんて、余程の運も必要である。何故、運勢というのはこうも残酷なのか。『幸運』の加護の持ち主にでも聞けば、その答えが分かるのであろうか。

「さあ、まだまだボクを楽しませておくれ。ユナン。」

他人の人生を狂わして楽しむ、そんな『狂人』の様子をアーサーは眺めていた。だが、この『狂人』のおかげで願いを叶え、あるいは力を手にして幸せになった者も大勢いるのは事実だ。だからこそ、アーサーは彼女に従う。彼は夢を追い続ける契約者達の事が大好きなのだ。

——夢を追いかける人間は、何よりも光輝いていて美しい。

「ユナン、君とはまた会えそうだ。君が自分の夢を追い続ける限りね。」

そしてアーサーは再び黄金の光を身に纏い、暗い夜空を飛んでいく。そんな彼の姿は誰よりも光輝いており、何より美しかった。

——彼もまた夢を追い続ける1人の人間なのである。

これはユナンが「死」のループから脱出した少し後の物語。場所はとある農村。ロッカという紫色の甘い果実が名産の村だ。

ある少年は両親の農作業を手伝っていた。今はまだロッカの木に

緑色の果実がついてる時期であり、収穫は少し先である。しかし、虫は容赦なくそんな緑色の果実にかぶりつく。だから人間が手を加えてやる必要があるのだ。

晴天の空の下、少年がいつものように木についた虫を取っていると、彼の目の前で緑色の果実が自然と地面に落ちてしまった。

「ああ、もったいない！」

それは少年の心からの叫び。この果実は結構高値で売れる。1個たりとも無駄にはしたくないのだ。なんで勝手に地面に落ちてしまうのか。そうしたら売れなくなってしまうではないか。いつそ真上にでも飛んでいってくれた方が気分が爽快になるってものだ。

そんなことを考えていた少年はある疑問を抱く。

——なんでロツカはいつも下に落ちるんだろう。

それは普通の人からしてみれば悩む価値すらない、意味の無い疑問。だがその少年にとっては魂を揺らすほどの疑問であったのだ。

「おーい。何ぼーっと突っ立ってるんだ？お前も、もうすぐ16歳になるだろ？そろそろ本格的に仕事を覚えて貰わないと……」

呆然としたまま作業を中断していた少年を見て、父親が注意をする。だが少年はそんなことには全く聞く耳を持たない。そして、父親にある質問を投げかける。

「ねえ、父さん。ロツカはなんでみんな下に落ちちやうんだろう。」

そんな少年の当たり前の質問に、父親は呆れたような表情をみせる。

「お天道様がそう決めただよ。そんな無駄な事を考えてないで手を動かせ、手を。」

ある意味それも1つの正解なのだが、その答えで少年の疑問が消えることは無かった。しかし、父親もうるさくなってきたので手は動かす。手を動かしたまま、考える。

その「答え」は簡単には出ない。けれどその疑問が少年の頭の中をずっと支配して離れないのだ。少年は悩み続けて、夜もまともに眠れなかった。

朝、昼、晩。常に少年は考え続ける。この謎を解くために、来る日

は昔から、それを「目印」にしてきた程である。それと同じで世界の真理も決して変わることは無いのだ。

——賢者がこの世に誕生し続ける限り、大罪の十二宮は不滅なのである。

第二章 【王都アルヴヘルム編】 自分を探す物語

第二章 1 『鍛冶屋の爺さん』

王都を目指すユナン達の旅は順調に進んでいた。大罪の十二宮ニュートンとの戦闘後、命の危険に晒されるような出来事は起こっていない。唯一問題があったとすれば、ユナンとキリマルが船酔いしたぐらいであろうか。

そしてユナン達の王都を目指す旅も、そろそろ終わりを告げようとしていた。王都近郊にある大きな街、ルーラット。ユナン達はこの街で、最後の休息をとることになった。

「新しい街、キター!! 新たな女の子がオレを待っている! 今行く! ぐえっ。」

キリマルは新たな街への到着に喜んだ。そしてその興奮のまま、どこかへ走り去ろうとする。しかし、それを強制的にアンナに止められてしまった。キリマルには首輪がつけられていたからだ。

——まさか本当につけることになるなんてな。

そんなキリマルにユナンは憐れみの視線を送る。食糧の確保や魔獣討伐依頼の受注など、ユナン達が旅の途中で町や村に寄ることは多かった。その行く先々でキリマルは必ず問題を起こす。何度衛兵や王国騎士にお世話になったか分からない。

そしてキリマルはとうとう本当に首輪をつけられてしまったのだ。しかし一向に反省する気配はない。…何が彼をあそこまで駆り立てるのであるうか。

「普通、人に首輪とかつける!? 人権侵害だよ、人権侵害!」

「アンタは人じゃなくて、もはや野獣じゃないの。心配しなくても、しつかり反省したらちゃんを取ってあげるわよ。」

「キリマル、頑張つてね。わたし、ほんの少しだけ応援してるから。」

「ほんの少しだけなんだ!? セーナちゃんまで…オレに仲間はいないのか。」

そう呟いて、キリマルはユナンの方をうるうるとした目で見つめてきた。そんなキリマルに、ユナンはキメ顔でグーサインを送る。

つまり、とにかく頑張れということだ。

完全に自分に味方がいないことを悟り、キリマルはしょんぼりと項垂れた。少し可哀想だが、これも彼のためである。

「さーて、ルーラットに到着したことだし、買い物にでも行きましようか。ここが最後に寄る町になるから、みんなも欲しいものとかは各々自分で買うようにね。」

アンナが明るい声でみんなにそう伝えた。みんなも頷いて、それ了解の意を示す。そんな中、ユナンだけが手を挙げた。

「俺は一旦別れてもいいか？鍛冶屋に寄りたいたいんだ。」

そう話して、ユナンは自分の腰にさしているカタナを見つめる。

これまでの道中、結構魔獣との戦闘もあったからな。こいつを手入れしてもらわないといけない。

「じゃあユナンとは後で合流ね。アタシ達は食料品店にいると思うから、そこでまた会いましょう。」

ユナンの発言に、アンナは軽くそう返した。

ユナンがそのままみんなと別れ、鍛冶屋に行こうとした時、セーナが突然、小さな可愛らしい悲鳴をあげた。セーナの胸の部分が何やらもぞもぞと動いている。

「きゃっ。くすぐったいわ！もう。」

そうしてセーナの白いローブの中から飛び出てきたのは、黒い子猫。くろすけだ。

結局、くろすけはユナン達にずっとついてきたのだ。そして道中歩き疲れたくろすけが休む、お気に入りの場所がここ。セーナの白いローブの中だ。

セーナは自分の小さな青い翼を隠すため、彼女の身体よりかなり大きめのローブを羽織っている。くろすけの体が小さいのもあって、この子猫にとってはちようど良い空間になるのであろう。

：羨ましい。俺もくろすけになりたかった。

そんなくろすけが、珍しくユナンの方に近づいてきた。ユナンも動

物は好きな方だ。自分から寄ってきてくれるのは大歓迎である。

「おっ、とうとう俺に懐いてくれたか？どれどれ…」

ユナンは近づいてきたくろすけの頭を撫でようとする。

くろすけは小さいくせに無駄に毛があつて、もふもふなのだ。可愛いヤツめ。

「ガブツ！」

「うぎやあああ！また噛みやがった、こいつ!!」

しかしくろすけは、そんなユナンがさし伸ばしてきた手を思いつきり噛んだ。絶対に甘噛みではない。普通に血が出るほど痛かった。

くろすけは何故かユナンだけには厳しいのだ。

「みんなには懐くのになんで俺はダメなんだよ！ちよつとぐらいモ
frasせてくれてもいいだろ!？」

「わたしには可愛くお腹まで見せてくれるのに、変なの。……ユナンの目付きがちよつと悪いから?」

「結構考えてそれ?セーナまで俺の心を噛むのか…」

「しっかりと心から向き合えば、動物は必ず心を開いてくれる。い
つだつて悪いのは人間の方だ。」

へこんでいるユナンに、ジークがさらに追い討ちの説教をしてきた。ジークはそのクールな顔に似合わず、動物が大好きらしい。

ユナンだつて、くろすけには心から向き合っているつもりなんだが。言葉が通じない相手というのはやはり難しいものである。

「はいはい、分かりましたよ。悪いのは俺です。んじゃあ鍛冶屋に行つてくるとしますか。」

ユナンは不貞腐れながらみんなと別れた。鍛冶屋を目指すユナンの後を、くろすけがとことこついて行く。

「懐かないのに、こういう時はユナンについて行っちゃうのよね。ユナンもくろすけも、ほんとに変な子。」

そんな1人と1匹の後ろ姿を、セーナは首を傾げて不思議そうに眺めていた。

変な子同士、案外仲が良かったりして。

そして鍛冶屋の前にユナンは辿り着く。ルーラットの明るい街並みには似合わない、古びた石造りの建物だ。煙突からは煙が上がっており、鋭く鉄を打つ音が、外にいるユナンの耳にまで入ってきた。

この街の鍛冶屋は凄腕であると、旅の途中に聞いたのだ。ユナンは寝る前や戦闘の後に、カタナの手入れをしているが、それは素人の手入れである。やはりその道のプロに頼んだ方が良いでしょう。王都も目前に迫り、丁度良いタイミングでもあるのだ。

作業中であるからか、入口は空きっぱなしだった。中からは熱気がぼわつと伝わってきた。

「すみませーん！」

そう言いながらユナンは中へと入る。中にいたのは60代くらいの男性だった。頭には白いバンダナ、茶色の袖がないシャツに、下は灰色の短パンと質素な格好をしている。腕や足には長年の重労働によって鍛え上げられた筋肉がついており、真剣な顔にはたくさんのシワが入っている。作業着やバンダナは煤で真っ黒に汚れており、男からは作業にのみ集中する職人の貫禄が感じられた。

男はユナンの声を聞いても全く反応せず、作業にのみ没頭していた。ユナンも結構大きな声で呼びかけたのが、この人には本当に聞こえていないのかもしれない。それくらい、男は集中していた。

彼の周りには、己と鉄のみ。それだけで十分なのだ。

ようやく作業を一通り終えた男がユナンの存在に気づく。彼は目をまん丸にして驚いた。

「びっくりしたわ!!声ぐらい掛けんかい！」

「いや掛けたよ！爺さんが反応しなかっただけ！」

男の馬鹿でかい声に、ユナンもつられて大声をあげる。さっきの、貫禄がある職人の姿はどこへ行ったのやら。作業を終えた男の姿は、ただのビビりな爺さんだった。

「えーと、俺はユナン。このカタナを研いでもらいにきたんだ。もちろん、お金は払う。」

落ち着きを取り戻したユナンは、腰にあるカタナを指さしてそう

言った。男も仕事の依頼だと分かり、落ち着きを取り戻したようであつた。

「なんじゃ、そんなことかい。てつきり儂を殺しに来た暗殺者なのかと思つたわい。ほらよこしな、研いでやつから。」

「爺さん、なんかヤバい借金でもしてんの?」

不審そうな目をしながら、ユナンはカタナを男へと預ける。それを受け取つた男は、やっと自己紹介をしてくれた。

「そんなわけあるかい。儂の名はガンテツ。善良な、どこにでもいる鍛冶屋じゃ。」

ガンテツはウインクしながらそう言った。ユナンの彼に対する初対面の印象は、「お茶目な爺さん」であつた。

ガンテツは慣れた手つきでユナンのカタナを手入れしていく。まづカタナの柄をはずし、布で軽く汚れを取る。それすらもユナンより遙かに速く、そして丁寧であつた。それから、先にもふもふがついた道具で謎の粉を刀身にムラなくかけていく。そしてまた刀身を布で丁寧に拭いて、その後油をムラなく塗つた。

その手入れの間だけ、ガンテツはまた無口な職人の姿へと戻つていた。そしてガンテツの手によって、ユナンのカタナは見違えるほど美しくなつた。刀身が鏡のように光輝いている。

「すっげー!」

まるで新品のようになったカタナを見て、ユナンは思わず感嘆の声をあげる。やはり、自分の手入れとは格が違う。

「爺さん、すげえな!カタナがこんなに光輝くなんて。さすがプロだけ。」

「儂はちよつと手を加えただけにしか過ぎぬ。…良いカタナじゃ。」

『魂』が宿つておるわい。」

「魂?武器なのにか?」

ガンテツの呟きにユナンが反応する。武器に魂が宿るなんて、おかしな話だ。するとガンテツはまた真剣な表情になり、貫禄ある職人の雰囲気へと戻つた。

「そうじゃ。武器には持ち主の生き様、言わば『魂』が宿る。『思い』と言う時もあるな。つまり人生の結晶じゃ。それが放つ輝きは美しいにきまつておろう。」

そんな壮大な話を聞いて、ユナンは息を飲む。なるほど、道理でこいつは光輝いているわけだ。

ユナンの脳裏に、いつも明るい笑顔を周囲にふりまいていた女性の姿が思い浮かぶ。元氣すぎて、一緒に暮らしているとうんざりするほどだ。

「母さんの人生ってんなら、光輝いていて当然だわな。」

ユナンはカタナを見つめながら、しみじみとそう呟いた。

母さん、元氣だろうか。黒い怪物の出現は、俺が来てからだった。母さんは村の人達とみんなで避難したに違いない。今頃、父さんと幸せな暮らしを送っているだろう。…そう信じたい。

——俺がいなくなったの、母さんは怒ってるだろうな。

おそらく俺は行方不明扱いだろう。早く戻って、元氣な顔を母さんに見せてやりたい。そのためにもまずは王都に行って、ムルク村へ帰る道を聞かなければ。

しばらく会っていない母親のことを思って、ユナンはしんみりとしていた。それを見たガンテツが口を開く。

「やはり譲り受けたものか。…なら代金は今回はいらん。大事なカタナなんじゃろ？また研いでやる。」

「えっ…ああ、また来る。ありがとな爺さん。」

そんなガンテツの発言に、ユナンは戸惑いながらもお礼を言う。ガンテツは何故か悲しそうな表情をしていた。…なんか勘違いしていないか？

「爺さん、これ形見とかじゃないぞ？借りてるんだ、母さんとまた来るよ。」

そんなユナンの発言に、ガンテツは驚いた表情を見せたが、彼はそれに対して何も言わなかった。ユナンに背中を見せ、

「…また来るんじゃぞ。仕事の邪魔じゃ。もう行ってくれ。」

ただそう言って、ユナンを追い払った。なんかぱつとしない別れ方

になってしまったが、また来るしいいか。

ユナンはあまり気にせず鍛冶屋を出て、食料品店へと向かう。予定よりも早くに終わった。みんなと合流して買い物でもするか。

ユナンは、食料品店から出てくるセーナ達を見つけた。

食糧はもう買い終えたのか。意外にも早かったな。

「おーいーみんなー！」

ユナンはそう叫んで、みんなに呼びかける。みんなもユナンに気づき、笑顔をこちらに向けた。

「速く来てー！もう次の店行くわよ！」

ユナンは、手を振ってこちらを呼んでいる5人に向かって、走って近づいていく。

——ん？5人!?なんか1人多くね？

「遅いですよ、待ってたんですからね！」

アンナ達の隣に、明らかに知らない男の子が1人立っている。そんな黒髪の少年に、ユナンは出会ってそうそうツツコミを入れた。

「いや、お前誰だよ!!」

ユナンの渾身のツツコミが街中に響き渡った。

第二章2 『転生者』

「いや、お前誰だよー!」

いつの間にかセーナ達の輪の中に溶け込んでいた見知らぬ少年に向かつて、ユナンはツツコミを入れる。そんなユナンの様子に、黒髪の少年は驚いたようであった。：いや、驚いているのはこっちの方なんだが。

少年の年齢はユナン達と同じくらいであろうか。癖のない真つ直ぐな黒髪と純粋な黒い瞳が、好青年の印象をユナンに与える。顔は普通。可もなく不可もなくといったところだろうか。

ただファツションセンスは少し奇抜であった。全身真つ赤で、袖に三本の白い縦線が入った服装。通気性が良さそうな素材でできている。ユナンはこんな生地を今までに見たことが無かった。そして左胸の辺りには奇妙なマークのようなものと、聞いたことの無い名称が白色で書かれている。

真ん中の留め具のようなものも、ユナンは見たことがなかった。どうやらボタンでは無いようだ。上着の中心を割くようにそれはついていた。簡単に開け閉めができそうであるが、彼はそれを全開にしている。中からは白いシャツが見えていた。そのシャツの素材は普通の布であるようだ。

全身がほぼ黒いユナンも人の事は言えないが、この少年の真つ赤な服装はどう見ても異質である。セーナ達もその服装のせいで彼を警戒しそうに思えるが、もうすっかり仲良くなっているようであった。それにユナンは少し違和感を感じるのだが…

「やだなあ。僕のこと忘れてしまったんですか? 酷いじゃないですか。」

ユナンの全力のツツコミを、少年は軽く流そうとする。しかし流すには少々無理がある。

セーナとは違う意味で俺がこんなやつ、忘れるわけないだろ! 全身真つ赤な服装してるんだぞ!?

出会っていきなり大声を上げたユナンに向かつて、セーナがその可

愛い瞳で睨みつけてくる。彼女の声には、たしかな怒りが宿っていた。

「ユナン！そんな事言ったら失礼じゃないの。ちゃんと謝って。」
何故かおかんみたいなお説教だが、たしかにセーナの言うことは正しい。いくら服装がヤバいとはいっても、それだけなのだ。初対面できなり大声を上げるユナンの方が、ヤバイやつなのかもしれない。

「えーと、いきなり大声出して悪かった。…そんで自己紹介とかしてもらえたら助かる。」

ユナンはぎこちない笑顔を浮かべながら、穏便に少年と話を済ませようとする。ニュートンに殺された時の教訓である。ヤバイやつほど、丁寧に付き合わなければならぬ。

まあこの少年からは、そんな『狂人』のオーラを微塵も感じられないが。

少年は何かを確信したような顔をした後に、ドヤ顔を決めて、自分の名前を明かす。

「僕の名前は前田優太です。趣味はゲームとアニメ鑑賞。どうぞよろしく願います！」

「マエダユウタ？なんか長い名前だな。それに、げえむ、あにめ？…」

ユナンは少年の長い名前と、聞いたことの無い趣味に困惑した。ユナンは田舎の村出身である。都会のことはよくわからないので、同世代ぐらいの人とも話が通じないのが恥ずかしい。

「ユナンも流行の波に乗っていかないか、すぐお爺さんになっちゃうわよ？」とか母さんに言われてたっけ。…たしかにそうなのかもしれない。王都に行ったら色々学ぼう。

そんなユナンの困惑する様子にマエダユウタは気にしていないようだった。寧ろ、ユナンの反応で何かを確信したように思える。

彼は苦笑しながら申し訳なさそうに、ユナンに語りかけた。

「すみません。ユウタって呼んでくれていいですよ。…やっぱリアニメやゲームとかは無いのか。」

どうやらユウタと呼ばば良いらしい。まあその方がユナンもしっ

くりときた。後半はぶつぶつ呟いていて、よく聞こえなかったが、まあいいだろう。

さて、こつちも自己紹介をしないとイケないな。

ユナンもキメ顔をして、ユウタに語りかける。

「俺の名前はユナン。趣味は魔獣退治と武器の手入れ！どうぞよろしく！」

ユウタの自己紹介をユナンは真似てみた。こういうのは初対面の印象が肝心なのである。…まあユナンが叫んでしまったせいで、彼のユナンに対する印象は、ただ下がりであるとは思うが。

「ず、随分と物騒な趣味をお持ちですね…」

そんなユナンの自己紹介にユウタは少しドン引きしていた。彼は笑顔が上手いが、流石に今回のユナンの発言を聞いて、顔が少し引きつっているようであった。

母に鍛えられておよそ4年。ドータ達と遊ぶ以外の青春を全て、戦闘訓練に注いってしまった悲しい少年は、まともな趣味などほとんど持ち合わせてはいなかったのだ。

——それはユナン自身が1番自覚している。

…王都へ行ったら新しい趣味が見つかるかも。

彼はまだ見ぬ王都に、全てを託したのであった。

ユナンとユウタの2人のやり取りを、他の4人は不思議そうに眺めていた。そんなに酷い会話だったであろうか。周りの変な視線に、ユナンは思わず冷や汗をかく。

「2人とも茶番はそこまでにして、次の店に行くわよー。」

そんな沈黙をアンナが破ってくれた。ユナンはほっとして、アンナに心の中でお礼を言った。ユウタを含めたみんなは、何事も無かったかのように歩き出す。

——そんな様子に少し違和感を感じていたのはユナンだけであった。

ユナン達は雑貨屋に足を踏み入れた。少し狭い店の中には、日用品やら何やらがギョウギョウに押し込まれていた。

旅に必要なものについて、ジークとアンナが話し合っている。王都近郊と言っても、道があまり整備されていないせいも、ここから王都まで歩いて1週間ほどはかかってしまうそうさ。あと少しだけ、旅は続く。

そんな2人の様子を、セーナが唇を綻ばせて、柔らかな視線で見つめていた。ユナンもセーナが何を考えているのかが分かった。

「2人とも本当に仲が良いよな。まるで熟年夫婦みたいだぜ。」

「うん。…少し羨ましいなって。」

ユナンの意見にセーナも同意する。彼女の水色の瞳は、晴天の空の色に似ている。しかし、今回はその空に様々な感情が浮かんでいるのが分かった。その感情の中身までは、ユナンには読み取れなかった。けれども、そんな互いに心から信頼し合える関係を、ユナンはセーナとも築いていきたいと思っている。「種族」の壁を乗り越えるのは難しいが、セーナとなら何故か出来る気がする。

そんな温かな2人の視線に気づいたアンナ達が訝しげに、こちらを見つめる。アンナは赤い眉を顰め、口を尖らせて文句を言ってきた。

「何よそのニヤニヤした視線は。2人とも、何かあるならいいなきいよ。」

「いや、2人のあまりの熟年夫婦っぷりに笑ってたんだよ。」

「アンナとジークって本当に仲が良いのね。」

「なっ!? 馬鹿言ってるんじゃないわよ。腐れ縁ってやつよ。く・き・れ・え・ん!」

「そ、そうさ。俺たちは同じ故郷で育ってな。」

ユナンとセーナの軽い茶化しに、2人は顔を赤らめ、揃って恥ずかしそうにしている。そういうところさ。

だけどやっぱり2人は幼なじみってやつか。どうりでたった2ヶ月の信頼関係には見えないと思った。幼なじみだと、やはりそういう関係を意識してしまうのであろうか。ユナンにも女の子の幼なじみが1人いるが、彼女は妹のような認識に近い。

——ユナンはまだ、まともに恋愛をした経験が無かったのだ。

そしてユナンは、恋愛『する』経験だけなら、星の数ほどありそうなキリマルを見た。何やらユウタと、ここそ奥で何かをしているようであった。

「ほう、『これ』に目をつけるとは。ユウタ君もお目が高い。」

「『これ』はあるんですね。驚きというか呆れたというか。」

「呆れ? いやいやユウタ君。オレ、『これ』には男の『夢』が沢山詰まっていると思うね!」

「うわ! 本物のケモ耳娘とか初めて見ましたよ!」

「ふつ、まだまだだな。ユウタ君は。」

2人が隠れながら見ていたのは「オトナ」の本であった。男2人、目を輝かせながらそれを眺めていた。

どうやって、この商品の山の中から見つけ出したのであろうか。ここまで来ると、一種の才能である。そう言った意味ではこのキリマルという男、大罪の十二宮レベルの『狂人』なのかもしれない。

「どうしたの? みんなで楽しそうにして。」

「うわあ!!」

セーナが3人に期待の視線を向けてくる。だがこれはセーナには見られたくない。というか見せたくない。ユナンは慌てて、誤魔化そうとする。

「なんでもないよ、男の『夢』を探してたんだよ。なっ?! キリマル。」

「お、おう。セーナちゃんにはちよつと早いかも…」

「——? わたし、これでもキリマルより少しだけ歳上なのよ?」

「あー! 分かったから。ちよつと面白いものがあっちにあるから、一緒に見に行こうぜ。」

ユナンは本から彼女を遠ざけようと必死だった。そういえばさつき、猫用のグッズを見つけたのだ。セーナと一緒にそれを見に行こう。…多分ユナンには使えないが。

「ユナン、今日は一段と変ね。大丈夫なの?」

そんなユナンの様子に、セーナは綺麗な眉を少し下げて心配していた。だが今回の行動は、ユナンの方が正しいのである。彼女に何と言われようが、ユナンは構わない。

——これも、彼女を守るためだ。

そしてテキトーな商品をセーナと一緒に見て、はしやぎながら、ユナンは時間を潰す。その途中、2人は奇妙な物を見つけた。

「なんだこれ？木で出来た人形？」

「ふふっ、変な顔ね。ユナンみたい。」

「流石にここまで酷くはねえよ!？」

それは木で出来た、人形であった。手や足は無いが、顔が描かれているため、人を模しているであろう。胴体にも何やら花のような模様が描かれていた。そんなおかしな人形でわいわいしていると、珍しくユウタから声を掛けられた。

彼は驚いた表情でこちらに語りかけてきた。

「それは、こけしじゃないですか。僕の国の伝統工芸品ですよ。目が黒丸なので、少し可愛くなっています。」

「へえ、ユウタの故郷なのか。それはちよつと気になるな。」

「まあ、もう行けないと思いますけど。…でもこれがあるって事は僕以外にも『いる』ということか。いや、それともパラレルワールドか？」

また後半は、独り言のようなものをぶつぶつと言っていてよく聞こえなかった。彼の癖なのであろうか。

どうやら、彼は故郷に問題があつて帰れないらしい。…俺と似たようなものか。

ユナンはそんな彼に親近感を覚える。王国騎士総出なら、あの黒い怪物も倒せそうではあるが。結局どうなったのかをユナンは知らない。

「わたし、これ可愛くて気に入ったわ！おじさん、これください。」
そんな2人の会話を他所に、セーナがこけしの購入を決意していた。彼女はウキウキとしながら、こけしを店の店主にまで持っていた。

…また、セーナは変なものを買う。彼女の趣味は未だによく分からない。

ユナン達は買い物を終え、雑貨屋を出た。そしてそのまま食堂へ行き、みんなで昼食をとった。時刻は昼過ぎ。必要な買い物を終え、後は自由時間である。

「ご飯は普通に変わらなくて安心しました！もつと、魔物の肉とかを使ったゲテモノが出てくるのかと思いましたよ。」

「ユウタはこの国をなんだと思ってるんだ…」

ユウタがお腹を満足そうにして、ふとこぼした発言を、ユナンは聞き逃さない。

しつかり者に見えるが、ユウタは考えが俺以上にぶっ飛んでいる。ユウタの故郷は相当な辺境の地なんだろうか。

「じゃあ後は自由行動ってことで。夕方、またここに集合ね。それじゃあ解散！」

「やった！これでオレは自由の身だあ!!」

「アンタはアタシ達と一緒に行動よ。」

どこかへ走りさろうとするキリマルの肩を、アンナがキリキリと掴む。その笑顔は何故か怖い。もう首輪は外されているが、キリマルの自由行動を許したわけではないらしい。

…ドンマイ、キリマル。

鍛冶屋の件も終えたし、これから何をしようかユナンが迷っていると、何やらこちらをじっと見つめてくる視線に気がついた。その可愛い視線には何か言いたいことがあるのだろう。それくらいはユナンも、セーナの事を理解してきたつもりである。その言葉を促すように、ユナンはセーナに優しく語りかけた。

「どうした、セーナ？何か俺に用事があるならなんでも言ってくれ。できる限りは手伝うよ。」

そんなユナンの発言に、セーナは一気に顔をぱつと明るくした。

そんなセーナの天使のような笑顔を見ることが出来たことに対して、ユナンは心の中で神に感謝を告げた。

「今なんでもするって言った？」

「いや、正しくは言っていないけど…」

セーナが純粹な笑顔で無邪気に、ユナンの言葉を確認した。

まあ、セーナの頼みならなんだって聞いてやりたい。彼女の笑顔には、それくらいの価値が十分にある。

あんまり、苦しくないお願いがいいな…

そんなユナンの心配は杞憂に終わる。彼女はとても純粹無垢な少女なのだ。

「わたし、ユナンの服を一緒に買いに行きたいな！…実はその真っ黒い服、あんまり好きじゃないの。」

買った物にわざわざ誘ってくれた嬉しさと、ユナンの服のセンスを否定された悲しさとで、おしくらまんじゅうされ、ユナンはよく分からない気持ちになった。もちろん、その頼みは受けるに決まっている。寧ろ、こちらから頼みたいくらいだ。

「お、おっけー。今すぐ行くこうぜ！…俺の服装、ずっと気にしてたんだな。」

「うん！すっごく気になってたの！」

セーナの悪気ない素敵な笑顔によつて、ユナンは心にダメージを負う。彼女の笑顔でユナンが傷ついたのは、もちろんこれが初めてである。フィーナといい、セーナといい、一切悪気なく人を傷つけてしまう性格というのは本当に恐ろしい。

「じゃあ、僕はアンナさんのグループについて行きますね。」

「分かったわ。じゃあみんな、どこか行きたいところはある？」

ユウタは『数』が多い方のグループについて行くつもりのようなのだ。

そしてアンナ達は相談しながらどこかへと歩いていった。

ナイス！ユウタ！愛してる！

ユナンは心の中でユウタを褒めたたえた。これでセーナと2人きりで行動ができる。この旅で2人きりになるのは、結構珍しい。セーナとグツと距離を縮められるチャンスであるのだ。

「それじゃあ、どこの店に行く？」

セーナがユナンの方を見つめて、笑顔でそう聞いてきた。

このセリフ、そしてこの状況…

——これって「デート」みたいじゃね!?

第二章3 『初めてのデート!?』

「というわけで、第1回ユナンの服装変えちやおう大作戦開始! 頑張るぞー、えいえいおー!」

「なんだそのテキストなネーミングセンス…」

「返事は?」

「え、えいえいおー。」

「そうそう。えいえいおー!!」

セーナがドヤ顔で、その可愛いこぶしをぎゅつと握りしめながら、気合いの入った声を出した。その様子はとても微笑ましいものだが、内容が内容なだけに、素直には喜べない。ユナンは複雑な気持ちのまま、何故か異様に元気な少女を眺めていた。

…というか第1回ってことは2回目もあるのか!?

もちろんユナンは大歓迎である。もつとも、本人はそんなことを全く意図せずに、言葉の響きだけでつけた可能性が高いが。まあ、セーナのネーミングセンスの無さについては放っておこう。

ちなみにユナンの服装は、黒いシャツの上に黒いジャケットを羽織り、下には黒いズボンという全身黒づくめの格好だ。もし殺人現場に居合わせたら、真っ先に犯人だと疑われそうな程、怪しい格好なのだが、本人はそれをさほど気にしてはいない。

一応、寝巻きや下着は旅先で買ったのだが、普通の服は1着も買っていないのだ。洗って、寝て起きたら乾いているので、換えの心配が必要ないからである。

それに何よりも、ユナンは服にそこまでこだわりがない。着ればなんでもいいのだ。

だがこの先、王都に到着すると、人に見られる機会も多くなる。ちゃんとした服を着てみるのもいいだろう。

——ちゃんとした服ってなんだろうな…

「ここ、男性用の服屋さんみたいね。」

セーナが、とある店の前で足を止める。それは民家3軒ぐらいの大

きさの木造建築の建物であった。結構大きな方だと思う。正面のガラスの中には、三体の木のマネキンがあり、男性用の服が着させられていた。年齢層は特に絞っていないように見える。

「すみませーん。」

セーナが木製のドアを開けた。細長いガラスが埋め込まれていて、ドア越しに中が見えるようになっていたのだ。そして、ドアが開いた瞬間、カランカランという鈴の音が鳴り響き、ユナン達の入店を知らせた。

「いらつしやいませ。おや可愛い嬢ちゃんと兄ちゃんかい。まあゆっくり見ていってくれ。」

接客に応じたのは、中年の男性。頭の正面が全部禿げていて、周りにしか黒い髪が残っていない。まあどこにでもいる、普通のおつちやんだ。赤朽葉色の大きなエプロンを来ており、ところどころには白い糸が引っ付いていた。

「じゃあ色々と店内を見て回りましょう。わたし、ユナンにぴったりの服を選んでくるわ！」

張り切って、セーナが店の中を意気揚々と駆けていく。

そういえば、セーナには、ファッションセンスというものがあるのだろうか。

ユナンは、何度か大きめの白いローブを脱いだセーナの姿を見たことがある。白と青を基調としたその服装は、セーナの白い肌と銀色の艶やかな美しい髪を存分に引き立たせていた。彼女の美しさが、よりいっそう輝くその服装は、まさに「ピツタリ」であった。それを自分で選んでいたのだとすれば、セーナのファッションセンスは相当に高いものだろう。

——だが何故か、ユナンにはそんな風な印象を彼女には持てないのだ。

彼女はその美しい女性の見た目の割には、中身がまだ幼い気がする。変な所だけ大人びているため、一概にもそうは言えないのだが、オシヤレをする乙女という感じには全く見えない。

だからこそ、ユナンは少し不安にも感じる。

彼女に任せつきりでもいいものか。自分の服なんだから、少しは自力で選んでみるか…

そう思い、店内を見て回ろうとした時だった。

「ユナン、来て来て。これはどう？可愛いわよ!」

店の奥からセーナの楽しそうな声が聞こえてきた。

…ちよつと選ぶの早くね？

ユナンはさらに不安を募らせながら、店の奥へと進む。そしてその奥で彼は信じられない光景を見た。

セーナは笑顔でクマの着ぐるみを持っていたのだ。それをユナンへと差し出す。彼女の瞳には自信が満ち溢れていた。ユナンは乾いた笑いをしながら、セーナのボケにツツコミを入れる。

「あはは。セーナ、今は仮装パーティーの衣装を選びに来たんじゃないぞ。」

「――？何言ってるの？普段着よ普段着。ユナンも可愛くなって、良いことづくめじゃない。」

「…まさか本気でいつてんの!?思わず自分の目を疑ったわ!」

セーナの本気のチョイスに、ユナンは驚きを通り越して、悲鳴を上げた。そんなユナンをセーナはきよとんとした目で見つめている。セーナの様子は可愛いが、今はそれどころでは無い。

ユナンの悪い予感が当たることはよくある。だがその遙か先を行ったのは、これが初めてである。

…というかこれ、顔も全て見えないよな!?俺の存在全否定じゃね?…セーナは俺のことが嫌いなかもしれない。

ユナンがそう思わずにはいられないほどの、酷いチョイスであった。そんなユナンの不服そうな様子を見て、セーナは気を取り直して新しい服を持ってきた。

…正直、あまり期待はしていない。

「なら、これはどう!?結構自信があるの。」

そう言っつてセーナが持ってきた来たのは、これまた仮装パーティー用。道化師のピエロの服装であった。

…というか、仮装パーティー用コーナーと、上に看板がぶら下がって

いる。ここで選ぶこと自体が間違っているのだ。

「…セーナ。」

ユナンは重い口を開いた。そんなユナンの次の言葉を、セーナが息を飲んで待っている。

ユナンは必死に頭を高速回転させ、何とか彼女を傷つけまいと言葉を選ぶ。その速度は、ニユートンに「答え」を聞かれた時と同じほどであった。

そうして彼の口から出てきたのは、結局ありきたりな言葉であった。

「一緒に服、選ぼうか。」

お互いに服のセンスが壊滅的な2人は、何度も服選びに挑戦し続けた。

——見られても恥ずかしくない服を選ぶためだけに。

セーナは、その度重なる失敗により、自分には服を選ぶセンスが無いことに、とうとう気がついてしまった。

それからの彼女は、酷く健気で、恥ずかしそうにユナンに服を提案してきた。さつきまで、クマの着ぐるみを持って、自信満々にユナンに提案してきた彼女は、まるで別人のようである。

店主のおっちゃんからちよくちよく助言を貰ったおかげで、ユナン達は何とか服を選ぶことが出来た。

そのお披露目会が、今まさに始まるうとしていた。

そしてユナンは新品の服を着て、2人の前に出てきた。

「わあ。結構似合ってるわ、ユナン！」

「意外と似合うじゃねえか、兄ちゃん。」

長袖の白いTシャツの上に、襟付きの黒いタンクトップを羽織っている。下は紺と黒の間の色の、カジユアルなズボンだ。そしてアクセントに、紫色に光るネックレスを首から下げている。

まあぶっちゃけ普通の服装なのだが、元の黒ずくめの服装からしてみれば、凄い変化である。

そこら辺を普通に歩いていても、別に目立たないのだ。それは彼に

とっては、とても大きな1歩である。

「おっちゃん、色々ありがとうな！」

ユナンは今回の1番の功績者に改めてお礼を言った。彼がいなければ、今回の服選びは失敗に終わっていたであろう。店主は綺麗に並んだ白い歯を見せながら、爽快な顔でユナンに返事をした。

「良いってもんよ！兄ちゃんもそろそろ年頃なんだから、オシヤレには気を使ってな！」

元氣よくそう言って、店主はセーナとユナンの様子を眺めていた。なんか意味深な表情をしているが、残念ながら、ユナンとセーナとの間には何も無い。もちろんユナンは、これからそれくらい、セーナと仲良くなりたいとは思っているのだが。

まだ2人は出会って1ヶ月ほどしか経っていない。そういうのはずっと先の話である。

セーナはそんな店主のよく分からない様子を理解出来ずに、きよんととしていた。

セーナの精神年齢は少し幼さ過ぎる。今はそれでいいのだ。成長を急かして良いことなんて、1つも無い。

ユナン達は代金を払った後、店主に別れのあいさつをして、店を出た。ユナンは上機嫌だった。セーナのおかげでとても有意義な時間を過ごすことが出来たからである。

セーナの方はというと、自分の服選びのセンスが無いことに余程こたえたのか、まだ少ししよんぼりとしていた。白いローブで見えないが、彼女の青い翼も下に垂れ下がっているように感じる。

「ユナン、ごめんなさい。わたしがユナンの服のセンスの事、全然言える立場じゃなかったよね…」

「いや、いいんだよ。まずは己の力量を知ることからってね。…また一緒に服を見に行こうぜ。今度はセーナの服も選ばう。」

ユナンはへこたれて、萎れているセーナに向かって前向きな言葉を投げかける。そんなユナンの発言に、セーナは目を大きく見開いたあと、素敵な笑顔を咲かせた。

「うん。約束よ、ユナン！」

そしてユナンとセーナは指切りをして、そう約束を交わした。

「竜人」にとつての指切りは、非常に大きな意味があるのだが、その事をユナンはまだ知らない。ユナンは、彼女について、知らないことが沢山あるのだ。だが、そんなに急がなくても、だんだんとお互いを知ることになるであろう。少年が彼女の隣にいる限り。

セーナは、どんどんこれからも成長をし続けていくだろう。つまりまだまだ、美しく、魅力的な女性になり得るということだ。それを俺は隣で少しづつ手助けしていきたい。

そう思いながら、ユナンはセーナと共に街を歩き出す。花が綺麗な街と、ルーラットは呼ばれているのだ。色とりどりの花々は、ユナン達に微笑んでいるようであった。彼らには、ユナン達が綺麗な花を咲かす前の蕾に見えているに違いない。

——途中で枯れてしまわずに、綺麗な花を咲かせることができるのか。それはユナン達の行動次第である。

場面は変わり、キリマル達へ。ユナン達が服選びに葛藤していた頃、キリマルは平和な様子に飽き飽きとしていた。

オレ、そんなに悪いことしたかなあ。一期一会の出会いは大切だった、婆ちゃんも言ってたし、オレ自身もそう思うんだけど……

ジークやアンナと行動を共にすることが出来たのも、そうした1つの出会いを大切にしたら結果である。アンナをお茶会に誘って、色々あって一緒に旅をすることになったのだ。オレが1人だったら、王都にたどり着けていたかどうかさえ、分からない。

今はアンナ達と一緒に、ルーラットの有名なスポットに来ている。段々畑に果樹では無く、花を植えているのだ。辺り一面に咲く黄色い花々。確かに綺麗ではあるが、どうせなら女の子と2人つきりで来た。花は素敵だが、女の子が隣にいて、初めて真価を発揮するものと、キリマルは思うのだ。

「うわあー1度来てみたかったの！すっごく綺麗ね。」

「そうだな。他にもこんな所があれば行ってみたいもんだ。」

しかもジークとアンナが2人で勝手に盛り上がっていると来た。

ユウタとオレは置いてけぼり。2人は完全に花畑に心を奪われていた。

——今なら抜け出せるのではないか？

「おい、ユウタ。行くぞ。」

「なんですか？キリマル。」

「今ならこの場を抜け出せる。オレたちは『夢』を追いかけに行くぞ！」

キリマルとユウタがこそごと、アンナ達の後ろで話し合っている。そして、ユウタがキリマルの『夢』という言葉聞いた瞬間、脱出を決意した顔になった。

「リア充をずっと見てるのもイラつきますからね。行きましょう。」

『夢』が僕たちを待っています！」

「それでこそ、『友』だ。2人目の相棒、行くぞ！」

そうしてキリマルが先頭になって忍び足で歩き出す。キリマルの『友』という言葉聞いて、表情を固くしていたユウタだが、すぐに正気を取り戻して、彼の後を追った。

「あら、あの2人いつの間に行ってしまったのかしら。」

「まあユウタもいるし、大丈夫だろう。」

「そうね。あいつらに時間を使うのも勿体ないし、次行きましょ？」

アンナ達は、遅れて2人の脱走に気がついたが、それをスルーした。

今は、目の前の綺麗な花畑を眺めるのに、集中したかったからだ。

「ふふん。相棒、これを見たまえ。」

「う、これは…」

キリマル達がやってきたのは、路地裏にある怪しいお店。店の看板には「マッサージ屋」と書かれていた。

ユウタ、17歳で初めて怪しいお店に入る。元の世界にもこういうのはあったが、周りの人の目や法律のせいで、行くに行けなかった場所である。

しかも今回は『異世界』の怪しいお店。ユウタの大好きなケモ耳娘

に会える可能性もある。それは向こうの世界では絶対に会えない人々でもある。ユウタは『夢』のすぐ前にいたのだ。

キリマルと共に店の中へ入った。怪しげな鈴の音が鳴り響き、ユウタの緊張が高まる。

カウンターには豊満な胸をした、うさ耳をつけた女性がいた。残念ながら本当の獣人では無いが、それでもテンションは爆上がりである。

「あら、可愛い坊やたち。いらっしやい。…マッサージが終わった『後』は、極上の快感よ。」

「うひょー!!」

キリマルが聞いた事のない嬉しそうな悲鳴を上げた。

…人間って本当にこんな声が出るんだな。

ユウタは、目をまん丸くしてその場に飛び上がるキリマルを眺めながら、そんな感想を抱いた。しかし、キリマルの気持ちも分からなくはない。ユウタ自身も興奮で心臓がバクバクと鳴っていた。

2人は代金を払って、別々の部屋へと進む。

「これが終わったら、2人とも『オトナ』の階段を登ったことになるな!」

ウインクしながら、爽やかな声で、キリマルが別れ際にユウタにそう語りかけてきた。ユウタも、ドヤ顔でグーサインをキリマルに返す。

——『夢』を追う2人の姿は、ある意味、光り輝いていたのであった。

ユウタは普通のベッドに仰向けになって寝かされた。そして、女の人から黒いアイマスクを渡される。

「はい、これ。付けておいてね。」

ユウタは少し戸惑ったが、初めてのこういう経験だ。素直に従っておいた方がいいだろう。ユウタは頷いて、アイマスクをつけた。

こういう場面、RPGのゲームにもあったな。それが実際にこうして目の前で起こっていると思うと、すげえな…

少し経ってから扉がガチャリと開いた音がした。

——キター!!

ユウタは心の中でそう叫ぶ。まさかの初めてが異世界では……。誰がそんなことを本気で思うだろうか。だが、ユウタは運命のいたずらで本当にそうなってしまうのだ。

——お父さん、お母さん。僕、大人になります。

そして少年は静かに目をつぶった。

だが次の瞬間、硬い感触とともに、今まで味わったことの無い激痛がユウタを襲う。

「あああああああああああああ！」

あまりの痛さに、今まで出したことない声が出た。

僕は何をされているんだ!?! 新手の敵に騙されたとか? いや、違う。

これは：

——ガチのマッサージだ！

その腕はまさに『異世界』級。ユウタも家族旅行の時に、マッサージを受けたことはあったが、それとは比べ物にならない。

——その痛さも、効果も絶大であった。

おっさんに肩や足などを揉まれること1時間。ようやくユウタは地獄から開放された。

たしかに身体は、自分が飛べるのではないかと錯覚してしまうほどに軽くなった。そして同時に、ユウタは思い知らされる。

——異世界怖え：

奇しくも、彼の異世界での初の「恐怖」は、この怪しい店で刻みつけられることになったのだ。もう今後、彼は決して怪しいお店に入ることは無いであろう。

やはり、体験が1番の教訓になるのである。

同じタイミングでキリマルも出てきた。キリマルの頬は痩せこけたように見え、あの地獄から何とか生き延びたことが窺える。だが、かける言葉も見つからず、ユウタは一応キリマルに聞いてみることにした。

「1歩、『オトナ』に近づくことができました？」

そんなユウタの質問に、キリマルは涙目になりながら、全身をプルプルと震わせてこう答えた。

「うん。オレ、1歩『大人』に近づいたよ。」

この衝撃的な体験は、彼らに決して忘れることの無い教訓を与えたであろう。

そして2人の少年はまた1歩、『大人』の階段を登ったのであった。

第二章 4 『怪談話』

時刻は夕方。ユナンとセーナは時間になったので、アンナ達と合流する為に食堂へと向かっていた。

その間、ユナンの顔はずっとニヤニヤとしていた。その理由は、別にセーナとずっと一緒に昼を過ごしたことだけでは無い。

ユナンは新しくなった服装に対するみんなの反応が、楽しみであったのだ。

服装にうるさいのは、案外キリマルである。キリマルは、黄色と緑色を基調としたあのハオリを、三領も持っている。しかも毎日しっかりと、それらを手入れをしているのだ。彼のハオリにシワが寄っている日を、ユナンは1日も見たことが無いほどである。説得力がある分には別にいいのだが…

「おいおい、ユナン。服装がだらしないと、紳士失格だぞ。モテないよ、そんなんじゃない！」

——キリマルの注意はとにかく「ウザイ」のだ。

ドータと同じレベルでうざい。しかも、「毎日」だ。こっちの気が狂いそうになる。

しかし今日でそんな日ともおさらばだ。ユナンはセーナとおつちちゃんの協力のおかげで、「普通」の格好をした少年に生まれ変わったのだ！

ユナンの様子を見て、セーナがジト目でこちらを見つめてくる。セーナは「目」で訴える事が多い。だが、さすがのユナンもそれだけでは、彼女の考えを完璧に理解することは不可能だ。だからこそ、彼女にはそろそろ、言いたいことを口にする癖をつけて欲しい。

「どしたの？なんかやつぱり、俺の格好おかしいか？」

「いや格好はもう大丈夫。…おかしいのは顔？」

「それはもう直しようが無いじゃん！俺の目付きの悪さは生まれつきだよ!!」

とうとうセーナから、生まれ持った体質の事まで言われ始めた。ユナンは自分のことを結構図太い性格であると、自負しているつもりだ

が、これは流石に心が折れそうである。

そんなユナンの心からの叫びを、セーナは否定した。

「いやそうじゃないの。目付きとかの話じゃなくて。…ユナン、わたしに何か隠してるでしょ。」

セーナは少し怒ったような声で、ユナンを責める。その言葉を聞いて、ユナンの表情が一瞬固まった。

——セーナはさすがとしか言い様がない。

セーナにはユナンの事がなんでもお見通しのようだ。正直、怖いくらいである。隠さなければいけない時まで、彼女には勘づかれそうなのがするからだ。

もちろんユナンは、服装に対するみんなの反応を楽しみにしていた。だが、彼の頭を本当に支配していたのは、それでは無いのだ。

——それはユウタのことである。

ユナンからしてみれば、明らかに彼の存在は「異常」であるのだ。たった半日ほどで、アンナやキリマルはともかく、ジークまで心を許すはずがないからだ。

しかしユナンには、どうにも彼が悪い人には見えない。だからこそ、困っている。

敵か味方が曖昧な状態にいる彼を、どう扱うべきかを。

ただ残念ながら、今回の件もセーナには相談できない。彼女もまた、ユウタの存在を当然と思っている人の1人であるからだ。だから、嘘ではないギリギリの言葉で、ユナンは説明した。

「…セーナには隠せないな。実は、ユウタの事で悩んでるんだ。上手く付き合えなくてさ。」

「そうなの？ユウタとユナンは、結構仲が良いようにみえるけど…。そんなことで悩むなんて、やっぱりユナンは変な人ね。」

いつもと同じ言葉。だが、今回に限っては彼女達の方が「変」だ。本当に正常なのはユナンの方である。

彼のことについて考えていると、遠くから男の子の、必死に誰かを呼ぶ声が聞こえてきた。

「ユイちゃん！ユイちゃん！聞こえたら返事してくれよー！」

走りながら、男の子は喉が枯れるほど必死に呼びかけていた。10歳くらいの男の子であろうか。

真っ青な半袖のシャツにクリーム色の短パンを履いている少年だ。茶色の髪が、鳥のトサカのようにとんがっている。

迷子の子を探しているのだろうか。

——もちろん、助けないはずがない。

まあユナンが、平気で泣きそうな男の子を見捨てるような性格でも、セーナがそれを許すはずがない。仲間を守るため、どちらにせよ、ユナンはこの男の子を助けたであろう。

ユナン達は男の子の元へ駆け寄った。

「どうした？俺はユナン。そしてこの美人なお姉さんがセーナ。君の名前と、困っている内容を聞かせて欲しい。」

ユナンは落ち着いた声で男の子に話しかける。もう、こういうのにも慣れたもんだ。

外に出るまでは分からなかったが、世界には毎日、無数の問題が起きている。旅に出てみると、それがよく分かるのだ。

「あ、あの。ユイちゃんが…」

男の子はいきなり声をかけられて、慌てふためいているようであった。そんな彼を落ち着かせるように、セーナは地母神のような眼差しを男の子へと向ける。そして優しい声で彼に語りかけた。

「どうしたの？何があったか、順番に説明してみて。」

「…みんなで怪談話をしてたんだ。蜘蛛女がこちら辺の森をうろついているって。普通そんなの信じないじゃん。でも、ユイちゃんだけがその話を本当に信じて行っちゃって！おいらがそんな話しなければ…」

男の子の話を聞いて、ユナンとセーナがお互いに顔を見合わせる。2人とも、大体の状況は把握したようであった。

蜘蛛女の話が特に問題なのではない。今の「時間帯」と女の子の向かった「場所」が問題なのだ。夜に、華奢な女の子が1人で森を彷徨えば、どうなるか。

——答えはただ1つ。魔獣の餌だ。

ただ人を探すにしても、人数が多いに越したことはない。一旦はアンナ達と合流するのが先である。セーナがキリツとした顔で、頼もしそうにその胸を張った。

「大丈夫、お姉さんたちに任せて。君の名前はなんて言うの？」

「ダイって言うんだ。助けてくれるのはありがたいんだけどよ、今の時間の森は危なくて……」

心配そうな表情を浮かべるダイに向かって、セーナがウィンクをした。……少しぎこちない気がする。それを知ったら絶対にへこむので、本人には言わないでおこう。

「お姉さんたち、こう見えても結構強いだよ。蜘蛛女でもなんでもかかってきなさい！」

さすがのユナンでも、そんなバケモノの相手はしたく無いのだが。というかそれ、もはや魔獣じゃないだろ……

ユナンはそんなことを思いながら、ダイを連れて、急いでアンナ達の元へと向かう。

——もうユウタの事なんて、考えている暇は無かった。

ユナン達が集合場所へ戻ると、もう他のみんなは既に集まっていた。ユナンは息を荒くしながら、大声でみんなに向かって叫ぶ。

「おーい！みんな、ちよつと聞いてくれ！」

「あら、ユナン。——！服を買ったのね。似合ってるじゃない。」

「俺もユナンに負けてはいられないな。」
ユナンの服装が変わった様子を見て、アンナとジークがそれを褒めてくれた。本来なら、ユナンはその場に飛び上がって、喜びまくるぐらい嬉しい言葉なのだが、今はそれどころでは無い。時間が惜しいのだ。

「ありがとうな。それはまた後で聞かせて欲しい。今は緊急の用なんだ。」

そう前置きをして、ユナンが手短かに状況を説明し始めた。女の子の命は、ユナン達の手にかかっていると云っても過言ではない。

「なるほどね。女の子が1人で森に…。それは大変ね。」

大体の話を聞いたアンナが、深刻そうに赤い眉を顰めて、現状をそう判断する。まだ日は沈みきってはいないが、夕方から活動する魔獣の中にはいるのだ。事態は一刻を争うであろう。

「女の子が1人で森に!? 大変だ!」といつもの調子で、話を聞いたキリマルが、まさしく雷神の如きスピードで駆け出しそうなものなんだが、今日は何故だかあまり元気がない。

そんな何故かしよんぼりしているキリマルの様子を見て、ユナンが不思議そうに首を傾げて声をかけた。

「どうしたんだ、キリマル。どこか体調でも悪いのか?」

「ああ。いや、身体の調子はむちゃくちゃ良いよ。…身体はね。」

「今はそつとしておいてください。僕たちは『夢』に敗れたんです…」

キリマルの言葉に付け足すように、横からユウタも、ユナンに声をかけてきた。ユウタも表には出ていないが、無理に笑顔を作っているのがバレバレなほど、疲れ切っていた。

…何やら気になる2人の様子だが、それも後回しである。最優先事項は一つだけ。

「それじゃあダイ。森へ俺たちを連れて行ってくれ。」

ユナンは力強く男の子に向けて、そう語りかける。その声からは、頼もしさを感じられた。ユナンも、旅によって少しは成長したということだ。…だが、相変わらず魔法が使えないのは同じである。

「森はこつちだよ!」

ダイに連れられて、ユナン達は街外れの森へと向かう。

空気が激んでいるように感じる。そしてじめじめとした感覚のせいで、背筋に寒気が走った。もう日も当たらなくなった森は、ひんやりと冷たかった。

不気味にねじ曲がった木がたくさん生い茂っている。土が紫色なものも相まって、余計に怖さを掻き立てていた。

ユナンでも少し怖いくらいである。たしかに、怪談話を作る上での

場所設定としては、最適である。

「よくこんな場所に1人で入ったな。」

「ほんと。わたしもさすがに夕方からは入れないかも。」

「昼なら1人でも入れるのかよ……」

走りながら、皮肉混じりの言葉を呟いたユナンに向かって、セーナが勇ましい感想を述べてきた。ユナンは、昼でもこんな森には入りたくない。

そんな森に、何故少女はわざわざ1人で入ったのだろう。ユナンは、ある質問をダイに投げかける。ユイという少女を探す、何かの手がかりになるかもしれないからだ。

「それでその怪談話って、具体的にはどんな話だったの？ 搜索の手がかりになるかもしれないから、教えて欲しいんだ。」

そして少しの沈黙の後、ダイが静かに語り始めた。

ある村にリリイという女の子と、その母親が、一緒に仲良く暮らしていました。しかし母親は、村で伝染している謎の病にかかってしまったのです。母親はやせ衰え、日に日に弱っていきました。

そんなある日、リリイは村のお爺さんから、謎の病を治す方法がある事を聞きました。

その方法はたった一つだけ。ワミマーム森林の奥深くにだけ生えているという、光るすすらの葉を煎じて飲ませるというものでした。

ただその森林には恐ろしい化け物「蜘蛛女」が住んでいて、そのすずらんを守っているという噂があったのです。けれどリリイは、森へ行く事を少しも迷いませんでした。なぜならリリイは、大好きなお母さんと一緒に、また綺麗な花畑の中を歩きたかったからです。1人で歩く花畑はとても切ないものなのです。

リリイは護身用の短剣を持っていき、その森林へと向かいました。そしてなんと、リリイは森の奥深くで、光るすすらんを発見したのです。しかしその前には、本当に噂通り、大きな蜘蛛女が立ちまわっていました。

ここまで来たからには、リリイは怯みません。決死の覚悟で蜘蛛女の急所目掛けて、持ってきた短剣を突き出したのです。蜘蛛女はその時、何故か抵抗をしませんでした。そしてリリイは無事、光るすずらんを手に入れることができたのでした。

家の前でリリイは、元気な姿に戻る母の姿を思い浮かべていました。

——そして家の扉を軽快に開けた少女の前には、何故か蜘蛛女がいたのです。

さらに蜘蛛女は醜い声で「おがえり」とリリイに声を掛けたのです。リリイは母親が蜘蛛女になってしまったことを悟り、持っていたすずらんを手から落としました。

蜘蛛女の様子がおかしくなり、リリイに突然襲いかかってきました。しかし、リリイは全く抵抗しません。なぜなら、抵抗すれば、自分の母親を殺すようなものだからです。

それに目の前の、既に母ではなくなった化け物を殺したとしても、リリイの夢はもう一生叶いません。そしてリリイは全てを諦めて、静かに目を閉じたのでした。

——少女の身体から真っ赤な花が咲きました。

その壮絶な話の内容に、ユナン達は絶句した。そんな重苦しい雰囲気になんて耐えきれなくなつて、最初に声を上げたのはユナンだ。

「怪談話っていうか、普通にすっごく悲しい話じゃねえか！ つーかその話、本当にダイが考えたものなのか？」

「そんな訳ないじゃん。変な男の人が街の広場で弾き語りをしてながら、その話をしてたんだよ！ 話のネタがちやうど切れてて、つい……」
そんなダイの説明にユナンは納得がいく。どうみても、子供が遊び半分で作った話ではない。吟遊詩人ならそれくらいの話、簡単に作れるであろう。

それにしても、実際に森の名前まで言つて、やけに現実味のある話だったな……

「蜘蛛女なんているわけないのにな。全く酷い話だぜ。俺はハッ

ピーエンドの方が、気分が良くなって好きなんだ。」

ユナンは強がりながら、鼻をならしてその悲しいお話を批評した。しかし後半、他のみんなはユナンの言葉を聞いてはいなかった。

セーナ達が、顔を真つ青にしながらこちらを見ている。全く、セーナもあれだけ強がつておきながら、本当は怖がりだなんて可愛いな。しかし、みんなの視線がユナンの方を向いていないことに、遅れて気づく。あのアンナが顔を青白くして、指を差しているのだ。

——まるで、ユナンに後ろを向けと言わんばかりに。

「なんだなんだ？みんな怖気づいちやって。後ろがどうし……」

ユナンは後ろを振り向いて絶句した。その時彼は、呼吸すら忘れていたのだ。

——ユナンの身長のおよそ3倍ほどある大きな蜘蛛女が、たしかに目の前に存在していた。

第二章5 『弱虫な雷神』

ユナンが振り返ると、目の前には大きな蜘蛛女が、赤く光る目で見つらるるを睨みつけていた。

体長は4メートルはあるであろうか。下半身は蜘蛛の姿。そして蜘蛛の腹から上の部分には、黒い長髪で、雪のように真っ白な肌をした全裸の女性の上半身が、不自然にくつつけられていた。それは、生物としてはあまりにも醜く、生命に対する冒瀆であった。

蜘蛛の下半身は黄色と黒色のまだら模様をしており、危険な存在であることが、その体色からも示唆されていた。

胸の部分は白い糸でサラシを巻いており、その醜い姿になつてなお、人の恥じらいの心が残っているように感じた。だがそいつは人ではない。ただの化け物である。

——いやデカすぎんだろ！赤い目ってことはこいつも魔獣なのか!?

ユナンがそんな事を心の中で叫ぶ。有り得ない幻想上の生物の登場に、ユナンの思考は止まらない。しかし、敵がわざわざ考える時間を与えてくれるはずが無い。

——女の腕の部分が変形し、獰猛な蜘蛛の足の部分へと変化する。それはただの蜘蛛の足では無かった。なんと少し変形していて、鋭い刃のようになっていたのだ。その刃は、光が届かない森の中であるにも関わらず、ギラリと怪しい光を放つ。

そして次の瞬間、蜘蛛女はユナンに向けてその刃を振りかざしたのだ。

「うおっー」

ユナンは咄嗟に屈んで、何とかその攻撃を躲す。蜘蛛女の攻撃が空を切り、高く鋭い音が発生した。そして、遅れて凄まじい風がユナンに押し寄せたのだ。

なんて風圧だ。もし切られたら、ユナンの首なんて簡単に飛んでいってしまうであろう。

その事実にも、ユナンの額からは汗が零れる。もちろん、こんな所で

死ぬつもりなんて毛頭ない。

「ユナン！避ける！」

後ろからジークの叫び声が聞こえ、ユナンは勢いよく斜め後ろに飛んだ。すると蜘蛛女目掛けて、本当に氷だけで出来た矢が三本放たれた。その威力も向上しており、蜘蛛女の腕や首を容易く吹き飛ばした。

ジークは何も無い空間から、氷の矢を三本生成する事が出来るようになっていたのだ。だからといって、弓の必要性が無くなった訳では無い。弓を使えばさらに遠くに、そして大きな威力で攻撃をすることが出来るのだ。だが彼はそれを使うまでも無いと判断したのである。

しかし蜘蛛女は、頭を吹き飛ばされてなお、黒い霧となって消えることは無かった。よく見ると、蜘蛛女の傷口が何やら蠢いている。そしてさっきの攻撃なんて無かったかのように、綺麗に再生したのであった。

その異常なまでの生命力に、ユナン達は驚きを隠せない。今までにも何度か、再生する魔獣に出会ったことはあるが、ここまで再生能力に優れた敵は、ユナン達も初めて見たのである。

「おりゃあ！死になさい！！」

そんな蜘蛛女に向かって、炎の両手剣の一撃が放たれた。辺りに熱風が生じ、そのチリチリとした少し熱い風が、ユナンの肌にも伝わってきた。

そして赤い炎は切り口だけでは無く、魔獣の体全体へと広がっている。蜘蛛女は炎に包まれ、苦しそうに悶えていた。どうやら、その状態では上手く再生できないようであった。

そしてそのまま蜘蛛女は黒い霧となって消えていった。

「さすがアンナとジーク。頼りになるぜ！」

ユナンは明るい顔で、そんな2人の戦闘を褒めた。

2人は目覚ましい成長を遂げていたのだ。これからも、彼らはどんどん強くなっていくであろう。

ユナンは、そんな2人を憧れと羨望の眼差しで見つめていた。ユナ

ンにもいつか魔法を使える日が来るのであろうか。…いや、使えるようになる努力をしなければならぬ。

ユナンは心の中で、そうやって自分を戒める。

「ふん。あつたり前よ。アタシ達はユナンより、1ヶ月も先輩なのよ?」

「今回の俺の攻撃は、奴には通用しなかった。…次は弓で再生できないくらいまで、全身を吹き飛ばす。」

そんなユナンの賞賛の声に、2人は思い思いの感想を口にする。褒められて、少し照れくさくなっているのが隠しきれしていない。

ユナンはそんな2人の様子を見て微笑んだ。

——しかし次の瞬間、ユナン、ジーク、ダイの足に、白い糸が巻きついたので。

「えっ?」

一瞬の出来事に、ユナンは情けない声を上げることしか出来なかった。

そしてユナン達はその糸の正体について思考を巡らせる前に、糸が彼らを勢いよく引つ張ったのだ。

「なんだこれ!」

「しまった!」

「うわああ!」

そして3人は森の奥へと、糸によって引つ張られていった。そんな状況をすぐには飲み込めずに、セーナ達はただその場で固まっていた。だが少しして正気を取り戻し、慌ててユナン達の後を追いかけてうとする。

「追いかけてみましょう!」

アンナを先頭にして、『3人』はユナン達が連れら去られてしまった森の奥深くへと向かおうとする。しかし、そんなアンナ達の進行を邪魔するように、さつきと同じ姿をした蜘蛛女の集団が立ちはだかった。

「こんなにたくさん…」

それを見たセーナは、不安そうに弱々しく呟いた。

ユナン達が心配である。さっきの戦闘を見た限り、蜘蛛女に『青』の魔法で作る尖った氷の礫は通用しそうにない。つまり、物理攻撃がこの魔獣達にはあまり通用しないのだ。それなのに、連れ去られてしまったのはジーク、ユナンという物理攻撃が得意な面子である。ダイはもちろん、非戦闘員だ。つまり、ユナン達には相性が悪い。

アンナは物理攻撃に魔法が付与されているので、蜘蛛女とは相性が良い。だからこそユナン達と合流してあげたいのだが、この魔獣の群れである。さすがのアンナでも、この数をすぐには片付けられないだろう。

セーナも手伝ってあげたいが、氷の礫しか使えないため、ほとんど無力である。もともと、人の姿でも身を守るように護身用で覚えた魔法なのだ。「人間」相手ならそれだけでも十分過ぎる威力なのだが、「魔獣」相手だと、こうした事態になってしまうのも仕方がない。

せめて、2人まともな戦力がいれば、魔獣の群れを速やかに片付け、ユナン達の元へと向かうことが出来るであろう。

セーナはチラツとキリマルの方を見た。彼は蜘蛛女を見てから、顔を真っ白にして失神状態となっていた。戦力になりそうもない。

しかし、セーナが竜の姿になるわけにもいかないのだ。実はセーナが人前で竜にはなりたくない理由が、自分の信念以外にもう1つあった。

——彼女は未だに、竜の姿での制御が上手く出来ないのである。簡単に言うと、意識が飛び飛びになってしまう。つまり、自分が仲間を傷つけてしまう可能性があったのだ。

竜になって仲間を傷つけるぐらいなら、死んだ方がマシである。

——仲間を守りたいのに力が足りない。

セーナはそう思えるくらい大切な「仲間」を持った。そして、自分の魔法が通用しない危機的「状況」に置かれた事で、生まれて初めて自分の無力さに嘆いたのだ。それは、彼女の今後の成長を促すものでもあった。

「青」の魔法は、非常に扱うのが難しいのである。氷を生み出すくらいなら、練習すれば普通の人でも到達できる地点だ。しかし、その先

から一気に難易度が跳ね上がるのである。そこからは魔法を教えてくれる「師匠」を持たなければ、先に進むのは難しい。

けれどセーナにだって、そんなことが言い訳にしか過ぎないことは分かっている。

——今、自分の出来る限りの事をするのよ！

そう自分を叱咤して、セーナは周囲に無数の氷の礫を展開する。辺りがその冷気によって冷やされ、真冬のように気温が下がる。しかし燃えるようなアンナには、ほとんどその影響がなかった。

そしてセーナは蜘蛛女達の「足」を狙った。蜘蛛の胴体には八本の足がついている。でもその1つ1つは細く、そこまで耐久はない。一体につき氷の礫の射出が2発で、彼らはほとんどその場から動けなくなる。

セーナは、それを魔獣達の足に向かって無数に射出。そして敵の動きを止める。再生能力は凄まじいが、再生速度は普通である。魔獣が足を復活させるには、少しだけ時間がかかるのだ。

「ナイスよー！セーナ。」

アンナがセーナに向かって頼もしくウインクをして、炎を全身に纏いながら蜘蛛女に重い一撃を叩きつける。さつきよりも、炎の勢いが強まっているようであった。そして動けなくなった蜘蛛女を、次々と黒い霧へと変えていく。

その姿はまさしく炎の女戦士。赤く光輝くアンナは、この世ならざる存在を跡形もなく焼き尽くす。

——しかし多勢に無勢。蜘蛛女達はわらわらと無限のように湧いてくる。

次第にアンナ達が押され始めたのだ。そして蜘蛛女の強靱な刃がついには、セーナの元にまで向けられる。

「あつ。」

その攻撃に反応が遅れたセーナは弱々しく声を上げた。しかし敵は待つてはくれない。このままでは儂げな少女の身体から、真っ赤な花が咲くであろう。

——死にたくない。

そんな「死」が迫ってくる間際、少女の頭には目付きの悪い少年の姿が思い浮かんだ。

彼と約束したの。また一緒に買い物に行くって。今、わたしが死んじゃったら、その約束を果たせなくなっちゃう。そんなのは嫌！

セーナの中から、様々な「感情」が溢れ出る。それはセーナの周囲を急速に冷却させ、攻撃してくる魔獣の動きを鈍らせた。

「アタシの可愛いセーナに何してくれてんのよ!!」

そして一方で、アンナも新たな成長を遂げようとしていた。

目を少し離れた隙に、いつの間にか他の蜘蛛女がセーナの元にまで行ってしまっていたのだ。

少しセーナとは距離があり、火球はその蜘蛛女には届かない。アンナは責任感が非常に強い女の子である。一緒に旅する大切な仲間を、こんな所で死なせるわけにはいかないのだ。

——アタシにはみんなを守る役目があるのよ！

その燃えさかるほど熱い思いが伝わったのか、なんとセーナの周囲に炎の盾が展開された。

蜘蛛女がセーナに鋭い攻撃を仕掛けたが、その盾によって弾かれる。そしてその接触を通じて、真っ赤な炎が波のように蜘蛛女の腕を伝っていく。そして全身に燃え広がった炎によって、蜘蛛女は黒い霧へと変わっていった。

——『感情』の炎は敵を焼き尽くすだけではない。姿を変えて、仲間を守ることで出て来るのだ。

「アンナ！ありがとう、助かったわ！」

セーナは命を救ってくれたアンナに向かってお礼を言った。アンナはセーナの無事にほっと息をつく。だが、まだ安心はしていられない。蜘蛛女はわらわらとアンナ達の元へと集まってくる。

「まだ気を抜けないわ！頑張りましょう！」

そうセーナに叫んで、アンナは両手剣を構えた。

炎の盾のおかげで、セーナの様子にそこまで気を配る必要は無くなったものの、状況はそこまで良くはない。アンナは味方に炎の盾を

展開しながら、目の前の敵とも戦っているのだ。次第に、彼女からは疲れが見え始める。

契約者の「力」も、ずっと放出し続けられる訳では無い。もちろん、「限界」があるのだ。『緑』は大地から魔力を供給し続けて貰えるらしいが、アンナは『赤』である。そろそろ、魔力が底を尽きてきた。それなのに蜘蛛女はまだ沢山いる。

炎が揺らいでおり、アンナの限界が近づいていることが、セーナには分かった。そして、とうとう彼女に隙が生じてしまう。蜘蛛女の攻撃がアンナに襲いかかる。

「危ない！」

セーナはそう叫んで、氷の礫でその蜘蛛女の腕を吹っ飛ばす。だが、それも少しの時間稼ぎにししか過ぎない。セーナ達を円で囲うように、蜘蛛女達がジリジリと迫ってくる。

——ここまでなの？…

アンナがそう思い、顔をしかめて悔しそうな表情をした。

というか、さつきからキリマルは一体何をしているの！ずっと顔を白くして倒れてるし。蜘蛛女達にも死人と間違われてるじゃないの！

「もうー…こんな時こそ男の出番でしょ！どうかしなさい、キリマル!!」

アンナがやけくそになって、失神しているキリマルに向かってそう叫んだ。

失神したキリマルはいつもの白い空間に立っていた。

——またである。

キリマルはそう思い、深くため息をついた。

こういうことはよくあるのだ。キリマルは、自分がとてつもないビビリである事を自覚している。昔からそうだったのだ。

里のみんなからはビビりのキリマル、略してビビマルなんてあだ名で蔑まれていたものだ。

オレの里は「度胸」を大切にする風習が昔からある。オレには小さ

い頃から、それが全くと言っていいほど無かった。

そしてある日、そんな自分が嫌いになって、里を飛び出したのだ。契約者になれば、オレの何かが変わると信じて。

——でもそれはただの幻想に過ぎなかった。

今のこの状況が1番それをよく表している。オレが失神したせいで、仲間に迷惑をかけてしまった。

「おい、ビビマル。また小便チビったのか？」

「父親はあんなに勇ましかったのにねえ。」

「はあ。そんな弱腰じゃ、これから生きていけねえぞ。」

里のみんなは、そんな臆病なオレの事が嫌いだった。だけど、1番オレの事を嫌っていたのは里のみんなではない。

情けないオレが嫌いだ。

臆病なオレが嫌いだ。

弱いオレが嫌いだ。

——オレが1番、『オレ』の事を嫌っているのだ。

「おい、このままじゃダメだろ。カッコいい紳士になるんだろ？」

そうやってオレを叱りつける、『自分』の声が頭から離れない。オレだってそんな理想の自分になりたいよ。

誇らしいオレでいたい。

勇敢なオレでいたい。

強いオレでいたい。

なのに何でオレは昔のままなんだ？一向に変われないんだ？

そうやって自分を責めるキリマルに、別の声が聞こえてきた。

「もう……こんな時こそ男の出番でしょ！どうにかしなさい、キリマル!!」

それはアンナの助けを呼ぶ声であった。

：蜘蛛女は今でもすっげー怖い。あの赤く光る目で睨みつけられるだけで、オレ、マジで小便チビっちゃうよ。

怖いのは嫌だ。痛いのも嫌いだ。

——だけどこで動かないと、一生自分は変われない気がした。キリマルは涙で潤んでいた目を擦り、真剣な表情になった。そして

声のする方へ、その手を伸ばしたのであった。

辺りに轟音が轟き、キリマルの身体に青白い落雷が落ちた。

——そして、雷神が降臨する。

「オレを呼ぶ『仲間』の声がしたんだ。」

本来のキリマルの声は男性にしては少し高い、ヘタレそうな男の子の声である。しかし、今の声はそれよりも少し低い、『男』の声であった。そしてなによりも、その声からは勇ましさが感じられたのだ。

少年は青白いオーラを全身から解き放っている。そしてその周りには無数の稲妻が走っていた。黄色い髪は電気によって逆立ち、その姿はまるで鬼神のようである。

その存在に大気が震え、世界の全てが畏怖していた。

蜘蛛女達はその神々しい存在を目の前にして、思わず足を止めてしまった。

——その隙を雷神は見逃さない。

青白い閃光が光って、一瞬世界の全てが真っ白になる。その中を紫電が一閃した。あまりの速さに、空間さえ、斬られたことに気づくのが遅れる。

一閃した場所に真空が発生し、今まで聞いたことの無い高い音が耳を貫いた。そして真空の生じた場所を元に戻そうと、世界が暴風を巻き起こす。

——キリマルはいつの間にか蜘蛛女達の背後にいた。

蜘蛛女達は何が起きたのか分からず、その場でピタツと止まっていた。本当に一瞬の出来事だったので。固まってしまうのも無理はない。

否、蜘蛛女達は驚きで全身を固くしていたわけではなかった。

——彼らは既に死んでいたのである。

次の瞬間、蜘蛛女達の身体に無数の線が走り、彼らは一瞬でバラバラに砕け散った。速すぎて、さっきまで自分が斬られていた事にさえ、気が付かなかつたのだ。

そのとんでもない光景に、アンナ達は信じられないといった目でキ

リマルを見る。すると、雷神の姿が1人の気弱な男の子の姿へと戻った。

そしてキリマルはきよとんとした目で、アンナ達を見つめてこう言った。

「あれ、蜘蛛女は？オレ、せつかく覚悟を決めてきたのに…」

「アンタが全部やったのよ！…本当に覚えてないわけ？」

「えっ、オレが全部！…って騙されないよ！そんなの無理に決まってるじゃん。」

キリマルはいつもの調子に戻っている。そんな彼を納得させる証拠は無い。でもアンナ達はしつかりとその目で見たのだ。

——キリマルが蜘蛛女達を一瞬で切り刻んだ光景を。

「あれ？ユナンとか、他のみんなは？」

「——！そうよ！みんな奥に連れ去られちゃったの。助けに行かないくちや！」

キリマルの眩きに反応して、セーナ達は森の奥へと駆け出した。キリマルも慌ててその後を追う。

「おい。置いてかないでよ！こんな森で1人とか、オレやだよ!!」
彼の情けない声が森中に響き渡った。

第二章 6 『武の道』

薄暗い森の中、刃と刃同士が交錯し、その激突に火花が散った。しかし片方の武器は鋼で出来てはいない。己の体を変形させ、鋭くさせた化け物の武器なのである。

化け物はその手で、少年の命を容赦なく刈り取ろうと死の舞を躍る。だが、少年はそれを既の所で回避。何とか命を取り留める。

その時、少年は辺りに凍てつく冷気が発生したのを肌を感じる。それは仲間の攻撃の準備が整った証。少年は大きく後方へ下がる。

次の瞬間、風を切る音と共に、少年と同じくらい大きな氷の矢がその化け物に向けて放たれた。もはやそれは先端が鋭く尖った氷柱である。それは周りの大気を凍らせ、白い霧を纏いながら標的に向かって飛んでいく。そして着弾と同時に爆散し、化け物を木っ端微塵にした。

肉片も離れ離れになるほど吹っ飛んだ化け物は、そのまま黒い霧へと変化していった。

「今の威力ヤバすぎだろ！殺すってレベルじゃねーぞ!!」

「これくらいしないと再生されてしまう。妥当な威力だ。」

「…おいら、青髪の兄ちゃんの方がバケモノだと思うぞ。」

「なんだと?」

そのとてつもない氷柱の威力で騒いでいる3人組は、ユナン、ジーク、ダイであった。彼らは蜘蛛女の白い糸によって、森の奥深くへ連れ去られていった。だが、ユナンは何か体勢を立て直しカタナで、ジークは氷の礫を白い糸に当てて脱出したのであった。ダイもジークの氷の礫のおかげで抜け出すことが出来たのだ。

それでもユナン達はだいぶ奥深くにまで来てしまった。とりあえず3人のこれからの行動は、辺りを散策して女の子を探しながら、あわよくばアンナ達とも合流するという方針に決まった。

ユナンは森の中を歩きながら、セーナ達の事を心配していた。アンナは蜘蛛女に有利に戦え、キリマルもいざという時はやる男である。むしろ、ユナン達の方が危険ではあるのだが、それでも仲間がどんな

状態なのか分からない方が、ユナンにとっては不安なのである。

——もし仲間が1人でも死んでしまったら、ユナンは迷わず自分の加護を使うであろう。

ユナンはチラツツとダイの様子を見る。

こんな命の危険に晒されながらも、弱音を少しも吐かない。心が強い男の子である：いや、ユナンには少年が少し無理をしているようにも見えた。

「ダイ、無理せず何かあつたら俺たちに言うんだぞ。休憩でも何でも、必要な時は言ってくれ。約束な。」

「おいら、まだ大丈夫だよ。それに今回はおいらが悪いんだ。ユイちゃんに早く会って、謝らないと。」

ダイはその茶色い瞳に決意の光を灯しながら、ユナンの言葉にそう返した。その眼差しは真剣で、強い思いが感じられる。ダイにとって、そのユイという女の子はとても大切な存在なのだろう。大切な人の為に無理をしようとするその気持ちは、ユナンにもよく分かった。

だからユナンも、ダイにこれ以上は何も言わなかった。こういう人間には何を言っても聞かない事を、ユナンが1番よく理解しているからだ。それにしても：

——こんな蜘蛛女だらけの森の中で、少女が無事であるのだろうか。

もちろんその事を口に出したりなんてしない。だが、ユナン達でも生き延びることに精一杯なのだ。正直言って、望みは薄いであろう。

蜘蛛女の数はそこまで多くはない。さつきから1度に出てくるのはせいぜい2体ほどである。ジークが開幕に一体仕留めて、次の攻撃の準備の間、ユナンが囷を引き受ける。それでどうにかなっているという状況だ。

「…蜘蛛女はあまり群れを成さないのか。」

「あつ、ジークも同じ事考えてた？まあ5体とか一気に出てられてもシャレになんないよな。蜘蛛女の集団とかに出くわさないよう、女神にでも祈るとしますか。」

ユナンが冗談めかしてそう言った時だった。ユナン達の進む先か

ら、沢山の赤い目が見えた。もちろんその目は魔獣以外のなにものでもない。つまりユナン達は蜘蛛女の集団に出くわしてしまったということだ。その沢山の赤い目がこちらに気づいて睨みつけてくる。

「そんなこと言った瞬間にこれかよ!？」

「チツ、仕方ない。ユナン、気を張るぞー!」

「そりや気は張ってるけど、それでどうにかなるのか!？」

ユナンとジークはダイを後ろにして戦闘体勢をとる。

少し冗談言ったらこれだよ! 本当にあのクソ女神の仕業とかじゃないよな!？」

開幕、ジークの攻撃によって一体が消し飛ぶ。しかしまだまだ数は多い。ユナンは2人を守るため、さらに前に出た。

最初に突撃してきた魔獣は三体。その奥にまだまだいるのが見える。ジークの攻撃準備の時間は4秒ほど。だが、それでも長く感じるほど相手は手強い。回避だけをしていては、いずれユナンは殺られる。

三体の蜘蛛女が一斉にそのギラついた刃をユナンに向けて振り下ろした。その攻撃は風を切る音がするほど鋭く、威力も大きい。簡単にユナンの首なんて吹っ飛ばしてしまうであろう。

——その攻撃の刹那、蜘蛛女達の動きが遅くなる。

いや、ユナンが極限まで集中してそう感じたただけだ。蜘蛛女達はユナンに両腕を振り下ろして攻撃してきた。それは6本の刃を振り下ろされた事と同じ。

——そう『刃』と同じであるのだ。

母に木刀でボコボコにされた思い出がユナンの頭をよぎる。あの人は一刀流であるにも関わらず、その明るい笑顔のまま、数え切れなほどの連撃を一瞬でまだ幼いユナンに向かって放っていた。

「そう思うと、母さんの方がよっぽど『化け物』だな。」

ユナンは少し微笑みながら、そう呟いた。

ユナンは蜘蛛女達の連撃の隙間、そこだけが光り輝いているように感じた。それは、武の道を修行した者にしか分からない感覚。避けるならここしか無いという絶対的な勘。それをユナンは母との修行の

末、習得していたのだ。

それは契約者の魔法や加護などの『力』ではない。人間本来が持っている力である。それを引き出せるかは、その人の努力次第だ。

ユナンは蜘蛛女達の連撃を「奇跡的」に回避。そしてその隙にV字に切り刻み、一体の蜘蛛女の両腕を切り飛ばした。

蜘蛛女の武器はその両腕だけである。それが無くなればただのちよつと大きな虫だ。しかも彼らは何故かその体の大きさを利用しない。体当たりなどをされただけでも、ユナンにはしんどいのだが。

「体当たりとかしてこないのは、こつちにとつちや有利なんで、ありがたい。」

そう呟いたユナンのすぐ横を、尖った大きな氷柱が通りすぎた。肌に凍てつく冷気が当たり、ヒリヒリとした感覚にユナンは震える。目の前の三体の内の一体が、その氷柱によって爆散していた。

「ちよーもし自分にも当たったら、木っ端微塵なんですけど!?!」

契約者の魔法は、仲間に被害が及ばないようにすることが出来る。しかしその分威力が下がるのだ。それをジークは容認しない。ユナンが冷気を感じたという事は、あの氷柱は自分にも当たり得る可能性があったということだ。

「ふっ、当たるはずがない。なにせ俺の弓の腕は誰にも負けないからな。」

そんなユナンの訴えに、ジークがそう高らかに宣言して、得意げに鼻を鳴らした。一見無茶苦茶な自論だが、その弓の腕が何よりもそれを証明している。ユナンはジークが弓の攻撃をハズした所を見たことがない。動いている標的にでも、彼はその先を読んできつかりと当てる。ジークもまた、武の道を修行した者の一人なのである。

残ったのは両腕を飛ばされた1匹と普通の蜘蛛女のみである。

普通の蜘蛛女がユナンに攻撃を仕掛けた。しかし、三体でも捌けたユナンにはその攻撃を避けるくらい、容易いものである。ユナンは攻撃を躲し、敵の背後に回り込んでその両腕を切り飛ばそうとする。

——ユナンはその時、蜘蛛の腹の中央部分に紫色の結晶が生えているのを見つけた。

それは尻尾が何本も生えた猫の魔獣と戦った時に、ユナンが見つけたものと同じである。

もしかしてこれって、魔獣の弱点なのでは？

ユナンはそう思い、腕ではなくその蜘蛛の結晶に向かってカタナを突き刺した。するとその結晶が割れ、蜘蛛女が悶え苦しみながら、黒い霧へと変わっていった。

ユナンはそれを見て、さっきの考えが確信に変わり、腕を再生しようとしている蜘蛛女にもさっきと同じ攻撃を行った。するとその个体も、黒い霧となっていった。

これまでにユナン達が戦ってきた魔獣にも弱点があったのであるうか。そう言えば、紫色の結晶を頭につけた鳥の魔獣と出会った事がある気がする。ただの飾りかと思っていたが、あれが弱点だったのか…。

ユナンは魔法が使えない。近接戦闘というのは常に危険が伴うものである。今までは遠距離の魔法でジーク達が安全に魔獣をほとんど処理をしていたので、ユナンは弱点の存在に気がつかなかったのだ。

「——！ユナン、何をした!?!」

「蜘蛛女に弱点があったんだよ！ほら、蜘蛛の腹の中央部分に結晶があるだろ？そこだよ、そこー!」

ユナンが一気に2体も蜘蛛女を倒した事にジークは驚きの声をあげる。そんなジークにユナンは蜘蛛女の弱点を叫んだ。ジークは目を凝らして、奥にいる蜘蛛女の下半身の腹の部分を観察する。

「……結晶なんてものは見えないが、まあとにかくそこさえ貫けばいいんだな?」

どうやらジークに結晶は見えていないらしい。

何故ユナンだけか？そういうえば、小さい頃から散々戦ってきた犬の魔獣にはそんな所は無かったな。見えるようになったのは、契約者になってからだろうか。

——ユナンのカタナが温かな熱を放っている。

その時、三本の氷の矢が奥の蜘蛛女達に向けて放たれた。その矢は

三本とも見事、蜘蛛女達の下半身の腹の中央部分に命中。彼らは黒い霧となって消えていく。

「…驚いた。本当に弱点らしい。」

「俺はお前の魔法の命中精度に目ん玉が飛び出たよ！」

ユナンは、的確に三体の弱点だけを貫いたジークにそんな感想を述べる。

言われてすぐに当てられる場所では無いはずだ。それなのにジークは初回で全弾命中させた。

魔法は念じれば、途中で軌道を少し変えることも出来るとジークは話していた。魔法を使えないユナンにはよく分からない感覚なのだが、どうやらそうらしい。しかし契約者全員が出来るというわけでもない。事実、アンナはそうだったのが苦手である。

魔獣を処理する速度も上がり、事態は好転したかのように思えた。そんなユナン達に、新たな敵が襲いかかる。

それはさっきの蜘蛛女の亜種とも呼べる存在。金髪の長髪をした蜘蛛女が奥から姿を現したのだ。

——そして違ったのは見た目だけでは無かった。

なんと金髪の蜘蛛女が、指の先から白い糸を出したのだ。そしてその魔獣は木を支柱にして、宙を舞う。

「俺達の足を白い糸で巻き付けたのはこいつか！」

「髪の色が変わろうが、空中に飛べるやつだろうが、やることは同じだ。」

そんな金髪蜘蛛女に向かって、氷の矢が放たれる。

流石に動きが速すぎたのか、ジークは氷の矢を三本使ったようやく腹の中央部分に命中させた。やはり魔法の操作は弓とは少し違うのかも知れない。

しかし、金髪蜘蛛女は消えない。よく見ると、女性のおでこの部分に小さな結晶があった。

「ジーク、頭が弱点だ！」

「弱点が違うのか…。チツ、少し生成するのに時間がかかるぞ。」

ジークが氷の矢を生成するまで、ユナンが囷になるしかない。ユナンはそう思い、金髪蜘蛛女と対峙しようとした。

だがそいつはユナンを何故か無視した。そして氷の矢を生成するジークの方を狙ったのだ。白い糸によって空中を舞いながらユナンの上を通り過ぎ、ジークの目の前へと着地する。

「こいつ、知能があるのか!?!ジーク、危ない!!」

金髪蜘蛛女には、ジークを先に潰した方が良いと考える「知能」があったのだ。

このままではジークが危ない。俺に魔法が使えたら…

「おい、化け物。確かにその判断は賢いが…弓兵を侮るなよ。」

ジークが金髪蜘蛛女を目の前にして、低くイケメンな声でそう言った。その瞬間、彼の周囲の大气が凍てつく。その冷気は凄まじく、空間全体が白い霧のようなものに包み込まれる。そしてそれに飲み込まれた敵は、氷のように固まってしまった。

それは氷の矢を生成するには十分すぎる時間であった。

「消えろ、化け物め。」

ジークは氷より冷たい声でそう言い放ち、金髪蜘蛛女の額を撃ち抜いた。そして、ジークの前には黒い霧だけが残る。

「青髪の兄ちゃん、すげえな。」

後ろの木の陰からジークの戦闘をずっと見ていたダイが、そんな感想を呟いた。

ダイはこの世界に契約者と呼ばれる強い人達がいることは知っていた。けれども、王国騎士以外の契約者がこんなにも強いとは思ってもみなかったのだ。

——おいらも契約者になったら、青髪の兄ちゃんみたいに強くなれるかな。

ダイがそんな未来の事を少しだけ考えていた時だった。ダイの横から突然何かが飛び出してきた。

それはさつきジークが倒した魔獣と同じ種類。金髪蜘蛛女であった。白い糸を巧みに操って飛び、奇襲を仕掛けてきたのだ。

あれは、さつき青髪の兄ちゃんが倒したやつと同じ敵！おいらを
狙ってる!? え、えつとこんな時どうしたらいいんだ？

パニックに陥ったダイは固まってしまう。身体が震えているのだ。
初めての「死」の恐怖がダイを襲う。目の前の現実を直視出来ずに、
ダイはただその目をつぶっていた。

「ダイ、危ない！横に向かって飛べ！」

「なっ!? 奇襲か？ 避ける！」

兄ちゃん達が必死においらにそう叫んでくれている。兄ちゃん達
なら避けられたのかもな。でもおいら、足が震えて動けないんだ。…お
いらには無理だよ。

小さな男の子が自分の命を諦めかけたその時、

——黒髪の少年がその男の子を助けようと飛び出してきた。

第二章7 『とある少年の生き方』

「それじゃあおいらは、蜘蛛女の話をするぞー！」
そしてダイはみんなに向かつて、吟遊詩人から聞いた話を意気揚々と語り始めた。

「——真つ赤な花が咲きました。」

最後にそう言つてダイはこのお話を締めた。

怪談話というより、ただの悲しいお話である。その場の空気はどんなよりとして、最悪になった。

「お前、怪談つて意味しらないだろー。」

「これぜつてえ人から聞いたやつじゃん。ずるいぞー。」

「ちえ。気づかれたかく。」

話を聞いて周りの男の子達がダイを茶化す。そんなみんなの様子に、ダイは決まりの悪そうな顔をした。

そんな時、泣きそうな少女の声がダイの耳に届いた。

「なんで、こんな話をしたの？」

それはダイを責めるような声でもあった。そう言ったのは幼なじみのユイだ。

薄紫色のおさげ髪の少女である。その容姿はとても可愛らしく、街の男の子に何度も告白されるほどだ。けれども気の強い彼女は男を見下しており、そんな男の子達をいつも無下に追い払っている。

そんな彼女も幼なじみのダイには心を許している。赤ん坊の頃から、お隣さんとして交流も深かったからであろう。

彼女は人前では滅多に笑顔を見せない。けれどダイはそんな彼女の笑顔を何度か見たことがある。その笑顔はどんなものよりも綺麗で眩しかった。

しかし今の彼女は、完全な敵意の目でダイを睨みつけている。珍しく彼女の目には涙が浮かんでいた。この話がそんなにも怖かったのだろうか。

ダイは頭を掻きながら、ユイに向かつて平謝りした。

「いやネタが思いつかなくてさ。吟遊詩人の話をパクっちゃったんだよ。ごめん、怖かった？」

「ダイの…ダイのバカ！」

ユイがそう言い放つて、どこかへ走り去っていく。ダイはなぜそこまでユイが怒っているのか理解出来ずに、ただその場で狼狽えていた。

そんなダイの様子を周りのみんなはからかう。

「ダイのやつ、ユイちゃん泣かせたぞー。悪いんだー。」

「ほんとだー悪いんだー。」

「女の子を泣かせるなんて最低。」

なんだよ。ちよつと話を作るのをサボっただけじゃんか。ユイのやつ、別にそんなに怒んなくなつていいだろ。

そう思つてダイは不貞腐れた。

この時ユイの事を追いかけていけば良かったとダイが後悔するのは、少し先の話である。

ユイは夕方の街の中をただただ走っていた。別に特に行くところはない。ダイ達に涙を見られたくなかつただけだ。

「蜘蛛女なんているわけないのに。なんであんな話なんかしたのよ…。」

少女が母親の為に頑張つたのに、最後はその母親に殺されてしまうという悲しいお話。その女の子と今のユイの状況は似ていたのだ。

母が原因不明の病にかかっているのである。その事でユイはここ最近ずっと頭を悩ませていた。

そんな時にダイからのあの話である。最近母が病気ということもあり、家族間での交流をしていなかった。

ダイが私の状況を知らないのも無理はない。頭では分かっているが、身体が先走つて、ダイには酷いことを言ってしまったのである。

——ダイには後で謝らないとなあ。

するとユイに声がかげられた。それは独特のある口調をした男の声であった。男性にしては少し高い声をしている。

「蜘蛛女、そして光るすずらんは実在するとも。」

「嘘よ。あるわけないわ。」

ユイは男の方を睨みつけてそう言った。

それは40代くらいの中年の男であった。その黒い顎髭を立派に伸ばした姿には、どこことなく貫禄がある。全身を緑色のコートで包んでおり、白い羽のついた緑色のハットが印象的である。

そんなユイの発言を聞いて、男は首を横に振ってそれを否定した。

「あるとも。何せワタシは直接みたんだから。」

男は黄色い双眸でじつとこちらを見つめてくる。何故かその目には、人を納得させる力がある気がした。

ユイは男がテキトーに嘘をついているようには思えなかったのだ。それに、ユイにわざわざ嘘をつく理由なんてない。

ユイはその話を信じる人物に心当たりがあった。

「あなた、まさか吟遊詩人さん？」

「そうだとーも。」

男は頷いて、それを証明するように懐から何かを取り出した。それはくちばしが太い特徴的な鳥の模様が彫られている銀のハープであった。たしかに吟遊詩人ではあるようだ。

「この街の外れの森に、光るすずらんがあるかーも。」

そして男は意味深な笑みを浮かべながら、そう言い残してどこかへと去っていった。

：行ってみる価値はあるのかもしれない。母の体調は日に日に悪くなっている。明日、命があるのかさえ分からない状況だ。

時刻は夕方。危険を承知で少女は森へと向かった。

——その状況は物語の女の子と全く同じである。

正体不明の化け物にユナン達が遭遇した時、ユウタは命の危険を感じて、自分の気配を完全に消していたのだ。

気配を消したというよりは周りの環境に「溶け込んだ」と言った方が正しいであろう。これはユウタが転生した時に与えられた能力。そしてそれは、ユウタのあっちの世界での生き方そのものを表した、

神様からの盛大な「皮肉」でもあった。

異世界転生ものではのお決まりは、主人公がチート級の能力を与えられる展開であると思うのだが、ユウタの能力はチート級とはとても言い難い。

現にこうして、ユウタは化け物相手に情けなく、身を縮こまらせているのだ。ユウタの能力は戦闘向きではない。

——現実はそのなにごくないのである。

アンナとジークという人は魔法が使えるようで、どうやら一般人では無いらしい。何も無い所から炎や氷の矢が生まれる様子は、まるでCGのようであった。

「僕も魔法で異世界無双したかったなあ……」

木の陰に隠れ、2人の戦闘を見守りながらユウタは独り言を呟いた。もちろんその声はユウタ本人にしか聞こえていない。

アニメで見たことのある、爽快感たっぷりなチート人生。そんなものは夢のまた夢であった。

化け物は蜘蛛女の見た目をしている。ギリシア神話に登場するアラクネと呼ばれる存在に似ているとユウタは思った。さすがは異世界、何でもありと言った所である。

アラクネも倒され、状況は落ち着いたように見える。ユウタはまた、ユナン達の集団に溶け込もうとした。

そんな時、突如としてユナン、ジーク、ダイの3人が森の奥へと引つ張られ始めたのだ。

森の奥に消えていく三人。その後をユウタは追いかけていた。周りに沢山のアラクネ達がいたが、ユウタの存在には気づかない。彼の能力によって自然の一部と勘違いしているからだ。

ユウタが三人を追いかけたのには理由がある。それはユナンの存在だ。あの少年には何故かユウタの能力が効いていない。

——つまり彼は、ユウタが異世界で初めて出会った、まともに人間関係を築く事が出来る唯一の相手なのである。

そして時は今に戻る。ユウタは相変わらず、自然に溶け込んで、木の陰にその身を潜めていた。

ユウタはぬくぬくと平和な環境で育てられた、普通の高校生である。ユナンのように剣の腕が立つわけでも無ければ、ジークのように魔法を使えたり、弓を匠に扱えるわけでもない。つまり、この場においては圧倒的弱者なのである。

弱者が生き残るための方法は、現代社会であろうが異世界だろうが大して変わらない。それは強者に目をつけられないように生きる事である。ユウタは今までそうやってこれまでの人生を生きてきた。

学校であれば先生に目をつけられないようにし、クラスの中心グループの人達と仲良くする。そしてモブのように社会に溶け込めれば良い。そうすれば、いじめられる事もなく、むしろ楽しい学校生活を送る事が出来たのだ。

しかし人間関係を維持し続けるというのは、精神に堪えるものなのである。ユウタはそんなストレスを、アニメやゲームなんかで取り除いていた。

今回も同じである。ユウタは何もしなくていい。ただモブのようにならなければ、死ぬことなんてない。表に出ても、自分の身を危険に晒すだけなのである。

ユナン達が危険になろうが、自分の知った事ではない。だいたい、今日たまたま出会っただけの赤の他人なのだ。わざわざ自分の命を賭ける必要なんてない。

———なのにどうしてこんなにも心が痛むのであろうか。「死」の淵に立たされている人を見る機会なんて、平和な日本ではほとんどない。きっとそのせいである。ユウタはそれに慣れていないだけなのだ。

そんな風に自分の気持ちを抑えていたユウタの目の前で事件は起こった。自分と同じように木の陰に隠れていたダイに、鋭い攻撃が襲いかかったのだ。その攻撃をした相手は、さっきのアラクネの変異種である。

ユナンとジークはダイから少し離れていて、助けられそうにもない。小さな男の子の命を助けられるのは、ユウタだけである。だが助けに行けば、自分の命の保証はない。

それに、そのアラクネのスピードはとても速いのだ。ダイと一緒に攻撃に飲み込まれて、二人とも無惨な死を遂げるだけかもしれない。強者に目をつけられた弱者は見捨てるのが社会のルール。いや、世界の理である。弱者を助けるのは強者にしか出来ない特権なのだ。

——なのにユウタの身体は勝手に動いていた。

ユウタの五十メートル走は7秒台。まあ平均的な値である。そこまで足が速いわけでもない彼であったが、その時のスピードは彼の人生史上最も速いものであった。

「あああああああ！」

よく分からない叫び声を上げながら、ユウタがダイを押し倒していた。そして2人は金髪蜘蛛女の攻撃を奇跡的に回避。ユナン達は突然のユウタの登場に驚いた。

しかしそれについて彼から聞くのは後である。金髪蜘蛛女は続けざまの攻撃を、その2人に向けて放とうとしていたからだ。だがそれを許すユナン達では無い。

ユナンが駆け寄り、二人を庇うように前に立って、その攻撃を弾く。金属同士が衝突するような音が辺りに響き渡った。そして少し体勢が崩れた敵に向かって、氷の矢が襲いかかる。冷気を纏ったその矢は化け物の額を的確に撃ち抜いた。弱点を貫かれた化け物は、そのまま黒い霧となつて消えていく。

「ナイス！ジーク。」

「ふん。当然だ。」

「おいら、もう死んじゃうかと思つたよ。ありがとうユウタさん。」

「あついえいえ。気にしないでください。」

おろおろと泣きながら、ダイはユウタに向かってお礼を言った。苦笑しながら、ユウタはダイに向かって返事をする。

ユナンはほっと息をついた。ユウタがどこに隠れていたのかは分からないが、彼の勇気ある行動のおかげでダイが死なずに済んだのは事実だ。これからは後方のジークが、ダイ達の近くにいた方が良いのかもしれない。

「それでユウタ。お前はいつからここにいた？」

「えっと…嫌だなあジークさん。最初から一緒にいたじゃないですか。」

「——？そ、そうだな。」

ジークが珍しく言い負かされている。いや、これはユウタの何かの能力であろう。明らかに不自然過ぎる。

ユナンはそう思い、不審な目でユウタを見つめる。そんな視線に気づいたユウタは、ユナンに目で合図を送った。どうやら、後でユナンには話してくれるらしい。

「さて周りの他の奴らは…」

「いなくなったようだな。」

ユナンはユウタの事を後回しにして、目の前の状況に目を向ける。だが、いつの間にか蜘蛛女達はいなくなっていた。もう少し数がいたと思ったのだが、ユナン達から逃げたのであろうか。少し奇妙である。

すると奥の方から誰かがこちらに向かって歩いてきた。ユナン達はそれに気づいて身構えたが、すぐにその緊張は解ける。

歩いてきたのは薄紫色のおさげ髪をした少女であったからだ。

「——！ユイちゃん！」

その正体に気づいたダイが、急いでその少女の元へと駆け寄った。どうやら、ダイが探していた女の子らしい。

「ユイちゃん、大丈夫だった!?ごめん！おいらが悪かったよ。二度とあんな話をしたりなんてしないから。怪談話も今度ちゃんとおいらが自分で作ってくるよ。」

「わたしもちよっとキツク言って悪かったなって思ってる。助けに来てくれてありがとう、ダイ。」

ずっとこの事を言いたかったのであろう。ダイは早口で色々な言

葉をユイに向かって投げかけた。そんな少年に向かって、ユイも笑顔で言葉を返した。

少年と少女の感動の再開である。ユナンはそんな二人の様子に心温まった。

「…ユイちゃん？」

しかしダイだけはその場にいた幼なじみの異変に気がついた。彼女は笑顔でダイを見つめている。

——それがおかしいのだ。

ユイは感情表現が苦手な女の子である。人前で笑顔を見せるなんて、それこそこんな状況であってもありえない。むしろ、ダイの事を「迎えに来るのが遅い」なんて叱りつけた方が、いつもの気が強い彼女らしい言動である。

その時、ダイは気がついた。…いや、気がついてしまったのだ。彼女の様子がおかしい理由はただ一つ。

——目の前にいる少女は、もう既にユイという女の子では無いという事だ。

「ちくしよおおお!!」

ダイはその「化け物」に向かって、持っていた短剣を突き刺した。

第二章 8 『魔獣ジヨロウグモ』

「ちくしよおおお！」

ダイがそんな悲痛な叫び声を上げながら、その少女の胸に短剣を突き刺した。その短剣は魔獣に襲われた時の為の護身用、そして…

——ユイちゃんを守るために持ってきたものであった。

だがダイはその守るべき少女に向かって短剣を突き刺したのだ。少女は胸を刺され、真つ赤な血を口から吐いた。

「な、何やってんだよ!? ダイー！」

そんなダイに向かってユナンは怒鳴り声を上げる。ダイは気でも狂ってしまったのであろうか。ユナンはその狂人を止めるために、急いで少女の元へと駆け寄ろうとする。そんなユナンをジークが止めた。

「ユナン、待て。…少女の様子がおかしい。」

「はあ? おかしいのはダイのほ…」

ジークに言われて少女をよく見たユナンは、そんな彼女の様子に絶句した。

——少女は胸を刺されてなお、笑っていたのだ。

「うふふふ。あはははは。」

そして狂気的な目を浮かべた少女は、目の前にいたダイを吹き飛ばしたのだ。

「ダイ!?!」

「ふごふご…お、おいらは大丈夫。」

幸い、ダイは茂みに吹き飛ばされたおかげで怪我は無さそうである。頭から突っ込んだので、そこから抜け出すには時間がかかっているようだ。

華奢な少女の身体から振るわれたとは思えない力。さらに、

——彼女の目が赤く光っている。

さすがのユナンもこれだけ条件が揃えば、疑わなかった。しかし、驚きはある。

「こいつ…魔獣か!？」

「信じたくないが、どうやらそうらしいな。」

そう言つてユナン達は武器を構えた。こちらへゆつくりと歩いてくる少女の姿をした魔獣。こんなものと戦うのはもちろん初めてである。

「てりやああ…うわっ!」

ユナンがその魔獣に向かって斬りかかっていく。だが何故か途中でユナンは体勢を崩して転んだ。もちろん落ちていた石に躓くほど、ユナンはドジではない。

ユナンは振り返つて、自分が転んだ場所をじっくりと見た。すると、何やらキラリと光る細いものがあつた。

「なんじゃこりゃ!…糸?」

ユナンが引つかかつたのは、白い糸のようなものであつた。それはパツと見ただけでは気づかないほど細いが、しっかりとした強度がある。

周りをよく見ると、そんな糸が何本もあつた。

「攻撃が来る!下がれ、ユナン!」

そんなジークの声が聞こえてきた。さらに、ユナンの背筋に恐ろしい戦慄が走つたのだ。それは身の危険を本能が察知した証拠である。

ユナンは糸をカタナで切つて、大きく後方へ下がつた。そして次の瞬間、辺りに熱風が巻き起こる。

——紅炎がその無数の糸の上を駆け巡つたのだ。

薄暗い森の中が炎によって一瞬で明るくなつた。周りの木々は燃え尽き、綺麗な夜空が少女の上に現れる。空中に無数に張り巡らされた燃えさかる糸が、その夜空を朱と金色に染める。

それは幻想的な風景であつた。だが判断が遅れていれば、ユナンも一緒にその紅炎に飲み込まれていたのだ。美しく、そして残酷な炎の攻撃。それを放つたのはもちろん、目の前にいる少女の姿をした怪物である。

「炎を操るのか…厄介だな。」

「俺、今確実に死んでたよな!?!あぶねえー!」

そんな攻撃を見て、ユナン達がそれぞれ感想をこぼした。ユナンの額から冷や汗が流れる。そして自分の軽率な行動に反省した。

これからは未知の相手に突っ込むなんて真似はしないでおこう。そんな事をしていては、それこほ命がいくつあっても足りない。無駄死にはごめんである。

ユウタとダイも、木の陰からそんな光景を覗いていた。

ユウタは少女の姿をした化け物の攻撃を見て、ある名前が思い浮かんだ。

絡新婦（じよろうぐも）。日本に古くから伝わる妖怪の一種である。美しい女の姿をしていて、火を吹く子蜘蛛を操るらしい。

今回は子蜘蛛では無く、直接火を操っているので少し状況は違いますが、そんな妖怪と、この化け物は酷く似ていた。

「それでこの化け物、どうやってやっつけるんだ？」

「氷の矢は届くか分からんな。：ユナン、弱点は見えるのか？」

「それが炎の糸で隠れていて、よく見えないんだ。あと、眩しい。」

「なるほど。では弱点が分かるまでは様子見だな。：さっきのようになへまはするなよ。」

「へいへい、すみませんでした。以後気をつけまーす。」

そしてユナン達は戦闘に戻る。ユナンがすることは弱点の発見。そのためには、

「まずこの邪魔くさい糸を切らないとなー！」

ユナンは慎重に、少しずつ炎の糸を切っていく。しかしそれを黙って敵が許すはずがない。炎の糸を巧みに操って、ユナンを取り囲むように攻撃を仕掛ける。

「うわお!!」

ユナンはそれを飛び上がって何とか回避する。

そんなユナンのすぐ横を氷の矢が通り過ぎた。下は熱い感覚、上は冷気で少し冷たい。ユナンも散々である。

そんな氷の矢は、炎の糸と共に消失してしまった。

「クソっ。やはりダメか。」

「ジークは俺の身体を掠めるように撃たないと気が済まないのか!?」

ユナンの抗議をジークは無視した。今はそれどころでは無いのだ。敵に矢を当てる技術はある。だが、途中で消えてしまう。どうすればいいのか。

本来の氷であれば、余程の熱を与えられない限り、一瞬で溶けたりなんてしない。だがこれは魔法同士の衝突。魔力量で差し引きされてしまうため、氷の矢はすぐに消えてしまう。

攻撃を通すには、無数の炎の糸をくぐり抜けられるほどの魔力量がいる。だがジークは魔法が大得意というわけではない。使い始めたのはたった2ヶ月ほど前である。

普通の矢だと、魔法の炎によつて失速してしまう。

——つまりジークの攻撃では魔獣に傷一つつけることが出来ないのだ。

「…すまない、ユナン。弱点が分かったとしても、俺の攻撃は届きそうにない。」

ジークはユナンに悔しそうにそう告げた。糸による攻撃をギリギリで回避して、後ろに下がったユナンはきよんとした目でジークを見つめた。

「ん？何言ってるんだ？」

「魔力量というものがあってだな。そのせ…」

「いや炎のせいで氷の矢が届かないのは分かる。でも…」

そしてユナンはジークの方を笑顔で見つめた。それは自信が満ち溢れていて、見るもの全てを元気づけてくれるような眩しい笑顔であった。

「お前の弓の腕は世界一なんだろう？炎の糸の間を進む矢くらい、簡単に撃てるだろ。」

炎の糸は無数にある。そんな間を縫うように進む矢を撃ち、しかも魔獣に命中させろだなんて、無茶ぶりである。だがユナンはジークなら出来る、信じて疑わない様子であった。そんなユナンの様子を見て、

——ジークは戦闘中に初めて笑った。

「ふっ。出来るに決まっている。それで、もちろん弱点は分かっただろうな?」

「ああ…:右太ももの部分だ。」

炎の糸の隙間、一瞬だけ魔獣を見ることが出来たのだ。その右太ももに紫色の結晶があった。

「右太ももか。なるほど、これで倒せるな。若い少女の身体を貫くというのは少し気が引けるが。」

「ああ、だけど…」

「分かっている。あの赤く光る目、間違いなく魔獣だ。」

「まあ、そのユイっていう少女に魔獣が化けたのかもしれないしな。…とりあえず、こいつは倒さないと。」

ユナンはそう言つて、炎の糸を切りに行つた。

炎の糸が少ない方が、もちろん氷の矢が届く確率が高まる。いや、確率ではない。ジークには矢が届くか届かないか、それが的確に分かるのだ。

ジークはじっくりと目を凝らして、矢を撃つ機会を窺つた。狩りと同じである。焦つてはいけない。だが、撃つ判断は一瞬だ。

ユナンもそのままでは魔獣に届く矢の隙間なんて、生まれないことは分かっていた。つまり、自分が道を切り拓くしかない。勝利への道を。

ユナンの肌が紅炎によつて焼ける。恐らく、何ヶ所か火傷を負っているだろう。だが、まだ勝利には足りないのである。

「おりゃあああー!」

「うふふふふ。」

魔獣の攻撃がさらに厳しくなった。だがそれはこちらの勝利が近づいて来ている証でもある。相手が焦っているのだ。ここで引くわけにはいかない。

ユナンの身体には細長い火傷跡がいくつもあつた。もちろん重症ではあるのだが、そんなもので彼は止まらない。仲間を信じて、ただ進むのだ。

次の瞬間、魔獣の直接出した糸がユナンに巻き付き、そのまま後方へと大きく飛ばされた。ユナンはダイとユウタが隠れていた木の所まで吹き飛ばされてしまったのだ。だが逆に言えば、魔獣の出した糸がユナンに巻き付く距離にまで、ユナンは近づいたということだ。

「ジーク、後は…頼んだぞ。」

ユナンはそう呟いて力尽きた。あちこち火傷だらけの重症である。気を失ってしまうのは当然であった。

「よくやった。こんな隙間を通すくらい、余裕だ。」

ジークがそう言って引き絞っていた弓を解き放つ。放たれたのは氷柱ではない。氷の矢である。しかしその分、スピードが乗っているのだ。その矢は一瞬で炎の糸の間をすり抜けていく。そして少女の右太ももを綺麗に貫いた。

「きゃあああああ！」

少女の姿をした化け物が悲鳴を上げる。そしてそのまま黒い霧へと…

——変わらなかった。魔獣はまだ生きていたのだ。

「何故だ!? 手応えはたしかにあったはず…」

周りの炎の糸も今の攻撃を受けたショックで消えている。だがその魔獣はまだ消えない。

まさか、もう一つ弱点があるということか!?

すると、ジークの足が白い糸によって巻き付けられてしまった。

ジークは炎の糸に慣れてしまっていて、白い糸の存在に気づけなかったのだ。

「しまった!」

ジークがそう叫んだ時にはもう遅く、ジークは糸によって引っ張られ宙を巻き、勢いよく木に衝突させられた。

「油断…した。おまえら逃げ…ろ。」

ジークはユウタ達にそう言い残して気を失った。

「これヤバい状況じゃないですか!」

ユウタが慌てふためきながら、ダイに向かってそう言った。ダイはそんな彼の言葉には一切返事はせずに、黙ってあの化け物の姿だけを

見つめ続けていた。

そしてダイは何かを決心したような顔をした。

その時ユナンが何とか意識を取り戻した。立つことはもう出来ない。しかしダイの顔を見て、ユナンは何かを感じ取った。

「ダイ。これを貸すから…できるな?」

そうして、ユナンは自分の持っていたカタナを、ダイへと差し出す。ダイはゆっくり頷いて、それを受け取った。

——そしてダイは、そのまま化け物の元へと向かっていった。

「えっ!? マジですか?…ああ、もう!」

ユウタはそんな彼の行動に驚嘆の声を上げ、仕方なくダイの後を追いかけていく。それもユナンには織り込み済みであった。ユウタは人を放つてはおけない性格なのである。

——ユナンは、ダイとユウタであの化け物倒せると思ったのだ。

「うふふふ。あははは。」

「おい、化け物。ユイちゃんはそんな風には笑わないんだ。…もつと素敵な笑顔なんだぞ!」

ダイは化け物に向かってそう怒鳴りつけた。ダイは、彼女の笑顔がとても可愛らしくて眩しい事を知っている。だからこそ、今、目の前にいる化け物の笑顔が許せない。

気持ち悪い笑顔を安売りされてしまったのは、彼女が穢れてしまうからだ。

ダイはユナンから借りたカタナを構えた。それに応えるように、カタナが温かい熱を放つ。その瞬間、ダイは化け物のもう1つの弱点に気がついた。それは、ダイが最初に刺した短剣の傷口の奥。そこに紫色の結晶があったのだ。

ダイは最初に持っていた短剣で刺した時、少女の心臓の部分までは刺さなかった。いや、刺さなかったのだ。

もしかしたらユイちゃんは戻ってくるのではないか。そんな淡い期待を抱いてしまったからである。けれど、

「今度こそ、おいらは君の心臓を貫いてみせる。」

ダイは力強い声で、そう言い放った。

ずっと化け物の様子を見ていて、ダイは気づいたのだ。彼女は、ユイちゃんの魂は泣いていると。気持ち悪い笑顔を浮かべたまま、泣いているのだ。

ダイは彼女が化け物になってしまった事を知り、深い絶望に叩き落とされた。けれど、一番辛いのは彼女自身なのである。だからこそ、ダイはそのカタナを握りしめるのだ。

そして、ダイはその心臓目掛けて、握りしめたカタナで突き刺しに行った。

「どりゃあああー！」

雄叫びを上げながら、ダイは少女に向かって突撃していく。もちろんそれを阻止しようと、少女がダイに向かって攻撃をしようとする。

「——!?!」

だがそれは何者かの手によって妨げられた。それはユウタである。彼は隠れて少女の後ろへと回り込み、彼女の両腕を掴んで押さえたのだ。

「動いちやダメですよ…っとうわー！」

しかし、その細い腕からは想像もつかないほど大きな力を振るわれてしまったせいで、ユウタは吹き飛ばされてしまった。

そして少女はその細い腕を鋭い刃へと変形させて、ダイへと切りかかったのだ。

ダイのカタナの攻撃は、もう少しで少女の心臓を貫く所であった。しかし、少しだけ、少女の攻撃の方が速い。

それでもダイは諦めない。彼女を救うために、彼女を殺すのである。今さら引くなんて選択肢は、彼には無かった。

「おいらと刺し違えてでも、ユイちゃんを救うんだ!!」

——その時、化け物の動きが一瞬だけ止まった。

その一瞬は戦いにおいては大きな違いとなる。攻撃が遅れた化け物はダイによってその心臓を貫かれたのだ。

すると、少女の赤く光る目が綺麗な薄紫色の瞳へと戻った。

「ダ…ダイ?」

「ユイちゃん!!」

彼女は完全に元通りに戻った事がダイには分かった。だがそれは意識だけである。彼女の心臓は、もう元には戻らない。

「ごめんね、ダイ。」

「謝りたいのはおいらの方だ!…新しい話を作ったんだ。ユイちゃんを散々泣かせて、悲しませてしまったお詫びだよ。だから…またいつもみたいに情けなくて、みつともないおいらの事を叱ってくれよ…。」

早口でダイはたくさん言葉をユイへと投げかけた。そんなダイをユイは優しく見つめていた。

いつも怒ってしまうのはわたしの悪い癖。本当は、ダイを情けなくみつともないなんて思った事、1度もないの。

わたしはダイの隣にいるだけで楽しかった。ダイが自分の作った話を意気揚々と語る、その顔が好きだった。

…けれどダイはわたしの気持ちなんかには、これっぽっちも気づいていない。ダイはどうせ、わたしが気の強い性格だから、男の子達からの告白を断ったんだと思ってるんだろうなあ。だからこそ、

「…ダイのバカ。」

ユイは真正銘の笑顔でダイに向かってそう言った。その笑顔はどんなものよりも綺麗で美しく、そして眩しかった。

そしてそのまま彼女は黒い霧となって消えていく。

「ユイちゃん!!なんでだよーおいら、まだ新しい話をユイちゃんに聞かせてないじゃん!だから…戻ってきてよ、ユイちゃん!」

ダイのそんな悲痛な叫び声だけが、薄暗い森の中に響き渡った。

第二章9 『未来へと繋がる涙』

「この声は…ダイ!？」

ダイの悲痛な叫び声が森中に響き渡り、その声はアンナ達の耳にも届いた。一同は急いでその声のした方へ向かう。

「これは…何があったの?」

「——! ユナンとジークが怪我をしているわ! 助けないと。」

「ぎゃあああ! みんな、大丈夫か? オレ、何が起こったのかさっぱり分かんないよ!？」

ダイの元に辿り着いたアンナ達は、目の前の惨状に驚いた。

木の傍で寄りかかっており、全身に火傷を負って動けないでいるユナン。木に大きな衝突の後があり、その傍で気を失っているジーク。そして周りが焼け焦げている場所の中央で、泣き叫んでいるダイの姿があった。

ダイは無傷であるように見えた。とりあえず、今急ぐのはジークとユナンの治療である。セーナはユナンを、アンナはジークを、キリマルはダイの様子を見ることにした。

セーナは木にもたれかかっているユナンに急いで駆け寄った。

ユナンには細長い火傷の跡がいくつもあった。服も何かによつて焼き切られており、所々破れている。

「ユナン、大丈夫!? 何があったの?」

「炎を操る魔獣と戦闘になったんだ。それで…このザマってわけよ。うぐつ。」

「無理には喋らないでいいわ。待ってて、えーと応急処置だけど…」
ユナン達はどうかやたら相当強い魔獣と戦闘をしたようである。彼の傷がそれを物語っていた。

セーナは、手に青い光を纏って、ユナンの傷に近づける。するとユナンの身体にあった小さな擦り傷などが、少しずつ治っていった。だが肝心の火傷は治らない。

実は「青」魔法には治癒魔法がある。というか一般的に「青」魔法

たとえば、氷を生成したりするよりも、そちらのイメージの方が強い。

「緑」にも治療魔法はあるが、そっちはオマケのようなものである。「緑」の治療魔法は自分に対する治療能力は高いが、他人に対する治療能力は低いのである。

しかし、「青」の治療魔法はどちらに對しても、その効能に違いはない。それにその種類も「緑」魔法より豊富である。

裂傷、火傷、毒など様々な症状を治すのに優れているのは「青」魔法なのである。

だが、火傷や毒などの特殊な症状を癒す魔法は、これまた難易度が高い。

セーナは擦り傷程度を治す魔法なら使えるが、火傷を治す魔法は使えなかったのだ。

「わたしにもっと力があれば、ユナンに苦しい思いをさせずにすんだのに……」

「いや擦り傷とかも痛いし、十分助かってるよ。そんな事言ったら、この傷は俺の力が足りなかったせいで出来たんだ。セーナが悔やむことなんて一つも無いって。」

また自分の力不足のせいで仲間を助ける事が出来ず、セーナはそんな自分を責めた。

けれどもユナンはそんなセーナを励ます。その優しさが、彼女に更なる自責の念を抱かせてしまう事をユナンは知らない。

そんな時、後ろから声が掛かった。

「またアンタも結構な無理をしてるわね。まあこの後ろのバカも一緒だけど。」

「くっ。俺は大丈夫……だ。アンナ、降ろせ。」

「はいはい。2人まとめて治療したかっただけよ。言われなくても、今降ろすわよ。」

ユナン達に声を掛けてきたのはアンナだ。その背中にはジークが背負われていた。そんなジークは少し恥ずかしそうにしている。

アンナはジークをユナンの隣に降ろす。それから彼女はリュックから何かを取り出した。

アンナは手に緑色の容器をしたスプレーのようなものを持っている。

「それは？」

「魔法道具『セリオン』の一種。中には火傷の治療魔法の術式が込められた水が入っているのよ。これは大陸中央の塔付近の街で買ったものなの。結構高かったんだから。本当はアタシが仲間を燃やしちゃったとき用に買ったものなんだけど……」

「アンナが契約者になったばかりの頃。俺はそれに何度か世話になったことがある。」

「……もしかしてアンタ、ちよつと怒ってる？」

ユナンはそんなアンナとジークの様子を苦笑しながら見ていた。ジークの言葉には、たしかに少しの怒りが含まれているように感じたのだ。

「……ジークは何回もアンナに燃やされたのであろう。」

契約者はすぐに魔法を使いこなせるようになるわけでは無いのかもしれない。だとすれば、こんな魔法道具が大陸中央の塔付近に売っているのも納得である。

契約者が事故を起こしてしまつたら、とんでもない大惨事となる。

魔法はそれくらい、強力で危険なものなのだ。

「じゃあ火傷の箇所、全部見せてー。」

ユナンは「ほい。」と言って、火傷の箇所を見せる。そこにアンナは魔法道具を使っていく。トリガーが引かれて噴射された液体は、ユナンの火傷の箇所に付着し、青色の光を発した。すると、ユナンの赤く膨れ上がった皮膚が元の綺麗な肌色の皮膚へと戻っていく。

「魔法の力ってすげー！」

ユナンは思わずそう叫んだ。正直ユナンは、全治3ヶ月ほどの傷を負った自覚があったのだが、それが今の一瞬で治つたのだ。魔法さまさまである。だが、

「なんか気だるいな……」

「あつたりまえでしょ。無理やり治したんだから。アンタたちは大人しくしておきなさい。」

何故かユナンの全身が重いような感覚がした。どうやら何の副作用も無く傷を治せるほど、便利なものでは無いらしい。

すると、ユナン達の元へキリマルとダイが歩いてきた。泣いているダイをなだめるようにキリマルが背中をさすっている。

「ぐすつ。ぐすつ…」

「ダイがトドメを刺してくれたんだな。ありがとう。…そしてごめん。」

そんなダイの様子にユナンは痛たましい顔をして感謝と謝罪の言葉を言った。

やはりユナンの予想通り、ダイはあの少女の姿をした魔獣を倒したようである。ダイならあの魔獣を倒せると思ったのには、2つの要因がある。

1つ目は魔獣のおかしな動きだ。それに気づいたのは魔獣が炎の糸を展開した時である。ユナン達には本気を出したが、ダイの時は吹き飛ばすだけであったのだ。普通、魔獣は手加減なんてものはしない。あれだけの力があるならば、最初の時にダイをその炎の糸で燃やし尽くしたはずである。つまり、あの魔獣はダイには本気を出さない。いや出せなかったのかもしれない。

そして2つ目はダイの決意である。ダイは自分の幼なじみの姿をした魔獣であっても、迷わず攻撃をすることが出来るのか。殺しに躊躇いのある者が戦闘をすれば、その者は必ず負けてしまう。それは当然の摂理である。戦闘というのはそんなに甘くはない。しかしユナンが見た、ダイのあの顔はそんな半端者の顔ではなかったのだ。

——だからこそ、ユナンは自分のカタナを彼に託した。

そしてダイは自分の目的をしっかりと果たしたのだ。…彼女を救うという目的を。

正直ユナンは人が魔獣になっただなんて、信じたくはなかった。しかしあの見た目。さらには魔獣がダイだけに本気を出さなかったこと。そしてなによりも今、何かに気づいて泣いているダイの様子。これだけ条件が揃えば、嫌でも分かる。

——あの魔獣がユイという少女であったことは疑いようがなかった

た。

「俺に力があれば、ダイに悲しい思いなんかさせずにすんだのに！」
「いやユナン、それは俺にも責任がある。」

ユナンは悔しそうにそう言っただけで自分を責めた。その責任をジークも背負おうとする。

自分の幼なじみを自ら手にかけるなんて、10歳の男の子には荷が重すぎる。その重荷をユナンは取り除いてあげる事が出来たはずなのだ。

——自分にもっと力があれば。

だがユナンは魔獣に負けてしまった。そのせいでダイが自ら戦わなければならなくなってしまったのだ。

ユナンは、自分は小さい頃から特訓をして力をつけてきたと思っていた。しかしここ最近はその考えが甘かった事を思い知らされてばかりいる。

魔法が使えないなんていうのは、言い訳にしか過ぎないのだ。努力すればセーナのように魔法を使うことも出来るし、母のようにもっと剣術を磨けば、魔法なんて使わずとも、あの魔獣を倒すことだって出来たはずである。

そんなユナンとジークの言葉に、ダイは首を横に振った。

ダイは彼女との別れの後、確かに悲しみに打ちひしがれていた。彼女はダイの腕の中で黒い霧となって消えていったのだ。そして、残ったのはこの紫色の結晶のみ。よく見ると中に、白い線のようなものでユイちゃんの姿が立体的に描かれている。

ダイはそれを握りしめながらずっと泣いていた。

——そんな時、どこかから声が聞こえて来たのだ。

「何泣いてるのよ。情けないし、みつともないわよ！ダイにはこれからがあるじゃないの！」

それはたしかにいつものユイちゃんの声だった。ダイは思わず、辺りをキョロキョロと見回した。しかし、どこにもあの愛しい女の子の姿は無かった。

「ユイちゃん!?!どこにいるの?」

ダイは必死にそう叫ぶ。しかし返事は一向に帰ってこなかった。ならあの声はダイの幻聴なのか?けれどダイにはそれが幻聴では無いことが分かった。なぜなら彼女の「魂」をたしかに感じたからである。

そして彼は気づく。あれは彼女の最期の言葉だったのではないかと。

「ダイにはこれからがあるじゃないの!」

あの少女の声がダイの脳内をこだまし続ける。それはダイの事を怒るような声でもあった。いつも通りの彼女らしい言葉である。

——彼女は最期までダイの事を叱ったのだ。

そう思った時、不思議とダイの胸の内から熱い何かが込み上げてきた。

彼女はいつだって前を向いていた。最期までそれは同じであったのだ。それなのに、自分は後ろを振り向いて、いじけてばかりいる。

——そんな弱い自分が情けなくて仕方無いのだ。

ダイの目から熱い涙が零れ落ちる。その目は悔しきで満ち溢れており、そして『未来』を見ていた。

「お兄さん達、違うんだよ。おいらは…ただ自分の力の無さに悔しくて泣いてるんだ。おいらがもっと勇氣を持って、早くにユイちゃんを探しに行っていれば、彼女を助けられたかもしれないんだ。」

その言葉を聞いて、ユナンとジークは目を見開いて驚いた。

——ダイは今、己の力の無さに嘆き、涙を流していたのだ。

ユナン達はダイの事を甘く見ていたのである。彼はユナン達が思っている以上に強い心の持ち主であったのだ。

彼の涙は過去を振り返り、『嘆く』為の涙などでは決してなかった。それは『未来』へと繋がる涙なのである。

「ダイ、勘違いして悪かった。お前の『心』は強えよ…」

ユナンはダイに対して改めて謝った。

それはダイに対する賞賛でもある。彼の心は強い。彼はもう決し

て振り返らないのであろう。熱い思いを持って、前だけを向くのだ。だからといって自分の力不足を無かったことには出来ない。ユナンもユナンで、『未来』を見ているのだ。

ユナン達はダイを街へと送り届ける。道中、もう蜘蛛女は一体も現れなかった。

そしてユナン達は街へと辿り着いた。時刻はすっかり夜になっており、酒場からは男達の笑い声が聞こえてきた。

「ありがとうお兄さん、お姉さん達。おいらもう行くよ。…やる事もたくさんあるし。」

「ほんとに大丈夫か？俺らも一緒に…」

「いや、大丈夫だよ。お兄さん達には迷惑かけてばかりだったし…それじゃあまたね！」

「またな！」

「またね！」

ユナン達は、街の中を颯爽と駆け出していく少年の後ろ姿に、手を振って返した。その少年が最後にこちらを振り返ってこう叫ぶ。

「おいら、契約者になってお兄さん達みたいに強くなるから!!」

その目にはたしかな「光」が宿っていた。そして手には紫色の結晶を大事そうに握りしめている。

「おう、強くなれよ!!」

ユナンはダイに向かってそう叫んだ。あの男の子が契約者になるなら、ユナン達はまた彼に出会うことになるのかもしれない。

——その時、彼はきつと強い契約者になっているに違いない。

ユナンは手を振りながらそう思った。彼の10歳とは思えない大きな後ろ姿を見て、それは確信へと変わったのであった。

「さて、俺たちも王都に向けて出発しますか。」

「そうだな。」

「王都。都会の女性、それに貴族のお嬢様!!」

ダイとも別れ、一段落ついたところで、元気そうに男3人組はそう

言った。次は王都である。ようやく目的地が目の前にまで近づき、彼らは興奮していたのだ。

そんな男3人組の様子をセーナ達はジト目で見つめていた。そしてアンナが口を開く。

「ユナンとジークは怪我したばっかりじゃない。今日はゆつくり宿に泊まって休む！明日出発よ！」

「えー…」

そんなアンナの宣言に男3人組は残念そうな声をあげた。しかしアンナの怖い笑顔を見るに、黙って従うしかなさそうである。

宿を目指すユナン達。そんな時、ユナンは背中をちよんちよんとつかれた。振り返るとセーナがじーっとこちらを見つめている。

…何かユナンに不満があるようだ。

そして彼女はぼつりと1つの単語だけを呟いた。

「服…」

「うげっ！わ、悪かったって。」

セーナのその一言でユナンは何を言いたいのか察した。ユナンの新しく買ったばかりの服は、魔獣の炎の糸によってボロボロになってしまったのだ。セーナと頑張って選んで買ったのに、それを1日も経たずにボロボロにしてしまったユナン。責められるのも仕方がない。

「ま、また明日にでも新しいのを…」

「同じの。」

「えっ？なんて？」

ユナンはそのぼそりと言ったセーナの言葉がよく聞き取れずに、手を耳に当てる動作をして、彼女にもう一度言葉を促す。

「だから、同じのを探すの！」

セーナは少し頬を膨らませて、ユナンに向かってそう叫んだ。可愛い眉をひそめ、両手をぐつと握りしめている。セーナは怒っている姿も可愛い。というか、あの服装がよっぽど気に入ったのであろうか。

「わ、わかったよ。まあ今は店も開いてないと思うし、明日の朝な。」

ユナンは苦笑しながらそう言って、ぶんぶん怒っている銀髪の少女をなだめた。

その真夜中、ユナンはベッドから起きて外に出た。それは、何故かずっとユナン達から隠れていたある少年に会うためであった。

「それで、色々と説明してもらおうかな。」

ユナンは真っ赤な服をきた少年に向かって、そう声を掛けた。その服装は、着ている本人が説明してくれるなら、ジャージ姿と言っていたであろう。

「ああ、待っていましたよ。ユナン君と話がしたくて。」

ユナンの言葉に振り返ってそう言ったのはユウタである。彼の言葉遣いが丁寧なのは、彼の人柄か、それとも彼の故郷の風習なのか、それはユナンには分からない。何故なら彼は今日出会ったばかりの、ほぼ「他人」であるからだ。

「…お前の加護、人の集団に溶け込むってやつか？」

「加護？それについてはよく分からないんですが、能力の説明は大体それで合ってます。正しくは環境に溶け込む能力と言った方が良いでしょうか。」

環境に溶け込む。それが本当なら凄まじい加護である。だが本人は加護について、知らないようであった。

「契約者じゃないのか？女神に会ったことは？」

「ああ、アンナさんやジーク君みたいな人達の事ですか？僕は魔法が使えないので、違うと思いますよ。女神という存在にも一度も会ったことはありません。」

その答えを聞いて、ユナンは一瞬身構える。契約者では無い能力持ち。まさか、

「…大罪の十二宮だったりしないよな？」

「なんですか、その厨二臭い名称は。それについてもよく分からないですね。…一つだけ言えるとするれば、僕は転生者であると言った所でしょうか。」

「転生者？」

「違う世界から来た者って言ったら理解してくれますか？」

——なるほど、全く分からん。

ただ、どうやら彼は大罪の十二宮では無いようなので安心した。転生者。とても信じられるような話では無いが、時間遡行をしているユナンも、それに関しては人のことをあまり言える立場ではない。世の中、何でも起こり得るのである。

「理解はしてないが、まあ信じるよ。∴それで、これからユウタはどうするんだ？」

「これからすぐに王都へと向かうつもりです。みんなとはここで別れになりますね。∴邪魔してすみませんでした。」

「いやいや、いいって。キリマルとかも、珍しく同じような仲間を見て楽しくそうにしてたし。なんならこれからも∴」

「いや、もういいんです。僕も次の事に目を向けないと。ここにいたら、それが出来なくなってしまうから∴キリマル君にお礼を言えないのはさみしいですが、これが僕の選択です。」

そんな彼の表情はとても辛そうであった。ユナンはユウタの事をあまり知らない。それでも、彼が何かを決意して、それを行動に起こそうとしている事だけは分かった。そんな彼をユナンは止めたりはしない。けれど、一つだけ彼には言いたいことがあったのだ。

「ユウタさ、なんでそんな能力をわざわざ使うんだ？たしかに見た目は変な格好してるけどさ、能力なんか使わなくても、ユウタの性格ならみんなと仲良く出来ると俺は思うぞ？」

なのに彼は能力を使ってユナン達に近づいた。それがユナンには不思議でたまらなかったのだ。

ユウタはそんなユナンの言葉を聞いて、目を見開く。そして泣きそうな顔になったのである。そんなユウタを見て、ユナンは慌てふためいた。

「えっ!?ごめん、コンプレックスとか？いやいや、そんなつもりは全く無かったんだけど∴」

「ああ、すみません。ちよつと嬉しかっただけですよ。∴ありがとうユナン。勇気を貰ったよ。」

彼は笑って、最後はユナンにタメ口をした。それが彼なりの距離の詰め方なのかもしれない。もう心配は要らないようである。

ユナンもそんな彼に笑顔を見せた。

「そうか元気でな。また会おうぜ、ユウタ!」

「そつちこそ元気で。またな、ユナン!」

ユウタは目をキラッとさせて、意気揚々と森へと歩いていった。

ユナンとユウタは、今日たまたま出会っただけの、「他人」の関係であった。しかしそれは少し前のこと。今の2人の中には、確かな「絆」が芽生えているのである。

——次またユウタと会う時が楽しみだな。

ユナンは密かにそんな思いを胸に抱いたのであった。

ユナンが宿に戻ると、たまたまキリマルと出会った。こんな夜更けまで起きているなんて、キリマルにしては珍しい。まあそれはユナンも同じことではあるが。

「おう、キリマル。こんな夜中まで起きてるなんて珍しいな。」

「オレ、昼に地獄のマツサージ受けちゃってさ。それがトラウマで眠れないんだよ。」

「そりゃあ…また災難だな。」

「ユナンは何で起きてたの?」

「あー、えーとな。実はユウタと会っててさ。あいつ、恥ずかしがり屋だからもう行くんだってよ。全く、みんなに挨拶ぐらいして行けばいいのにな!」

そんなユナンの言葉を聞いて、キリマルが首を傾げた。そして彼はきよとんとしたまま、ユナンに向かってこんな質問を投げかけたのだ。

「その…ユウタって誰?ユナンの知り合いか?」

「——…いや何でもない、忘れてくれ。」

その時、ユナンは改めてユウタの能力の恐ろしさを知った。それは別に彼が危険だとかそういう話では無い。ユナンはむしろ、彼の将来を心配したのである。

彼の能力は、初めから人間関係そのものを無視してしまうのだ。

——つまりその能力が発動し続ける限り、彼は人とまともに付き合

うことさえ出来ないのである。

一生孤独な運命を定められた少年。

「そんなの…あんまりじゃねえか。」

ユナンのそんな呟きを聞いて、キリマルはただただ、不思議そうな顔をしていたのであった。

真夜中の森の中を、ハーブの音が響き渡った。それを奏でているのは、ハーブの美しい音色には全く似合わない1人の男性。顎髭をたくましく伸ばした、中年の怪しい男である。

その男の隣に立っている木には、大きな白い綿のようなものがへばりついていていた。それは蜘蛛の卵、だがその大きさは人間が丸ごと入れる程はある。

——そしてその卵が破けて、中から生き物が出てきた。

それは薄紫色の髪をした女性のような姿をしていた。20代ほどの年齢であろうか。すらつとした細長い体型、起伏に富んだ女性らしい体つきは、どこからどう見ても普通の人間である。

——だがその目が一瞬赤く光った。

そんな女性の姿を見て、隣にいた男は歓喜の声を上げた。

「すばらしいーね。成功だーよ。」

男はずっと「実験」をしていたのだ。生物の進化、その集大成となるものである。

ライオンのような強靱な牙も爪もない。それなのにシマウマのような敵から逃げる足の速ささえも無かった人類は、その進化の方向性を変えた。それは道具である。そうして「発明」を繰り返し、人類は食物連鎖の頂点、いやそれ以上にまで登りつめたのだ。そんな彼らは生物の最終進化形態と言えるのかもしれない。

——しかしワタシはそうは思わない。

今なお、新しい道具を生み出し続けている人類。そうしていくうちに、我々は本来の進化というものを忘れてしまったのである。

——道具が無くなってしまえば、人はただの猿、いやそれ以下の存在なのだ。

だからこそワタシは思う。人間並みの頭の良さを持ち、なおかつ強靱な肉体を手に入れた種族こそ、本当の生物の最終進化形態と言えるのではないかと。

——仮定が立った。であるならばワタシは「実験」を行う。そして世界に「証明」するのだ。

あの被検体から直接作ったものは、少し余計な感情を持ちすぎてしまった。そのせいで、あんな小さな男の子にも負けてしまう結果となったのだ。

もちろん感情は更なる成長にとって重要な事くらいは十分に理解している。成長しない個体など、最終進化形態とはとても言えない。だから成長に要らない感情だけを取り除く。そうして出来たのが、今、目の前にいる完成体なのだ。

「…それで、命令は？」

気の強い女性の声だ。被検体に似たのかもしれない。まあ気の弱いやつよりは余程良い。寧ろ、好都合である。

…さて殺す相手か。テキトーで良いが、まあ種族として強いものの方が参考になるな。ワタシの理想に1番近かった種族。ターゲットはそれにしよう。

男は邪悪な笑顔を浮かべながらこう言った。

「竜人を1人、殺してくるよーに。」

「…了解。」

そう返事して、女性は超人的なスピードで暗い森の中へと消えていった。すると、それに入れ替わるように1人の男が暗闇の中から姿を現した。

その男の服装は動きやすく、隠密に適したものであった。ユウタがその姿を見たのなら「忍者」と、そう呼んだであろう。

「申し上げます。森で赤い服装をした黒髪の少年を1人捕らえました。どうなされますか？」

顎髭の男はその報告を聞いて、あの戦闘中に一瞬だけ現れた謎の少年の事を思い出した。その少年のせいで動きを止められ、被検体は刺

されてしまったのだ。

——あの少年は、何か特別な能力を持っているようだ。

「我々、暗殺団の仲間に迎えましょーう。ここに連れてくるよーに。」

「はっ。」

そう返事をして忍者の格好をした男がまた暗闇へと消えていく。

そして顎髭の男が、再びハープを奏で始めた。

——怪しい音色が森中に響き渡る。

第二章 10 『王都アルヴヘルム』

「王都キター！城門でけえー。」

「オレも初めて見たよ！すげえ!!」

「本当、こんなに大きくてびっくりしちゃった。」

ユナン達は1ヶ月の旅の末に、ようやく目的地の王都アルヴヘルムへと辿り着いた。今いるのはその入口前。その城門の大きさに、ユナン、キリマル、セーナは驚きの声を上げたのであった。

その城門の高さは人の身長の10倍、いやそれ以上はあるだろう。そしてそれと同じ高さの城壁が、王都周辺をぐるりと囲っているのがある。たとえ巨人であろうと、それを飛び越えることは不可能であろう。城壁には灰色の強固な石材を使っており、外壁にびっしりと付いている傷が、この王国の歴史の長さを証明していた。

王都アルヴヘルムはラムザ平原のど真ん中に位置している。そしてラムザ平原にはラムール川と呼ばれる1本の大きな川が流れているのだ。水源は人々が生活する上で欠かせないものである。つまりラムール川のおかげで、この地は古くから人々に愛され、国の中心部分となるまでに発展したのである。

驚きの声を上げるユナン達に向かって、アンナが赤い眉を顰めながら注意をした。

「感動するのも分かるけど、他の人もいるのよ。アンタたち、声がデカいわよ！」

「…オレ、今のアンナの声の方がデカいと思うぞ。なあ、ユナン。」

「俺もそう思う。」

「アンタたち。首輪…する？」

「すみませんでした!!」

アンナの脅しに屈服し、ユナン達は一瞬で頭を下げた。彼女はやると言ったら、人前であろうがなんだろうが、マジでユナン達に首輪をつける。ユナン達は王都デビューをそんな恥ずかしい格好で、したくは無かったのだ。そんな彼らの考えをアンナはもちろん見抜いている。

「あーリユックが重いわね。キリマルー？」

「はいはい、オレが持ちましようか？」

「肩凝ったわね。ユナンく？」

「はいはい、お嬢様。かしこまりました！」

ユナンとキリマルはぎこちない笑顔を浮かべながら、アンナの命令に従うほか無かった。ユナン達はまるで家来のように、アンナのご機嫌取りをさせられた。

クソ！後で覚えてろよ、アンナ！

「――？急に優しくなつて、ユナンとキリマルつたら変なの。」

そんなユナン達の様子を、セーナは首を傾げて不思議そうに眺めていた。どうせご機嫌を取るなら、こんな純粋な少女に向けては良かった。ユナンはセーナを見ながら、そんなふうに関心の中で呟く。

するとそこへ、門番と話していたジークが戻ってきた。

「…おまえら、何してるんだ？」

「ユナンとキリマルが『じぶんから』アタシの為にしてくれてるのよ。」

「はあ。遊びも大概にしておけ…」

「それで、お話はどうなったの？」

「もちろん上手くいっただ。全く、契約者も不便な身だな。」

契約者が王都に入る時には、特別な申請が必要となる。もちろんそれは安全上の理由である。契約者はそれほど、敵に回れば厄介であるということだ。

「それじゃあ中に入りましようか！」

アンナがそう仕切り、ユナン達は門へと向かった。門番は2人。1人は青のマント、もう1人は赤のマントを羽織っていた。どうやら2人とも王国騎士であるようだ。

「門番って王国騎士がしてるんだな。」

「そうよ、当番制でね。まあアンタたちもいずれやる事になるかもね。」

ユナンの呟きに反応したのは、青のマントを羽織った女性。青色のシヨートカットヘアで、姉御肌の女性であった。

そしてジークが律儀にその女性に向かって挨拶をする。

「自分は『青』の騎士団に入るつもりだ。また今度世話になるかもしれない。その時はよろしく頼む。」

「まあ、良い男じゃないの。楽しみにしてるわ。久しぶりにアタシが教育係を試してみようかねえ。」

「ちよつと、もう行くわよ!」

そんな2人の会話を遮るように、アンナがそう言った。アンナは頬を少し膨らませながら、強引にジークの腕を掴んで連れていく。

「おい、まだ挨拶が終わっていないんだが。」

「そんなの、明日いくらでも出来るでしょ。まだアンタは王国騎士じゃないんだから、別にいいじゃない。」

「それでもだな…」

確かにユナンも、あの女性は完全にジークに目を付けていたような気がした。アンナの心中は察するところである。まあ、ジークなら大丈夫であるとユナンは思うのだが、乙女心というのはそんなに単純なものでは無いらしい。

「うわあ、凄い。こんなに人がたくさん…」

セーナが目の前風景にそんな感想を零した。ユナンもそのセーナの言葉に釣られて、前の景色を見た。

ぎゆうぎゆうになるほど沢山の人が歩道を行き来していた。中央には荷物を乗せた馬車などが走っていて、馬車越しに商人達が楽しそうに会話をしている。

大通りはずっと奥まで一直線に続いており、遠くには大きな城が見えた。おそらく、あれが王城なのであろう。

大通りの両側には様々な店が立ち並び、客を呼ぶ声があちこち飛び交っている。人々の声が辺りを埋めつくしており、ユナン達は隣にいるのに、会話が困難であるほどうるさかった。しかしそれは王都が賑わっている証拠でもある。不思議と悪い気分では無かった。

「それでどこに行くんだ?」

「まずはアタシ達が泊まる最後の宿を目指しましょう。集合場所が分かったら、後は自由行動よ。」

「最後…か。」

アンナについて行きながら、ユナンはこれまでの旅を思い返していた。

最初、無一文で見知らぬ土地に放り出された時はどうしようかと思った。けれど、ユナンはこんな素敵な仲間達と出会い、楽しく旅をする事が出来たのである。今では、あの場所に飛ばされた事に感謝すらしている。

少し寂しいが、明日でアンナ達ともお別れである

——俺はこれから一体何をすればいいんだろう。

もちろん、一旦は故郷の情報を王都で仕入れて、村へ帰るつもりだ。母さんに自分の無事を報告するためである。

しかしユナンはこれからの事について、あまり良く考えてはいなかったのだ。

一応ユナンは明日、自分が何色かだけは確認するために騎士団を訪ねてみるつもりではある。しかし、魔法が使えないユナンを王国騎士団に入れてもらえるとは考えにくい。

なら、セーナと一緒に旅をしないかと聞いてみるか…

「ついたわー！ここが今日の宿よ。」

「宿もでけええ！オレ、部屋が楽しみだよ！」

ユナンがずっと考え事をしていたら、いつの間にか目的の宿屋にまで到着していた。その宿は、人が何十人も一度に泊まれるほど、大きなものだった。なんと4階建ての木造建築である。優秀な建築士と大工が王都には、いるのであろう。

「それじゃあ夜にはここに戻ってくるように。みんなで夜は打ち上げよー！じゃあ、一旦解散！」

「打ち上げ、うっひょー！」

「とりあえず、武器屋でも見てくるか。王都なら、珍しい矢が売ってるかもしれない」

なんか周りを見ていたら、ユナンのこれからの悩みなんて、どうでも良くなったきた。ユナンは気を取り直し、キリツとした目をしてこっぴど叫んだ。

「じゃあ俺は、王都を探検してくるぜ！」

「アンタ：迷子にならないようにね。」

「大丈夫だって！」

ユナンはアンナにサムズアップをしてそう言った後、どこかへ駆け出して行った。

「あつ：待って。」

セーナはそんなユナンを呼び止めようとする。しかし、王都の景色に完全に目を奪われているユナンは、それよりも先に走り去ってしまった。

セーナは、ユナンと一緒に服を買いに行く約束を果たしたかったのだ。

「それなのに、すぐどこかへ行っちゃうんだから。まさかわたしとの約束、忘れてないよね…」

セーナが頬を膨らませながら、もうここにはいないユナンに向かって、そう文句を言ったのであった。

キリマルは通りを歩く沢山の人々に目を凝らしながら、その『ターゲット』を捜していた。普通、こんな人混みの中で、一人一人の顔を確認していく事なんて出来るはずがない。しかしキリマルは、とてつもない集中力を発揮して、その人間離れた業を可能にしたのであった。

「美人さん、みつけ！」

そして彼は『ターゲット』に一直線へと向かっていく。人混みをかき分けた先には、1人の少女の姿があった。

その少女は、赤い大きなリボンでその黒髪を括り、ポニーテールの髪型をしていた。白と赤を基調とした服。上は主に白で、下は赤のスカートだ。その服装はキリマルの里にいた巫女の格好に似ていた。

もちろん、顔はキリマルが惹かれるほど可愛い。胸は小さいが、その可憐な立ち姿からは、清楚さが滲み出していた。清楚な女性はキリマルのタイプでもあるのだ。

そしてキリマルはいつものセリフで、その女の子に語りかけた。

「その美しいお嬢さん。オレと一緒にお茶でもしませんか？」
ちなみにキリマルの経験上、この誘いに乗ってくれる確率は1パーセントである。その1パーセントとは、キリマルを面白がったアンナの事であった。つまり、大体は断られる。しかし、それで引くようでは男が廃るというものだ。

「お茶!?!いいわね、私ちようどお腹が空いていたの!」

「ああ、無理なのは分かっていますよ。けれどオレは君と運命の…え?今なんて?」

「いいって言ったのよ!さあ、行きましょ?」

「う、うん。」

だがその少女は断るところか、食い気味にキリマルの誘いに乗ってきたのであった。キリマルはそんな少女の様子に少し戸惑った。

オレから誘っておいてなんだけど、この女の子、少し変じゃね?清楚というか、天然元気っ子って感じなのかな?

「私の名前はリンデル。リンって呼んでね。」

「お、オレの名前はキリマル。よろしくリンデルちゃん。」

「むっ。だからリンでいいってば。」

少し距離を置いたキリマルの呼び方に、リンデルは頬を膨らまして怒った。…顔が近い。あのキリマルでさえ1歩引いてしまうくらい、その少女はぐんぐんとキリマルに距離を詰めてきたのである。

「よ、よろしく。リン。」

キリマルは少し苦笑いをしながら、そう言ったのであった。

2人は大通りの外れにある、茶屋に足を運んだ。キリマルの里にもあったが、あそこ以外で茶屋があるのは珍しい。さすがは王都、どんな店でも探せばある。

キリマルは久しぶりの団子を美味しそうに頬張った。懐かしの故郷を思い出す。別に故郷にそこまで良い思い出は無いが…

隣に座っているリンデルも、団子を美味しそうに食べていた。その食べる仕草は何故か上品であるように感じた。

それからリンデルとキリマルは、団子とお茶を楽しみながら、たわいのない話をしていった。

「へー、キリマルは旅をしながら王都まで来たんだ。どんな旅だったの？」

「そりゃ、大変だったって。変な力を操る男に、光る正義のお兄さん。蜘蛛女みたいな化け物にだって出会ったよ。」

「凄い旅だったんだ…楽しそうー！」

「今のオレの話、ちゃんと聞いてた？」

「うん！蜘蛛女、私も会ってみたいなあ。それで襲ってきたら、ドカーン！って吹き飛ばすの！」

腕を高く掲げて、そう叫んだ少女には清楚の「せ」の字も感じられなかった。しかしキリマルは、そんな彼女と一緒にいて結構楽しかった。それは美人なお姉さんと一緒にいて感じる楽しさとは違い、どつちかというところ、ユナン達と一緒にいる時に感じるものと似ている。

当初の目的からは大きく外れてしまったが、たまにはこういうのも悪くはない。

「ねえ、もつと色んな話を聞かせてよ！」

そんな少女の薄紅の瞳は光輝いていた。キリマルは珍しく自然な笑みを浮かべながら、話を続ける。

「それじゃあ次は…」

キリマルの話を、リンデルは元気に相槌を打ちながら、楽しそうに聞いていた。

そんなキリマルの午後の時間は、あつという間に過ぎ去ったのであった。

「どこどこだ？…って王都広すぎんだろ!!」

ユナンの肌にはひんやりとした空気が当たる。大通り沿いは、活気に満ち溢れていて明るかった。しかし人っ子一人いないこの路地裏は、昼間なのに薄暗い。

ユナンも最初は、普通に大通り沿いの店を見て回っていた。しかし、途中で飽きてしまったのだ。だからユナンは、探検家気分で細い路地へと続く道に足を踏み入れてしまう。

——それが最大の過ちであった。

そして案の定、ユナンは帰る道を忘れてしまい迷子となってしまうのだ。薄暗い場所というのは、人を不安にさせてしまうものなのである。

「なんか出てきそうだなこゝ。早いとこ抜けねえと。」

そう呟いたユナンの耳に誰かの声が入ってきた。どうやら、怒鳴っている男の声のようである。ユナンの嫌な予感通り、その男の声は荒くれ者のような声であった。

「おい、あんまり大人を舐めるんじやねえぞ？！痛い目見るか？」

「女だからって調子にのんじやねーぞ!？」

「きゃー！助けてーお巡りさーん。」

男は2人いるようであった。そしてそんな男達に絡まれ、助けを呼ぶ女の子の音がする。しかし、

「こんな路地裏でお巡りさん呼んでも、都合良く来るわけねえだろ…」

ユナンはそう呆れたように言いながら、声の元へと向かう。

狭い路地を抜けると目の前が一気に開けた。どうやら薄汚い広場のようなのである。そこには、チンピラのような男が2人と、亜麻色の髪をした少女が1人いた。そして少女は駆けつけたユナンを見て、笑顔でこちらに手を振った。

「あつ、お巡りさん。助かります〜！」

その少女の声は可愛い。だがぶりっ子っぽい声であるせいか、少しわざとらしく感じてしまう。…地声低そうだな。

「どう見ても違えだろ。その目は何のためにあるんだよ。俺は一般人だ！」

「ええー。初対面の人にそんなに言わなくてもいいじゃないですか〜。」

そんなユナンのツツコミに、亜麻色の髪の少女は苦笑してそう返したのであった。

第二章 1 『打ち上げ』

目の前にいる少女はユナンと同じくらい年齢であろうか。しかしその服装は大人びている。黒のキャスケット帽を被り、茶色のハイネックニットの上に水色の上着を羽織っている。下は黒のショートパンツで、寒くないようにタイツも履いていた。ユナンからしてみれば、都会っ子のような服装である。

亜麻色の髪は首元まで伸びており、薄黄色の瞳が印象的だ。

「それでこれ、どういう状況？説明プリーズ。」

「プリーズってなんだ兄ちゃん？」

「ちようだいって意味だよ。俺の母さんがよく言ってたから、移っちゃったんだ。悪い悪い。」

ユナンは頭を掻いて、恥ずかしそうにしながら謝罪をする。状況の説明を求めた理由は簡単だ。目の前にいる少女から胡散臭いオーラを感じるからである。

「このくそアマが俺らの財布を盗みやがったんだよ！」

「だからワイっちらはその仕返しをしようとしてたってわけよ。」

「だから財布は返したじゃないですか〜！」

チンピラ2人の証言を聞いて、ユナンが冷たい視線を少女へ向ける。やはりこの少女は隠し事をしていた。そういう勘にユナンは鋭いのである。

自分からチンピラに喧嘩を打ったのだ。仕返しをされても文句は言えないであろう。

「なるほど。大体の状況は分かった。それじゃ俺はもう行くから、3人で仲良くごゆっくりどうぞ〜。」

「待って、待ってってば！仲良くなんか出来るわけ無いでしょ！話聞いてました？というか、こんなか弱い女の子を見捨てるなんて、信じられないんですけど。」

「自分で言うのか…見捨てるもなにも、自業自得じゃねーか。強く生きてくれ。」

ユナンはそう言ってその場から立ち去ろうとする。後ろから少女が俺を罵る声が聞こえてくるが、知ったこっちゃない。…と思わせておいて、

「おまわりさーん!!」

ユナンは全力でそう叫ぶ。その声は大気が震えるほど大きい。そしてうるさい。その場にいた3人は突然の爆音に耐えきれず、耳を塞いだ。

「な、なに!? つかうるさっ。」

「こんぐらいしなきや、おまわりさんは来ないんだぞ?」

「なんでこの人、ちよつと自慢げにしてるんですか…」

「残念だが兄ちゃん、そりゃ無駄だ。ここは貧民街の端っこ。衛兵なんざ寄りつきやしないのさ。」

「そうだね、私は衛兵では無い。」

それは落ち着いた男性の声であった。その声からはどこことなく気が感じられる。

いつの間にかユナンの隣には、1人の男が立っていたのだ。その男は紫色の艶やかな髪をさつと掻き上げた。彼の服装は騎士の正装に青色のマント。つまり、

「青の王国騎士!」

「しかもただの王国騎士じゃねーよ。こいつは、青の王国騎士団長ヘンリー・アルバートだ!」

「おや、貧民街の者達にまで知られているとは光栄だね。…その称号はまだ私には重すぎるが。」

「そんなわけねえだろ! どんな魔獣もその槍で一突きしただけで倒れるって噂だぞ? おい、逃げるぞ!」

そう言い捨てて、チンピラ達は急いで路地裏へ逃げていった。

まさかの王国騎士団長の登場。そのおかげでチンピラ達を追い払うことに成功した。ユナンも戦えないことは無かったが、やはり争いごとというのは避けたいものなのである。武器を使うのは最終手段であると、ユナンは心に決めている。

ユナンはヘンリーにお礼を言った。

「俺はユナン。チンピラ達に出くわしちまってき。助かったよ、ありがとうヘンリー。」

「当然の事をしたままでだよ、ユナン。人を助けるのは騎士の務めだ。そちらの女性は？」

「私はライリつて言います。」

「よろしくライリ。ところでユナンとライリはどうしてこんな所に？」

「俺はマジの迷子。んでこいつは……」

ユナンはチラツと横目でライリを見た。彼女は心配そうな目でこちらを見つめている。俺に窃盗の事を言われたくないのであろう。まあ別に俺が盗られたわけでもないし、とやかく言うつもりは無い。

「ここでたまたま出会ったんだ。お前はここの住人か？」

「——！ち、違います。えつと同じく迷子です……」

「なるほど。それではユナンとライリ。私が大通りまで案内しよう。」

そしてユナン達はヘンリーに連れられて、無事大通りへと戻ることができた。時刻はもう夕方になっていった。

「それでは私はこれで。2人とも、もう危険な所には行かないように。」

「マジでありがとな、ヘンリー。」

「ありがとうございます。」

ユナン達は改めてヘンリーにお礼を言った。ヘンリーは爽やかな笑顔を浮かべて、どこかへと去っていった。

ユナンは颯爽と駆けていくヘンリーに向かって手を振る。そんな時、隣にいたライリから声が掛かってきた。

「あの……助けていただいてありがとうございます。」

「別に助けたつもりはねえよ。……これに懲りたらもう窃盗なんですんなよ？」

「——！……優しいんですね。」

そう言った彼女は頬を紅に染め、愛おしそうな目でこちらを見つめ

ている。白く熱い吐息が彼女の口からこぼれた。そんな彼女の様子は、まるで恋に落ちた乙女のようなのである。

——しかしユナンは騙されない。

ユナンは昔から人を見る目があるのだ。その人の仕草や表情、話し方などで大体の人物像が分かるのである。

このライリという少女は普通の人の目には、可愛い理想的な女の子に映るのであろう。

だがユナンには分かる。それは作られたものなのだ。今まで自分を嘘で塗りたくってきた彼女の人生が、ユナンには見える。

「その演技、気持ち悪いぞ。別に気の強い性格でも、がさつな性格でも俺は気にしない。むしろ、素を出してくれた方が俺には好印象だ。」そんなユナンの発言にライリは少しだけ目を見開く。しかし彼女はまたすぐに大きな仮面を被った。

「やあだなく、これが素に決まってるじゃないですかー。」

その言葉は演技をしていると自分で認めてしまっているようなものだ。まあ彼女もそれには気づいているようだが…

ユナンはため息をついて、別れの挨拶をした。

「そうかよ。じゃあな、可愛い詐欺師さん。」

「可愛いのは認めてくれるんですね。さようなら、声の馬鹿でかいお兄さん。」

最後はお互いに皮肉を言い合って別れた。

王都には色んな人間がいる。こんな少女はまだ可愛いものだったとユナンが気づくことになるのは、少し先の話である。

「かんぱーいー！」

場所はレストラン「メリツサ・ラムール」。世界中の料理が食べられると噂の王都一番のレストランである。アンナが個室を予約してくれたおかげまで、ユナン達は仲間だけの空間で食事を楽しむことができた。

旅の打ち上げといった所である。

「ジーク〜おんぶー。」

「おい、アンナ。飲みすぎだ。」

「アンタももつと飲みなさい。アタシの酒が飲めないの〜?」

ジークが酔っ払ったアンナの相手に困っている。だが制御がきかなくなった彼女の相手は、それこそジークにしか出来ない。ジークがこちらに救いの手を求めてきたが、ユナンはキリツとした目で「がんば!」とだけ言った。

ちなみにユナンは酒を飲んでいない。…初めては家族と一緒に飲みたいからである。

「ういー!オレ、今日は飲みまくるぜ!」

「なんだキリマル?今日は一段と元気が良いな。ナンパでも成功したのか?」

「…成功したけど、してない。」

「――?」

キリマルが意味のわからない事を言っている。まあ彼の身に、何か良いことがあったのだけは分かる。キリマルが嬉しそうで何よりだ。

「ううー。でもオレ、みんなとお別れになるのは寂しいよ。」

「…それは俺も一緒だな。」

「わたしもちよつと寂しいかな。」

キリマルに賛同して、ユナンとセーナも寂しそうにそう呟く。…セーナはさつきからお酒をぐいぐい飲んでいるが、平気なのだろうか。

別に明日からみんなとの関係が無かったことになる訳では無い。それでも王国騎士に入るつもりでのジーク、アンナ、キリマルとはあまり会えなくなるであろう。

「アンタたち、何情けない顔してんのよ。しゃきつとしなさい!」

「王国騎士団も月に3日は休みを取れる。日を合わせれば、みんな揃ってまた会うことができるだろう。」

「ほんとうか!」

「本当だ。お、おいユナン。顔が近い。」

ジークの発言に、ユナンは目を輝かせて喜んだ。

王国騎士団は毎日警備に追われ、超ブラックな集団だと思っていたが、意外と休みがあるようで安心した。これなら、月に1回はみんなと会うことが出来るであろう。

そんな時、セーナがいきなりユナンに絡んできた。

「ユナンこそみんなで会う日をちゃんと守れるの？すぐに約束忘れちゃうんだから〜！」

「つて急に酔うなおい！あんなに飲んだらそりやヤバいわ。」

「酔ってませーん。ユナンの方が酔ってるじゃない。ぐにやぐにやしてて、変なの〜。」

「…ダメだこりゃ。」

セーナは急に酔っ払う体質のようだ。そっちの方がタチが悪いのだが…。

彼女はいつもより近い距離までユナンに接近して、可愛い眉を顰めながらこちらを睨みつけている。セーナの頬は紅に染まり、熱い吐息が口からこぼれる。

夕方も同じような光景をユナンは見た。しかし彼女は酔っ払っているだけである。それでも、その妖艶な彼女の姿に、ユナンの胸はドキツとした。作りものの演技とはインパクトが桁違いである。

「むー。今日だって服を買いに誘おうとしたのに、ユナンはすぐどこかにいつちやうんだから。わたしたち、約束したじゃない。」

「いやー週間前に買いに行つたばっかじゃねーか。もつと先の話俺はしてたんだよー！」

「言い訳しないー！」

セーナがそう言つてユナンを叩く。そんなユナンとセーナの痴話喧嘩は、傍から見れば微笑ましいものである。

——しかしユナンを叩いたセーナの力が尋常ではなかった。

「あぶらびぼ〜！」

予想以上のパワーでセーナに叩かれ、ユナンは大きく吹っ飛んだ。転がり方が悪ければ、首の骨を折っていたかもしれない。

「ユナン大丈夫か？」

「死ぬかと思つたわ！なんだあの力!？」

「ふん。少しは反省した？」

「その場で宙返りして土下座するレベルの恐怖だったわ！」

危うく痴話喧嘩から殺害事件に発展するところであったのだ。こんな可愛い女の子に殺されかけるなんて、世の中は広い。というか、

「竜人マジぱねえ…」

ユナンはまた竜人の新たな側面を知ることとなったのだ。その後、ユナン達の楽しい宴は夜遅くまで続いた。

——これから始まる苦難の道を、まだユナンは知る由もなかった。

第二章 12 『イロナシ』

「オレ、飲みすぎたよ…うえ。」

「何やってんのよ。今日は入団審査を受けに行く日って、アタシ言ったわよね？」

「そうだ。キリマルも今日から騎士としての自覚を持て。そんな調子では、本当に入団させてもらえなくなるぞ。」

「分かってるよー…」

打ち上げの次の日の朝、ユナン達は宿の前に集まっていた。これからそれぞれ、自分が入るつもりでの騎士団に足を運び、入隊審査を受けるのだ。

アンナは昨日あんなに飲んだのに、何事も無かったかのようにピンピンしている。正直に言って化け物だ。キリマル以外の2人は、入隊審査が目前に迫っている為か、表情が少し固い。ジークはともかく、アンナが緊張している顔はなかなか見ることができない。

「それでユナンはどうするんだ？」

「ああ、俺はジークについて行って、青の騎士団で色を見てもらうよ。昨日、青の騎士団長と会ったし、話しやすいかなと思っただ。」
そんなユナンの発言に驚き、ジークがこちらに詰め寄ってきた。

「なに!? いつ会ったんだ？」

「え、えっと昨日迷子になった時に助けてもらって…」

「なぜそれを今まで黙ってたんだ！ 今度また話を聞かせてくれ。」

「っていうかやっぱリアンタ、迷子なってたんだ…」

ジークが珍しく子供のようユナンの話に食いついてきた。青の騎士団長に憧れでもあるのだろうか…。まあ騎士団長という事は、青の騎士団の中で一番偉い立場にあるという事だ。ジークがここまで反応するのも無理はない。

「それじゃあ3人で無事に王国騎士団に入隊しましょう！」

「おおー！」

アンナ達は三人で円陣を組んで、気合いを入れていた。ユナンと

セーナは蚊帳の外である。少し寂しいが、ユナンは三人を陰ながら応援したい。

そしてユナンはセーナの方をチラッと見た。彼女はユナンと一定の距離を置いている。彼女なりに、昨日の自分の行いを反省しているようであった。ちなみに昨日の夜は3回、ユナンは酔っ払ったセーナに叩かれた。

「いつまでそうしてるんだよセーナ。大丈夫、俺はこうしてピンピンしてるんだ。怒ってないって。」

「…ほんとに?」

セーナが上目遣いで申し訳なさそうにこちらを見つめている。そんな彼女の様子にユナンの嗜虐心が刺激されるが、それをユナンは何とか抑えた。今は彼女を安心させる方が大切である。

少しだけ、セーナとの物理的距離が縮まる。そしてユナンは笑顔で彼女に語りかけた。

「本当だ。でもこれからは飲みすぎんなよ?」

「わたしの事、怖くない?」

「だから怖くないって。」

そんな時、セーナが急に手を挙げた。突然の彼女の行動に、ユナンの身体が思わず反応してしまう。これは身体の反射的な問題である。心は許していても、ユナンの身体は昨日の恐怖を覚えていたのだ。

セーナがジト目でこちらを見つめてくる。

「ほら。やっぱりちよつと怖がつてるじゃない。」

「今のは誰でもそうなるだろ! 不可抗力だ、不可抗力!」

セーナが口を尖らせながら、ユナンの行動を指摘する。ユナンとしては、今のをビビるなど言われる方が無理である。しかしそれでは彼女に示しつかないのだ。

——頑張れ、俺の身体。

「おいユナン。もう行くぞ。」

「あーすまんすまん。今行く。」

そんな時、ジークがユナンを呼びに来た。どうやら、もう気合いは充分に入ったらしい。ジークの顔は少し清々しいように見えた。

「セーナはどうするんだ？」

「わたしもユナンについて行くわよ。ユナンはすぐ危なっかしいことするんだから。」

「なんでオカン目線？まあいいけど…」

セーナは頬を膨らませて、こちらを睨みつけた。怒った顔も可愛いのは、いつもの事である。

そしてユナン達は青の騎士団本部にまでたどり着く。

やはり本部とだけあって、前にユナンが行った駐屯所とは大違いである。

広大な敷地に大きな建物が2棟立っている。1つは木製の建物で、中から威勢のいい声が聞こえてくる。どうやら練兵場のようだ。もう1つはレンガで出来た建物だ。青色に塗られた壁には大きな時計が埋め込まれている。あそこは事務などをする場所であろうか。

「俺たちが行くのはあの青色の建物だ。」

「それにしてもデカいなあ。」

「ほんと、すごく大きい。」

「当たり前だ。ここは騎士団本部だぞ？ここで騎士団は皆、修行をしたり、依頼を受けたりするんだ。」

「へえー、良いなあ。俺も騎士団に入ろうかな。」

「…まあ色が分かれれば、ユナンも入れない事はないだろう。」

ユナン達は青いレンガの建物へと入る。そして清潔感溢れる広い空間に出た。一般人も結構いて、みんな椅子やソファーなどに座って、何かを待っているようであった。その光景はまるで、

「病院？」

「青の魔法は治癒魔法が得意だと前にも言っただろう。騎士団はなにも、戦うことだけが仕事ではない。この青の騎士団では病院の役目を担っている。他の騎士団でも、それぞれ能力に合った公共事業を請け負っているんだ。」

「なるほど、そりやそうか。やつぱ騎士団つてすげえな…」

魔獣退治から病人の治療まで。契約者の力は偉大である。もはや

契約者がいない世の中など、成り立たないのではないか？

そしてユナン達は受付カウンターへと向かった。そこには水色の髪をした女性がいた。

「こちらは青の騎士団本部受付です。どのようなご要件でしょうか。診察ですか？依頼ですか？」

「いえ、俺は騎士団の入隊審査を受けに来たジークという者です。申請は先日しました。」

「今確認致しますので、少々お待ちください。」

「いや、確認はしなくていいよ。」

「あつ。ヘンリー団長！おはようございます。」

「おはようカレン。今日も朝早くから悪いね。」

「い、いえ。これも仕事なので…」

受付をしていた女性が顔を赤らめ、たじろぐ。ユナン達の前に現れたのは、紫色の髪をした美丈夫。青の王国騎士団長のヘンリーであった。

「ヘンリー団長。今日はよろしくお願いします。」

「よろしくジーク。一応審査は受けてもらうけど、そんなに気を張らなくても大丈夫だよ。…それでこちらの人達は。——！」

「えーと昨日ぶりです。」

「昨日の迷子の子か。確か名前はユナンだったかな。ユナンも王国騎士に？」

「いや俺は魔法が使え…」

そんな時、ジークがユナンの言葉を遮って、慌てたように説明をした。ジークにしては珍しい行動である。

「こいつは俺の連れです。女神に色を聞き忘れてらしくて、出来れば一緒に色の確認をして頂けないかと。」

「聞き忘れ？…まあ女神様も気まぐれなお方だ。そういうこともあるのだろう。」

「あ、あの、わたしはセーナって言います。」

「よろしくセーナ。別に審査は神聖な儀式でも何でもない。ジークの友達なら一緒に来てくれて構わないよ。」

ヘンリーは笑顔でユナン達にそう言った。案外、気さくな人なのかもしれない。

ユナン達はヘンリーに連れられて、練兵場へと向かった。中では十数人の王国騎士が稽古をしていた。そして彼らはヘンリーを見て、一斉に手を止める。

「ヘンリー団長。おはようございます。」

「おはようみんな。私の隣にいるこの男の子が久しぶりの新人だ。名前はジーク。みんな仲良くしてやってくれ。」

「団長、まだ俺は審査を受けていないのですが…」

「色を確認するだけだよ。私の目では既に君は合格だ。」

ヘンリーがジークに向かったウインクをする。新しく仲間になるジークを、他の王国騎士達は興味津々で見ている。

他の王国騎士達は屈強な男から、可憐な少女までいて、年齢、性別に特に偏りは無かった。唯一揃っているのはその青マント姿と、契約者としての力の「色」だけである。その中には、昨日ユナン達が王都に入る際に出会った門番のお姉さんもいた。

「団長。久しぶりにアタシが教育係をしたいのだけれど、いいかしら？」

「おや、ナターシャが自ら教育係をしたがるなんて珍しいね。そんなに彼のことが気にいったのかい？」

「良い男だよ。団長と良い勝負しているわ。」

「なるほど、私も負けてはられないな。」

そしてヘンリーは他の王国騎士達と楽しそうに談笑していた。彼らはとても仲が良いようである。

しかしユナン達は完全に蚊帳の外だ。それに耐えきれず、ジークが話を戻す。

「ヘンリー団長。それで色の確認というのは。」

「ああすまない。これで確認するんだ。」

ヘンリーが思い出したようにそう言って、奥から何やら水晶玉のような物を持ってきた。その水晶玉は金の台座に乗せられていて、神聖

なオーラが感じられた。

「この水晶玉は特殊だね。契約者に触れられると、その契約者の色の色と同じ色の光を放つんだ。」

そう言つてヘンリーは水晶玉に触れる。すると、水晶玉の右半分が白の光、左半分が青の光を放った。

「はあ、アンタはややこしいから参考にならないんだよ。こんな風に二属性を持つ者は、半分に分かれて光るのさ。まあこんな奴はほとんどいないから無視していいわよ。」

「マジか、二属性とかあるのかよ…」

ナターシャの説明にユナンが驚いたようにそう呟いた。属性は1人1つだと思つていたユナンの考えが甘かったのである。なら三属性、四属性を持つ者もいるのであろうか…

「とりあえず、触ればいいんだな。」

ジークがそう言つて水晶玉に触れる。すると、水晶玉が青く光輝いた。やはりジークは青の契約者らしい。そしてヘンリーは笑顔でジークに握手を求めた。

「ようこそ、青の王国騎士団へ。」

「俺はジークという者です。これからよろしくお願いします。」

ジークはヘンリーと握手を交わし、みんなに向かつてそう言った。他の王国騎士達はそんな新しい仲間を歓迎し、大きな拍手をした。

周りの歓迎に少し照れくさくなっているジーク。そんな彼をユナンは羨ましそうに見つめていた。

いいなあ。俺も王国騎士になれば、こんな居場所が出来るのかな。ユナンはジークやみんなの様子を見て、王国騎士団に入つてみたいと思つたのだ。そのためにもまずは自分の色を知る必要がある。

「それじゃあ俺も。」

青の魔法は扱うのが難しいと聞く。もしかしたらユナンも今は扱えていないだけで、本当は青の契約者なのかもしれない。そうしたらみんなとここで…

そんな妄想をしながら、ユナンは水晶玉に触れる。

——ユナンに触れられた水晶玉が「黒」く濁った。

「へ？黒？」

そんな水晶玉の色を見た他のみんなは絶句した。歓迎ムードの明るい雰囲気が一変、辺りは暗く静まり返る。そして冷たい視線がユナンへと一斉に向けられた。

「えっ。これどういうこと？この水晶玉、壊れてたりする？」

そんな暗い雰囲気に耐えきれず、ユナンは苦笑しながらみんなにそう問いかけた。しかし誰もその問いには答えない。

ユナンの額から冷や汗が流れた。そんな時、王国騎士の1人がボソツと小さく呟いた。

「イロナシ…」

「イロナシ？なんだそれ。そんな事、女神は何も説明してくれな…」

「出ていけ。」

低く冷たい声でユナンはそう言われた。その声は騎士団長でも他の王国騎士でもない。ユナンと一緒に旅をしたジークのものであった。

「きゅ、急に何言ってるんだよ。ジーク…」

「ここから出ていってくれ！お前は王国騎士にはなれない。ここはお前のいる場所じゃないんだ！」

ジークが再び声を荒らげそう叫んだ。そんな彼の言葉に、他のみんなは何も言わなかった。…みんなも彼と同じ意見であるということだろうか。

みんなの冷たい視線がユナンの胸に刺さり続ける。あんなに和やかだったこの場の雰囲気も、ジークの歓迎ムードも、ユナンのせいですべてぶち壊しになったような気がした。

「な、なんだよイロナシって。意味わかんねえよ!!」

ユナンはそんな雰囲気に耐えきれずに、その場から逃げ出した。

出て行けって言われたんだから、その通りに出て行ってやるよ。だいたい、一緒に旅をしてきた仲間に向かって、いきなりそんな事を言うなんて、あんまりじゃねーか。ジークにとって俺は、その程度の存在だったって事かよ。

「俺はお前のこと、『仲間』だと思ってたんだよ…」

最後にユナンは絞り出すような声でそう言っ、練兵場を出ていった。

「ユナン!!」

そんなユナンの後をセーナが追いかける。

「ユナン…:すまない。」

ユナンがイロナシなのではないかと、ジークは薄々気づいていた。しかしジークは信じたくなかったのだ。

もしかしたら、ユナンは本当に魔法を扱うのが限りなく下手なのかもしれない。

——ジークにしては珍しく、非合理的な判断をしたのである。

「いいのかい？イロナシの彼は君の仲間では？」

「ユナンには後で俺が謝りに行きます。それよりも…」

ジークはそう言っ、戸惑いの表情を浮かべながら、ヘンリーの方を見た。王国騎士団長であるヘンリーがイロナシを見逃すのか…

「私は何も見なかった。これでいいかい？」

「——!いいんですか?」

「別にイロナシを敵対視する者なんて、そんなにいないよ。忌み嫌われているだけだ。私はただの契約者としか思っっていない。しかし…」

そしてヘンリーは整った紫色の眉を顰め、心配そうな表情を浮かべた。イロナシを敵対視する者、その人物にどうやら心当たりがあるようである。

『彼』がそれを知ったら、地の果てまでユナンを追いかけるだろうね…」

第二章 13 『死の円』

「イロナシってなんなんだよ…クソッ！」

そう吐き捨てて、ユナンは道端に落ちていた石を思いつき蹴飛ばした。場所は大通り外れの細い道。

ユナンは青の王国騎士団本部から逃げ出し、行く宛てもなく王都内をふらついていたのだ。

ユナンが騎士団を訪れて分かったことは2つである。

「俺が魔法を使えないのには何らかの理由がある。そして、そのイロナシってのが王国騎士からは嫌われてるってことか…」

ユナンがイロナシだと分かった途端、周りにいた王国騎士達の目が明らかに変わった。しかもそれは、ただ嫌いな相手を見るような目では無かった。

「あれ、完全に俺の事を『敵』だと思ってる目だったよな。騎士団に入るとか以前にスタートがこれとか、完全に詰んでるじゃねーか…」騎士団に入りたいと少し思った途端にこれである。ユナンは本当に呪われているのかもしれない。

しかしユナンは元々、自分が騎士団には入れないだろうと思っていたのだ。つまり最初に考えていた、騎士団では無い契約者としての生き方をユナンは選べばいいだけなのである。それでも、

「やっぱつれえわ…」

もちろん王国騎士達に冷たい目で見られたことも辛かった。しかしユナンはそれよりも、ジークにあんなに冷たくされた事が一番心にくさるのである。

胸がしめつけられ、瞼の奥が熱くなる。人に嫌われるということに、ユナンはあまり慣れていない。

「はあ…はあ…こんな所にいたの？ユナンはすぐどっかに行っちゃうんだから…」

そんな時、ユナンは後ろから声をかけられた。

甘く澄んだ声。その声には他者の心を震わせるような力がある。

そんな声の持ち主を、ユナンは1人しか知らない。

ユナンは涙を悟られないように、目を擦ってからその銀髪の少女の方へと振り向いた。

「俺はかくれんぼが得意なのに、よくここが分かったな！」

「残念でした。ユナンぐらい簡単に探せちゃいます。わたしも一人かくれんぼが得意なんだから。」

「セーナの悲しい過去が…。しかもそれ、ほとんどかくれんぼじゃないからな!？」

ユナンはセーナの発言にツツコミを入れる。何気ない普通の会話。そのおかげでユナンは少し元気を取り戻すことが出来た。

彼女はそんなユナンの様子を見てから、本題を切り出す。

「ユナンは他の騎士団に行ってみる気はない？」

「なんで？みんなの目を見ただろ？俺は嫌われてるんだ。なら騎士団なんか入らずに別の道を探すさ。」

そんなユナンの発言に、セーナは首を横に振って否定した。彼女の水色の瞳で、真剣にこちらを見つめている。

「いやそういうのじゃなくて、ただ質問しに行くだけよ。そのイロナシってというのが何なのか。はつきりさせておいた方が良くと思うの。」

「けど…」

「嫌われてるならその理由をちゃんと聞く！理由が分からないのに嫌われてるのって、おかしいでしょ?…」

そう言ったセーナの瞳には様々な激情が浮かんでいる。竜人である彼女は、人に嫌われる経験が多かったのかもしれない。

そんなセーナの訴えを無下にすることなど出来ない。それにイロナシについての知識は、これからのユナンの人生においても、必要になるであろう。

「…分かったよ。たしかに俺も、イロナシについて知りたいことは山ほどある。」

「――じゃあどの色の騎士団に聞きに行く？」

「青は気まずいし、緑とかかなあ。」

「どうして緑なの？」

「緑の騎士団に俺は一度助けてもらったことがあるんだ。」

ユナンは何故か誇らしげに、セーナに向かってそう言った。そうして二人は緑の騎士団本部を目指すこととなったのだ。

その道中、ユナン達は見たことのある顔に出会う。黄色い髪の少年はしよんぼりしながら、歩道を一人で歩いている。

ユナン達はその少年に駆け寄った。

「おい！キリマルー！どうしたんだ？」

「騎士団の試験じゃなかったの？」

「ユナンとセーナちゃん。そのオレ…試験を受けさせて貰えなかったんだ。」

「やっぱリナンパ癖を見透かされたのか。」

「キリマルっておちよこちよいだもんね。」

「え。もつと否定してくれてもよくない？あとオレが受けられなかったの、そんな理由じゃないからね。」

「——？じゃあなんなんだ？」

「前にジークが言ってたヤツだよ。ほら、大罪の十二宮によって、黄の王国騎士がたくさん殺られたって話。その戦いで、黄の団長が戦死。その後、副団長も騎士団を脱退しちゃったらしくて…今は新人を育てる余力も無いんだってさ。」

「っていう言い訳で断られちゃったわけだ。」

「キリマル、大丈夫よ。騎士団に入れなくなっただって、他の道はいくらでもあるわ。少しずつ、大人になっていきましょ？」

「どんだけオレ、二人に信頼されてないの!?審査受付開始は3ヶ月後だってさ…オレそれまでどうしようかな。」

どうやら本当にキリマルは審査自体を受けられなかったらしい。しかしキリマルの問題は、時間が経てば解決するものである。ユナンのように、入隊が絶望的なわけではない。

「それでユナンとセーナちゃんは何してるの？」

「わたし達は緑の騎士団本部を目指してるの。」

「どうして?」

キリマルの問いかけに、セーナはチラツとユナンの方を見た。彼女は、ユナンの話をすべきだとしても言いたげである。

ユナンは重い口を開いて、自分の正体について話し始めた。ユナンの額から冷や汗が零れる。

「お、俺さ。どうやらイロナシって存在らしくて…」

「イロナシ?」

しかしユナンの心配は杞憂に終わり、キリマルはその言葉を聞いてもピンと来ていないようだった。つまりユナン達と同じく、キリマルはその言葉についてよく知らないのだ。

「なんていうか、騎士団に嫌われてる存在…みたいなの?」

「ふーん。でもオレはユナンの事『相棒』だと思ってるよ。それに周りがどう思っても関係ないじゃん。ユナンはユナンだろ?」

「――!」

ヤバい、まさかキリマルに泣かされる日が来るとは思わなかった。自分は自分。たしかにそんな事は分かっているが、人から実際にそう言われると、案外勇気づけられるものである。

ユナンは瞼の奥の熱いものを必死に抑えて、キリマルに問いかける。

「も、もしかしたら俺が危険な存在なのかもしれないぞ?」

「そんなわけないじゃん。オレ、ユナンと1ヶ月も一緒に旅をしたんだよ?むしろ、ユナンに救われたことだってあったじゃんか。…あつ。でももしユナンが化け物になっても、オレを殺さないでね。」

あんなにカツコよかったのに、最後の言葉で全てが台無しである。けれど、そんな正直な彼の言葉には説得力があった。上辺だけを取り繕った百人の言葉よりも、正直な一人の言葉の方が、人は元気づけられるのだ。

そんなキリマルの言葉を聞いて、ユナンは自分が恥ずかしくなった。『仲間』を信用していなかったのは自分の方だったのである。

…ジークにも、もう一度会ってしっかり話をしないと。

「ありがとな、キリマル。」

「別にオレは何もしてないって。」

そんな二人の様子を見て、セーナは嬉しそうに微笑んでいた。

そしてユナン達は本題へと戻る。

「それで今からそのイロナシつてのを、騎士団に直接聞きに行くわけよ。」

「キリマルも一緒に来る？知っておいて損はないと思うの。」

「たしかにそうだな。オレも暇だし、二人について行くよ。」

そうしてユナン達は緑の騎士団本部へと向かった。

敷地は青の時と同じ広さだが、敷地内の様子は全くちがった。

2つの建物があるが、一つは大きな倉庫である。入口が空いていて、中に木材などの資材がたくさん置かれているのが分かった。

そしてもう1つの建物はレンガ造りの建物。壁は緑色に塗られている。おそらくここが受付であろう。

中は作業場のようになっていて、シャベルやツルハシなどが無造作に置かれている。：筋トレの器具もたくさんあった。

建物内に人はほとんどおらず、受付カウンターに茶色い髪の女性が1人だけいた。

「こちら緑の騎士団本部です。申し訳ございませんが、今、緑の騎士団は遠征中でありまして、仕事の依頼は受け付けておりません。」

「あーすみません。仕事の依頼とかじゃなくて、ただ副団長のドールさんと会いたかっただけなんです。その：彼は元気になっていますか？」

ユナンが最後に気を失った時には、まだドールゼルは生きていた。おそらく緑の治癒魔法が働いていたのだろう。

あのたくましい背中を思い出す。ユナンは彼が死んでしまったとはとても思えないのだ。

しかしユナンの言葉を聞いて、その女性は眉を顰めて悲しそうな顔をした。

「副団長のお知り合いですか。その：副団長は今昏睡状態です、青の騎士団本部で入院なさっています。」

「――！けど生きてるのか！」

「はい…副団長は生きてはいます。」

ドーゼルが生きていたことにユナンは安堵する。

ユナンは彼には話したいことがたくさんあるのだ。そして謝らなければならぬ。ユナンがああの時、黒い怪物から逃げる事が出来ていれば、ドーゼルは自由に戦っていたのだ。そうしたら、彼はあまり怪我をせずに済んだのかもしれない。

「…また来ます。ありがとうございます。」

ユナンは頭を下げてそう言った後、セーナ達と一緒に本部を出ていった。

「それにしてもユナンって、結構騎士団の人と関わりがあるのね。びつくりしちゃった。」

「緑の騎士団は特にな。ヘンリー団長には迷子を助けてもらっただけ。それ以外はあんまり知らないぞ。」

本当は白の騎士団もユナンは何人か知っているのだが、彼らに出会ったのはこの世界線ではない。それでも次に行く騎士団の色は決まっている。

「緑の騎士団は遠征中だったかあ。それでユナン、次はどこに行くつもりなんだ？」

「次は白だ。」

ユナンは自信満々にそう言った。

そしてユナン達は白の王国騎士本部へとたどり着いた。

敷地の広さはもちろん他の騎士団と同じである。敷地内には練兵場があり、どっちかというところと青の騎士団の敷地の様子と似ていた。

本部は白色に塗られたレンガの建物。本部の建物は、色は違えど建物の形はどの騎士団も同じであるようだ。

本部内は白いソファやテーブルなどが配置されており、快適に過ごせる空間となっていた。おそらくここで仕事の依頼を受けるのだろう。

受付カウンターには金髪の女性が1人いた。

「ここは白の王国騎士団本部です。仕事の依頼でしょうか？」

「いや、聞きたいことがあって。白の王国騎士に会うことはできませんかね。」

「いきなりはちよつと…」

「いや、いい。ちょうど探す手間が省けた。」

そう言つてユナン達の元へ誰かが歩いてきた。その声は低く、冷酷な声であった。

歩いてきたのは白のマントを羽織つた、少し背の低い黒髪の男性。ユナンよりも目付きが悪く、その目で見つめられるだけで威圧感を感じてしまう。それなのに男はその目をいつそう細めて、ユナンを睨みつけている。

「え、えつと俺の名前はユナン。それで探す手間が省けたとは？」

「俺は白の王国騎士団長ルシスだ。そしてイロナシ、俺はお前を捜していたんだ…。まあ一応、確認はする。こつちへ来い。」

そう言つてルシスはユナン達を団長室へと案内する。

ユナンはそんな中、1人の女の子の顔を思い出していた。それは白の副団長シノである。彼女は口を開けば、白の団長の事ばかりを言っていた。それくらい、彼の事が好きなのである。ユナンはそんなシノの様子を見ていて、白の団長はとても魅力的な人なのだと思つたのだ。

——しかし今ユナンの目の前にいる男は、そんな『魅力』とはかけ離れた存在であった。

無愛想な面に威圧的な鋭い目。そして、そんな見た目に合った冷たい性格。たしかにそこそこイケメンではあるが、こんな男のどこが良いかユナンにはよく分からない。乙女心というのは不思議なものである。

ユナン達が団長室に入ると、そこにはシノの姿があった。少し大人びた雰囲気を漂わせる白髪の少女である。

「この人たちが…」

シノは厳しい目でユナン達を睨みつけている。ユナンはシノを知っているが、彼女にはユナンと出会った記憶が無いのだ。警戒する

のも仕方がないであろう。

「とりあえずその仲間2人。これに触れ。」

そう言ってルシスが持ってきたのは透明な水晶玉。青の騎士団にあったものと同じく、金の台座の上に置かれている。

「ほいほい……。うわつ、すげえ。」

まずはキリマルが水晶玉へと触れる。すると、水晶玉が黄色の光を放つ。黄色の光も綺麗だとユナンは感じた。

「わたしが触ったらどうなるのかな？」

そして次にセーナが水晶玉におそるおそる触れる。しかし水晶玉は光らなかった。やはりこの水晶玉は契約者以外には反応しないようである。

「やつぱり。なんかちよつと残念。」

「最後はお前だ。」

ルシスにそう言われ、ユナンは深く頷いた。そして水晶玉へとゆつくりと手を伸ばす。

心臓の鼓動がうるさい。ユナンの額から汗が流れる。分かっている、やはり緊張するものである。それにもしかしたら、今度は光るかもしれない。

しかしユナンの期待は外れ、やはり水晶玉は黒く濁る。

——その瞬間、辺りに恐ろしい旋風が巻き起こった。

「えっ?」

それと同時に部屋の中を青白い稲妻が走る。刃と刃が交錯し、鋼同士の間隙に火花が飛び散った。

刃を交えているのはキリマルとシノだ。シノがユナンへと斬りかかり、それを庇う形でキリマルがその攻撃を受けたのである。

それにユナンは遅れて気づく。あまりの速さに目が追いついていなかったのだ。

「オレの仲間は何するんだよ!」

「イロナシは殺す。団長の手は煩わせない。」

「いや、俺が動くしかないな。その黄色い髪のがき、シノの攻撃を受けるなんてやりやがる。」

「うわっ！」

「きゃっ！」

次の瞬間、突風が吹き、セーナとキリマルは勢いよく部屋から追い出された。ルシスの魔法であろうか。

そしてユナンだけが団長室に残ってしまった。

「悪いがここでお前には死んでもらう。」

「待っ……」

ルシスが両側の腰にある二本の剣を鞘から抜いた。そして彼は身体を回転させながら、ユナンへと斬りかかったのである。回転しただけなのに、彼の身体からは白い円の形をした風の刃が発生した。

その刃に、ユナンは何故か引き込まれてしまう。逃げようとしても、自分からその刃へと向かってしまうのだ。

——風の刃によってユナンの首から鮮血が噴き出す。

そして「死」のループがまた始まった。

第二章 14 『俺だけの記憶』

少年の首から鮮血が飛び散った。首から下の部分はそのまま床に倒れ、反射でピクピクと動いている。そして後から頭の部分が床に落ち、肉の潰れる音が部屋中に響いた。少年の漆黒の瞳からは既に光が消えている。もう彼の魂はこの世界には無いのだ。

「チツ、汚え。これは部屋を掃除しないといけねえな。」

それは人を殺した後のセリフとしては、あまりに非情なものであった。しかしそんなルシスは顔を顰めて、痛ましそうな表情でユナンの死体を見つめていたのだ。

「こいつにも『夢』はあっただろうに。いや、だからこそ…」
自分を責めるような声でルシスは言葉を発する。

するとシノは、そんな彼を後ろから優しく抱きしめた。彼女の方がルシスよりひと回り身体が小さいが、その姿はまさに姉のようであった。

「…大丈夫。団長が優しいのは私がよく知ってるから。」

「俺は別に優しくなんかねえ。…だが気を使わせたな、悪い。」

いや、団長は本当に優しい人間なのである。今のだって私に手を汚させない為に、自ら罪を負ったのだ。彼はただ感情を表に出すのが苦手で、不器用なだけ。

シノはそれを知っている。だからこそ、そんな彼の心の支えとなれる存在に自分になりたい。

「ユナン!!」

「うそ…でしよ?」

そして突風によって吹き飛ばされたキリマルとセーナが遅れて団長室へと戻ってきた。

しかし彼らの目の前には、無惨な仲間の死体だけが横たわっていた。

「…オレはもう騎士団には入らない。」

低くそう呟いてキリマルが雷神と化す。そしてそのまま人智を超

えた速さでルシスへと斬りかかったのだ。

しかし洗練された風のスピードは、雷速をも凌駕する。

「ガキは大人しくしてろ。」

ルシスは剣の柄を使ってキリマルの首の横を強打する。するとキリマルに纏っていた稲妻は一瞬で消え、彼は意識を失った。

ルシスは首の骨が折れない程度に力を加え、キリマルを気絶させたのである。それは圧倒的な実力差がなくては難しい芸当だ。

普通は契約者が王国騎士なんかには斬りかかったら、即死刑である。それは王国の法律にも定められていることだ。それぐらいでない、逆に王国騎士が殺られてしまう。

しかし圧倒的な実力差とルシスの情状酌量のおかげで、キリマルは命を奪われずに済んだのだ。

「なんでユナンに酷いことするの？…彼が何か悪いことをしたの？」

それは冷たい女性の声。そして静かな怒りも込められていた。その声を放ったのは銀髪の少女である。

彼女はイロナシの仲間なのだろう。ルシス達が恨まれるのも仕方がない。

「言っただけだ。あいつがイロナシだからだ。」

「その事について、あなたたちは彼に詳しく説明しなかったじゃない!!」

そんなセーナの訴えに、ルシスは気まずそうな顔で視線を逸らした。

「…知らなくても良いことが世の中にはある。」

「もういいわ。わたしは人間を信じない。」

セーナがそう言った瞬間、周りの大気が凍てつく。そして少女は懐から水色の輝きを放つ石を取り出した。その石から放たれた水色の光が、少女の身体を包み込む。

「——！お前は……」

「…竜人。」

シノが風の刃をその少女に向けて放った。しかしその刃はセーナ

の周りにある光によって相殺される。

そしてセーナは最後に冷たい目でルシス達を見た。それは全てを諦めた者の目でもあった。

「さようなら。」

少女の身体が巨大な群青色の龍の姿へと変貌する。

そして王都全体が絶対零度の死の空間へと変わった。

「あれ？……は……」

ユナンが意識を取り戻すと、そこは大通り外れの道であった。本当は紫色の扉を開けて、ここへと戻ってきたのだが、ユナンは呆然としていてその時の記憶が無かったのである。それくらいユナンの精神は摩耗していた。

「人に殺されると心まで殺られるんだな……」

ユナンは初めて、意志を持った人に殺されたのだ。

もちろんニュートンも人間なのかもしれないが、ユナンからしてみれば彼も魔獣と同じ化け物である。

ユナンは自分の首をそつと触った。もちろん首はちやんとくつついている。しかし全身の震えが止まらない。久しぶりに感じる「死」の喪失感、ユナンの心に恐怖を植え付ける。いつまで経っても、この感覚には慣れない。いや、慣れてはいけないのかもしれない。

「この力、回数制限とかねえよな。あのクソ女神のことだし、黙ってる可能性も全然ありそう……」

死は突然訪れるものなのである。別に今回でユナンがそのまま死んでしまっても、何もおかしくは無かった。むしろ、そっちの方が正しいのである。命の在り方を歪めてしまっているのは、ユナンの方だ。

さらによくよく考えてみれば、ルシスの言動は少し怪しかった。もつと警戒していれば、死を避けられたのかもしれない。よくわからない加護に頼りっぱなしでは、前と何も変わっていないではないか。

「本当は1度限りの命なんだ。最後まで抗ってこそ『人間』ってもんだろ。」

ユナンは自分に言い聞かせるようにそう呟いて、心に誓った。そのためには…

そんな時、後ろから声をかけられた。振り返らなくても、ユナンにはそれが誰か分かる。

「はあ…はあ…こんな所にいたの？ユナンはすぐどこかに行っちゃうんだから…」

「セーナは一人かくれんぼが得意だもんな。」

「そうよ、だからユナンくらい簡単に見つけちゃうんだから。…つてなんでその事を知ってるの？」

彼女は首を傾げて、不思議そうにこちらを見つめている。そんな彼女の反応に、ユナンは加護が発動したことを再確認。そして彼女に本題を切り出す。

「前にセーナが言ってたんだよ。…それよりも話があるんだ。俺は白の騎士団に命を狙われてる。」

「——！それって…」

「そう。さつき聞いたイロナシつてのがどうやら関わってるらしい。でも俺は死ぬつもりなんてない。」

「そうよね。そんな理由で酷いことされちゃうなんてあんまりだわ。」

「若干言葉が可愛いけど…まあそれは俺も同感だ。でも誤解を解くために、このまま直接会いに行っても殺されるだけなんだ。」

「じゃあどうするの？」

「…時間だよ。一旦俺は王都を出る。それで王都の外でイロナシの情報仕入れるんだ。」

とりあえずイロナシが何なのか分からないことには何も始まらない。しかし王都で情報を集めるのは危険すぎる。だからこそ、この作戦である。

「分かった、わたしも一緒に行くわ。」

「えっ、でも狙われてるのは俺だけ…」

「わたしもイロナシの事が気になるもの。それに、ユナンが一人ぼっちなんて可哀想じゃない。」

ユナンはそんなセーナの優しさに瞼の奥が熱くなる。彼女には救われてばかりである。

「…ありがとうな。」

「お礼なんていいわよ。わたしがしたくてしてるんだもん。」

そう言つてセーナは眩しい笑顔をユナンへと向ける。

そんな彼女の笑顔見て、ユナンの身体の震えはいつの間にか収まっていた。

ユナン達は王都の入口である城門へと足を運んだ。王都を抜けるには、ここを通るしかない。

物陰に隠れて、ユナンは門番を担当している王国騎士を観察する。

青の騎士団なら、通してくれなくも無さそうだが…

「マジかよ…。しかもあれ、タルクか?」

城門には二人の王国騎士がいた。どっちのマントの色も白。そして彼らは真剣な表情で警備に当たっている。たまたま白の王国騎士が2人も門番をしているなんて都合のいい話、そうそうあるわけがない。つまり、

「もう俺の存在バレてるってことか?早すぎんだろ…」

「そう?わたしは結構時間があつたと思うけど…」

たしかに、ユナンが青の王国騎士団本部から逃げ出してもう1時間は経っていた。イロナシの噂が広まってしまうのも仕方がない。しかし、白の騎士団がユナンの搜索を開始するのが明らかに早すぎるのである。

「ガチで殺しにきてるなこれ…」

「ユナン、本当に何もしてないのよね?わたしと一緒に謝りに行く?」

「マジでなんもしてねーよ!…してないよな?逆に俺が心配になつてきたわ。」

そう思ってしまうほど、白の騎士団は本気である。これは尚更、説得は無理そうだ。なら警戒が解けるまで王都内で潜伏するか…

——そんな時、タルクがこちらの存在に気づいた。

「やばっ！逃げるぞ、セーナ！」

「ちよ、ちよっとユナン待ってってば…」

ユナンは慌ててその場から逃げ出す。そのユナンの行動にセーナは反応が遅れる。だからユナンは彼女の腕を掴んで連れていった。

大通りを外れ、ユナン達は細道へと逃げ込む。昨日ユナンが迷子になった所である。しかし隠れるのにはうってつけだ。

「はあ…はあ…見つかったんなら謝ればいいんじゃない？」

「ダメだ。あいつらはイロナシである俺を許さない。絶対に殺しにくるはずだ。」

「いきなりそんなおっかない真似しないって。嬢ちゃんの言う通り、謝れば許してやる…かもな。」

それは陽気な男の声であった。ユナン達に語りかけて来たのは、金色の髪をサラツと首元まで伸ばしたチャラ男。つまりタルクだ。

彼は空中を浮遊するようにして、ユナン達を追いかけてきたのである。

「冗談は見た目だけにしてくれ。…どうせお前は俺を殺すつもりなんだろ？」

「そんな怖い顔すんなって。でも騎士様から逃げるって事は、自分を悪人だと認めたってことだぜ！」

威勢よくそう言って、タルクがサーベルの柄でユナンを殴ってきた。その攻撃は正確にユナンの首元を狙っている。どうやら、一旦はユナンを捕らえるつもりらしい。

まあたしかに彼が本気でユナンを殺すつもりなら、風の刃でユナンの首をすぐにでも刎ね飛ばしていただろう。

——だが大人しく捕まってもどうせ結果は変わらない。

水晶玉が黒く濁った瞬間に、ルシスとシノのどちらかが必ずユナンを殺す。それは逃れられない運命なのだ。ユナンには分かる。だからこそ、ユナンは全力で運命に抗うのである。

「ちゃんと地面に足ついて追いかけた方がいいんじゃないか？」

「この方が速いんだ…っておわっ！」

ユナンは端に立てかけてあった大きな木の板を倒した。タルクは

危うくそれにぶつかりそうになる。

何とか衝突は避けられたが、道を塞がれてしまった。

「こりゃあマジの糞ガキっすわ。」

タルクはやれやれと頭を掻いた。実は、彼はこの任務にあまり乗り気ではないのである。

タルクから逃げ切ったユナン達。しかし次の敵がユナン達に向かってくる。それは別の白の王国騎士達だ。ユナンが知らない面子だが、その実力はさすがは騎士と言ったところである。

白の騎士三人は、風のようなスピードでユナンに斬りかかってきた。短剣だろうが、剣だろうが、その攻撃を食らってしまえばユナンに命は無いであろう。

「とかいこいつら、完全に俺の事殺すつもりかよ!?!」

最終手段。ユナンは腰に差しているカタナを抜いた。しかしユナンがそれを振るうことは無かった。なぜなら、

「いきなりそんな事しちゃダメじゃない!」

「――!」

セーナが無数の氷の礫をその騎士3人に向かって放ったからである。その先端は丸まっていて、彼らを気絶させるだけが目的のようである。

しかし彼らは空中で身を捻ってそれを躲した。そしてセーナに向かって身構える。どうやら彼らは、この場の危険人物をセーナと判断したようである。

「先に行つて!」

「でも…」

「このままじゃユナンは捕まっちゃうでしょ?それに狙われてるのはユナンの方よ。わたしは大丈夫だから。」

セーナは力強い視線でユナンの方を見つめた。その気持ちを無駄にすることなんてできない。ユナンはゆっくりと頷いた。

「分かった、また後で。」

「うん、ユナンとの約束まだ果たしてないもの。」

なんか死亡フラグみたいに聞こえるが、セーナはこう見えても対人戦にはめっぽう強い。こんな騎士3人くらいなら、簡単に片付けてしまっただろう。

ユナンは後ろを振り返らずに走り出した。その後を騎士3人が追いかけてようとするが、

「先には行かせないわ!」

大きな三本のつららが彼らの行く手を塞いだ。そして上空には飛ばないように氷の柱を上を展開。そのせいで、騎士3人はセーナから逃げられない。彼女の保有する膨大な魔力量がそれを可能にしたのである。

ユナンはその後、貧民街の無人のボロ屋敷の中に身を潜めていた。時刻は夕方。

そろそろ自分からセーナを捜しに行く方がいいだろう。彼女はユナンを捜すのに手間取っているのかもしれない。

ユナンがそう思い、屋敷の外に出た時だった。

ユナンを見つけた白髪の女の子が、こちらへ全速力で向かってくる。それはどう見てもシノの姿であった。

「出た瞬間にこれかよ!?!マジでツイてねえ!」

ユナンは反対方向に向かって逃げ出す。細い路地を抜け、分かれ道。その片方には白の王国騎士がこちらへ向かってくるのが見えた。もちろんユナンはもう片方の道を選ぶ。

そんな感じでユナンは王国騎士がいない道を選択し続けた。しかしユナンは少しだけ違和感を抱く。

「なんか俺、誘導されてね?」

まず後ろから追ってくるシノの様子もおかしい。彼女ならすぐにもユナンに追いついて、その双剣でユナンを切り刻むはずである。

「そういえばマイミアで会った時はレイピアだったけど、今は双剣を使ってるのか。」

前回は急すぎてそんな感想も出てこなかった。逆にそんな事を考えられるくらい、今のユナンには何故か余裕があるのである。

そしてユナンは王都全体が見渡せる、見晴らしのよい場所へとたどり着く。ここは他より少し高い場所になっていたのである。本来は小高い丘の地形だったのかもしれない。

大きな時計塔がその場所には建っていた。その下で腕を組んで待っていたのは、白の王国騎士の二人。タルクとシノである。

夕日がユナン達を照らし、その場には寂寥感が漂う。

「まんまと引つかかったな？ 糞ガキ。」

「タルクの魔法か…これ。」

「御明答！…ってなんで俺の名前を知ってんだ？」

後ろからユナンを追ってきたシノの姿がゆらゆらと揺れている。その魔法を、ユナンは別の世界線で一度見ている。まさか他の人にも適応できるとはユナンも思わなかった。

「イロナシは私が殺す。団長にはさせない。」

ユナンを睨みつけながらそう言って、シノが双剣を鞘から抜いた。ユナンは逃げる気力さえ、もう残ってはいなかった。まあ逃げたとしても彼らに追いつかれるだけだが…

「そう言えばシノは以前、レイピアを使ってたよな。なんで最近双剣に変えたんだ？」

彼女に殺される前に、ユナンは彼らと話がしたかった。別の世界線、それも半日だけではあるが、彼らとの思い出がユナンの中には残っていたのである。

シノは戸惑った様子で、そのユナンの問いに返答した。彼女は怪しい人を見るような目でこちらを見ている。

「それは団長に勧められて…というかなんで私の名前を知ってるの？」

「俺の頭の中にお前らと会った記憶があるからに決まってるんだろ？ 他にも知ってるぜ。シノは猫が好きなんだったな。たしか団長に似てるって理由で…ほんとか？」

ユナンは懐かしそうな目をして、笑顔でそれを語っている。しかしそんな彼の表情はどことなく寂しそうであった。なぜなら彼らとユナンには心の距離があるからだ。しかもその距離は、ユナンが感じて

いるものと彼らの感じているもので食い違っている。

「…それを誰から聞いたの？」

「そんなのお前しかいねえじゃんか。って覚えてないよな。」

「当たり前よ。…何故か馴れ馴れしいあなたの態度を見てたら、頭が痛くなる。もう手短に済ますわ。」

「――！」

突風が吹いてユナンはその場にすっ転んだ。そして、

「あああああー！」

ユナンは両手両足を小さな風の槍で貫かれた。手足の先から鋭い痛みが走る。しかし叫ぶだけで、ユナンはその場から動けないでいた。

「お、おい。流石に拷問は…」

「水晶玉が無いから仕方ないでしょ。どうせ殺すなら白白させて、手短に殺す方がいい。…さあ楽になりたかったら早く言って！」

ユナンの右腕が風の槍によって貫かれる。痛みによって身体が悲鳴を上げているが、白白なんかしてやらない。なぜならユナンは、まだ彼らと話がしたかったのである。

「なあタルク。お前は弟5人、妹3人がいる大家族なんだってな。それで両親を楽にさせてやりたくて、王国騎士団に入ったんだろ。良い奴だよな。」

「――！お前、なんでそれを知って。」

「これも、お前から直接聞いたんだよ…」

意識が朦朧とする。そんな中でもユナンは彼らとの会話を続けた。「シノは口を開けば団長のことばかり。なんか俺まで恥ずかしくなってくるぜ。」

「…あなたに団長の事を話した覚えなんてない。」

「でも俺は知ってるんだ。タルクは…そう言えば弟のノエゾウに誕生日プレゼントを送ったんだっけ？もう返事が届いてるんじゃないのか？」

「嬉しそう…だったぜ。だが俺はそんなことをお前に…」

「なんで俺の中にしかこの記憶がないんだよ!!俺にはお前らとの思

い出がたしかにあるんだ。だからこそ…辛いんだよ。そんな目でお前らに見られることが!!」

ユナンは嗚咽混じりの怒声を彼らへと浴びせた。

それはシノやタルクからしてみれば、完全に『狂人』の戯言である。しかしそんな狂人は、まるで自分達と親しく語り合った事があるかのような態度で接してくるのだ。

「もう…やめてー!」

シノがそんな狂人を見ていられずに、さらに攻撃を加えて、彼に自白を促そうとする。

「あああああ!」

今度は横腹を貫かれ、血を吐きながらユナンは絶叫した。吐いた血が喉に絡まりユナンは咳き込む。激痛によって、視界が赤と白で交互に明滅を繰り返している。

そんな臓腑が絞り上げられるような苦痛を与えられてなお、ユナンは自白しなかった。

——その時、大気を穿つ風の槍がユナンの頭を吹き飛ばした。

「たしかにマニユアルに、水晶玉が無い時は拷問で自白を促せと書いたが…実際にやるバカがどこにいる。」

「団長…すみません。」

「次からは普通に殺せ。…まあそれを書いた俺にも責任がある。」

「…なあ団長。本当にイロナシはみんな殺さなきゃならないんっすか?」

タルクのそんな絞り出すような声が辺りに響き渡った。3人に向かって寂しく吹いた夕風は、死に絶えた少年の心を表しているようであった。

第二章 15 『怨嗟の声』

何も無い暗闇の中を、ユナンは呆然としたまま歩いていた。頭を吹き飛ばされたはずの彼の身体は、既に元に戻っており、普通に歩くことが出来ていた。

——だがいくら時を戻そうとも、心の傷までは治らない。

いつそ出来るなら、全部忘れてしまいたい。そんな記憶がユナンの脳に刻みつけられたのである。

「なんで俺は生きてるんだろう。」

ユナンは知らず知らずの内にそう呟いていた。

また戻っても、同じくシノヤルシスに殺されるだけである。さらにユナンのせいで、セーナまで危険に晒されてしまうのだ。そんな自分に生きる資格なんてない…

——紫色の扉が蜃気楼のように揺らぐ。

しかしユナンはその扉のドアノブをなんとか掴んだ。

そして扉から溢れ出た光によって世界が構成される。

「ユナンは他の騎士団に行ってみる気はない？」

この場面はユナンが青の騎士団本部から逃げ出し、その後セーナと合流して少し経ったところであった。

セーナに声をかけられ、ユナンはやつと意識をしっかりと取り戻した。

ユナンは自分の顔をぺたぺたと触った。

「俺、ちゃんと頭ついてるか？」

「——？当たり前じゃない。急にそんなこと言い出すなんて大丈夫？どこか具合でも…」

完全に頭のおかしいユナンの発言に、セーナは眉を顰めて心配そうな表情を浮かべている。

事実、ユナンの体調はあまり優れない。今も胃の奥から食べたものが込み上げてきていた。しかしセーナの前でそんな醜態を晒すわけにもいかず、ユナンはなんとか持ち堪えているのである。

セーナにあまり心配をかけないように、ユナンは話の話題を変えた。

「まあちよつと悪いな。なんせ俺は白の王国騎士団に命を狙われてっからな。」

「——！それって…」

「そうそう、俺がイロナシだからだ。もちろん俺は死ぬつもりなんてない。でも王都を抜け出すのも難しそうなんだよな…」

「どうして？」

「白の王国騎士団が城門を見張ってるからだよ。それでさ…ってなんだ？」

セーナがジト目でこちらを見つめている。それはユナンに何か言いたいことがある証拠である。ユナンは彼女に言葉を促した。

「ユナンはなんでそんな事知ってるのかなって。」

たしかにその疑問はもつともだ。セーナからしてみれば、ユナンがどこでその情報を仕入れてきたのか、不思議でたまらないはずである。

ユナンはとりあえず、彼女に正直に伝えてみることにした。

「…俺がタイムスリップしてきたって言ったら、セーナは信じるか？」

「——！うん、信じる。」

ユナンの言葉を聞いて、セーナが目を見開いて驚きの表情を浮かべる。しかし彼女はすぐ真剣な顔になり、頷いてユナンにそう返したのだ。そこまで即決で認められると、逆にこっちが動揺してしまう。

「いやよくそんな話を簡単に信じたな。逆に心配…つてまあいいか。とりあえずそう思ってくれ。それで俺は、ガチの隠れんぼをやろうと思う。」

「隠れんぼ？」

「そのまんまの意味だ。出られないんなら警戒が解けるまで隠れるしかないだろ。まあその間に、他の脱出方法についても考えてみるけど。」

「隠れんぼ、楽しそうね！」

「俺は別に楽しくはないけどな…」

ある意味、見つかったら終わりの「死」の隠れんぼである。それを
楽しめという方が異常なのだ。まあセーナと一緒に居られるなら、そ
んなに悪くない隠れんぼではあるが…

しかしユナンには1つだけ思い残したことがあった。多分あの白
の王国騎士団の様子を見るに、当分ユナンは王都には帰ってこられな
いであろう。

だからこそユナンには王都を出る前に、必ず会いたい人物がいたの
だ。

「その隠れんぼをする前に、ちよつと会いたい人物がいるんだ。多
分青の騎士団本部にいると思うんだが…」

「それ大丈夫なの？ユナンは命を狙われてるんでしょ？」

「なら変装するしかないな！」

ユナンは王都で買っていた黒いローブに身を包む。そして目には
怪しいサングラスをかけた。

ユナンは王都には荒くれ者がたくさんいると聞いていたのだ。そ
んな集団に目をつけられた時の為に、ユナンは保険として買っていた
のである。

「わあ、似合ってるわね。ユナンの怪しさがさらに引き立っていると
思う！」

「それ褒めてなくない？まあ買って早々、役に立って良かったぜ。」
ユナンの誇らしげな様子に、セーナが拍手をしてその格好を褒め
た。しかし変装するどころか、逆に怪しくなつて悪化している事にユ
ナン達は気づかない。

「それじゃあお見舞いに行きますか！」

そしてユナン達は青の騎士団本部にたどり着く。受付カウンター
には前と同じく、水色の短髪の女性が担当していた。たしか名前はカ
レンだった気がする。

カレンはユナン達を見た途端、面倒くさそうな表情をこちらに向け

た。

「イロナシさんとその可愛いお仲間さんじゃないですか。一体何の用ですか。」

「なっ!? バレた! 変装は完璧なはずじゃ…」

「隣の女の子は、前と同じ格好をしているじゃないですか。それにイロナシさんが1人で来たとしても、そんな怪しい格好では中に入れさせませんよ。」

「そ、その俺を通報したりは…」

「別にそんな事はしませんよ。まあその格好のせいで思わず通報しそうになりましたが…。とりあえず、今日はもう帰って下さい。」

「待ってくれ。ドーゼルさんがここにいて聞いたんだ。助けてもらったお礼が言いたくて…頼む、彼に会わせて欲しい。」

「緑の副団長と知り合いなんですか?…でもそんな怪しい格好の人を、ましてやイロナシなんて通せないですよ。」

「おや、君たちは…」

ユナンの訴えにカレンが困っていると、そこに紫髪的美丈夫がやってきた。青の騎士団長ヘンリーである。

彼はユナン達がまた戻ってきたことに驚いている様子であった。カレンがヘンリーに今の状況を説明する。

「それがですね、イロナシがまた戻ってきて、ドーゼル副団長に会いたいと言ってきました。」

「ユナン、ドーゼルとはどこで。」

「俺の村が化け物に襲われた時に助けてもらったんだ。そのお礼をどうしても言いたくて…」

「…分かった。ついてきたまえ。」

「——! ありがとうヘンリー。」

状況を把握したヘンリーは、ユナン達をドーゼルがいる病室へと案内してくれた。

そんなヘンリーの優しい対応にユナンは疑問を抱く。

「…白の王国騎士団は俺を殺そうとしてるんだ。なのになんでヘンリーは、こんな俺に優しくしてくれるんだ?そしてイロナシってのは

…」

「すまないがイロナシについて、私の口から詳しくは言えない。だがこれだけは言える。それは、みんながみんな、イロナシを嫌っているわけではないということだ。…ルシスは逆に珍しいタイプなんだよ。」

「そうなのか。」

そんなヘンリーの答えを聞いて、ユナンは安堵する。どうやら王国騎士全員がユナンの敵というわけでは無いらしい。

しかしヘンリーはその後に整った眉を少し細めた。

「だがイロナシが忌み嫌われる存在であるというのは変わらない。私の部下達にもイロナシを快く思わない者が何人かいるのは事実だ。すまないがこれを最後に、もう青の騎士団本部に来るのはやめて欲しい。」

それを聞いたユナンは目を見開いて、苦しそうな表情をしながら胸を押さえる。

「そう…ですか。すみません。」

「こちらこそすまない、これも部下達の為なんだ。…着いたね。ここがドーゼルの病室だ。彼の様子は実際に自分の目で見て確かめて欲しい。それでは。」

辛そうな表情を浮かべた後、ヘンリーはそう言って団長室へと向かっていった。その彼の後ろ姿にユナン達は頭を下げる。

もちろんユナンだって、青の騎士団本部になど、もう二度と来たくは無かった。しかしそれでも、ユナンがドーゼルに会いに来たのには理由がある。

それは彼がユナンの悩みを全て解決してくれる存在であったからである。

村はどうなったのか、イロナシとはなんなのか。彼ならば全て答えてくれるとユナンは思ったのだ。

ユナンは病室の扉を開ける。病室内のベッドにはもちろんドーゼルが寝かされていた。

「嘘…だろ？」

ドーゼルの状態を見て、ユナンは喉を締め付けるような声を上げた。セーナも口を押さえて、その目の前の光景に何も言えないでいる。

——ドーゼルの身体はボロボロであったのだ。

彼のたくましい右足と左腕は無くなっていた。全身が包帯で巻かれており、それは血で赤黒く汚れている。特に胸の辺りの傷は酷く、今もなお血が乾いていないようであった。さらに彼の左目の部分にも包帯が巻かれており、それは血で黒く滲んでいた。

そんな傷を負ってなお、彼はまだ命をこの世に留めている。それは彼の強靱な生命力と緑の治癒魔法、そして青の騎士団の治療を一身に受けて、やつと繋ぎ止められる儂い命であった。

もちろんユナンも嫌な予感はしていた。さすがのドーゼルでも、1人である怪物に立ち向かうのには無理がある。それこそ彼は死んでも何もおかしくは無かったのだ。

そんな彼が生きていた事を聞いて、ユナンは素直に喜んだのである。しかし目の前の彼の様子を見て思った。

「こんなのに死ぬより酷いじゃねーか。」

片足、片腕を奪われ、さらには左目まで無くしてしまったのだ。彼は意識を取り戻したとしても、もうまともに歩くことすら出来ないであろう。

「アンタは村にいた…」

ユナンは後ろから声がかげられた。振り返ると病室の入口に、金髪の女性が立っていた。その女性はユナンを見て、持ってきた花を床に落とした。

それは緑の王国騎士ナタリーであった。彼女は遠征には行かず、ずっとドーゼルの看病をしていたのであろう。その大きな青色の瞳には、様々な激情が浮かんでいた。

「よう、ナタ…」

「なんでアンタはそんなにピンピンしてるんっすか。」

それは静かな怒りのこもった声であった。それからナタリーはその抑え込んでいた怒りを爆発させた。

「だっておかしいじゃないっすか！副団長はこんな傷を負ったのに、アンタが無傷だなんて…。ならアンタは、あの魔人の仲間だとか考えられないっす！」

「ま、待ってくれ。俺は契約者になったんだ。胸を貫かれた時に女神に転移させられて…」

魔人、あの黒い怪物はそう呼ばれてるのか？俺がそいつの仲間だなんて、誤解もいいところである。

しかしそんなユナンの訴えも、怒りに燃えているナタリーには届かない。

「そんな話を信じろって言うんすか！」

「…ほんとにナタリーはぎゃあぎゃあうるさいぞ。ちつとは人の話を聞け。」

「副団長！目を覚ましたんっすね!？」

そんな時ドーゼルが奇跡的に目を覚ました。それから彼はその右目でユナンのの方を見た。

「ユナンの言ってることは本当だ。わしがこの目で見たからな。ユナンは胸を貫かれた後、転移した。あれは女神の所に行っていたのか…」

どうやらドーゼルは少し前から目を覚ましていたらしい。

「でもドーゼルさんがいなかったら俺は今頃死んでいた。だからそのお礼が言いたくて…」

そんなユナンの言葉を聞いてドーゼルが鼻で笑った。

「わしは騎士として当然の事をしただけだ。それよりもユナン、少し見ない間にちよつとだけ成長したな。」

「俺、そのまま契約者になったんだよ。でもまだ俺は弱いまんまで…」

そんなユナンの言葉に、ドーゼルは否定するように首を横に振った。

「わしはユナンの心の事を言ったんだ。もっともまだまだ未熟だがな。」

包帯越しでよく分からないが、ドーゼルは少し笑っていたような気

がする。

それからユナンは、ドーゼルにずっと聞きたかった事を口にした。

「それで…村はどうなったんだ？他のみんなは？」

それについてナタリーがドーゼルの代わりに答える。彼にあまり無理をして欲しくないからであろう。

「村人はフィーナちゃん以外、全員行方不明のままです。あの魔人にも…逃げられたっす。」

「そんな…みんな…」

そのナタリーの答えにユナンの頭が真っ白になる。そしてその場に力なく座り込んだ。

それだけは考えたく無かったからである。母さん、父さん、村のみんな、そしてドータまでもが、あの魔人とかいうやつのお餌食になってしまったのか。

——つまりユナンは帰る場所すら失ったのである。

正直もう、ユナンには立つ気力すら残っていないかった。それでも最後の質問だけはしなければならぬ。…それはこれからのために。

「最後にいいか。イロナシってのと、その魔人ってのを教えて欲しい。」

「それは…」

「待てナタリー。」

ナタリーが説明しようとした時、ドーゼルがそれに割って入った。どうやらその事についてはドーゼルが説明したいらしい。

「魔人はお前が見たまんまの存在だ。人類の敵と思っておけばいい。そしてイロナシは魔法が使えない契約者の蔑称だ。」

魔法が使えない契約者。それだけであんなに嫌われているのは、少しおかしくないか？つまりドーゼルは何かを隠している。

「待ってくれ、俺はそのイロナシなんだ。本当の事を話して欲しい！」

「イロナシについて聞いてきたのは、やはりそういう事だったのか。…嘘なんかじゃない。さっき言った通りだ。そしてもう出ていけ、ユナン。」

最後にドーゼルは冷たくそう言い放った。急に変わった彼の態度にユナンは狼狽する。

彼が急に冷たくなつたのはユナンがイロナシだと知ったからか。それとも他の何かが…

「…イロナシ？ やっぱり、アンタがみんなを不幸にしてるんつすよ！」

そんなナタリーの言葉を聞いて、ユナンの身体が凍ったように固まった。なぜならユナン自身もそう思っていたからである。それをとどう、他の人からも言われてしまった。

——俺はみんなを不幸にする存在なんだ。

「出て…いききます。」

ユナンは無気力のまま、病室から出ていった。

ユナンの頭の中を、さっきのナタリーの怒声がりピートし続けている。

そしてそれは次第に自分の声へと置き換わっていった。

——お前はこの世にはいけない存在だ。

そんな自分の怨嗟の声が少年の頭の中をこだまする。

第二章 16 『君の体温』

ドーゼルとの再会を果たしたユナン。しかしそこでナタリーから言われた言葉に、ユナンは何も言い返せず、そのまま病室を後にした。

——アンタがみんなを不幸にしてるんっすよ！

帰る故郷すら無くなり、ナタリーからそんなことまで言われたユナンは絶望のどん底に突き落とされた。：と普通はそうなるはずだが、

「まあ生きてこそなんぼだ。とりあえず大事なのは今日の命。そして明日のこと！」

何故かユナンはそんなことが全く無かったかのように、元気いっばいであった。そんな彼の様子を見て、セーナは心配そうな表情を浮かべた。

「その…本当になんともないの？ユナンの故郷には大切な人がたくさんいたはずでしょ？少し休んでからでも…」

「こんなところで休んだら白の王国騎士の奴らに首チョンパされちゃうよ。ほら急がなきゃ。良い隠れ場所があるんだ。」

たしかにユナンの言っていることは正しい。

彼が自分の命を守る為には、白の騎士に見つからないように、なるべく早足で身を隠す場所に向かった方が良いのは当たり前である。

しかしセーナは、そんな元気そうに駆け出すユナンの後ろ姿が、やけに寂しそうに見えたのだ。

セーナは少しの違和感を感じながらも、そんな彼について行った。

そしてユナン達は幸運にも、白の騎士の誰にも見つからずに、目的地へと辿り着いた。

「こんな所があっただなんて…。ちよつと汚いけど、掃除すれば全然使えるわね。」

「だろ。俺なら1ヶ月は住めちゃうね。」

「ふふん。わたしは2ヶ月住めるわ。」

「なんでそんなどうでもいい所で張り合うんだよ…」

そのボロ屋敷は、ユナンが前の世界線で身を潜める為に使った場所である。20畳ほどの広さがあり、朽ちた木の板などが辺りに散乱していた。おそらく、倉庫として使われていたのであろう。

広さも十分にあり、雨風も凌げる。隠れ場所としてはうってつけであった。

ユナン達は床に散らばっている木の板をどかし、2人が座れるくらいの最低限の場所を作った。

壁に寄りかかり、2人は並んで体育座りをする。肩が触れ合うほど近い距離。ユナンの心臓は破裂しそうなほどドキドキしていた。

「どうかこのままでは本当に俺の身がもたない。」

「な、なんか近くね?」

「そう?でも暖かい方がいいじゃない。」

耳まで真っ赤にしているユナンに向かって、セーナは笑顔でそう返した。そんな彼女の眩しい笑顔を見て、ユナンは思った。

——セーナとなら新しい居場所を探せるだろうか…

王都に居場所は無く、そして唯一の希望であった故郷まで奪われてしまったのだ。もちろんセーナの言う通り、ユナンは大丈夫では無かった。

——お前はみんなを不幸にする存在だ。

今もユナンの頭の中では、自分を責めるような声が、ずっとこだましている。そのせいで彼の精神はすり減り、身体にまでその影響を及ぼしてしまっていたのだ。

胃が逆流し、吐き気を催したが、それを決して表には出さない。

そして彼は作り出した笑顔を彼女へと向ける。なぜなら、

——セーナに嫌われたくないから。

もはや今の彼にとっては、セーナと旅をすることだけが唯一の『希望』なのである。

だからこそ自分の情けない姿なんて、彼女に見せるわけにはいかない。過去なんか振り返らずに、前だけを見ている強い自分の姿を、彼女には見せたかったのだ。

そしてユナンは真剣な表情でセーナを見つめる。

そんなユナンの様子に彼女は背筋を正した。そしてその綺麗な水色の瞳をこちらへと向ける。

「俺はこれから王都を出て、世界を旅するつもりだ。それでその：セーナも一緒に来て欲しいんだ！」

ユナンの必死の勧誘。しかしすぐに返事は返って来なかった。ユナンの額から汗が流れる。

「アンナやキリマル、ジークとはどうするの？」

「へ？」

しかしセーナの口から発せられたのは、ユナンの問いに対する答えではなく、質問であった。

たしかにキリマル達は、今まで一緒に旅をしてきた大切な仲間だ。セーナからそんな質問が飛んでくるのも仕方がない。そして、それに対するユナンの答えは既に決まっていた。

「みんなは王国騎士団に入るんだ。イロナシである俺と関わるのは難しいって。：だからここでお別れになる。」

そんなユナンの答えを聞いて、セーナは黙った。また2人の間に長い沈黙が訪れる。

そして彼女は真剣な眼差しでユナンを見つめて、口を開いた。

「みんなと会えなくなるのは嫌。だからその提案には乗れないわ。」

——ユナンはどうとう1人になってしまったのだ。

もちろんユナンは分かっていた。セーナはみんなに優しいのである。その優しさをユナンが独り占めすることなんて出来ない。分かっていてもユナンにはその道を選ぶしか無かったのだ。

イロナシである自分の居場所はどこにも無い。セーナにさえ見捨てられた今、ユナンに残された道はただ1つ。

——本当にこの世から消え去るといふ選択である。

「ははっ。だよなあ。じゃあ俺はもう行くわ。今までありがとうな、セーナ。」

そう言ったユナンは笑顔であったが、その寂しそうな表情までは隠せてはいない。そしてユナンはその場から勢いよく走り去ろうとする。

「待ってー！」

セーナはそんなユナンに手を伸ばし、引き止めようとするが、こんな時のユナンの逃げるスピードはとてつもなく速い。

いつもユナンは、セーナの手が届く前に走り去ってしまうのだ。

——しかし今回はセーナの手が彼の肩に触れた。

「待って。」

セーナがユナンの肩を掴んで、彼を引きとどめた。彼は振り返って、自嘲の笑みを浮かべながらセーナの方を見る。

「みんなと会えなくなるのは嫌だつて言ったのはセーナだろ？じやあイロナシの俺なんかと…」

——次の瞬間、ユナンは柔らかい感触に包まれる。

セーナがユナンを優しく抱きしめたのである。甘い香り、暖かい人のぬくもりに、ユナンは何もする事が出来ず、その場でたじろいでいた。

「みんなと会えなくなるのは嫌。一番そう思っているのはユナンでしょ？わたしには何でもお見通しなんだから。」

「——！」

そしてユナンは気づく。セーナに隠し事なんて出来ないのだ。なぜなら、自分ですら気づいていなかった『自分』の事を彼女は見抜いていたからである。

つまり彼女の目には、必死に元気そうな演技をする滑稽なユナンの姿が常に映っていたのである。

そしてユナンは親の前で嘘がバレた幼子のような弱々しい表情を彼女へと向けた。

「はは…俺はみんなの事なんて…」

そんなユナンの言葉は、全てを見透かしたセーナにとっては、ただの虚言にしか聞こえない。

セーナは、柔らかな眼差しでユナンを見つめている。そしてまたユナンを優しく抱きしめて、耳元でこう囁いた。

「ユナンの辛い気持ち、わたしには分かるから。だから——半分こ、しよっ。」

その瞬間、ユナンの中の何かが解き放たれたような気がした。それはずっと抑え込んでいた感情、そして記憶である。つまり、みんなとの思い出だ。

ユナンはそれをずっと奥にしまい込んでいたのだ。なぜなら、他に道が無かったユナンは、こうすることでしか前に進めなかったからである。

感情と共に、ユナンの目から涙が零れる。それは止めたくても止められない。堰を切ったように少年の全てが外に溢れ出した。

ユナンはそんな抑えきれなくなった感情を、目の前にいる銀髪の少女へとぶつける。そして彼女は優しくそれを受け止めた。

「辛かった?」

「ああ。あの冷たい視線が、声が、もう一度俺に向けられたらと思うと、胸が締め付けられて…」

「大変だったね。」

「俺はみんなの事が好きで、でもどこにも俺の居場所は無くって…。それでも足掻いて、足掻いて、もう疲れたんだよ。」

「…疲れたのは頑張った証拠よ。」

そんな会話がずっと続いた。

ユナンは人に本心を伝えるのがあまり得意ではない。だがそんな彼でも、何もかも優しく受け止めてくれる少女の前では、全てをさらけ出してしまうものなのである。

柔らかい少女の身体に包まれながら、ユナンは赤子のようにただただ泣き続けた。

ユナンの涙が枯れる頃には、辺りはすっかり薄暗くなっていた。夕日の光も、建物の中までは届かない。

「もういいの?もっと泣いてもいいのよ。」

「もう一生分くらい泣いたよ!…本当にありがとうな。」

「どういたしまして。」

セーナは天使のような笑顔をユナンへと向ける。そんな彼女を見

て、ユナンは胸がぎゅつと締め付けられた。

それは冷たい視線を向けられて感じる、辛い感情とは全く違うもの。そして彼が人生で初めて抱いた感情でもあった。心臓の動悸が激しくなる。さつきまでの事を思い出して、顔が熱くなってしまうた。

「ユナンの顔が真っ赤だけど、どうしたの？」

「なんでこんな薄暗い中でも見えるんだよ！」

「ふふん。竜人は暗い中でも目がいいのよ。」

「便利だなー。：色々気をつけないと。」

「——？」

竜人についての知識がまた一個増えた。それに対する喜びを、ユナンは前よりも、もつと感じていた。なぜなら竜人について知りたい理由が、もう一つ出来たからである。

「それでこれからどうするの？」

「まあ今日はここで泊まるしかないかな。明日、キリマル達と合流って感じで。」

「分かったわ。じゃあ掃除をして、もうちよつとスペースを広くしよっか。」

「俺は別にこのままでもいいけどな。」

「——？広い方が快適じゃない？」

「アツハイ。」

ユナンは残念そうに返事をして、セーナの手伝いをし始めた。ユナンの気持ち彼女に伝わるのは、だいぶ先になりそうである。

そしてユナン達は寝転がる。セーナは大きな白いローブを掛け布団代わりにしているようであった。彼女はユナンの隣でぐっすりと眠っている。

「…こんな状況で眠れるかよ。」

一方でユナンは全く眠れずにいた。なぜなら、セーナの小さな寝息がユナンの耳に入ってくるからである。

「そういえばキリマルと一緒に、セーナの寝顔を見に行ったことがあったっけ…」

それは結局、魔法道具セリオンの防衛機能によって、失敗に終わった。その思い出すら遠い昔のことにように感じる。けれど彼らとの思い出は、どれも忘れることの出来ないものばかりだ。

それを思い出させてくれたのは銀髪の少女。

ユナンは隣で眠っている愛しい少女を優しく見つめた。

「おやすみ、セーナ。」

彼女に心を救われた。ならばどんな運命が立ちまはだかろうと、俺は彼女と、そして仲間たちと一緒に最高の未来を目指す。

——少年はそう決意しながら、明日の朝に向けて眠りについた。

「竜人みつけ。」

時刻は真夜中。女性の声があったような気がしてユナンは目を覚ます。しかし周りに人の姿は見えなかった。

——遅れてやってきたのは血の臭い。

しかしユナンの身体はどこも傷ついてはいない。嫌な予感がして、ユナンは隣の少女を見た。

「嘘…だろ?」

そこには心臓を抉り取られて絶命しているセーナの姿があった。戻る場所を失った血液は、そのまま胸から外へと流れ出している。真っ赤な鮮血が彼女の銀髪、そして白い肌を赤黒く染め上げていた。

「セーナ…セーナ!!」

ユナンはセーナの身体を抱きしめた。そして彼女の名前を何度も叫ぶ。だが返事は返って来なかった。

セーナの身体はまだ暖かい。しかしユナンの腕の中で、彼女はだんだんと冷たくなっていく。少女の命の灯火が少しずつ消えていく様子を、ユナンはただ見ることにしか出来なかったのである。

「なんで俺じゃないんだ。殺すなら俺を殺せよ!!なんで…セーナを…」

散々泣いた後だというのに、ユナンの目からは涙が零れた。

「俺を…置いていかないでくれ。セーナ…」

少女の命に縋り付くかのように、ユナンは力強く彼女の身体を抱きしめる。しかしそんなユナンの願いは虚しく、彼女の胸からは血がとめどなく溢れ出ていた。

やがてセーナの身体は氷のように冷たくなった。

周りはすっかり血の海となっていた。そしてその中央で少女の死体をずっと抱きしめ続けている黒髪の少年の姿がそこにはあった。

——血溜まりの中で少年の漆黒の瞳が怪しく光る。

それは全てを諦めた者の目ではない。その逆である。これから少年は銀髪の少女を救いにいくと決めたのだ。

その方法を少年は知っている。彼にだけ与えられた特別な加護。その発動条件は極めて非人道的であり、きつと悪魔のような神様が考えたに違いない。

だが少年は自らその悪魔と契約を結んだのだ。その事に後悔はない。

少年は隣にあつたカタナの切っ先を、自分の腹へと向けた。その手は小刻みに震えている。脳がその先の行動を拒んでいるのだ。

そしてカタナもおかしな熱を発しているように感じた。もしかしたら母さんが、辞めてと叫んでいるのかもしれない。

「けど俺は…セーナを救うんだ!!」

——そんな警告を、少年は無理やり『心』で振り切った。

「ああああああああ!」

自分の腹を貫き、その激痛によつて少年は叫び声を上げる。刺した箇所から真っ赤な血が流れ出す。

——しかし少年は簡単に死ぬことが出来なかった。

切腹というのは介錯人がいないと成り立たない。腹を刺しただけでは、なかなか人間は死なないからである。

激痛だけを伴って、出血多量でゆっくりと死んでいく様は拷問に近い。

少年はその事に直感で気づく。人に殺されるのは簡単なのに、自分で死ぬのはこんなにも難しいのである。

だから少年は、何度も何度も自分の腹を刺し続けたのだ。その行動

は結果的に成功する。大量に流れ出た血液によって少年の意識は少しずつ遠くなっていた。

「セー……ナ……」

狂気じみた笑みを浮かべて、少年は次の世界へと旅立った。

第二章 17 『制約』

自ら腹を貫いて命を絶ったユナン。彼が向かう先はいつもの暗闇の空間かと思っていたのだが…

「…あれ？」

ユナンは真っ白な空間に立っていた。この場所には覚えがある。それはユナンが魔人に胸を貫かれた直後に転移してきた場所。つまり女神の精神世界であった。

「ボクは少し怒ってるんだ。」

不満げな声がユナンの耳に届いた。その声のした方へとユナンは振り向く。

そこには薄茶色の髪をした美しい女性——女神が白い椅子に座っていた。彼女はむすつとして、紫紺の瞳に非難の色を浮かべながらこちらを見ていた。

しかしユナンはそんな事よりも、彼女の服装の方に目が行ったのである。彼女は白のブラウスに、下は黒のミニスカートを履いていた。少し小さいのか、胸元はボタンが弾け飛びそうなほど膨らんでいた。

「女神も服とか洗うの？」

「洗いませーん。でもボクもオシャレぐらいはするよ。ちなみにこれは女教師のコスプレ。ユナン君を叱る意味も込めてね。」

ユナンの村の近くには学校が無かったので、教師というものにはあまり縁がない。ユナンにとっては自分の母が教師代わりであったのだ。

そして女神は、さっきまでの不機嫌な態度が嘘のように誇らしげな顔をして胸を張っていた。

感情がコロコロ変わる女神である。いや、もしかしたら女神に感情などというものは無いのかもしれない。だがそれにしても…

「なんか前に会った時は、まだギリギリ神様の威厳っていうのを感じたんだが…今はその欠片もねえな。後なんか馴れ馴れしい。」

ユナンも人のことは言えないのだが、女神と会うのはまだ2回目

ある。それなのに初対面の時と今では女神の態度が全く違った。まるでずつと旅を共にしてきた仲間のような距離感で、女神はユナンに接してくる。

そんなユナンの発言に、女神は悲しそうな表情を浮かべた。

「前は神様としてカッコつけたからで…。それにボクはずつとユナンを見ていたんだよ？そんな距離を置かれるなんて、ちよつと寂しいじゃないか…」

「げっ！ずつと監視できんのかよ。気持ちわりいー。」

「うえーん。セーナ、セーナ。」

「そこ再現しないでいいから!!」

女神が、セーナの胸の中で泣き叫んでいたユナンのモノマネをした。そんな彼女の演技を見て、ユナンは顔を真っ赤にしながら目を塞ぐ。

セーナ本人にさえ、忘れてもらいたい記憶なのである。それをよりにもよって、このクソ女神に知られしまったのだ。ユナンは恥ずかしさで、体が燃えるように熱かった。

「そ、それで怒ってるのはどうしてだよ。」

ユナンは不貞腐れた顔をしながら話を戻す。すると、女神は真剣な眼差しでこちらを見つめてきた。

「決まっているじゃないか。君が自殺をした件についてだよ。」

「…やっぱそれか。」

「あのね、ボクがいなかったら君は本当に死んでいたんだよ？」

その女神の発言に、ユナンは頭を殴られたような衝撃を受けた。つまり自分の軽率な行動で、ユナンはセーナを救うどころか、ただ無駄死にってしまう所だったのである。

「な、なんで…」

「死にたくないって願ったのに、自分から死んでどうするのさ。まあ今回ののはボクの説明不足でもある。」

そして女神は溜息をついてから、さらに説明を続ける。

「つまらなくなるからあんまり言いたくはないんだけど、まあ仕方ないか。君の加護の発動には感情が大きく関わっているんだよ。」

「…感情?」

「そう。怒りであれ、憎しみであれ、なんでもいい。『死にたくない』と思う感情。まあ『普通』の人間なら死の間際、誰でもそんな感情を抱くものなだけど…」

そこでユナンは、今回自分の加護が発動しなかった理由に気づく。それを見透かしたように、女神の瞳が怪しく光った。

「ユナン。君は今回、『死にたい』と思ったね。」

「――!」

もちろんユナンがセーナを救いたいと思って自殺したことに嘘はない。それだけは心に、いや神にさえ誓える。だが、

――ユナンは自分の命をどうでもいいと思っていたのである。

自分を救ってくれた少女のすぐ隣にいたのに、ユナンは何も出来なかったのだ。ユナンはそんな弱くて、無能な自分を憎んだ。

おそらくあの時、自分の命と引き替えに彼女の命を救えたのなら、ユナンは迷わずその命を差し出したであろう。実際、そんな気持ちでユナンは自分の腹を何度も突き刺したのだ。

そして女神は今度は呆れたような溜息をついて、この世の理を無知な少年に説明した。

「この世にタダなんてものは無いんだ。人智を超えた力には必ず何かの制約が発生する。今回はボクのせいでもあるから、大目に見て『命』までは取らない。けれど『罰』は受けてもらうよ。」

「…それはなんだ?」

ユナンの額から汗が流れる。おそらく命と同じくらい重い罰なのであろう。後遺症が残るとか、一生のトラウマを植え付けられるとか、色々想像はできる。大切な人にさえ被害が及ばなければ、なんでもいいが…

そして女神の口からその『罰』が告げられる。

「自分の加護の事を人に説明してはいけない。そういう制約の追加だ。わかったかい?」

女神の指から放たれた紫色の光がユナンの胸の中に入り込んでいく。どうやら制約がユナンの身体に埋め込まれたようだ。

しかし肝心のユナンは、あまりその『罰』に納得していない様子であった。

「お、おう。そんなものでいいのか?」

どうせほとんどの人は、自分の加護を説明した所で信じてくれないのである。そんな制約、無いのと同じだ。

ユナンの拍子抜けした様子に、女神は意味深な笑みを浮かべた。

『『そんなもの』。君がそう思うならそれでもいい。けれど制約を破ったら、本当の『罰』が与えられるから気をつけて。それじゃあ頑張つてね。』

「お、おい!まだ色々聞きたいことが…」

こちらに笑顔で手を振る女神の姿を最後に、ユナンの視界がだんだんと暗くなつていった。

黒髪の少年が転移された後、女神が楽しそうに独り言を呟く。

「まあ制約なんて追加しなくてもよかつたんだけど。あれ、封じとかなないと『つまんない』からね。」

女神にとって人の人生など、ただの『遊び』にしか過ぎないのだ。

「もういいの?もつと泣いてもいいのよ。」

場面は、ユナンがセーナの胸の中で散々泣き叫んだ後のところであった。

正直その前に戻って欲しかった気持ちも少しあったが、この恥ずかしい思い出を無かつたことにするのは、彼女の優しさを踏みにじるようなものである。

この記憶は永遠に世界に刻みつけられるべきであろう。

ユナンは愛しい少女の姿をじつと見つめる。そしてなんと、彼はもう一度彼女に抱きついたのである。暖かくて柔らかい感触。少女の鼓動が耳に聞こえてくるのを、ユナンはしっかりと確認した。

「ど、どうしたの!?!」

突然のユナンの行動に驚き、セーナは思わず彼の身体を突き放した。そしてセーナは自分を抱きしめるポーズをとり、ジト目でユナン

の方を見た。それはまるで変質者に襲われた後のような仕草。実際そんな場面に似ているのだが、ユナン自身はそれに気づいていないようである。

「…ユナンのえっち。」

「違う！ちゃんとセーナが生きてるか確認してただけだ！つてかなんで前のは良くて今回ののはダメなんだよ…」

「…ユナンから抱きしめたから？」

「んな理不尽な！」

セーナは首を傾げて、少し考えるような仕草をしてからそう結論づける。その理不尽な彼女の答えにユナンは不満そうであった。しかし第三者から見れば、悪いのは明らかにユナンの方なのだ。

その後何も言い返せずに、ユナンは口を閉じて黙った。

もつと彼女と話をしていたいが、ユナンは自分達には時間が無いということを知っている。目の前の愛らしい少女と接していると、ついそんな現実を忘れてしまいそうになるのだ。

「それでこれからどうするの？」

「それなんだけど…セーナって今、命を狙われている相手とかがいる？」

ユナンにそう質問された彼女は、整った眉を顰めて、苦い顔をした。

「人から嫌われたりはするけれど、命まで狙われる覚えは無いわ。」

「ということは新手の敵？…今日の夜、セーナが命を狙われるんだよ。」

「わ、わたし?!?どうして…」

ユナンからの衝撃の告白に、セーナは動揺する。当然の反応であろう。しかしこれは嘘でもなんでも無い。ユナンが実際に体験した未来の出来事なのだ。

「どうしてかは分からない。でも今夜、敵が必ず現れる。そして悔しいが、俺一人ではセーナを守れる自信が無い…」

ユナンは自分を責めるような声で悔しそうにそう呟く。大切な人を守るための力が欲しい。けれどその力を養う「時間」が今の自分には無かったのだ。

セーナは黙ったまま、そんなユナンを見つめていた。

「やっぱりこういう時は…騎士団だよなあ。」

ユナンが肩を落としながらそう結論づける。やはり王国騎士団はとて頼りになる存在なのだ。どれだけ嫌われていようが、彼らと全く関わらないことなんて出来るはずが無いのである。

「なら赤の騎士団に行ってみない？アンナもいるはずよね。」

セーナがユナンにそう助言をした。それはユナンも考えていた事である。ユナンが未だ訪れたことの無い最後の騎士団。一縷の望みをかけるなら、そこしかない。

しかしそれは一種の賭けでもある。白の騎士団と同様に、イロナシと分かったユナンを殺しにきてもおかしくはないのだ。

「俺もそう思っていたところだ。じゃあ行くか！」

しかしユナンがそんな事で止まるはずは無かった。

なぜなら彼は自らの命を1度絶つてまで、目の前にいる少女を救いに来たからである。

第二章 18 『フレア』

ユナンとセーナは赤の王国騎士団本部へと辿り着く。

ここへやって来たのはもちろん戦力確保のためだ。ユナンは自分だけではセーナを守ることが出来ないかと判断したのである。

それは前回のユナンの記憶によるものだ。ユナンは敵の襲撃に警戒しながら寝ていたのである。白の王国騎士達が夜の間もずっと、ユナンを血眼になって捜している可能性があったのだ。無論、全くの無警戒というわけにもいかない。

——それでもユナンは敵の襲撃に気づけなかった。

気づけなかったというよりは、犯行が速すぎて、ユナンの対応が間に合わなかったといった方が正しいのかもしれない。

それくらいあの襲撃は一瞬の出来事であったのだ。

謎の女性の声。その声を聞いてユナンが飛び起きた時には、既にセーナの心臓は抜き取られ、犯人は行方を晦ましていた。あんな真似が出来るのは、超人的な強さを持った者だけであろう。

難しい顔をして敵の危険度を再確認していたユナン。そんなユナンの様子を見て、セーナが口を尖らせながら非難してきた。

「また嫌な顔してる。言ったでしょ、半分こしよって。」

「悪い悪い。でも今回危険な目に遭うのは俺じゃなくてセーナの方だ。…その怖くないのか？」

「死」に対する恐怖。それはユナンが一番よく知っている。今のセーナはそんな恐怖を感じているはずなのに、怯えるような素振りすら彼女は見せていなかったのだ。ユナンにはそんな彼女が不思議でたまらない。

するとセーナは少し考えるような仕草をしてから、笑顔をこちらに向けて、

「もちろん怖いわ。でもユナンといるとわたし、どんな事でも乗り越えられるような気がするの。」

と自信満々にそう断言した。そんな彼女の言葉にユナンは胸を痛

める。

セーナはユナンを信頼してくれている。だがユナンは前回、それに応えることが出来ずに彼女の命を守れなかったのだ。

ユナンは苦笑いをしながら、呆れたように自分の無力さをセーナに説く。

「おいおい、俺は実際セーナより弱いんだぜ。過大評価し過ぎだった。」

「そういうのじゃなくて、心の問題よ。」

しかしそんなユナンの発言を、セーナは眩しい笑顔のまま否定したのであった。

やはり敷地内の構造は赤の騎士団も他の騎士団も少し似ている。赤いレンガの建物。おそらくあそこが本部なのであろう。

ユナン達が入ると、受付カウンターには1人の女性がいた。薄茶色の髪を腰まで伸ばした美しい女性だ。赤の澄んだ瞳からは、純粹さと情熱が感じられる。年齢は20代ほどであろうか。軽装の鎧の格好で、赤いマントを羽織っている。そのマントは赤の王国騎士であるなによりの証拠だ。

「こんな夜に急にすみません。少し話がしたくて…」

ユナンはその女性に向かって話を持ち出そうとする。するとその女性は、ユナン達の真剣な顔つきを見て、慌てたように応対した。

「か、火事ですか!? 火事ですよね? え、え、えーとまずは…」

それは綺麗で澄んだ女性の声。しかしその声からは精神的な幼さが少し感じられた。

慌てふためく女性の様子を見て、ユナンは手で、待ったというようなジェスチャーをしながら、目の前の女性を落ち着かせようとする。

「早とちりし過ぎだろ!? 俺たちは頼みがあつてここに来ただけで…」

「今はあんまり人がいないのにどうしよう…。というか火事の現場って何を持っていったら良いんだっけ。とりあえず…。水?」

しかしその女性はユナンの話を全く聞いていない。するとそれに

見兼ねたセーナが強硬手段をとった。セーナはその女性の両頬を優しくつつねる。

「ほへ？」

「お姉さん落ち着いて。わたしはセーナ。そしてこの男の子がユナン。わたしたちは、赤の王国騎士団に話があつてここにやつて来たの。お姉さんの名前は？」

「わ、私はフレアつています…。」

そのフレアという女性はやつと落ち着きを取り戻したようであった。そして彼女はユナン達が火事の要件でここにやつて来たのでは無いと知って、ほつと安堵の息を漏らした。

そんな時、部屋の奥から小さな女の子がやって来た。

「フレア、何かあつたのです？」

身長はユナンのお腹の辺りまでしかない。そしてその体格に見合った幼い少女の声。明らかにまだ未成年であつた。クリーム色の髪で、羽付きの赤い帽子からはアホ毛がはみ出ている。

しかしユナンが目を疑つたのはその幼女の服装。下がふわふわの赤い洋服は、その少女の可愛らしさをさらに引き立たせているのだが…

——さらにその子は赤いマントを羽織っていた。

ユナンはその事実を元に、ある問いを目の前の幼女へとおそるおそる投げかけた。

「ま、まさかお前。王国騎士だったりしないよ…な？」

「そのまさかです。ノノは立派な王国騎士なのですよ。」

ユナンの問いかけにその幼女——ノノは「えっへん」と小さな胸を張ってそう断言した。

「こんなに小さいのにウソだろおい!!」

ユナンはそんな事実を目ん玉が飛び出るほど驚く。

普通はみんな、16歳になってから王国騎士に入団するものだどユナンは思っていた。だが言われてみれば、王国騎士の入団に年齢制限があるなんて、今まで聞いたことが無い。つまり王国騎士になれる条件に、年齢は関係ないのだ。

しかしそれでも、こんな5歳ほどの年齢の少女を戦わせるのはどうかと思う。

ノノはユナンの「小さい」という言葉を聞いて頬を膨らませた。そして彼女は不貞腐れた顔で、ある質問をユナンへと投げかける。

「じゃあ失礼なお兄さんは火事の時、炎と煙。どっちの方が危険か分かるのです?」

「――?そりゃあ熱い炎に決まってるだろ?」

「ぶつぶー。実は煙なのです。煙の方が早く迫ってきて、さらに不完全燃焼の煙を吸い込むと、一酸化炭素中毒になって呼吸困難に陥るのです。」

「何言ってるか全然わかんねえ!?俺もしかして、こんな幼女にさえ頭で負けてる?」

ユナンは自分の学のなさを恥じる。こんな幼女の方がユナンよりも賢いのだ。彼はおそろおそろ周りのみんなの様子を観察した。

「――?」

「言ってることは全く分からないけど、さすが師匠。博識ですね!」しかしセーナもフレアも、ノノの言った事を理解出来ていないようであった。というかフレアに関しては、この幼女の事を「師匠」と呼んでいた。大人の女性が幼い少女の事をそう呼ぶ光景はなかなか奇怪だ。

ユナンは大人の女性陣二人の様子を見てほっと胸を撫で下ろしてから、話を戻す。

「それで俺たちは赤の騎士団に頼みがあるんだが:中に入ってもいいか?」

「いいですよ!今日は人もあまりいなくて空いてるから、団員室で話をしましょう。」

フレアはユナンの話を軽々しく承諾。そして団員室へとユナン達は案内された。

団員室の中は広く、快適な居住スペースのようになっていた。ふかふかのベッドやくつろぐ為のソファ。巨大な丸い木のテーブルの周

りに椅子が何脚も設置されている。台所やお風呂まであり、不便な思いは無さそうである。

その部屋の中にいたのは赤髪のポニーテールの少女、アンナと肌が茶色い銀髪の男性であった。アンナは既に赤のマントを羽織っていた。おそらく入団審査に受かったのであろう。そんな彼女はユナン達に気づき、驚きの声を上げる。

「ユナンとセーナ!? アンナたち何でここに?」

「いやあ色々あつてさ。…ホントに色々。」

「今日は大変だったよね。」

ユナン達の様子に事件の香りを感じたのか、アンナは呆れたように溜息をついた。

「アンタたちは本当に厄介事を引き受けるのが得意ね…」

「あれ? アンナとこの子たちって知り合いなの? なら最初から言ってくればよかったのに。」

3人の様子を見て、フレアが苦笑しながらユナン達にそう言ってきた。するとそこへアンナの隣にいた銀髪の男が歩いてきた。

「今日は新入りが3人も来たのか?」

落ち着いた低い声。しかしその静寂の裏にある豪傑らしい気質を隠せてはいない。

艶やかな銀髪の髪を首元まで伸ばしたクールな男性。茶色い肌と少し鋭い黄色の双眸がよく似合っている。

薄紫色のフード付きコートに身を包んでおり、赤のマントはしていない。

「俺の名前はユナン。こっちの少女がセーナ。俺たちは頼みがあつてここに来ただけで、入隊希望者じゃない。それであんたは…」

「俺の名前はジン。よろしくな。前の団長とダチっただけで俺は王国騎士じゃねえよ。でもたまに顔を見せに来てんだ。」

「ジンさんはむっちゃ強いんですよ。」

「フレアも大概バケモンだろうが…」

ジンという男からはとてつもないオーラを感じる。それは強者だけが放つオーラ。フレアの言う通り、この男はとても強いのだろう。

それはユナンには好都合だった。なぜならユナン達は、戦力目当てでここに来ているからだ。

ユナンは真剣な顔つきで自分達がここに来た理由を説明する。

「それで話を戻すんだが、俺たちがここに来た理由について話そうと思う。簡単に言う隣にいる女の子、セーナが命を狙われてる。だから今日だけでもいい、匿って欲しいんだ。」

つまりユナン達は厄介事を持ち込んで来たという事だ。当然彼らから、非難の視線を浴びせられるとユナンは思っていたのだが…

「なるほどね。大丈夫、お姉さんが君たちを守ってあげるから。」

「悪い人はノノがぶっ飛ばすのです。」

「…だよ。俺も別にいいぜ。最近は戦闘もしてなかったし、ちょうど腕が鈍ってたところだ。」

意外にもあつさりユナン達の要求を受けてくれた。久しぶりの他人からの暖かい言葉に、ユナンは思わず泣きそうになる。勇気を振り絞ってここに来て良かったとユナンは心底思った。

そんな時、ジンが抱いて当然の疑問を口にした。

「それでその嬢ちゃんはどうして命を狙われてるんだ？」

その問いかけにユナンとセーナはお互いの顔を見合わせた。やはり答えは「アレ」しか考えられない。そしてユナンはそれを明かすのはセーナ自身であるべきだと言うことを目で訴える。

セーナは彼らなら大丈夫だと判断したのであろう。何かを隠すように纏っていた大きめの白いローブを脱いで、その背中を彼らへと向ける。そこには少女の正体を示す、一對の翼が生えていた。

「なるほどな。竜人ってわけか。久しぶりに見たな。」

「私は初めて！こんな感じで翼が生えているのね。意外とちっちゃくて可愛い。」

「ノノも初めて見たのです。」

やはり三人は驚きこそしたものの、それ以外の憎悪などの感情は全く無さそうであった。そして竜人が人間に忌み嫌われているというのは、周知の事実である。

竜人であるならば、人間に命を狙われていたとしてもおかしくは無

い。当たり前のようにそう考えられているこの世の中を、やはりユナンはあまり好きになれない。

「はい。だからお願いします…」

セーナは少し声を落として、よそよそしく彼らにそう告げる。人間からの襲撃を優しい人間に守ってもらう。こういった経験を彼女はこれまでどれほどしてきたのだろう。

魔法を自力で覚えるのには血の滲む努力が必要だ。つまりそれほど、セーナは自分のせいで心優しい人間を巻き込んでしまう事が嫌であつたのだ。

そんな事はユナンも知っている。だが、ユナン一人では彼女を守ることが出来ないのだ。セーナには悪いが今回は、強く優しい人間に守ってもらう選択をするしかない。

「それでフレア団長。どうやって彼らを守るのです。」

「うーん。みんなでここにいたらいいんじゃない？今日はジンさんもいるし、余裕でしょ！」

「当たり前だ…ってフレアも戦えよ。」

三人がそんな会話を和気あいあいとしていた。しかしユナンはその会話の中に聞き捨てならない言葉があつた事に気がつく。

ユナンはジト目でフレアの方を見ながら、首を横に振る。

「今なんかフレア『団長』って聞こえたんだが…。あれかノノにそうやって呼ばせてるのか？」

「——？私が赤の王国騎士団長だけど？」

「嘘だろ!?1番この中でなつちやいけない奴だつて！」

その事實は、今日1番、いや王都に来て1番の驚きであつた。

フレアはさつきまで受付カウンターに座っていた。しかも彼女はユナン達が来た要件を勝手に火事だと勘違いして、おどおどしていたのだ。そんな彼女が王国騎士団長であると、誰が想像できたであろう。少なくともユナンは想像すらしていなかった。

そんなユナンの発言に、アンナが鬼のような形相をして注意する。

「ユナン！団長に失礼でしょ。謝って!!」

たしかに今の件についてはユナンが100パーセント悪い。ユナ

ンは申し訳なきような表情をして、フレアに頭を下げた。

「すみません！匿ってもらおう身でこんな失礼な発言を…」

「別にいいって。よく言われるし。私も自分のことはまだまだ新人って思ってるから。ね、師匠？」

「まだフレアはノノからすれば新人みたいなものなのです。」

「竜人戦争の2年。それが終わってから副団長の任に就いて4年。残りの9年間を団長として務めていて新人はねえだろ…」

「初心を忘れるべからず。気持ちは新人！」

「ほい、そうですかい…」

三人がそんな会話をしていた。どうやらフレアは見かけによらず、王国騎士として多くの実績があるようだ。というか…

「フレアって20代くらいかと思ってたけど本当は何歳…」

「嬉しいー…いや私は永遠の16歳だけどね！」

「フレアはその歳でまだ結婚してないもんな…」

「ジン…？」

「ひっ！悪かったよ。だからそんな怖い顔すんなって！」

あまりの怒りにフレアはいつもの「さん」付けを忘れていた。いやもしかしたら、本当は互いに呼び捨てをするほど2人は仲が良いのかもしれない。

…だがフレアに年齢の話をするのは辞めておこう。

ユナンはそう固く心に誓った。

周りを見るとノノ、アンナ、セーナが楽しそうに会話をしている。セーナのひよこひよこ動く竜の翼に、ノノは興味津々な様子だ。そんなノノの姿はまるでおもちゃで戯れる子猫のようであった。

そんな平和な光景を前にして、ユナンは自然に頬を緩ませていた。それはほんの数時間前まで、自分の腹を突き刺していた男の顔とは思えないほど穏やかなものであった。

しかしそんな微笑ましい空間にさえ、運命は土足で足を踏み入れてくる。

団員室の大きな窓。そこが突風によって勢いよく開かれた。団員室は2階に位置しているのだが、その空いた窓から、なんと人間が

入って来た。人数は三人。皆、白のマントを羽織っている。

「あつ、シノ久しぶり〜。それにルシスとタルクも一緒じゃない。いきなりどうしたの？」

そんな三人の王国騎士の登場に、フレアはまるで友達が家に遊びに来たかのような反応をした。しかし彼らは遊びではなく仕事でここにやって来たのだ。いや仕事というよりは『信念』と言った方が近いのかもしれない。それくらい、彼らのイロナシに対する執着心は凄まじい。ユナンがいくら逃げようとも、彼らは必ず追いかけてくるのだから。

ルシスは相変わらずの仏頂面で、自分達がここへ来た理由についてフレアに話した。

「悪いが今回は遊びに来たわけじゃねえ。俺達はもしかして思っ
てここにやって来たんだが…どうやら正解だったみてえだな。」

そしてルシスはユナンの方をその鋭い目で睨みつける。一方ユナンは、セーナでは無く自分を狙う「敵」が先に現れた事に困惑していた。

「俺達はここに逃げ込んだイロナシを捕まえに来たんだ。」

第二章 19 『千剣の戦乙女』

「俺達はここに逃げ込んだイロナシを捕まえに来たんだ。」

冷酷な声でそう説明し、ルシスがユナンに向かって鋭い眼光を放つ。しかしフレアはあまり状況が飲み込めていないようであった。彼女は首を傾げながら、

「イロナシを名乗る人なんてここには来てないけど？」

とルシスに告げる。そんなフレアの言葉にルシスは心底呆れたような表情をして、

「これだから天然バカは…。自分からイロナシなんて名乗る奴はいないだろ。こいつが隠してたんだ。」

と、どんな人にも分かるように説明をして、ユナンの方を指差す。

この世界線ではユナンとルシスは初対面のはずである。しかしルシスはユナンの顔を何故か知っているのだ。つまり、ユナンの正体を白の王国騎士団に告げ口した人物がいる。

「なんで俺がイロナシって分かるんだ？」

ユナンはルシスを睨みつけながら、その事について質問をした。ユナンの額からは汗が流れている。

ルシスはその質問に対して鼻で笑った。そして見下すような目でユナンの方を見る。

「青の王国騎士団の団員から、イロナシが現れたという連絡があったただけだ。目付きの悪い黒髪の少年。その特徴と一致する人間がこんな場所にいたら、もう疑う余地はないだろう。」

たしかにルシスの予想は論理的で、誰もが納得するものであろう。もはやユナンが言い逃れできる道理は無い。

そしてもう一つ、ユナンは確認しなければならない事があった。

「…その連絡をしたのはヘンリーか？」

「いやあいつは少し優しすぎる。どうせお前を見なかった事にでもしたのだろう。だがあの場にいた王国騎士はあいつだけじゃない。それが答えだ。」

とりあえずヘンリーに裏切られたわけでは無いことを知って、ユナンは内心で安堵の吐息をつく。

ルシスのその説明にも納得がいく。あの場には十数人も王国騎士が居たのだ。何人かはイロナシの事を極度に嫌っている連中がいたとしてもおかしくは無い。

そして今、ユナンがやるべき事は一つだけ。自分の正体をちゃんと己の口から告げる事である。

今さら自分の正体を黙っていた事実を許してもらおうなんて思うほど、ユナンも厚顔無恥な性格ではない。

ユナンはフレア達の顔を見れずにいた。それは彼の幼く弱い心の部分の現れでもある。

イロナシだと隠していた自分を彼らはどんな顔で見ているのだろう。ユナンはそれを直視出来なかったのだ。

だからユナンはフレア達に向けて頭を下げ、彼らの顔は見ないまま、誠心誠意の謝罪をした。

「すまない。ルシスの言う通り、俺はイロナシである事を隠していた。俺は隣の少女をただ救いたかっただけなんだ。もちろんそれは言い訳にしか聞こえないと思う。だからもう俺はここから出ていく。…だけどセーナだけは守ってやってくれないか？そんな立場でないのは分かっている。…だけど…頼む！」

「ユナン!? そんなのわたしが許さないわ!」

ユナンは必死に自分の思いをフレア達に伝えた。その少年の声は最後の方が枯れるほど、感情がこもっていたのだ。さすがのルシスでもその言葉まで嘲笑することはしなかった。

そのユナンの言葉に、もちろんセーナは抗議した。

しかしユナンにその考えを改める気は全く無い。

ユナンはセーナにちゃんと生きていて欲しいのだ。

——たとえこの世界に自分がいなくなっても。

「…下なんか向いてないでちゃんと私の顔を見て。」

ただフレアはユナンにそう告げた。顔を上げろと言われて、そのま

ま俯いているわけにもいかない。ユナンはおそろおそろ顔を上げて、フレア達の顔を見た。

——フレアはユナンに優しい笑顔を向けていたのだ。

その紅の目は、ユナンがイロナシだと知る前の目と何一つ変わってはいなかった。彼女の目にはユナンの事がただの少年として映っていたのだ。

周りを見ると、ジンやノノもフレアと同じような目でユナンを見つめていた。

そしてフレアが力こぶを見せつけるようなポーズをとって、キリツとした表情をしながらユナンに宣言する。

「私たちが二人を守ってあげるから安心して。私たち、これでも凄く強いんですよ。」

「でも俺は…イロナシで。」

そんなフレアの温かい言葉に、ユナンはまだその事実を受け止め切れないようだった。ユナンは完全に今回の世界線を諦めていたのだ。それなのにフレアは、ユナンにこの世界でまだ生きるチャンスを与えてくれた。ユナンは彼女に命を救われたようなものである。

「そうだお前はイロナシだ。」

そんな時、突如として冷たい烈風が吹き起こった。それはルシスが動いた証。彼は面倒な事態になる事を察して、強硬手段に出たのだ。その速度は神速に達する。いくら赤の王国騎士団長と言えども、それに咄嗟に反応するのは困難であろう。

——しかしその神速についていける者がこの場に1人だけいた。

「…ジンさんか。何故俺の邪魔をする。」

「俺はいつだって中立だぜ？どっちも俺の可愛い弟子だからな。轟負なんてしねえよ。ただ今のお前の行動はちよつと無粋なんじやねえかと思っただけだ。」

ユナンはあの攻撃の瞬間、ルシスが本当に消えたかのように見えた。そんな錯覚をしてしまうほど、彼の速度は凄まじいものであったのだ。しかしジンはルシスを目で追うどころか、彼の腕を掴んでその攻撃を中断させてしまったのである。

そんなジンの恐るべき戦闘能力に、ユナンは敵でもないのに恐怖を感じてしまう。

彼がイロナシの事を敵対視していなくて本当に良かった。今の一瞬の立合いを見て、ユナンは心の底からそう思う。

「ルシス。悪いけど私はこの子達を放っておけない。そっちが力づくで来るなら、私達も手加減しないわよ。」

フレアがムツとした表情をして、鞘から長剣を引き抜いた。その長剣の先端は薄く、反りのない真つすぐな刃を持っていた。美しい曲線状の紅の鍔は、彼女の可憐さをより引き立たせている。それは斬るよりも突くことに特化した武器、レイピアである。

「とりゃあー!」

素早い刺突。それは紅の熱風を伴ってルシスへと放たれた。ルシスはそれを横に飛んで易々と回避する。

——だがフレアは二段突きを放っていたのだ。

遅れて炎を纏った刺突が宙に舞ったルシスに襲いかかる。空中にいる者は身を捻ることではか攻撃を避けようが無い。しかしフレアは炎で攻撃の半径を増大させており、そんな小さな動きでは逃れられないようにしていたのだ。ルシスがその刺突を回避することは不可能に思えた。

だが空こそ彼のテリトリーなのである。ルシスは壁を蹴るような動作を空中で行う。すると謎の加速が起こり、ルシスの身体は後方へ飛んだ。

もちろん彼はただ攻撃をさせてくれるほど優しい相手では無い。回避と同時に白い風刃をフレアへと放ったのだ。

今のは一瞬の出来事。だが既にその場所にフレアはいなかった。全く隙がない攻撃をいつでも放つことが出来る。それがレイピアという武器の特権である。

「チッ。こうなると思ったから強硬手段に出たんだが…」

後方へ下がったルシスは忌々しそうにそう呟いて、ジンの方を睨みつける。しかしジンはルシスに向かって笑顔で手を振った。

「団長、騎士団同士の戦闘は避けるべきかと…」

するとシノが不安そうな声でルシスにそう提言したのだ。

好戦的なシノが、それもルシスにそんな提案をするのは珍しい。しかし彼女をよく観察してみると、その理由が分かった。

シノはフレアの方を心配そうな目で見つめていたのである。

「私もシノとは戦いたくないなく。」

シノの視線に気づいたのか、フレアが彼女に向かって微笑んだ。そんなフレアを見て、シノはより一層気まずい表情を浮かべる。

おそらく、シノとフレアは親友なのであろう。

「…ならシノにはフレア以外を任せる。どうせ規則の方はジンがなんとかするんだろ?」

そう言ってルシスは冷たい目でジンを睨みつけた。

「ご名答。」

ジンは相変わらずの笑顔でルシスに向かって軽く手を叩いた。そんな彼を見て、ルシスは深い溜息をついた。

どうやらジンは赤と白の騎士団同士の戦いを見たがっているようである。

そんなジンの様子を見て、フレアはようやく気がついた。

「えっ!? ジンさんは私達の味方なんじゃないの?」

「馬鹿野郎。そんなのすぐ終わっちまうじゃねーか。人数は一緒だろ。そのの新人を使え。」

ジンは呆れたようにそう言って、アンナの方を指差す。突然の指名にアンナは心底驚いたようである。

「えっ、アタシ!?!」

「お前はもう立派な赤の王国騎士だろ。それにお前の技はフレア達と相性が良いとみた。」

ジンは悪い笑顔を浮かべて、その黄色い双眸を怪しく光らせる。その顔はまさしく戦闘狂そのもの。彼の本性が浮き彫りになった瞬間である。

そして騎士団長であるにも関わらず、フレアは何故かうるうるとした目でアンナに頼み込んだ。

「アンナ、お願い。」

「も、もちろんやりますよ！だからそんな目をしないで下さい、团长。」

アンナは慌てたようにフレア達の隣に並んだ。彼女の額からは汗が流れている。いきなり白の王国騎士のトップクラスの實力者達と戦闘をしなければならぬのだ。緊張するのも当たり前である。寧ろ、震えていないだけアンナは勇気がある方だと言えるだろう。

赤と白の王国騎士達が3対3で対峙する。お互いの距離は6メートルほど。だがそんな距離も神速の前では無意味である。長い沈黙が訪れ、双方の緊張感が高まる。そんな張り詰めた空気の中、ジンが口を開いた。

「始め！」

その一言で戦いの火蓋が切られた。先に相手に向かって行ったのは白の王国騎士達。彼らは風の如きスピードでフレア達との距離を詰める。だが、

——辺りに爆発が巻き起こった。

その爆心地は複数箇所あり、それによって生じた爆風がルスス達に襲いかかったのだ。爆心地の数だけ爆風が生じるため、室内では避けようが無い。無論、ルスス達は屋外へと退避した。

「やってやったのです！」

ノノが自慢げにそう言つて、小さな胸を張る。しかしユナンの方は内心穏やかでは無い。

「やってやったのです、じゃねーよ!!これ普通みんな死んでるよね!?!」

「だから魔法は凄いのです。ユナンはビックリしたのです?」

「ビックリどころか失神するかと思ったわ…」

ユナンのツツコミにノノはあまり気にしていないようだった。それどころか、ノノは自慢げに魔法の凄さをユナンに説いたのである。

契約者の魔法はその対象を選べるのだ。本来であれば建物ごと崩壊し、ユナン達が全員死んでしまうような爆発であっても、問題は無い。ユナン達は全員無事で、建物にも傷一つ無かった。たしかに契約者の魔法は凄いものである。

「チツ。化け物が。」

「いやあ、あれはおつかないっすねー。」

「ノノ、普段はあんなに可愛いのに…」

そしてルシス達が苦々しい顔でここに戻ってきた。開幕の奇襲を成功させたのは、白ではなく赤の方であったのだ。それはフレアが準備をするのに十分な時間を稼いだ。

そしてフレアは珍しく真剣な声でぽつりと一言だけ呟く。

「——炎剣乱舞。」

するとフレアの周囲の空間を無数の剣が覆い尽くした。それは紅色の刀身をした炎剣。その剣の輪郭は橙に光り輝いており、灼熱を纏っている事が見て取れた。

その剣1本1本に、燃えるような思いが感じられる。

「近づいたら痛い目みるわよ。」

「近づかなきゃ斬れねえだろうが。」

フレアの忠告を無視して、ルシスがその空間に突っ込む。しかしその無数の炎剣はただの飾りではなかった。その一つ一つがまるで意志を持っているかのように、様々な方向からルシスへと襲いかかったのだ。

彼は双剣でそれらを弾きながら、回転を行い竜巻を起こすことで、フレアの攻撃を受けきる。今のルシスの動きも超人的なものであったのだが、

——フレアには全く近づけなかった。

いくら弾かれ、吹き飛ばされようとも彼女の炎剣は一向になくならない。それどころか、新たにまた生み出し続けることでそれは徐々に増えているかのように思えた。

そんな光景を見て、ユナンは驚きの声を上げるしか無かった。

「…なんて数だよ。」

「まだまだフレアの力はこんなものじゃないぞ。有名な契約者には2つ名が存在することがある。」

そんなユナンの呟きに反応して、ジンがフレアについて説明をしてくれた。

「彼女の二つ名は『千剣の戦乙女』。全力を出せば、彼女は千を超え
る炎剣を自由自在に扱えるんだぜ？」

全方面から炎剣が際限なく向かってくるのだ。それは絶対不可避
の攻撃といえるだろう。神速の男でさえ、それを捌き切るのに精一杯
なのであった。

そんな攻撃を放っているのは、無数の炎剣の中心で美しく立ってい
る女性。

——千剣の戦乙女に近づける者は誰もいない。